

楡木 I 遺跡・上原IV遺跡(2)・西久保IV遺跡

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第39集

2012

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

ハツ場ダムは、首都圏の生活用水や工業用水など利水および治水、さらには発電を目的とし、関東地方北西部を東流する吾妻川に計画され、現在は吾妻郡長野原町などにおいて、関連工事が行われています。ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成6年度から開始され、本年度で18年目を迎えることとなりました。これまで、多くの遺跡が発掘調査され、調査報告書も本報告書で39冊目を数えることとなりました。

今回報告します榎木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡・西久保Ⅳ遺跡は、平成21年度と平成23年度に発掘調査された遺跡です。小規模な発掘調査でしたが、各遺跡とも充実した成果がありました。

榎木Ⅰ遺跡は平安時代の集落跡と近世屋敷跡が目立ちます。特に平安時代の竈屋は、従来の集落景観に小型の燃焼施設を加えることができました。上原Ⅳ遺跡の出土遺物のうち縄文時代後期の資料は、先に調査された上原Ⅳ遺跡84区との関係が深く、周辺の遺跡との比較検討に貴重な例となるでしょう。西久保Ⅳ遺跡は、縄文時代掘立柱建物跡と天明3年泥流下の畑跡を報告しています。縄文時代集落跡としては小型の類ですが、大規模集落周辺に小規模な集落が点在する様子が判明してきました。天明3年泥流下の畑跡は、周辺の遺跡でも同時期の畑跡が広域に調査されており、これらの資料と併せて、他県にはない貴重な調査例となるでしょう。

今回の報告書刊行に至るまでには、国土交通省ハツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、ならびに地元関係者の皆様に多大なるご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げるとともに、本書が広く活用され、郷土の新たな歴史の解明に大いに役立つことを願ひ序といたします。

平成24年12月

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 榮 一

例 言

1. 本書は、ハツ場ダム建設工事に伴う榎木1遺跡、上原IV遺跡(2)、西久保IV遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。上原IV遺跡は『山根Ⅲ遺跡(2)・上原IV遺跡・幸神遺跡』(2008)において84区の一部が報告済みであるため、本報告が遺跡通番で第2集となるため、(2)を付している。

2. 遺跡所在地

榎木1遺跡 吾妻郡長野原町大字林字榎木15-2、15-3、16、17、18-2、20-1、20-2、21、27
上原IV遺跡 吾妻郡長野原町大字林字上原1136-3、1137、1139、1140-2、1140-3、1141、1157-2、1182-2、1183-2、1184、1200-2、1202-2、1203-2
西久保IV遺跡 吾妻郡長野原町大字横壁字西久保25-1、26、31-4、31-5、31-6、31-7、35、37-2、38、42

3. 事業主体

国土交通省

4. 調査主体

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間

榎木1遺跡 平成21年(2009年)9月1日～平成21年(2009年)10月31日
上原IV遺跡 平成21年(2009年)4月1日～平成21年(2009年)5月31日
西久保IV遺跡 平成21年(2009年)12月1日～平成21年(2009年)12月28日
平成23年(2011年)5月1日～平成23年(2011年)6月30日

5. 発掘調査体制

榎木1遺跡 発掘調査担当 飯田陽一(上席専門員) 坂口 一(主任専門員(総括)) 麻生敏隆(主任専門員(総括)) 須田正久(主任調査研究員) 平井 敦(主任調査研究員)
遺跡掘削請負工事：株式会社歴史の杜
委託 地上測量：株式会社測研
上原IV遺跡 発掘調査担当 飯田陽一 須田正久
遺跡掘削請負工事：株式会社歴史の杜
委託 地上測量：株式会社測研
西久保IV遺跡 発掘調査担当 中沢 悟(調査研究部長) 須田正久(平成21年度)
小野和之(調査課課長) 山口逸弘(上席専門員)(平成23年度)
遺跡掘削請負工事：吉澤建設株式会社(平成21年度)
株式会社測研(平成23年度)
委託 地上測量：株式会社測研(平成21・23年度)

6. 整理及び報告書担当

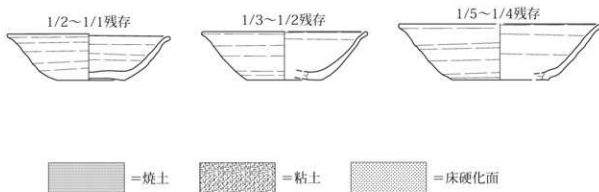
整理期間 平成23年10月1日～平成24年3月31日
整理担当及び報告書編集：山口逸弘 遺物写真撮影：佐藤元彦(補佐(総括)) 保存処理：関 邦一(補佐)
執筆担当 第1章(至る経緯)中沢 悟
第7章1(平安時代の集落について)坂口 一
上記以外 山口逸弘
石材同定 渡辺弘幸(甘楽町新屋小学校教諭)
遺構写真撮影：各調査担当者
委託：遺構図デジタル編集 株式会社測研
整理補助員：富澤友理 川津えみ子 井草峯子 関 裕子
平安時代土器観察・指導：中沢 悟 中世～古代陶磁器観察・指導：黒澤照弘(主任調査研究員)

7. 本書に掲載する榎木1遺跡、上原IV遺跡、西久保IV遺跡に係わる遺構記録図面及び写真、出土遺物、実測図等は、群馬県埋蔵文化財センターで保管している。

8. 発掘調査及び報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言・ご指導をいただいた。記して感謝します。
 国土交通省関東地方建設局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、
 富田孝彦(長野原町教育委員会)

凡 例

1. 本書で使用した座標値は、2002年4月改訂以前の日本測地系によるものであり、方位は国家座標北を表している。真北方向角は $+0^{\circ} 41' 36.73''$ (楡木1遺跡)である。
2. 遺構図の縮尺は、全体図1/500・1/200・1/100、畑跡1/100・1/80、住居跡1/40・1/60、竈屋1/40、カマド1/30、近世建物跡1/500・1/200・1/100・1/60、竈屋・掘立柱建物跡・土坑・集石・焼土遺構等1/40を基本とし、各挿図に縮尺を明記している。
3. 遺構番号は、原則として調査時の番号を踏襲している。整理段階で、他の遺構に組み入れたものや遺構認定から外された例もあるため、遺構番号は連続していない。
4. 遺物図の縮尺は、土師器費1/4、須恵器坏碗類1/3、縄文土器1/4・1/3、石器1/3・1/2・2/3を基本とし、各挿図に縮尺を明記している。
5. 土器・陶磁器実測図中、口縁部遺存度の割合によって、中心線脇を切っている。(下図参照)
6. 石器実測図中、白抜きは欠損部である。
7. 遺物図と遺物写真は原則として同縮率としたが、墨書土器写真などは任意の縮尺である。
8. 遺物観察表中の計測値単位はcmである。重量は、残存値を測り単位はgである。色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖に基づいている。
9. 本文中のテフラについては、以下の略称を用いた。
 Y P k・A s・Y P k = 浅間草津黄色軽石(新井1962) 粕川テフラ = 浅間粕川テフラ(A s・K k)
 浅間A軽石 = A s・A
10. 遺物・遺構図中の土器残存度の表現及びスクリーントーンは下図の通りである。



参考文献

新井房夫 1962 関東盆地北西部地域の第四紀編年 群馬大学紀要自然科学編 第10巻第4号

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 調査に至る経緯と調査経過	
第1節 榎木1遺跡の調査経過	1
第2節 上原IV遺跡の調査経過	2
第3節 西久保IV遺跡の調査経過	2
第2章 立地と環境	3
第1節 榎木1遺跡の立地と近接遺跡	6
第2節 上原IV遺跡の立地と近接遺跡	7
第3節 西久保IV遺跡の立地と近接遺跡	9
第3章 調査の方法	
第1節 榎木1遺跡の調査方法	10
第2節 上原IV遺跡の調査方法	12
第3節 西久保IV遺跡の調査方法	12
第4章 榎木1遺跡	
第1節 概要	13
第2節 基本土層	16
第3節 検出された遺構と遺物	17
1.住居跡	
2.竈屋遺構及びカマド・焼土遺構・集石遺構	
3.建物跡	
4.土坑	
5.ピット	
6.畑跡	
7.遺構外出土遺物	
遺構計測表・遺物観察表	
第5章 上原IV遺跡	
第1節 概要	85
第2節 基本土層	85
第3節 検出された遺構と遺物	85
1.土坑	
2.縄文包含層	
3.遺構外出土遺物	
遺構計測表・遺物観察表	
第6章 西久保IV遺跡	
第1節 概要	92
第2節 基本土層	93
第3節 検出された遺構と遺物	95
1.住居跡	
2.焼土遺構	
3.掘立柱建物及び柱穴列	
4.土坑	
5.畑跡	
6.天明泥流下畑跡	
7.遺構外出土遺物	
遺構計測表・遺物観察表	
第7章 まとめ	
1.平安時代の集落について	123
2.概括	125
報告書抄録	127
写真図版	
奥付	

挿図目次

1 図	1. 樫木1道跡 2. 上原IV道跡 3. 西久保IV道跡 位置図	1
2 図	周辺の道跡	3
3 図	樫木1道跡の位置と近接道跡	6
4 図	上原IV道跡の位置と近接道跡	8
5 図	西久保IV道跡の位置図と近接道跡	9
6 図	調査区の設定	11
7 図	樫木1道跡全体図	13
8 図	道構配置図(1)	14
9 図	道構配置図(2)	15
10 図	基本土層図	16
11 図	1号住居跡(1)	18
12 図	1号住居跡(2)カマド	19
13 図	1号住居跡(3)床下・1号住居跡出土遺物(1)	20
14 図	1号住居跡出土遺物(2)	21
15 図	2号住居跡(1)遺物出土状態及び3号カマド	23
16 図	2号住居跡(2)1・2号カマド及び床下	24
17 図	2号住居跡出土遺物(1)	25
18 図	2号住居跡出土遺物(2)	26
19 図	3号住居跡(1)遺物出土状態	28
20 図	3号住居跡(2)貯蔵穴及びエレベーション図	29
21 図	3号住居跡(3)カマド	30
22 図	3号住居跡(4)床下・3号住居跡出土遺物(1)	31
23 図	3号住居跡出土遺物(2)	32
24 図	3号住居跡出土遺物(3)	33
25 図	3号住居跡出土遺物(4)	34
26 図	4号住居跡(1)遺物出土状態	35
27 図	4号住居跡(2)カマド	36
28 図	4号住居跡(3)床下・4号住居跡出土遺物(1)	37
29 図	4号住居跡出土遺物(2)	38
30 図	4号住居跡出土遺物(3)	39
31 図	1号電屋・1号電屋出土遺物	41
32 図	カマド及び焼土・2号カマド出土遺物	42
33 図	集石・4号集石出土遺物	44
34 図	1号建物跡(1)	45
35 図	1号建物跡(2)	46
36 図	1号建物跡(3)	47
37 図	1号建物跡(4)	48
38 図	1号建物跡(5)	49
39 図	1号建物跡(6)	50
40 図	1号建物跡(7)	51
41 図	1号建物跡(8)	52
42 図	土坑(1)	54
43 図	土坑(2)	55
44 図	土坑(3)	56
45 図	土坑(4)	57
46 図	土坑(5)	58
47 図	土坑(6)	59
48 図	土坑(7)	60
49 図	土坑(8)	61
50 図	土坑(9)	62
51 図	土坑・溝・ピット出土遺物	63
52 図	ピット(1)	65
53 図	ピット(2)	66
54 図	ピット(3)	67
55 図	ピット(4)	68
56 図	ピット(5)	69
57 図	1号畑跡	70
58 図	道構外出土遺物	71
59 図	上原IV道跡全体図・基本土層	86
60 図	道構位置図及び土坑	87
61 図	道構外出土遺物	89
62 図	西久保IV道跡全体図	92
63 図	西久保IV道跡基本土層	93
64 図	西久保IV道跡 第1面(As-A配流下)全体図	94

65 図	西久保IV道跡 第2面(ローム藩移層土層)全景	95
66 図	1号住居跡及びカマド・出土遺物	96
67 図	焼土道構	97
68 図	1号竪立柱建物跡(1)	99
69 図	1号竪立柱建物跡(2)エレベーション及びピット土層	100
70 図	2号竪立柱建物跡	101
71 図	1号柱穴列	103
72 図	2・3号柱穴列	104
73 図	土坑(1)	105
74 図	土坑(2)	106
75 図	土坑(3)	107
76 図	土坑(4)	108
77 図	土坑(5)	109
78 図	土坑(6)	110
79 図	土坑(7)	111
80 図	1号畑跡	112
81 図	西久保IV道跡(東調査区)第1面・第1面円形平坦面	115
82 図	西久保IV道跡(西調査区)第1面・第1面円形平坦面	116
83 図	1号竪立柱建物・道構外(1)出土遺物	117
84 図	道構外出土遺物(2)	118
図 1	樫木1道跡 平安時代集積層	123
図 2	樫木1道跡 平安時代集積層全景(西から)	123
図 3	樫木1道跡 1～4号住居・電屋(S-1/200)	123
図 4	樫木1道跡 電屋全景(西から)	123

表目次

表 1	周辺の主な道跡一覧	4
表 2	樫木1道跡 道構計測表	72
表 3	樫木1道跡 出土遺物観察表	75
表 4	上原IV道跡 道構計測表	90
表 5	上原IV道跡 出土遺物観察表	90
表 6	西久保IV道跡 道構計測表	119
表 7	西久保IV道跡 遺物観察表	121

写真図版目次

P.L. 1	樫木1道跡と西久保IV道跡 上原IV道跡と樫木1道跡	
樫木1道跡		
P.L. 2	調査区より丸岩山を臨む 調査区遠景(1・2号住居跡周辺)	
P.L. 3	1号住居跡 遺物出土状態(南から) 1号住居跡 床面全景(南から) 1号住居跡 床下全景(南から) 1号住居跡 カマド検出面(南から) 1号住居跡 カマド全景(南から) 1号住居跡 カマド全景(南東から) 1号住居跡 調査風景 1号住居跡・2号住居跡 重複状況(南から)	
P.L. 4	2号住居跡 床面全景(南から) 2号住居跡 床下全景(南から) 2号住居跡 1号カマド全景(西から) 2号住居跡 2号カマド全景(西から) 2号住居跡 3号カマド(南から) 2号住居跡 3号カマド土層(南から) 2号住居跡 貯蔵穴全景(南から) 1号住居跡・2号住居跡 調査風景	
P.L. 5	3号住居跡 遺物出土状態(西から) 3号住居跡 床面全景(西から) 3号住居跡 床下全景(西から) 3号住居跡 カマド全景(西から) 3号住居跡 貯蔵穴中層状態(西から) 3号住居跡 底面小ピット(西から) 3号住居跡 貯蔵穴中層遺物出土状態近接	

P.L. 5 3号住居跡 貯蔵穴底面上遺物出土状態(南から)

P.L. 6 4号住居跡 床面全景(西から)
4号住居跡 床面全景(西から)
4号住居跡 カマド全景(西から)
4号住居跡 カマド構築面(西から)
4号住居跡 カマド袖石覆元(西から)
4号住居跡 2号床下土坑遺物出土状態(南から)
4号住居跡 6号床下土坑遺物出土状態(東から)
4号住居跡 6号床下土坑遺物出土状態(東から)

P.L. 7 1号電屋 全景(西から)
1号電屋 カマド確認面(南から)
1号電屋 床下全景(西から)
1号電屋 カマド使用面下(西から)
2号カマド 全景(東から)
1号塼土 全景(南から)
3号塼土 全景(西から)
4号塼土 全景(西から)
1号集石 上層(南から)
2号集石 上層(南西から)
3号集石 全景(西から)
4号集石 全景(南から)
1号建物跡 遠景(南東から)
1号建物跡 遠景(南西から)
1号建物跡 石垣基盤(南西から)
1号建物跡 石垣基盤(南から)

P.L. 9 1号建物跡 1・2号溝全景(北から)
1号建物跡 1～3号溝全景(南から)
1号建物跡 3号溝全景(南から)
1号建物跡 4号溝全景(北から)
1号建物跡 25～28号土坑全景(東から)
1号建物跡 18号土坑全景(南から)
1号建物跡 19号土坑全景(南から)
1号建物跡 遠景(東から)

P.L. 10 1号建物跡 1号ビット上層(南から)
1号建物跡 1号ビット全景(南から)
1号建物跡 2号ビット上層(南から)
1号建物跡 2号ビット全景(南から)
1号建物跡 3号ビット上層(南から)
1号建物跡 4号ビット全景(南から)
1号建物跡 5号ビット全景(南から)
1号建物跡 6号ビット全景(南から)
1号建物跡 7号ビット全景(南から)
1号建物跡 8号ビット全景(南から)
1号建物跡 9号ビット全景(南から)
1号建物跡 10号ビット全景(南から)
1号建物跡 11号ビット全景(南から)
1号建物跡 12号ビット全景(南から)
1号建物跡 13号ビット全景(南から)

P.L. 11 1号建物跡 14号ビット全景(南から)
1号建物跡 15号ビット全景(南から)
1号建物跡 16号ビット全景(南から)
1号建物跡 17号ビット上層(東から)
1号建物跡 18号ビット上層(南から)
1号建物跡 19a号ビット全景(東から)
1号建物跡 20号ビット全景(東から)
1号建物跡 21号ビット全景(南から)
1号建物跡 22号ビット全景(南から)
1号建物跡 23号ビット全景(西から)
1号建物跡 24号ビット全景(東から)
1号建物跡 25号ビット全景(南から)
1号建物跡 26号ビット上層(南から)
1号建物跡 29号ビット上層(南から)
1号建物跡 41・42号ビット全景(南から)

P.L. 12 1号土坑 全景(南から)
1号土坑 基盤全景(南から)
2号土坑 全景(東から)
3号土坑 全景(南から)
4号土坑 全景(南から)

P.L. 12 5号土坑 全景(南西から)
6号土坑 全景(南東から)
7号土坑 全景(南東から)
8号土坑 全景(南東から)
9号土坑 全景(西から)
10号土坑 全景(南から)
11号土坑 全景(南東から)
13号土坑 全景(南から)
14号土坑 全景(東から)
15号土坑 全景(南東から)
16号土坑 全景(南東から)
17号土坑 全景(南東から)
20号土坑 材出土状態(東から)
20号土坑 床面土層(補板か) (南から)
21号土坑 検出状況(西から)
22号土坑 全景(南東から)
23号土坑 全景(南東から)
24号土坑 全景(南から)
25号土坑 全景(南東から)
29号土坑 全景(南から)
30号土坑 全景(東から)
31号土坑 集石状況(東から)
32号土坑 全景(西から)
33号土坑 集石状況(西から)
34号土坑 全景(南から)
35号土坑 全景(南から)
36号土坑 全景(西から)
37号土坑 上層(南から)
38号土坑 全景(南から)
39号土坑 全景(南から)
40号土坑 全景(南から)
41号土坑 全景(東から)
42号土坑 全景(南西から)
43号土坑 全景(南から)
44号土坑 全景(東から)
45・46号土坑 全景(南から)
47号土坑 全景(南から)
48号土坑 遺物出土状態(東から)
48号土坑 中層(東から)
48号土坑 中層下土層(南から)

P.L. 15 49号土坑 全景(北から)
50号土坑 全景(南から)
51号土坑 全景(西から)
52号土坑 全景(南から)
52号土坑 出土古銭近境
53号土坑 全景(南から)
54号土坑 全景(南から)
55号土坑 全景(南から)
56号土坑 全景(南から)
57号土坑 全景(南から)
58号土坑 上層(南から)
59号土坑 上層(南から)
60号土坑 全景(南から)
61号土坑 全景(南から)
62号土坑 全景(南から)

P.L. 16 1号住居跡・2号住居跡(1)出土遺物

P.L. 17 2号住居跡(2)・3号住居跡(1)出土遺物

P.L. 18 3号住居跡(2)・4号住居跡(1)出土遺物

P.L. 19 4号住居跡(2)・電屋・カマド・集石出土遺物

P.L. 20 土坑・溝・ビット・遺構外出土遺物

上原IV遺跡

P.L. 21 上原IV遺跡 遠景(南から)
上原IV遺跡 調査前遠景(南から)

P.L. 22 上原IV遺跡 5トレンチ
上原IV遺跡 6トレンチ
上原IV遺跡 7トレンチ
上原IV遺跡 1号土坑(南から) 拡張状況

- P L .22 上原IV遺跡 7・8トレンチ
上原IV遺跡 縄文包含層調査区
上原IV遺跡 縄文包含層
上原IV遺跡 縄文包含層
- P L .23 上原IV遺跡 出土遺物

西久保IV遺跡

- P L .24 西久保IV遺跡 西側調査区遠景 1 面目As-A泥流下(東より)
西久保IV遺跡 東側調査区遠景 2 面目(西より)
- P L .25 2 面目 1 号住居跡 全景(西より)
2 面目 1 号住居跡 カマド(西より)
2 面目 焼土遺構 14号土坑上層(南より)
2 面目 焼土遺構 16号土坑上層(南より)
2 面目 焼土遺構 18・19号土坑検出面(南より)
2 面目 焼土遺構 18号土坑炭化果実出土状況(東より)
2 面目 焼土遺構 18号土坑上層(東より)
2 面目 焼土遺構 19号土坑上層(南より)
- P L .26 2 面目西側調査区 遠景(東より)
2 面目 1 号掘立柱建物跡 全景(北より)
2 面目 2 号掘立柱建物跡 全景(北より)
2 面目 1 号掘立柱建物跡 ビット列全景(南より)
2 面目 1 号柱穴列 全景(南より)
2 面目 2 号柱穴列 全景(南より)
2 面目 3 号柱穴列 全景(南より)
2 面目 2・3号柱穴列 全景(南より)
- P L .27 2 面目 西側調査区 土坑群(東南より)
2 面目 西側調査区 土坑群(北より)
2 面目 西側調査区 土坑群(北より)
2 面目 西側調査区 土坑群 調査風景
2 面目 西側調査区 土坑群 調査風景
2 面目 西側調査区 土坑群 調査風景
2 面目 東側調査区 畑跡(北より)
2 面目 東側調査区 畑跡(北西より)
- P L .28 1 面目 東端調査区 天明泥流下 全景
1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 溝
1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 円形平坦面
1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 段差
1 面目 東側調査区 天明泥流下畑跡 全景(南より)
1 面目 東側調査区 天明泥流下畑跡 全景(南より)
1 面目 東側調査区 天明泥流下畑跡 段差(東より)
1 面目 東側調査区 天明泥流下畑跡 サク(東より)
- P L .29 1 面目 東側調査区 天明泥流下畑跡 サク(東より)
1 面目 東側調査区 天明泥流下金属製品出土状態
1 面目 西側調査区 天明泥流下畑跡 全景(南より)
1 面目 西側調査区 天明泥流下畑跡 全景(南より)
1 面目 西側調査区 天明泥流下畑跡 溝状凹み
1 面目 西側調査区 天明泥流下畑跡 溝状凹み
1 面目 西側調査区 天明泥流下 近景
1 面目 西側調査区 天明泥流下畑跡 円形平坦面(南より)
- P L .30 西久保IV遺跡 住居跡・掘立柱建物跡・遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局(現 国土交通省関東地方整備局)と群馬県教育委員会、長野県教育委員会、吾妻町教育委員会が協議し、平成6年3月18日「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。同年4月1日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。以下、榎木1遺跡、上原IV遺跡、西久保IV遺跡の個別の調査経過を述べる。

第1節 榎木1遺跡の調査経過

榎木1遺跡は、代替地造成に伴い工事が計画されていた。群馬県教育委員会は平成19年12月に遺跡東側、平成20年11月と平成21年1月に遺跡西側の試掘調査を実施した。その結果、遺跡包蔵地面積5,794㎡の中で西側を中心とする1,036㎡が調査対象地となった。

平成21年4月1日に国土交通省関東地方整備局長と平成21年度の発掘調査受託契約を締結し、発掘調査は平成21年9月から開始した。調査が進む中で、平安時代の

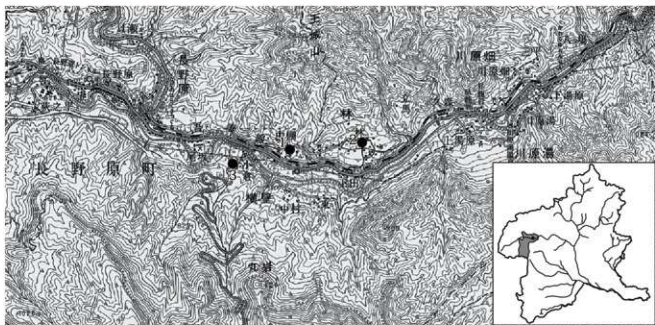
住居跡等が文化財保護課で確定した東側の限界範囲を超えて延びていることが明らかになった。9月4日に文化財保護課と国土交通省との調整が行われ、以下の2点が決まる。

① 調査範囲は当初計画より東側に拡張する。調査面積は、当初の1,036㎡から3,018㎡と1,982㎡追加する。

② 調査面積の増加に伴い、調査期間は当初9月の1ヶ月から10月までの2ヶ月とする。

(調査経過) 発掘調査は、平成21年9月1日に東側調査区より着手した。当初はバックホウによる表土掘削で遺構まで掘り下げ、その後人力による遺構確認・掘削・精査を重ねた。遺構確認面としての調査面はローム上層面を基準としたが、西側調査区は、上層の黒色土の堆積が良好で、確認面を黒色土～暗褐色土中で止め遺構検出に努め、さらに、黒色土を下げローム漸移層で2面目、最終的にローム面で3面目の調査を重ね、遺構検出と記録化に努めた。発掘調査は10月に終了した。

平成21年 調査日誌抄	
9月1日	調査区西平より表土掘削開始
9月4日	調査区東側の追加調査(1,982㎡)を決定
9月8日	1号建物跡など検出作業進む
9月16日	調査区西平終了。
9月24日	調査区東平の住居跡など集落調査を継続
10月1日	3号住・4号住居跡・土坑など調査
10月8日	住居跡床下遺構など調査
10月18日	遺構はほぼ完備。全体図など記録化へ
10月23日	第3面調査面の全景写真撮影。理め戻しへ
10月31日	調査終了



1 図 1. 榎木1遺跡 2. 上原IV遺跡 3. 西久保IV遺跡 位置図(国土地理院5万分の1地形図「草津」使用)

第2節 上原IV遺跡の調査経過

(至る経過) 平成21年度に調査された上原IV遺跡は、ハツ場ダム建設に伴う、県道林長野原線建設工事に係る発掘調査である。本遺跡は平成15年に林地区内町道拡張工事に伴う調査が遺跡西端で行われ、縄文時代後期の住居4軒・配石遺構・土坑等が発掘調査されている。

平成21年4月1日に国土交通省関東地方整備局長と平成21年度の発掘調査受委託契約を締結。4月16日より現地調査を開始した。

(調査経過) 上原IV遺跡の調査地は、緩斜面地形に占められていたが、各所で急勾配の斜面地形が点在する様相だった。そのため、遺構密度など全体像の把握を目的とし、調査区内にトレンチを設定し、遺構の広がりを捉えるように努めた。その結果、遺構密度は極めて低く、土坑6基と包含層の調査にとどまった。

なお、調査区内には墓地があり、「朝林寺」という焼失寺院の存在が伝承されていたが、墓地周辺からも寺院跡の痕跡は見出せなかった。

平成21年	調査日誌抄
4月16日	調査着手。重機による掘削と作業員によるトレンチ調査を平行する
4月30日	1～7号トレンチ設定。遺構確認。調査区内にある水路などの付け替えを行う
5月11日	各トレンチより土坑・自然流路などを検出。遺構がかかったトレンチを対象に拡張調査を行う
5月13日	土坑など全景写真や断面撮影など調査継続。各トレンチ全景写真
5月15日	8トレンチ設定。縄文土器片など出土。7トレンチ・8トレンチ間を拡張調査へ
5月18日	拡張区内は遺構なしと判断し、調査区内記録作業は終了へ
5月31日	器材撤収・埋め戻し終了。調査終了

第3節 西久保IV遺跡

(至る経過) 西久保IV遺跡はハツ場ダム建設工事に伴うJR本線付け替え工事及び変電所建設に伴う発掘調査である。平成21年12月と平成23年5・6月に発掘調査を実施した。

平成21年度の調査は、当初計画には含まれていなかったが、JR本線及び橋脚工事が急がれていたため早急の発掘調査が必要となった。平成21年11月27日文化財保護課の試掘調査により、天明泥流下における畑跡や道路跡を確認した。同年12月3日国土交通省と県文化財保護課との調整により、12月上旬から、遺跡地内の東側にかかる

JR本線部分と橋脚部分を発掘調査することが決まり、12月に実施した。

平成23年度の調査は、同遺跡西側に予定されていたJR本線部分及び変電所部分が対象となった。平成22年9月17日に県文化財保護課による試掘調査により、天明泥流下における畑跡や道路跡が確認された。平成23年4月1日に国土交通省関東地方整備局長と平成21年度の発掘調査受委託契約を締結。平成23年5・6月に発掘調査を実施した。

(調査経過) 平成21年度調査の対象は遺跡地の東端にあたり、対象面積は855㎡とやや狭い調査区である。調査当初は、調査区全域を覆う天明泥流の重機による除去作業からはじめた。調査面は泥流下とはいえ、当時の地表面に露出した基盤礫が各所に点在し、表土掘削も平滑には行われなかった。その中で、泥流直下より畑跡が検出されたが、遺存度は良好でなかった。

平成23年度の調査は対象面積が2,601㎡とやや広く、排土箇所も周辺に適当な用地も無かったため、調査区を2分した反転で調査をおこなった。平成21年度調査同様に、調査区全域を覆う天明泥流除去を当初作業とし、泥流下畑跡を検出した。畑跡調査後に畑跡耕作土下の黒色土を、2×4あるいは2×2mの試掘坑を各所に配し、下層文化層の有無を確認したところ、幾つかの試掘坑より、土師器や縄文土器破片の出土が見られ、さらに焼土も認められたので2面目の調査を実施した。

平成21年	調査日誌抄
12月1日	調査着手。調査区設定及び重機による表土掘削。作業員による調査区整備
12月3日	天明泥流下畑跡の検出作業を継続する。
12月14日-18日	泥流下畑跡検出作業及び記録
12月18日	畑跡下第2面確認調査
12月19日	埋め戻し作業着手
12月28日	器材撤収などを済ませ調査終了
平成23年	
4月28日	調査着手。調査区確認など準備作業
5月12日	調査区東半より重機による表土掘削
5月16日	東半部。天明泥流下畑跡検出作業継続
5月20日	東半部。天明泥流下畑跡全景写真 2面目試掘調査
5月22日	東半部。2面目確認面まで重機による掘削
6月1日	東半部。2面目遺構調査継続。住居跡・土坑など
6月7日	東半部。2面目調査終了。排土反転。西半部調査区表土掘削
6月10日	西半部。天明泥流下畑跡検出作業継続
6月15日	西半部。天明泥流下畑跡全景写真 2面目試掘調査
6月17日	西半部。2面目確認面まで重機による掘削及び遺構確認作業
6月22日	西半部。2面目遺構調査継続。土坑・掘立柱建物跡など
6月30日	西半部。2面目調査終了。埋め戻し

第2章 立地と環境

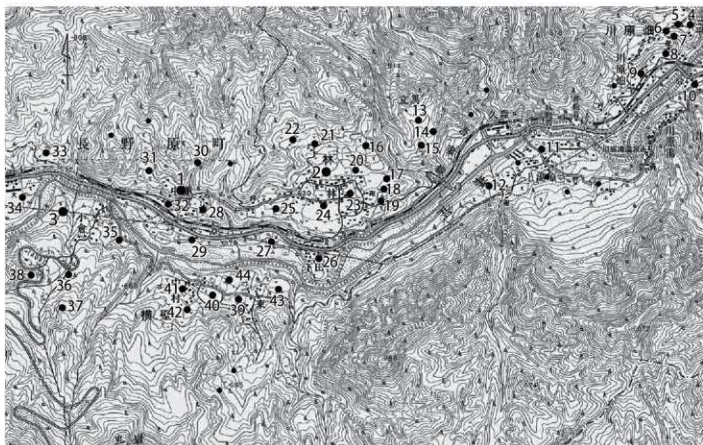
吾妻川は上信国境の一つである鳥井峠(1,362m)付近に源を発し、嬭恋村を経て長野原町、東吾妻町を東に流れ、渋川市白井で利根川と合流する。吾妻川を挟んで北には草津白根山(2,171m)、南には浅間山(2,568m)という活火山を中心とした山脈が連なり上信国境の分水嶺を構成している。上・中流域の主要な支流としては、万座川、熊川、白砂川などが挙げられるが、多くがこの分水嶺付近に端が求められる河川である。

本書で扱う榎木1遺跡、上原IV遺跡、西久保IV遺跡は、群馬県北西部の吾妻郡長野原町に所在する。長野原町北部は吾妻川上・中流域にあたり、吾妻川を中心とした南北の山地地形が迫る、山あいの地に発展した地域である。一方、南部は浅間高原地帯に占められ、間近に浅間山を望む景勝の地でもある。周辺の山々の主な例を挙げると、吾妻川北に高間山(1,342m)、王城山(1,123m)を眺め、南には岩峰丸岩(1,124m)や管峰(1,473.5m)などが聳える。特に王城山と丸岩は当地域の示標ともなっており、

地元に着した山である。このような山々と分水嶺より流れ下る吾妻川支流によって、峡谷を地勢とする当地域の地理的特徴が際立っている。

長野原町域に分布する遺跡の多くは、吾妻川が形成した河岸段丘に立地しており、近年の調査に伴い丘陵、山麓斜面にその分布域を広げている。本書で報告する3遺跡も吾妻川兩岸の段丘上に位置している。吾妻川が形成した段丘面としては、最上位段丘面・上位段丘面・中位段丘面・下位段丘面が挙げられている。長野原町におけるハツ場ダム対象地域は広く、各段丘面を包括した面的な発掘調査が及ぶ地域であり、各段丘面の遺跡相が複雑に絡み合う様相が明らかになると期待される。また、当地域は、川原畑・川原湯・林・横壁・長野原という5箇所の大字が存在する。各大字は河川・段丘・道路などで区分されており、それぞれが特徴ある遺跡を包蔵する地区となっている。段丘様相と併せて各大字が包括する小地域様相が把握される地域である。

ここでは、当地域の周辺の主な遺跡分布図と一覧表を掲載し、榎木1遺跡、上原IV遺跡、西久保IV遺跡の周辺遺跡の詳細は各節で述べる。



2 図 周辺の遺跡(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)

第2章 立地と環境

表1 周辺の主な遺跡一覧

No	遺跡名	所在大字	段丘面	概要	文献など
1	榎木1遺跡	林	上位段丘面	縄文時代中期土坑、平安時代集落跡、近世屋敷跡など	本報告書
2	上原IV遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包舎跡、中・近世土坑など	本報告書
3	上原IV遺跡	横塚	中位段丘面	縄文時代住居跡4・列石・配石遺構、弥生時代前期の良好な包舎跡、近世溝・木製品など	27
4	三平1遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代早期～前期集落跡、住居跡2軒。弥生時代前期～中期土坑、平安時代以降の掘立柱建物跡3・墳土10基など	25
5	三平2遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代包舎跡(草創期～前期)。掘立柱建物跡7軒などの中世屋敷跡	25
6	上ノ平1遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代中期集落跡、住居跡16軒。平安時代集落跡、住居跡20軒など	31
7	上ノ平2遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	1
8	東宮遺跡	川原畑	中位段丘面	天明記流下屋敷跡7棟、建物の構造と性格が把握できる良好な遺存状態であり、礎石とともに東・土台・大引・床板が出土している。酒蔵、糟場跡も検出され	39
9	西宮遺跡	川原畑	中位段丘面	天明記流下の屋敷跡・小屋・畑跡。畑跡には復旧溝を含む	54
10	西ノ上遺跡	川原畑	中位段丘面	天明記流下畑跡	16
11	石川原遺跡	川原畑	中位段丘面	縄文時代中期～後期集落跡、配石遺構など。近世畑・屋敷跡など	54
12	川原畑沼遺跡	川原畑	中位段丘面	縄文晩期埋蔵土基。平安時代集落跡、住居跡3軒。天明記流下畑跡など	18
13	立馬1遺跡	林	山地斜面	小規模な縄文時代早期集落跡、晩期集落跡、弥生時代中期集落跡・豊積墓。平安時代集落跡、陥穴状土坑など	23
14	立馬2遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期包舎跡、中期前庭～後集落跡、住居跡1軒。陥穴状土坑など	20
15	立馬3遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期集落跡、住居跡3軒。中期住居跡1軒。良好な早期包舎跡。陥穴状土坑など	32
16	花畑遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期初頭包舎跡。平安時代集落跡、住居跡3軒。陥穴など	14
17	東原1遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代上土坑及び包舎跡。平安時代以降の陥穴土坑。中・近世の掘立柱建物跡2棟など	38
18	東原2遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包舎跡。陥穴状土坑り基。中・近世での掘立柱建物跡1棟など	38
19	東原3遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代早期～後期包舎跡。中・近世の掘立柱建物跡4棟、内耳跡や古瀬戸など出土。江戸後期礎石建物跡1棟	38
20	上原1遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代前期～中期包舎跡。中期後葉住居跡1軒を調査	7
21	上原2遺跡	林	最上位段丘面	2011年度、町教委調査。縄文時代中期初頭の集落跡など	町教委富田氏・高林氏ご
22	上原3遺跡	林	最上位段丘面	2011年度、町教委調査。平安時代集落跡など	教示(規説資料など)
23	林中原1遺跡	林	最上位段丘面	町教委調査では、縄文時代後期前葉集落跡。住居跡1軒、配石遺構など。注口土器などの良好な出土遺物を見る。事業団調査では、縄文時代前期～中期集落跡。中世掘立柱建物跡を中心とした中・近世遺構群や城跡の一部を調査	10
24	林中原2遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期～後期の大型集落跡。弥生中期墓跡、住居跡4軒。中・近世掘立柱建物跡を調査している	54・55
25	林原宮遺跡	林	最上位段丘面	西宮妻地域で初出の古墳時代後期住居跡を見る。平安時代集落跡、住居跡14軒など。平引状金具の出土	12
26	下田遺跡	林	中位段丘面	天明記流下の民家1軒。畑跡を検出。鋤を出土する	14
27	下原遺跡	林	下位段丘面	古墳時代中期～平安時代集落跡。住居跡各1軒。中世屋敷跡、中～近世畑跡など	24
28	中郷1遺跡	林	上位段丘面	縄文時代早期包舎跡、平安時代集落跡など。2011年度 町教委調査	町教委富田氏・高林氏ご
29	中郷2遺跡	林	下位段丘面	天明記流下の畑跡及び安永9年埋没と推定される畑跡など	16
30	二反沢遺跡	林	山地斜面	石加を付設する中世土坑。澁川河遺物出土。近世畑跡	21
31	榎木2遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代早期～中期前葉集落跡、住居跡30軒。平安時代集落跡、住居跡38軒。	28・33
32	榎木3遺跡	林	上位段丘面	中世掘立柱建物群など	14
33	金神遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期集落跡。住居跡2軒。早期～後期包舎跡。近世以前の畑跡など	27
34	尾坂保1遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期集落跡。早期～後期包舎跡。中世掘立柱建物跡。天明記流下の畑跡など	14・52～56
35	西久保1遺跡	横塚	中位段丘面	縄文時代中期末葉集落跡。住居跡1軒。水場遺構など	14
36	西久保2遺跡	横塚	中位段丘面	平安時代の散布地とされる	1
37	西久保3遺跡	横塚	山地斜面	散布地	1
38	柳沢城跡	横塚	山地斜面	中世城郭。堀切・土塁・礎石・腰曲輪・石籠遺構。陶磁器・鉄製品・銅製品、石臼などを出土	2
39	山根1遺跡	横塚	中位段丘面	平安時代散布地とされる	1
40	山根2遺跡	横塚	中位段丘面	散布地	1
41	山根3遺跡	横塚	中位段丘面	縄文時代中期後葉集落跡。住居跡3軒。土坑39基。中・近世溝1条など	14・27
42	山根4遺跡	横塚	中位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	1
43	横塚勝沼遺跡	横塚	中位段丘面	槍先形尖頭器の出土(表採)。縄文時代土坑。平安時代住居跡1軒	14
44	横塚中村遺跡	横塚	中位段丘面	縄文時代中期～後期の大型集落跡。平安時代集落跡。中・近世の掘立柱建物群。礎石建物跡・土坑墓など	17・19・22・26・29・30・34～37

主要参考文献

1. 長野県教育委員会(以下長野町教委)1990「長野原の道跡—町内道跡詳細分布調査—」長野原町理蔵文化財調査報告書第1集
2. 長野町教委1995「柳沢城」長野原町理蔵文化財調査報告書第4集
3. 長野町教委2004「町内道跡Ⅳ」長野原町理蔵文化財調査報告書第13集 林中原Ⅰ道跡Ⅳ・外輪原Ⅰ道跡・長城Ⅰ道跡Ⅱ
4. 長野町教委2002「林宮原道跡Ⅱ」長野原町理蔵文化財調査報告書第14集
5. 長野町教委2005「町内道跡Ⅴ」長野原町理蔵文化財調査報告書第15集 船木Ⅰ道跡・立石道跡・林宮原道跡等
6. 長野町教委2006「町内道跡Ⅵ」長野原町理蔵文化財調査報告書第16集 林中原Ⅱ道跡Ⅵ・東原Ⅰ道跡・林中原Ⅰ道跡Ⅶ等
7. 長野町教委2007「町内道跡Ⅶ」長野原町理蔵文化財調査報告書第17集 林中原Ⅰ道跡Ⅶ・林宮原道跡Ⅵ・東原Ⅰ道跡Ⅱ・上原Ⅰ道跡Ⅱ・上原Ⅳ道跡・林中原道跡Ⅹ・林中原Ⅱ道跡Ⅹ・中郷Ⅰ道跡・上原Ⅱ道跡・上原Ⅲ道跡等
8. 長野町教委2009「町内道跡Ⅷ」長野原町理蔵文化財調査報告書第18集 林中原Ⅰ道跡Ⅷ・久々戸道跡等
9. 長野町教委2010「町内道跡Ⅸ」長野原町理蔵文化財調査報告書第19集 草木原道跡Ⅱ・三平Ⅰ道跡・古屋敷道跡・林宮原道跡Ⅶ・林中原Ⅰ道跡Ⅷ・上原Ⅳ道跡Ⅷ等
10. 長野町教委2010「林中原Ⅰ道跡Ⅳ」長野原町理蔵文化財調査報告書第20集
11. 長野町教委2010「町内道跡Ⅹ」長野原町理蔵文化財調査報告書第21集 林中原Ⅱ道跡Ⅹ
12. 長野町教委2011「林宮原道跡Ⅶ」長野原町理蔵文化財調査報告書第23集
13. 財団法人群馬県理蔵文化財調査事業団(以下群馬文)1998「長野原久々戸道跡」
14. 群馬文2002「ハッ場ダム発掘調査成果(1)」ハッ場ダム建設工事に伴う理蔵文化財調査報告書第2集(以下ハッ場〇集) 東宮道跡・石畑道跡・川原湯勝沼道跡・横塚勝沼道跡・西久保Ⅰ道跡・山根Ⅱ道跡・下田道跡・花畑道跡・船木Ⅱ道跡・尾坂道跡等
15. 群馬文2003「久々戸道跡・中郷Ⅱ道跡・下原道跡・横塚中村道跡」ハッ場3集
16. 群馬文2004「久々戸道跡(2)・中郷Ⅱ道跡(2)・西ノ上道跡・上郷A道跡」ハッ場4集
17. 群馬文2005「横塚中村道跡(2)」ハッ場5集
18. 群馬文2005「川原湯勝沼道跡」ハッ場6集
19. 群馬文2006「横塚中村道跡(3)」ハッ場7集
20. 群馬文2006「立馬Ⅱ道跡」ハッ場8集
21. 群馬文2006「上郷B道跡・廣石A道跡・二反沢道跡」ハッ場9集
22. 群馬文2006「横塚中村道跡(4)」ハッ場10集
23. 群馬文2006「立馬Ⅰ道跡」ハッ場11集
24. 群馬文2007「下原道跡Ⅱ」ハッ場12集
25. 群馬文2007「三平Ⅰ・Ⅱ道跡」ハッ場13集
26. 群馬文2007「横塚中村道跡(5)」ハッ場14集
27. 群馬文2008「幸神道跡・上原Ⅳ道跡・山根Ⅱ道跡(2)」ハッ場17集
28. 群馬文2008「船木Ⅱ道跡(1)」ハッ場18集
29. 群馬文2008「横塚中村道跡(6)」ハッ場20集
30. 群馬文2008「横塚中村道跡(7)」ハッ場22集
31. 群馬文2008「上ノ平Ⅰ道跡(1)」ハッ場23集
32. 群馬文2009「立馬Ⅲ道跡」ハッ場26集
33. 群馬文2009「船木Ⅱ道跡(2)」ハッ場27集
34. 群馬文2009「横塚中村道跡(8)」ハッ場29集
35. 群馬文2009「横塚中村道跡(9)」ハッ場30集
36. 群馬文2010「横塚中村道跡(10)」ハッ場31集
37. 群馬文2010「横塚中村道跡(11)」ハッ場32集
38. 群馬文2010「東原Ⅰ道跡・東原Ⅱ道跡・東原Ⅲ道跡」ハッ場33集
39. 群馬文2011「東宮道跡(1)」ハッ場34集
40. 群馬文1995「年報14」
41. 群馬文1996「年報15」
42. 群馬文1997「年報16」
43. 群馬文1998「年報17」長野原一本松・長野原幸神・横塚中村・長野原久々戸・川原湯上高原・川原畑東宮・川原畑石畑・林下田林東原・上原・林花畑・横塚中村Ⅱ・横塚西久保
44. 群馬文1999「年報18」川原畑石畑道跡・長野原一本松道跡・長野原久々戸道跡・林花畑道跡・林花畑・横塚中村Ⅰ・横塚中村Ⅱ・横塚西久保・林久森・林東原・川原畑三平・川原畑二社Ⅱ
45. 群馬文2000「年報19」長野原一本松・長野原尾坂・長野原久々戸・林中郷・林花畑・横塚中村
46. 群馬文2001「年報20」長野原一本松・林下原Ⅱ・林中郷Ⅱ・林二反沢・林花畑Ⅱ・林花畑・横塚中村・横塚西久保Ⅰ
47. 群馬文2002「年報21」長野原一本松・林花畑Ⅱ・林中郷Ⅱ・林下原Ⅱ・立馬・横塚中村・山根Ⅱ・上郷Ⅱ・上郷岡原・廣石・雷田
48. 群馬文2003「年報22」長野原一本松・横塚中村・立馬・立馬Ⅱ・西ノ上・上郷岡原・上郷
49. 群馬文2004「年報23」長野原一本松・上原Ⅳ・中郷Ⅱ(2)・横塚中村・久々戸・下原・川原湯勝沼・上郷岡原・上郷A
50. 群馬文2005「年報24」長野原一本松・上原Ⅲ・林中原Ⅰ・Ⅱ・船木Ⅱ・下原・三平Ⅰ・Ⅱ・横塚中村・川原湯勝沼
51. 群馬文2006「年報25」幸神・長野原一本松・船木Ⅱ・立馬Ⅰ・三平Ⅰ・横塚中村・上郷岡原
52. 群馬文2007「年報26」上ノ平Ⅰ・尾坂・横塚中村・山根Ⅱ・上郷岡原
53. 群馬文2008「年報27」上ノ平Ⅰ・立馬Ⅲ・長野原一本松・尾坂・東宮・林中原・上郷岡原・上郷A・上郷西
54. 群馬文2009「年報28」林中原Ⅰ・東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・林中原Ⅱ・尾坂・長野原一本松・石川原・西宮・上郷A
55. 群馬文2010「年報29」尾坂・東宮・林中原Ⅱ・東原Ⅲ・上原Ⅳ・船木Ⅰ・林中原・西久保Ⅲ
56. 群馬文2011「年報30」尾坂



林地区より吾妻川下流を望む

第1節 榎木I遺跡の立地と 近接遺跡

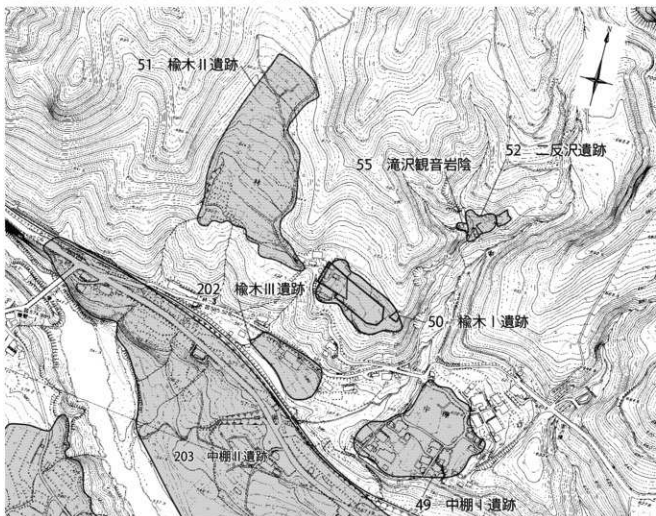
長野原町大字林に所在する。林地区は王城山(標高1,232m)南斜面裾部にあたる。当地域の地形区分では最上位段丘面が主体を占め、段丘崖以下に中位段丘面と下位段丘面を臨む。上位段丘面は応桑泥流堆積層(約21,000年前)を削って形成されたとされ、南側への急斜面地形から、標高660m付近で緩やかな斜面地形に変換する。南流する小河川や沢により、いくつかの尾根状台地に分割される。尾根状台地の東西端及び南端は比較的急斜面地形が展開し、台地中央部分が広く平坦地に近い緩斜面地形が保たれている。これらの台地が東西に連なる林地区には、遺跡の濃密な分布が知られ、最上位段丘面では花畑遺跡や林中原遺跡群、林上原遺跡群、立馬遺跡群などが調査されている。

榎木I遺跡(本書)は、林地区南西部にあたり、吾妻川左岸最上位段丘面に位置するとされているが、遺跡内及

び周辺は段丘面という平坦地形ではなく、山地斜面に近い傾斜が周辺を取り巻く。急傾斜地形内に見られる比較的緩やかな平坦地が、本遺跡内の地形である。遺跡の北西側には榎木II遺跡が位置し、東側には榎木沢を挟んで対岸に中棚I遺跡を見る。また南側の段丘崖を経て上位段丘面に榎木III遺跡が所在する。榎木I遺跡の発掘調査は平成21年度に行われ、縄文時代土坑、平安時代集落跡、近世屋敷跡などが検出されている。

榎木II遺跡(麻生2008・2009)は、平成12年・13年・16年・17年に調査が行われている。縄文時代早期初頭～前葉と中期初頭～前葉の集落跡及び平安時代集落跡が検出されている。縄文時代の出土資料が豊富であり、早期の撫糸文系土器群や中期初頭の五領ヶ台式を中心にした充実した出土量を見ることができる。

早期の住居跡は31軒が検出され、該期集落跡としては屈指の規模となる。石囲いや付帯する例が9軒数えられ、これも格段の内容である。通常、早期段階の住居



3図 榎木I遺跡の位置と近接遺跡

内には石囲いや設けた例が無いことから、当遺跡の例は縄文時代観を大きく揺るがす発見となるはずである。しかしながら、検出された石囲いやの幾つかは床面から浮いた状態の例も見られ、厳密には居住に伴う例と判断できない。今後は同様な石囲いを持つ該期住居跡の検出例を待ちたいが、当遺跡の事例自体も検証を重ねて一定の結論を導かねばならないだろう。住居廃絶後の凹地に築かれた石囲い施設と見る方向も視野に入れるべきであろう。

中期の集落跡は住居跡3軒を見る。その他に中期に比定される土坑も数基あり、斜面地形に営まれた小規模な中期集落を想定できよう。ただ、斜面包含層などからの中期土器出土量は多く、遺構出土土器の内容を遙かに凌駕する。おそらく、斜面包含層と遺構面が複数回にわたり重複する変遷が予想され、そのため時間幅のある混在した包含層が形成されたのであろう。また、前期末葉の土器群も一定量出土しており、林地区における前期末～中期前葉段階の資料充実を裏付ける例となっている。

平安時代の集落跡も調査されており、38軒の竪穴住居跡が報告されている。9世紀後半代から10世紀にかけての比較的規模の大きな集落と思われる。墨書土器(「三家」)や石製紡錘車(「称」)などの文字資料が目玉を引く。その他に鉄製の小型鎌や芋引鉄製品などの出土も見られ、生業の一端を窺う資料が出土している。

中世遺構としては、中世掘立柱建物群が調査されている。削平された数段の平坦面に20棟の掘立柱建物跡を検出し、屋敷跡としての位置付けが可能となっている。

榎木Ⅲ遺跡(松原2002)は、平成10年に調査が行われた。包含層調査となったが、縄文時代前期後葉、後期前葉、さらに弥生時代中期の土器片が出土している。

中棚Ⅰ遺跡(富田2010)は、土地改良事業に先立ち、長野原町教育委員会が試掘を行い、縄文時代早期包含層・平安時代包含層と住居跡を確認している。続く、2011年度には町教委の本調査で、平安時代集落跡を検出している。特に主軸長6mを超える大型住居跡は注目されよう。縄文時代早期後葉の土器も出土している(富田氏・高林氏ご教示)。

中棚Ⅱ遺跡(岡2003・小野2004)は下位段丘に位置し、天明泥流下の畑跡を中心に詳細な調査が行われている。泥流堆積物の分析や耕作状況、栽培植物などに関する

様々な視点での調査成果となっており、周辺と同様な天明泥流下畑跡調査における基準的な事例となっている。その他では、縄文晩期や弥生中期の土器片や平安時代須恵器片が出土している。

山あいの斜面平坦地に占地する二反沢遺跡(神谷2006)は、調査面を二面持つ。下面の中世面では、石垣を伴う造成地を3箇所検出しており、鍛冶工房に伴う炉壁・椀形滓や鉄滓が出土している。上面の調査面では、天明泥流以降の近世畑跡を調査している。また、周辺は「大乗院堂跡」とされる周知の遺跡である。

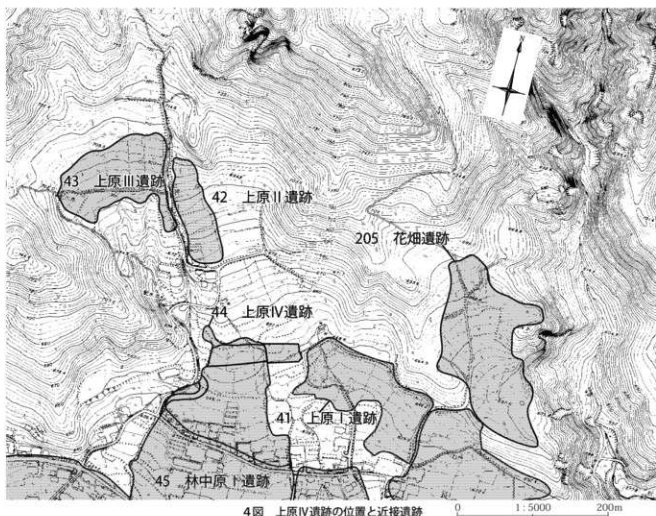
なお、滝沢観音岩除は、「滝沢観音堂宇」と石仏群が見られ、岩除遺跡としての詳細は不明である。

第2節 上原IV遺跡の立地と近接遺跡

上原IV遺跡も、榎木Ⅰ遺跡と同様に長野原町大字林に所在する。榎木Ⅰ遺跡は上位段丘面とはいえ、山地斜面における緩斜面地形への占地だったのに比して、上原IV遺跡とその周辺は扇状地形の扇端部及び扇尖部に近い地形に位置しており、北から南側への緩傾斜地形が比較的広く望める地形である。さらに南側の林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡などを経て吾妻川の形成した上位段丘面境にある段丘崖へ達する。前にも述べたように、本遺跡と周辺の地形は最上位段丘面とはいえ扇状地地形であり、上位の傾斜地形は扇頂部の山地地形とほぼ一体化している。また本遺跡の西を押し沢川が流れ、さらに西は山地斜面が迫る形態となる。一方東側も、上原Ⅰ遺跡を挟んで、花畑遺跡が乗る緩斜面地形が広がりを見せる。周辺遺跡としては、上原Ⅱ遺跡と上原Ⅲ遺跡及び花畑遺跡が標高の高い急斜面地形に立地し、上原Ⅰ遺跡と上原IV遺跡や林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡・林宮原遺跡などは比較的緩やかな斜面地形に広く占地する傾向が見られる。

上原Ⅰ遺跡は、平成18年に長野原町教育委員会が土地改良事業に伴い試掘調査を施し、縄文時代中期後葉の住居跡や前期包含層などを確認している(富田2007)。当事業団も平成9年度に試掘・立ち会い調査を行い、陥穴状土坑I基を確認している。

上原Ⅱ遺跡は平成16年に当事業団が試掘調査を行い、町教委が18年に試掘、23年に本調査を行っている。縄文時代中期初頭の竪穴遺構や焼土遺構、土坑などを検出



4図 上原IV遺跡の位置と近接遺跡

している(高林他2012)。林地区は縄文時代前期末葉や中期初頭～前葉の資料が他地区に比しても多く、例えば立馬II遺跡や前述の楡木II遺跡でもまとまった資料が報告されている。

上原III遺跡も平成18年に町教委試掘、23年に本調査が行われている。平安時代の集落跡として、住居跡14軒や鍛冶工房跡などを見る(高林他2012)。今後さらに調査例を加え、平安時代集落跡の全容を明らかにし、上原II遺跡と併せて整理・報告が待たれよう。

上原IV遺跡は数次にわたり調査が重なる。町教育委員会が平成14・18・20年に、事業団が平成15年と21年に調査を行っている(篠原2008)。事業団調査では、縄文時代後期の敷石住居跡や配石遺構が検出されており、1・3号住居跡や列石より出土した注口土器は、隣接する林中原I遺跡にも類例が認められ、当地区における堀之内2式土器の充実ぶりが窺われる。また、縄文時代晩期末葉～弥生時代の包含層も調査されている。近世では、下駄・石鉢・陶磁器類などが豊富に出土している。本書は平成

21年度調査分を掲載している。

花畑遺跡は最上位段丘面の最上位に位置する。平成9～12年に当事業団で調査を行った(松原2002)。平安時代集落跡として住居跡3軒を検出している。また陥穴状土坑を多数調査しており、幾つかの土坑壁面や底面より、土坑の掘削工具痕を抽出し得た。金属製の道具と捉えられ、そのことから、陥穴状土坑の帰属時期を弥生時代以降に求める調査成果を導き出している。

本遺跡の南側には、林中原I遺跡が広がる。前述のように、町教委調査では、良好な縄文時代後期前葉集落跡を検出している。地域性の強い堀之内2式土器が知られ、研究上今後も注目が集まる資料である。事業団調査では、中世建物群や城跡の一部を調査している。ハッ場ダムに関連する発掘調査では、縄文時代集落跡と近世畑跡の充実が知られるが、中世遺構の検出は希少であり、極めて重要な遺構群と評価されよう。林地区における中世遺構群の様相を基に、他地区における中世遺構の検出に努めるべきであろう。

第3節 西久保IV遺跡の立地と近接遺跡

西久保IV遺跡は吾妻川右岸横壁地区に所在する。横壁地区は中段段丘面を主としており、上位段丘面も最上位段丘面も形成されていない。著名な横壁中村遺跡も中段段丘面の占地である。横壁地区は東西に概ね2箇所の平坦な段丘面を持ち、西久保IV遺跡は西側の段丘面に位置する。周辺は吾妻川が白砂川と合流し下流で蛇行し、段丘面が北側へ突出する舌状の地形となっている。また、遺跡の東側は、南側の山地斜面より流れ出した小倉沢に刻まれ、独立した台地の印象を得る地形である。

周辺遺跡としては、西久保I遺跡が平成6年・10年・12年に当事業団で発掘調査が行われている(松原2002)。縄文時代中期後葉～末葉の集落跡として住居跡6軒の他、中期中葉末段階の水場遺構や前葉段階の土坑などが調査されている。また、黒曜石の剥片を多量に出土した箇所を、剥片廃棄場として位置付けている。

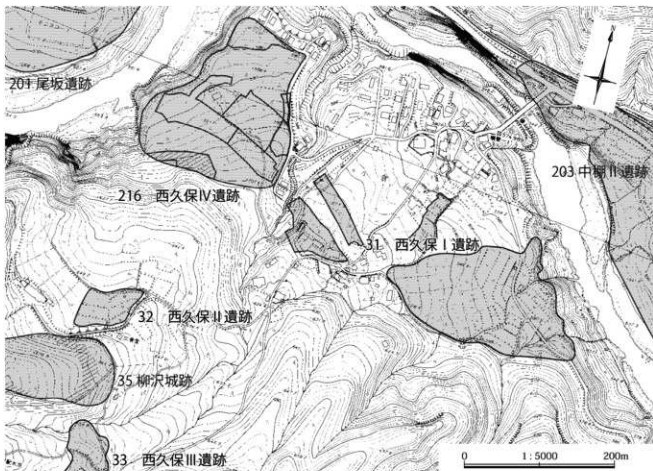
西久保II・III遺跡には調査が及んでいないが、縄文時

代と平安時代の散布地として位置付けられている。

本書で扱う西久保IV遺跡も数次に渡って調査が行われている。平成12年と21年・23年の事業団調査以外にも、平成17年に町教育委員会が町営住宅建設に伴い試掘調査を行っている。いずれも、天明泥流下の烟跡を検出している。町教委の調査地点では、天明泥流の天端ともいべき地点を検出しており、泥流災害の規模を再確認するデータを提供している。この天明泥流下の烟跡は周辺遺跡でも広く調査され、久々戸遺跡や吾妻川対岸の尾坂遺跡や中棚II遺跡などで広域な烟跡が確認されている。

尾坂遺跡では、泥流下烟跡下面に中世・平安・弥生・縄文の調査面を検出し各面の集落様相を調査した。中世は掘立柱建物跡、平安時代は竪穴住居跡、弥生時代は墓壇や貯蔵穴、縄文時代は敷石住居跡・埋裏などを見た。

柳沢城が本遺跡の南西約4kmに所在する。中世山城で、平成5年に町教委が発掘調査を行っている(白石1995)。別城一郭付随と呼ばれる特殊構造で、郭跡・堀切・土居などを調査した。出土物も豊富で、常滑・古瀬戸・美濃・珠洲窯の甕・輸入陶磁器(景徳鎮)などが見られる。



5図 西久保IV遺跡の位置図と近接遺跡

第3章 調査の方法

ハツ場ダム建設に伴う発掘調査は、平成6年(1994年)より開始されている。その間幾多の遺跡が発掘調査され、各遺跡で様々な調査成果が挙げられてきた。ハツ場ダムに係わる調査対象地として、長野原町北部及び東吾妻町北西部があたる。この広域な調査対象地に対し、各遺跡の調査方法の均一化、とりわけ調査区呼称方法については、統一した方法をとることになった。これは、「ハツ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」について関連する市町村と協議した結果である。本書に掲載する、楡木Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、西久保Ⅳ遺跡の発掘調査もこれらの方法に準拠している。以下、その一部を掲載する。

① ハツ場ダム建設に関連する遺跡には、遺跡名とともにYD(ハツ場ダムの略)番号を設定した。長野原町の調査対象区内における大字5地区(1、川原畑 2、川原湯 3、横壁 4、林 5、長野原)、東吾妻町の大字3地区(6、三島 7、大柏木 8、松谷)に番号を付けた。楡木Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡の所在する長野原町林はYD4であり、楡木Ⅰ遺跡はYD4-22、上原Ⅳ遺跡はYD4-13である。横壁に所在する西久保Ⅳ遺跡は、YD3-05である。

② 発掘調査対象地には、国家座標(日本測地系)に基づきグリッドを設定した。座標値 $X=+58000.0$ 、 $Y=97000.0$ を原点とし1km方眼で60箇所の区画を設定し「地区」(大グリッドと呼ぶ)とする。楡木Ⅰ遺跡はNo.28地区に、上原Ⅳ遺跡は、No.27地区に、西久保Ⅳ遺跡はNo.28地区とNo.29地区に跨がる(6図-1)。

③ 次に1km方眼の中を、100m方眼に分割し、「区」(中グリッド)とする。南東隅は1区となり、南東隅から南西隅まで10区続いた後、1区の北側が11区となり同様に西へ20区まで続く。この配列により1km方眼の北西隅が100区となるように設定している。楡木Ⅰ遺跡は73区と83区、上原Ⅳ遺跡は93区・94区・83区・84区に跨がる。西久保Ⅳ遺跡は28地区60区・70区、29地区51区・61区に跨がる(6図-2)。

④ 100m方眼の「区」は、さらに4m方眼に細分割され「グリッド」(小グリッドと呼ぶ)とする。東から西へAからYまでのアルファベット25字を充てる。南から北へ1から25の数字をそれぞれ割り当て、その交点となる南

東隅を起点としてグリッドを呼称している(6図-3)。

遺物取り上げにおいて、特に遺構外扱いの遺物については、この中・小グリッド名を明記して取りあげている。また、遺構名称についても、中グリッド毎の遺構名称となっている。西久保Ⅳ遺跡を例えれば、28地区60区の1号土坑は60区1号土坑として、29地区51区の1号土坑は51区1号土坑となっている。1遺跡内に1号土坑が複数存在する可能性もあり、さらに遺跡によっては通番を付す場合もあり、留意が必要である。

遺構平面測量にあたっては、測量業者委託による。3遺跡ともデジタル測量を基本とし、各遺構の特性に応じ、縮尺率1/10～1/200を選択して行っている。遺構断面測量も同様である。

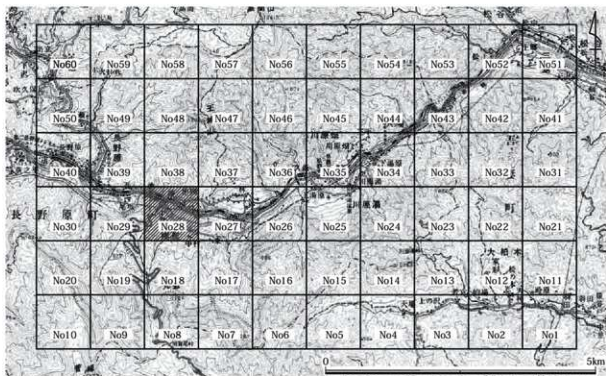
遺構写真については、各遺跡とも現場担当者が行っている。平成18年度より、デジタルカメラ導入によりフィルム撮影はプロウニーフィルム(6×7)のみ撮影している。

第1節 楡木Ⅰ遺跡の調査方法

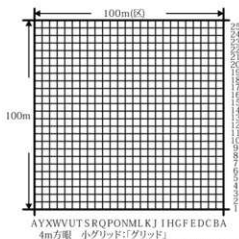
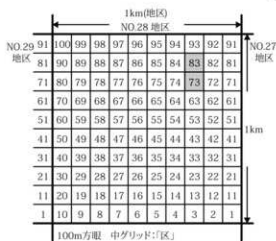
発掘調査は、大型重機(バックホー)による表土掘削を行った。西側からの着手であり、確認面はローム上面を基準とした。西側は1号建物跡を中心とした遺構群があり、1号建物の設営時の削平平坦面も確認面となった。東側の調査区に至ると、上層の黒褐色土(Ⅲ層・Ⅳ層)の堆積が厚く、Ⅳ-1層中で表土掘削を一旦止め、1・2号住居跡等の調査を進めた。次に、確認面をⅣ-2層まで下げ、3・4号住居跡等を調査し、さらに上層での遺構調査終了後はⅣ層～Ⅴ層(ローム層上面)まで確認面を下げ、遺構確認漏れが無いように努めた。

表土除去後、作業員による遺構確認、個別遺構の調査は、ジョレン・移植こてなどの道具を使用している。

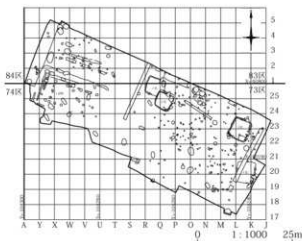
検出した各遺構名は、中グリッドにこだわらず通番とした。遺構は、土層セクションの記録化のため半載調査あるいはベルト設定をして、写真・土層図の記録をとった。平面図・断面図縮尺は基本的に1/20とし、住居跡など遺構単位として把握できるものは個別図、土坑・ピット群や溝などはシート図を作成した。平面図・断面図測量は業者委託し、デジタル測量を施した。



6図-1 「地区」設定



6図-2 「区」「グリッド」設定模式図



6図-3 榎木I遺跡の「区」「グリッド」設定

調査区の設定方法として、榎木I遺跡の例を挙げた(網掛け部分)。6図-1にあるように榎木I遺跡は、大グリッドとしてNo.28地区に含まれ、100m単位の中グリッドとしては73区と83区に跨がる(6図-2上)。小グリッドは4m方眼で6図-2下のように設定した。榎木I遺跡調査区を全体図として表した例が6図-3である。

本文中にも触れたとおり、上原IV遺跡はNo.27地区83区・84区・93区・94区に位置する。西久保IV遺跡はNo.28地区60区・70区、29地区51区・61区に位置する。

6図 調査区の設定

第2節 上原IV遺跡の調査方法

上原IV遺跡の発掘調査は、調査区内の遺構密度の把握から行った。調査区内に9本のトレンチを設定し、大型重機(バックホー)による表土除去、作業員による遺構確認を経て、遺構密度及び調査面の確定を急いだ。その結果、遺構密度及び遺物出土量は希薄で、数基の土坑が点在する様相が予想されたため、土坑・溝などが確認されたトレンチを拡張して調査を継続した。また、幾つかのトレンチには数条の溝状の落ち込みが見られたため、これも拡張調査したが、自然流路と判断した。

遺構が確認された拡張区を中心に、北東調査区と南西調査区に分け各調査区で検出した6基の土坑を中心に記録を重ねた。また、最東部の7トレンチと8トレンチにかけて、少量ながら縄文土器の散布が見られたため、拡張区を設定して広がり記録化した。

遺構・遺物量が少量とはいえ、検出された遺構に対しては、平・断面図及び全体図のデジタル測量を業者委託し、各遺構の写真撮影を施し記録化に努めた。

なお、北東調査区には現代の墓地があり、位置と平面形は全体図に掲載した。

第3節 西久保IV遺跡の調査方法

西久保IV遺跡全体が天明泥流に覆われていた。そのため、大型重機(バックホー)による表土及び天明泥流掘削を重ね、深さ約50cm～1mで天明3年時の地表面検出に至った。表土・天明泥流除去後、作業員による遺構確認を進めたが、畑跡に関しては、サクに堆積する浅間A軽石(As-A)は完全に除去せず、サクの方向を強調する調査方法を探った。畑跡検出後に、全景写真などの写真撮影を行い、デジタル測量を業者委託した。

天明3年の地表面における各遺構調査終了後、2×2mあるいは2×4mの試掘坑を各所に配し、下層の文化層の有無を探り、遺物の出土や焼土を確認したため、2面目の調査に至った。

2面目の調査面は暗褐色土上層およびローム漸移層で行った。2面目で得られた各遺構の平・断面記録も、デジタル測量を業者委託し、写真撮影を重ねた。

なお、平成23年度調査では排土箇所を確保するため調査区を2分し、反転調査によって排土をした。これは、1面調査毎に行っている。



西久保IV遺跡調査風景(As-A泥流下)

第4章 榎木I遺跡

第1節 概要

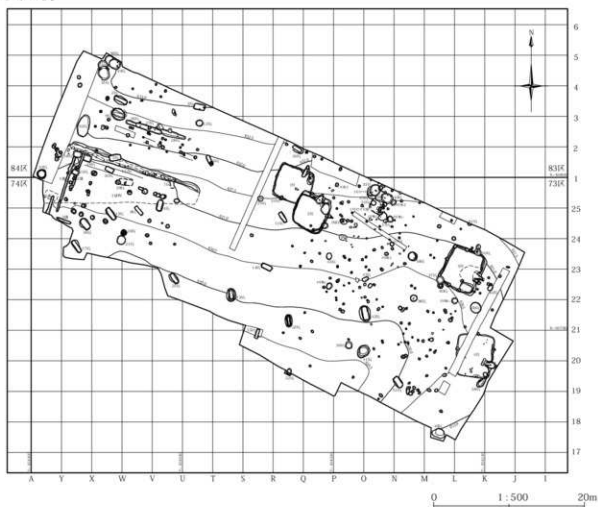
榎木I遺跡は、吾妻郡長野原町北部の吾妻川右岸最上位段丘面にある。前述したように、北から南への斜面地形にあって、緩斜面地形や平坦地形を選んで古地された集落遺跡の一つである。隣接する榎木II遺跡や中棚I遺跡では縄文時代早期と中期の集落跡、平安時代の集落跡が調査されており、山地斜面地形といえども、濃密な遺跡群といえよう。調査区内の標高は629.2m～633.1mである。

本遺跡で検出された遺構は、縄文時代中期の土坑、平安時代集落跡として住居跡4軒、竈屋1軒など、近世屋敷跡1棟などが調査された。

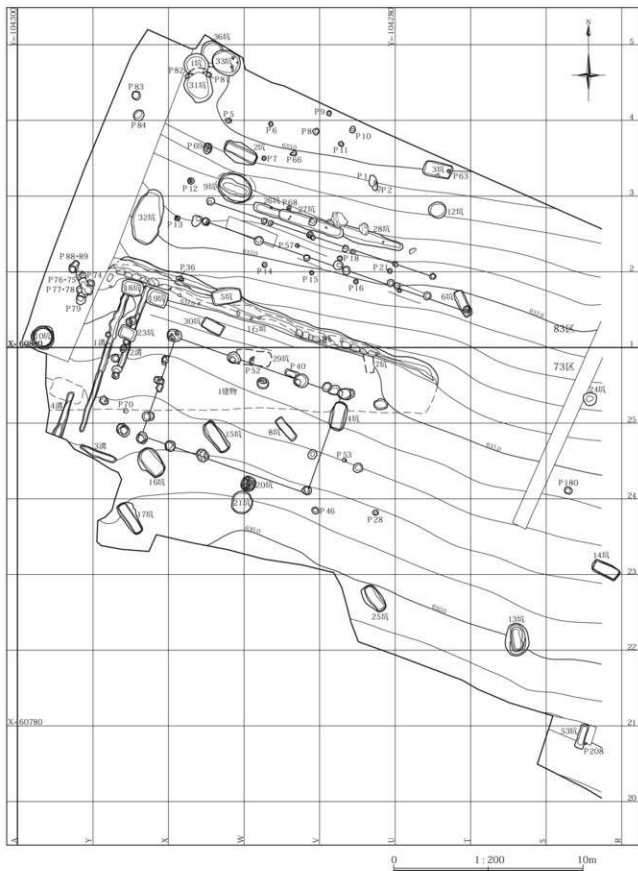
縄文時代の土坑は、確定的な例として48号土坑が調査区西側で調査した。円形の土坑で中期前葉の小型深鉢を出土している。

平安時代の集落跡としては、住居跡4軒を検出した。調査区の西側に偏在する様相で、2軒単位でまとまる配置である。小規模な集落と捉えられるが、住居跡以外に竈屋が集落内施設として加わる様相を示す。集落跡の時期としては、9世紀後半段階と考えられるが、墨書土器や小型鎌、鉄滓などを出土する。その他の該期遺構としては、土坑あるいは陥穴状土坑が挙げられよう。なお、掘立柱建物跡は検出されなかった。

近世建物跡は、調査区東側に位置する。出土遺物はなかったが、石垣・礎石柱穴・溝などを付帯する屋敷跡である。傾斜地を平坦に造成しており、礎石などの存在から母屋に相当する建物跡と考えられる。一部の柱穴が判然としないため、確定的ではないが5間×3間の側柱式の建物が想定できる。東辺に平行する溝、北側に石垣やビット列を配しており、周辺の土坑の幾つかも、屋敷跡に含まれる可能性があり、類例を重ねて検討すべきであろう。



7図 榎木I遺跡全体図



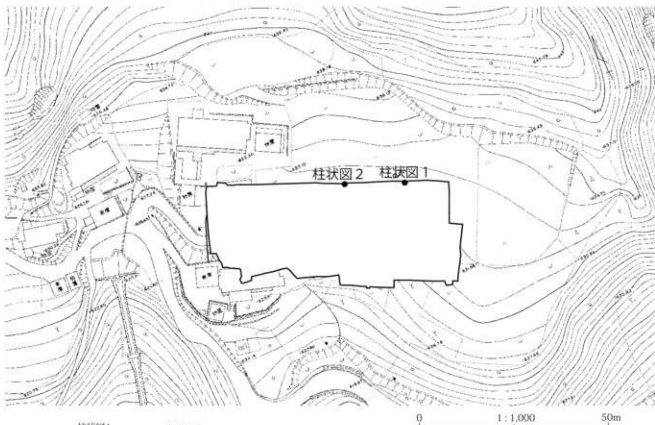
9図 遺構配置図(2)

第2節 基本土層

調査区北壁を利用して2箇所の基本土層を記録化した。本遺跡の層序は、林地区及び当地域の上位段丘面～最上位段丘面に見られる層位と大きな差は無く、隣接する榎木II遺跡とも共通する層序である。吾妻川中流域で

は、中段段丘面や下位段丘面では天明3年の浅間火山噴火に伴う軽石(As-A, 1783年)と泥流の堆積が見られるが、本遺跡の乗る上位段丘面にまでは及んでいない。

本遺跡は南側への緩傾斜地形にあるため、2地点で得られた基本土層としても、地点によっては欠落する層や付加するべき層もある。特に小規模な地滑りや山崩れな



	柱状図1	柱状図2
	I	I
633.00m	II-1	II
	II-2	III-1
	IV-1	III-2
	IV-2	IV-1
632.00m	V	IV-2
	VI	V
	VI-1	VI
	VI-2	VI-1
631.00m	VI-4	VI-2
		VI-3
	VI-5	VI-4
	VI	VI
	IX-1	
530.00m	IX-2	

- I 暗褐色～灰褐色土。表土。浅間山津黄色軽石(As-YPK)を多量に含む。
- II 暗褐色土。浅間山津黄色軽石(As-YPK)を少量含む。地点的な堆積か
- III-1 黒褐色土。As-YPKを微量含む
- III-2 黒褐色土。細粒の白色粒を含む。平安時代の遺構遺物を包含する
- IV-1 黒褐色土。細粒の白色粒を多く、As-YPKを少量含む。上面で平安時代～近世遺構確認面
- IV-2 黒褐色～暗褐色土。細粒の白色粒を少量、粗粒のAs-YPKを多量に含む。縄文時代遺物包含層
- V 暗褐色～褐色土。ローム層砂粒。細粒でしまりに含む
- VI 黄褐色ローム。上層は軟質で下層に硬質層が見るが顕著ではない。As-YPKを含む
- VI-1 黄褐色細粒軽石層。白色軽石粒を混在する
- VI-2 桃色粗粒火山灰層。硬質化する
- VI-3 灰色粗粒火山灰層。赤褐色火山灰層と互層をなす
- VI-4 黄灰色軽石。大粒の黄灰色軽石。As-YPK一次堆積
- VI-5 黒灰色火山灰。硬質化する
- VI 黄褐色ローム。大粒の黄色軽石を多く含む。一部粘土化を見る
- IX-1 赤褐色礫層。鉄分により固結する。マンガン付着
- IX-2 赤褐色樹なだれ堆積物(赤褐色泥炭)上面

10図 基本土層図

どによる、小礫層堆積物が各所に見られた。

遺構確認面はIV層～VI層である。また、層位としては確認できなかったが、平安時代の住居跡埋土・覆土中には、浅間柏川軽石(As-K, 1128年)が薄く地点状に見ることができる。集落廃絶後の凹地への堆積であろうか。おそらく、III層中に対比される層である。

遺構確認面以下では硬質ローム以下に浅間草津黄色軽石(As-YPk)をVII層として位置付けた。5層前後のユニットを確認したが、極めて厚層があり硬化灰層も見られた。

第3節 検出された遺構と遺物

先にも述べたように、本遺跡で調査された遺構は縄文時代土坑1基、平安時代の住居跡4軒、近世屋敷跡1棟などである。必ずしも遺構量は多くはなく、主体となる時代が平安時代であるため、本章では時期別の掲載ではなく、遺構種に沿った報告を進めたい。各遺構の時期は、遺構毎の記述あるいは遺構一覧表や遺物観察表を参考にさせていただきたい。

なお、4軒の住居跡と1号竈屋に関しては、調査担当者の所見も参考にした。

1. 住居跡

楡木1遺跡では、4軒の竪穴住居跡を調査している。いずれも、平安時代に帰属する住居跡であり、出土土器の様相から、9世紀後半～終末に至る例と判断される。4軒の住居跡は、調査区東半で検出され、2軒単位でのまとまりを見る事ができた。

1号住居跡(11図～14図 PL. 3・16)

調査区中央やや北よりで73・83区に跨がり検出した。周辺は北西から南東へ緩やかに傾斜しており、概ね7.5°の傾斜角を測る。傾斜軸上に2号住居跡が本住居跡の南東隅で重複する。新旧関係としては、本住居跡が2号住居を切る様相である。2号住居以外の重複遺構としては、44号土坑が南壁やや西よりに重なる。調査当初は別種遺構として考えたが、壁に架かる柱穴として隣接するピット5とともに住居の施設として位置付けたい。ゆえに44号土坑は欠番扱いとなっている。近接する遺構としては、北約1.6mに34号土坑、南約1.9mに11号土坑が見られるが、本住居跡とは時期を異にするため、関連性は無い。

1号住居跡は北カマドで、本遺跡の平安時代集落跡内で、最も新相を呈する住居跡である。

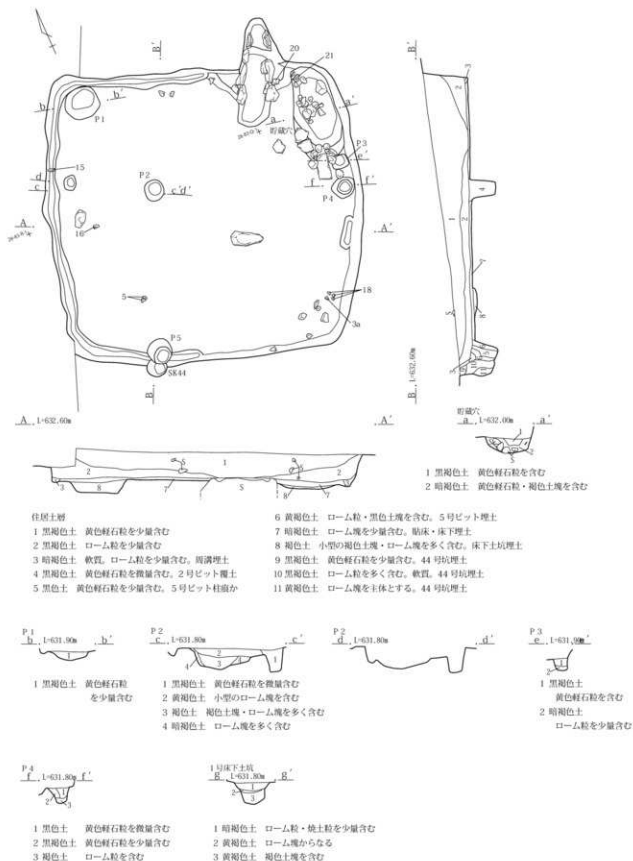
主軸長4.7m×5.0m程の整った方形を呈し、主軸方位を北北東に向ける。深さは約80cmを測り、遺存度は良好と言えよう。四辺の壁とも直立気味に立ち上がるが、斜面地形のため南辺の壁がやや低く、西辺の壁は試掘トレンチにより上半を逸失している。また前述のように、南東隅の壁検出に際しては、2号住との重複による黒色土相互の新旧判断となったが、重複部に1号住貼床を確認したため、1号住平面形を先に検出できた。

床面は、黄褐色ロームを掘り込み暗褐色土を貼床構成土としていた。貼床は南半に顕著で、北半はローム層を基盤とする地床だった。床面はほぼ平坦面を保つ。南側へ僅かに2°程度の傾きを見るが、床面全体は整った面に構築されていた。硬化面は特に広がりを見なかったが、中央部や北西隅及びカマド周辺が硬く締まっていた。また、床面中央やや東よりに大型の基盤層礫が露出していた。上端を削り、床面レベルと合わせていた。

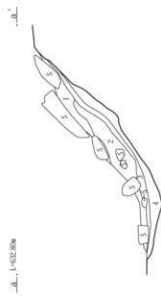
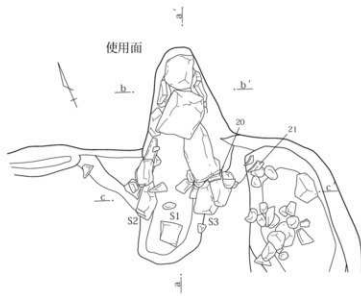
壁際には幅約20cm、深さ約8.0cmの壁周溝が北壁西半から西壁・南壁西半にかけて検出した。東壁際の一部にも壁周溝状の小施設を見るが、出入り口施設の痕跡としても、壁に接近する位置のため確定できない。

柱穴は不規則ながらも、ピット2・ピット5が主軸に近い配列を示す。また、ピット4とピット2も短軸方向に並び、東壁際のピット6も延長線上から僅かに外れる位置にある。1号ピットも北東隅にあり、位置的には妥当性を帯びるが、深さが17cmと浅く柱穴としては疑問が残る。なお、前述したように南壁の5号ピットと接して検出された44号土坑も本住居跡の柱穴として位置付け、5号ピットが切る新旧を観察している。土層の観察では、柱痕として各ピット中央部に黒色土～黒褐色土を見る。なお、ピット5以外は床下調査で得られたものである。

貯蔵穴は、北東隅に設けられる。長軸を北に向け、不整楕円形を呈す平面形で、規模は180×72cm程のやや大型の例である。深さも40cmを超え、しっかりした掘り込みを見せる。床面上で貯蔵穴南西側に幾つかの自然石が並列して出土している。自然石上端のレベルもほぼ一定しており、貯蔵穴に伴う石敷き施設とも見て取れよう。蓋などの上部構造も想定しなければならないだろう。貯蔵穴内部からは、角礫状の自然石が埋土中位より出土し



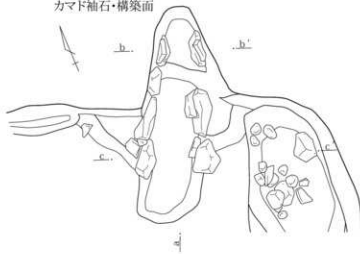
11図 1号住居跡(1)



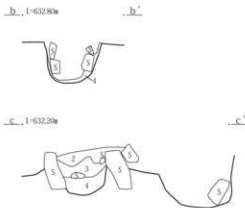
カマド土層

- 1 暗褐色土 焼土粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色軽石粒・焼土粒を少量含む
- 3 暗赤褐色土 焼土塊を主体とする
- 4 黄褐色土 大型のローム塊を多く含む

カマド袖石・構築面



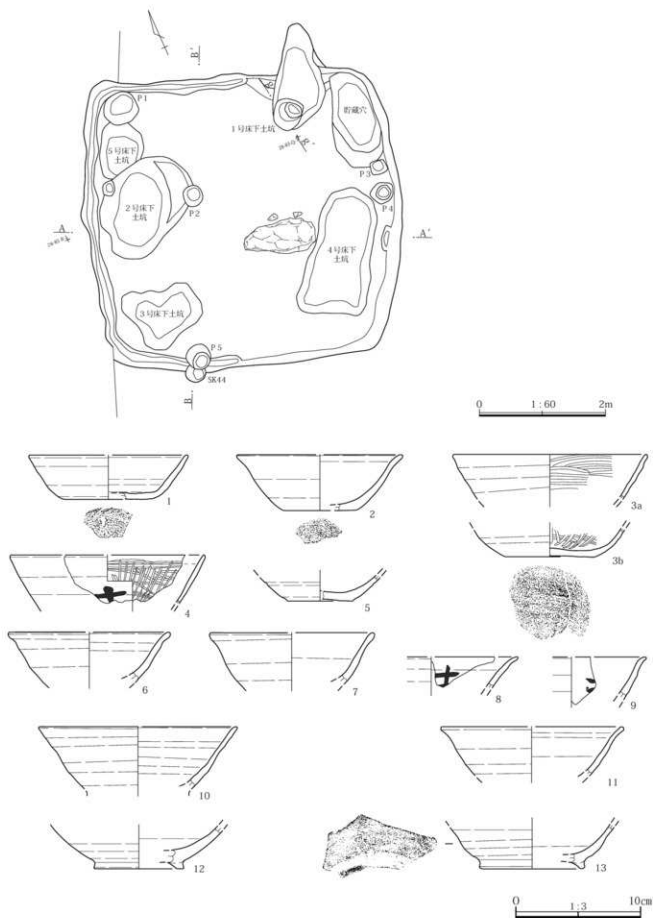
カマド検出状況



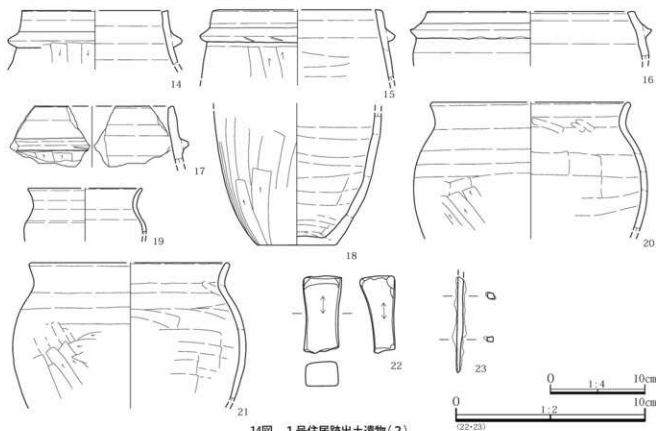
カマド土層

0 1:30 1m

12図 1号住居跡(2)カマド



13圖 1号住居跡(3)床下・1号住居跡出土遺物(1)



14図 1号住居跡出土遺物(2)

ている。用途は不明であるが廃棄段階での流入であろうか。埋土は黒褐色土を基調としていた。

カマドは北壁東よりで検出した。煙道を強く北壁外に突出させた石組カマドである。主軸方位を住居主軸よりやや東よりに設けており、平面規模は約170×60cmを測り、やや大型の例と言えよう。燃焼部までの深さも90cm近くあり、遺存度も良好である。突出する煙道は80cmを測り、上部を大型の板石状の自然石2基で覆っていた。2基とも廃絶後に陥没した様相を示す。燃焼部から煙道上端部までの傾斜は強く、約47°を測る。焚き口部幅は、30cm程で中位に円礫を置く(S1)。支脚石と考えたいが、やや小型であり原位置ではなく、廃絶後の横倒りが想定される。支脚北に焚き口部に突出する両脇の角礫状の自然石(S2・S3)を見るが、これも支脚同様に煮沸具の支え材と考えたい。両袖には自然石が補強される。焚き口部は大型の角礫で、煙道周辺は小型ながら上下2段の粗石で補強されていた。

床下調査では、5基の床下土坑を得た。1号床下土坑はカマド焚き口部に検出され、上層に焼土粒を見るように、カマド構築・使用に伴う施設と位置付けられよう。その他の床下土坑は床面西側と東側へ偏る傾向があり、

住居本体掘削構築時の所産と考えられよう。

出土遺物は、住居跡の時期を特定する出土状態ではない。破片状態の例が多く完形土器の出土は無かった。その中で、5の坏底部破片は床面直上より出土している他、カマド内及び周辺で土師器甕(20・21)や羽釜破片を見る。床面から浮いた状態とはいえ、南東隅周辺でまとまった状態で羽釜体部下半(18)が出土している。床直出土遺物としては、16の羽釜口縁部破片が挙げられよう。土器以外では、砥石と鉄鎌茎部の出土を見た。

1号住居跡の帰属時期としては、出土遺物の特徴から、9世紀終末段階、第4四半期と考える。

2号住居跡(15図～18図 PL. 4・16・17)

調査区中央やや北よりの73区Q-24・25で検出した。周辺は1号住と同様に、北西から南東へ緩やかに傾斜しており、概ね7.5°の傾斜角を測る。前述のように1号住南東隅と本住居跡北西隅が重複する。近接する遺構としては西約0.9mに11号坑、東約1.7mに56号土坑が位置する。また距離をやや置くが、1号竈屋が東北東約5.4mにある。

3基のカマドを検出した住居跡である。軸長約4.7×

4.6mの正方形を呈すが、北東隅の湾曲が他の3隅に比べ大きく、やや不整形の印象を得る。深さも80cmを超え、良好な遺存度を誇る。主軸を北側のカマドに置くと、北北東に方位を持つ。北壁から東壁周辺はしっかりとした直立気味に立ち上がるが、西壁は1号住との重複のため、南壁は傾斜地形のため、やや壁高を低くする。西壁は約30cm、南壁は約20cmを測る。

床面は、1号住よりさらに深く黄褐色ロームを掘り込むため、重複部の床面・壁の検出は容易だった。北側1/3程が基盤ローム層を地床とし、南側はローム塊と黒色土塊を構成土とする貼床が広がる。傾斜も1.5°程度で、ほぼ平坦面を築くといえよう。カマド周辺から床面中央部にかけて硬化面を捉えた。壁周溝はほぼ全周し、北東隅の貯蔵穴南で途切れ、また、南東隅では内側に新たに壁周溝を加えることができた。これは後述する。3基のカマドの移動に伴う所産と考えられる。

北側壁にテラス状の段差を設ける。床面からの比高差は17cm程で、確認面からは60cmの差が見られるように、床面とほぼ一体化したテラスである。これも、おそらく北カマド設置時に新たに加えられた施設と捉えられる。

柱穴として、P1以外は床下調査で得られた例である。P1・P2とも、配置・規模とも柱穴としての位置づけは妥当である。その他の小ピットは深さが10cm前後であり、やや可能性に欠ける。P3・P4は深さも良好であるが、燃焼部に開けられており、あるいは、北カマド設置段階での柱穴として考えられる。

貯蔵穴は、北東隅に設けられる。長軸を北北東に持つ不整形楕円形を平面形とし、床面からの深さは24cmを測る。平面規模は約1.5×1.0mである。黒褐色土～暗褐色土を基調とした埋土で、数点の土師器破片や須恵器破片が坑底面より浮いた状態で出土している。また、床下調査で得られた、ピット5とピット7はそれぞれが1号カマドと2号カマド脇南側に設けられており、あるいは旧貯蔵穴として見る事も可能である。検出された位置、形態とも類似性があり、カマド脇の貯蔵穴とした判断も重視したい。

本住居跡で特徴的な在り方を示す施設が3基のカマドであろう。無論同時併存ではなく、住居内のカマド移動を示唆する資料として位置付けられる。東壁に2基(1・2号カマド)、北壁に1基(3号カマド)が検出された。

各カマドや壁周溝の様相から、おそらく3号カマドが最も新しいカマドとして位置付けられる。

1号カマドは、東壁南寄りに設けられる。馬蹄状の煙道で、燃焼部は廃絶に伴い破壊されていた。壁外の煙道部下面には焼土が残り、南側壁には袖の残存である自然石の補強が見られた。煙道部の立ち上がり角度は約30°である。燃焼部にあたる箇所には壁周溝があり、これは3号カマド設置時の所産と見ることができよう。

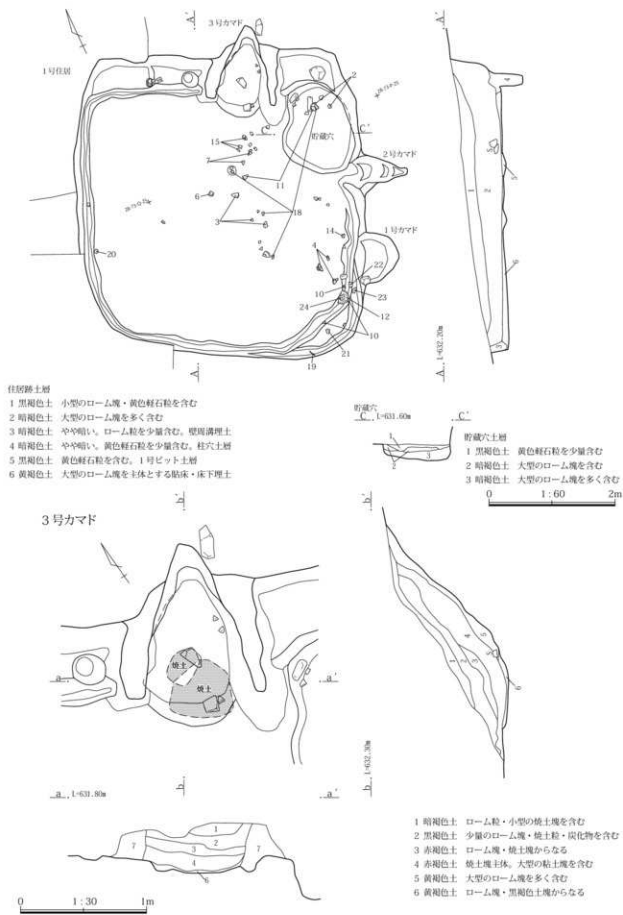
2号カマドは、東壁やや北寄りに設けられる。強く突出する煙道形状で、傾斜角は東端部は緩やかながら、燃焼部からは45°に近い。燃焼部は1号カマド同様、廃絶に伴い破壊されており、北側は貯蔵穴が重なる。煙道部は側面に僅かな焼土が残り、燃焼部南側には袖の一部と思われる焼土塊が見られた。

3号カマドは、北壁のほぼ中央で検出した。燃焼部より煙道北端部まで、約1.4mを測るやや大型のカマドである。煙道は強く突出し、燃焼部から煙道端部まで45°の傾斜を持って立ち上がる。焚き口部より燃焼部は緩やかに凹み、底面は焼土化していた。カマド構築材として粘土とローム塊が使用されていた。両袖とも焼土化した粘土が確認されたが、袖補強材としての自然石は抜き取られた痕跡を床下調査の際に得た。残存する袖材は、補強材としての自然石を抜き取った後、原位近くで散乱したものと判断できよう。調査所見では、この抜き取られた補強材―自然石を、1号住へ転用した可能性を指摘されている。

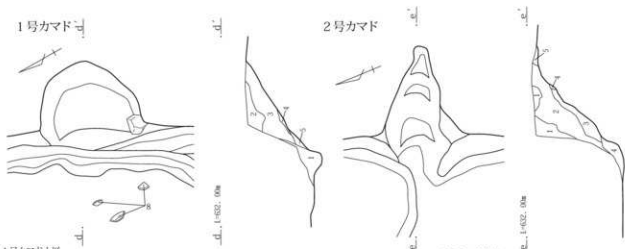
床下遺構としては、前述の柱穴相当のピット1～4の他に、不整形土坑を3基検出している。床下土坑として位置付けた。

出土遺物は、総数としては1号住出土土器に及ばないが、残存物の良い遺物が多く、22点を図示し得た。

1号カマドと3号カマド周辺と床面中央付近の出土が目立つ。須恵器環・埴類は残存度も良く、床直あるいは床直上出土の例が多い。1・3・4・6～10はほぼ床直出土である。2は貯蔵穴より出土している。須恵器環・埴類には墨書を施した3個体を見る。また、12は2号カマド南で正位の状態でも出土している。須恵器裏体部～底部の残存だが、あるいは「置き台」としての用途も想起されよう。土師器裏はいわゆる「コ」字状口縁裏を主とする。3号カマド周辺から中央部にかけて床直上に散乱する状



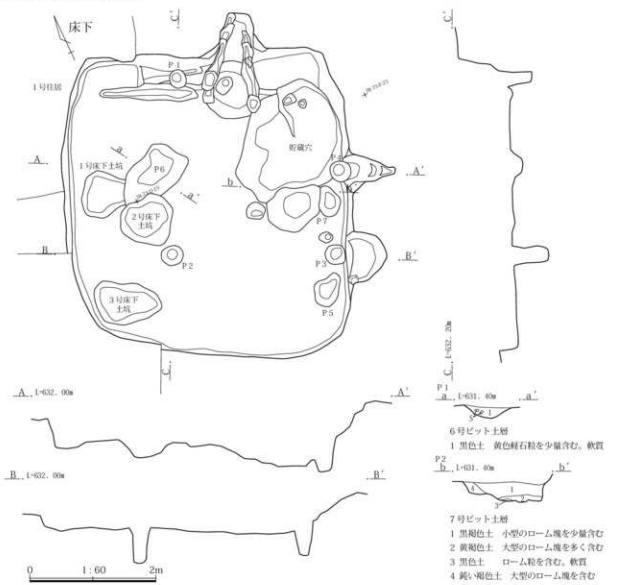
15図 2号住居跡(1)遺物出土状態及び3号カマド



- 1号カマド土層
- 1 暗褐色土 やや細かい、ローム粒を少量含む。厚層調理土
 - 2 黒褐色土 少量の焼土粒・炭化物を含む
 - 3 暗赤褐色土 小型のローム塊を多く含む
 - 4 黄褐色土 大型のローム塊からなる
 - 5 暗褐色土 小型のローム塊を含む

- 2号カマド土層
- 1 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む
 - 2 鈍い黄褐色土 ローム塊・焼土塊からなる
 - 3 黒褐色土 焼土塊・炭化物を少量含む
 - 4 黄褐色土 大型のローム塊からなる

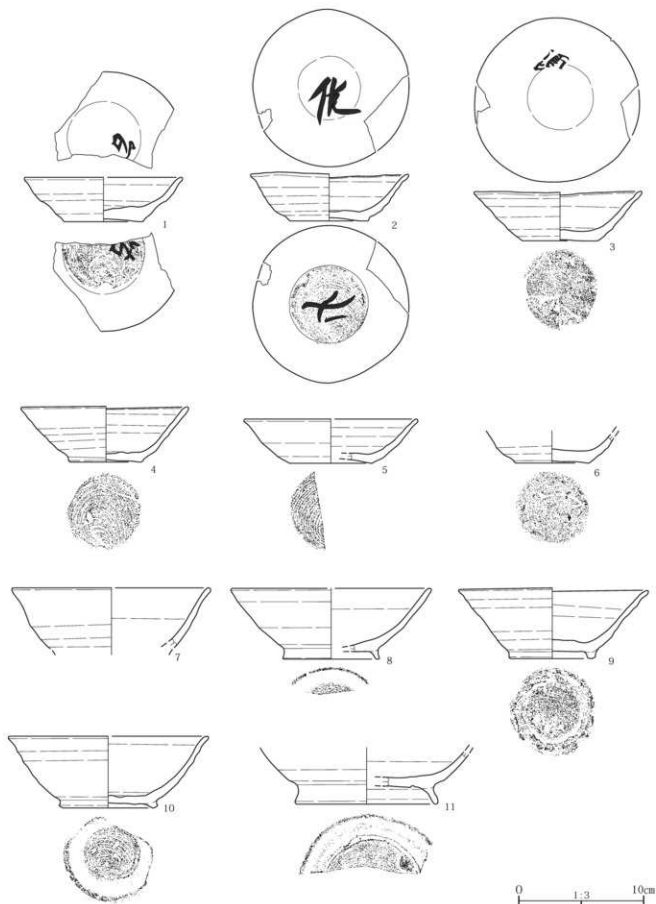
0 1:30 1m



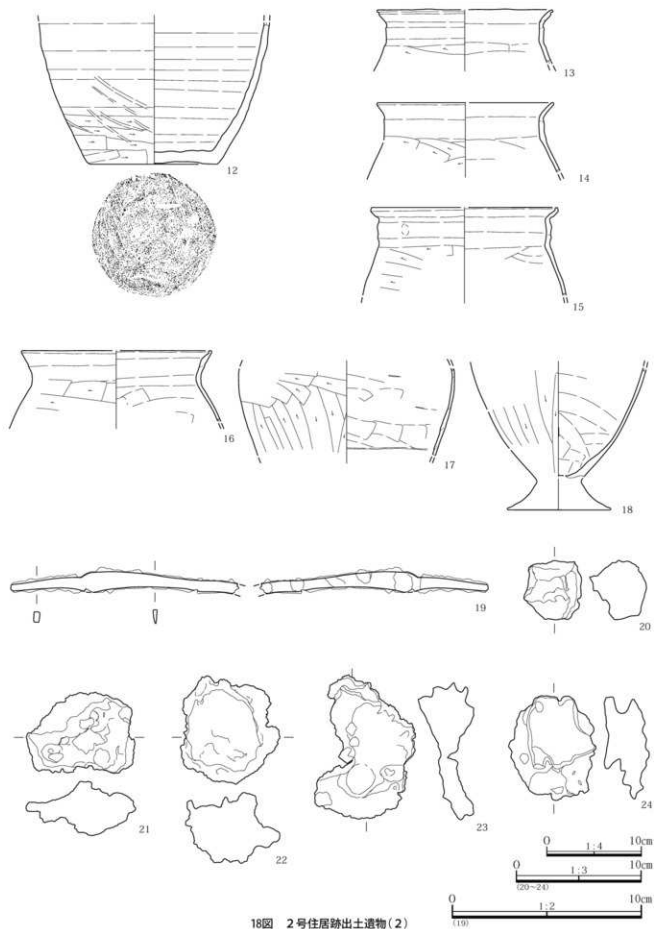
- 6号ピット土層
- 1 黒色土 黄色軽石粒を少量含む。軟質

- 7号ピット土層
- 1 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む
 - 2 黄褐色土 大型のローム塊を多く含む
 - 3 黒色土 ローム粒を含む。軟質
 - 4 鈍い褐色土 大型のローム塊を含む

16図 2号住居跡(2)1・2号カマド及び床下



17図 2号住居跡出土遺物(1)



18图 2号住居跡出土物(2)

態での出土が目立つ。18の付け置きは、貯蔵穴出土破片とも接合したことから、住居跡廃絶直後の埋土行為の際に同時に廃棄された例と考えられよう。同時に鉄滓も埋土中の出土である。土師器喪類と同時に廃棄されたのであろうか。鉄製品刀子(19)は南東隅の壁溝溝上で、やや浮いた状態の出土である。

遺物の時期から、住居跡の帰属時期は9世紀後半第3四半期に求めたい。

本住居跡からは、3基のカマドが検出され、住居内におけるカマド移動の痕跡と捉えた。同時に重複する1号住との関連も重要であり、カマド移動順位を含めて、まとめとして後述したい。

3号住居跡(19図～25図 PL. 5・17・18)

調査区北東隅で調査した。73区K・L-23・24グリッドに位置する。主軸方位は南南東を向く。周辺は北から南への緩傾斜地形を呈し、傾斜角は6°前後である。

本住居跡は、2面目の調査面で単独の検出を果たした。1面目の調査面である黒褐色土上層(Ⅲ-2層)で37号土坑などを調査した後、黒褐色土中層(Ⅳ層上面)まで掘り下げ、住居跡平面確認に至った。重複する遺構としては、住居跡西南隅に37号土坑が重なるが、上層の確認面での遺構であり、土坑の掘り込みも浅く本住居跡の平面形確認には支障は無かった。同様に、50号土坑が北壁に重複する。これは本住居跡調査後の漸移層での遺構調査で得られた3面目の遺構であり、本住居跡より古い遺構である。

近接する住居跡は4号住居跡がある。南に5.1m程の距離を置いて、軸を同じにして位置している。前述の1・2号住居跡は、西北西約20mにあり、本住居跡とは別の居住単位と判断できよう。また、1号カマド屋は西北西約10mに位置する。その他の近接遺構としては、59号～62号土坑が周辺に点在するが、本住居との関連性は窺えない。

特徴的な貯蔵穴を持つ住居跡である。平面形は、東壁辺長が西辺長に比して50cm近く長いが、大きな壁の湾曲もなく整った長方形を呈す。平面規模は5.1×5.7mを測り、本遺跡や隣接する榎木Ⅱ遺跡の同時期の住居跡の中では大型の部類に入る。深さは80cmを超え良好な遺存度といえよう。壁は四辺ともしっかりと掘り込むが、黄褐

色ローム層にまでは達せず、黒褐色土を基調とした壁である。

床面は平坦面を築く。傾斜角も南へ1.5°程度である。床面中央が僅かに凹む傾向があるが、大きな差異はない。貼り床は床面全面に薄く及ぶ。ローム塊を含む暗褐色土を貼り床構成土とする。硬化面はカマド周辺に顕著だった。

壁周溝はカマド周辺と貯蔵穴を除きほぼ全周する。20～30cm程の幅で、深さは15cm前後である。

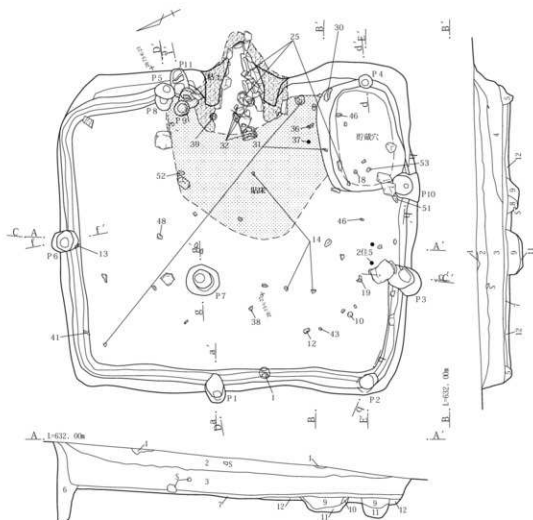
柱穴として、床面柱穴としてP7、及び壁柱穴としてP1～P6、P8～P11を検出した。壁柱穴は径20～30cmの小型のもので、北壁にはP6が開くのみで、南側へ偏る傾向が見られた。これは南側への地形傾斜が要因であろう。また、カマド北に集まるP(5・8)・9・11は2穴1対の柱穴であり、複数回の小移動が想起される。

貯蔵穴は、東壁隅に長軸を東に向け設けられていた。平面形は隅丸方形を呈し、規模は約1.8×1.3mで深さは50cmを測る。断面形もしっかりとした箱形を呈す。特筆すべきは、貯蔵穴埋土途中にローム塊を中心とした貼床状の面を有していた例である。さらに、この面で、壁際に小ピットが確認され、下端は基盤のローム層にまで達していた。柱穴あるいは打ち込み杭の痕跡としても、貯蔵穴を被覆する上層等の構造物が想起されよう。1号住居跡貯蔵穴にも見られた石敷き施設と併せて、貯蔵穴の用途や性格を復元する良好な例である。

カマドは、東壁中央で検出した。良好な遺存度の石組カマドである。煙道は壁から約60cm突出し、燃焼部から煙道への傾斜角は約32°を測り、やや緩やかである。煙道部から燃焼部にかけて、袖芯材として板石状の自然石を縦列に並列し、粘土及びローム塊で補強していた。天井部に架かる構築材は無かった。焚き口部から燃焼部にかけては、焼土化が著しかった。

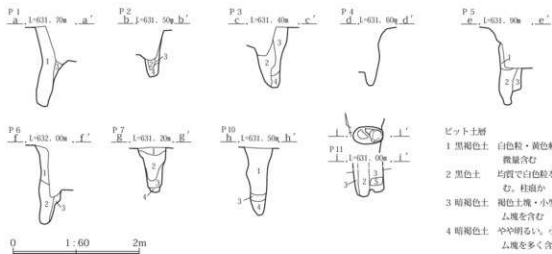
床下遺構としては、15基の床下土坑を調査した。9号・14号床下土坑を除き、その他は径60cm前後の不整形形を呈する例である。

出土遺物は量が多い。出土総量650点中53点を図示した。平面的には北東隅を除き、住居跡全体から満遍なく出土を見る。特に大きな偏りは見られないが、貯蔵穴出土例が目立つ。須恵器環・埴輪としては、2・3・5～9・11・15が貯蔵穴出土である。特に11の埴輪は貼り床状の面

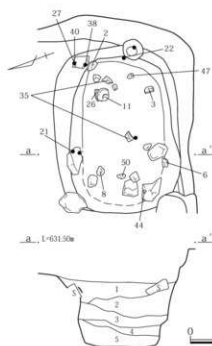


住居跡土層

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 黄褐色土 僅かに粘土化したローム堆 | 7 褐色土 ローム塊を主体とする粘土構成土。硬化面はカマド周辺 |
| 2 黒褐色土 白色粒を微量含む。均質 | 8 暗褐色土 ローム粒を少量含む。12号床下土処理土 |
| 3 黒褐色土 やや明るい。黄色軽石粒・褐色土塊を含む | 9 暗褐色土 大型のローム塊を多く含む。床下土処理土 |
| 4 暗褐色土 黄色軽石粒・褐色土塊を多く含む。灰化物・焼土粒も見る | 10 褐色土 ローム粒主体の塊状堆積。4号床下土処理土 |
| 5 暗褐色土 ローム粒を少量含む。軟質。壁周溝埋土 | 11 黄褐色土 大型のローム塊を主体とする。床下土処理土 |
| 6 黒褐色土 やや明るい。黄色軽石粒・ローム塊を含む。柱穴埋土 | 12 暗褐色土 ローム粒・褐色土塊を含む。床下埋土 |



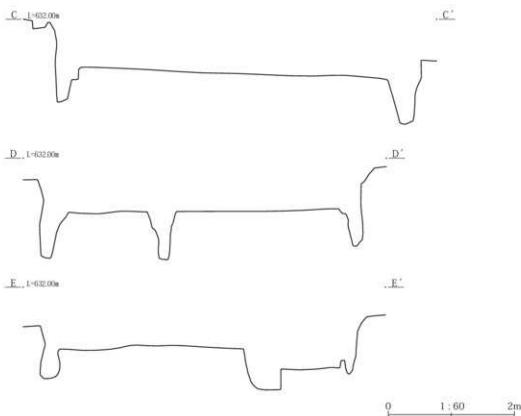
19図 3号住居跡(1)遺物出土状態



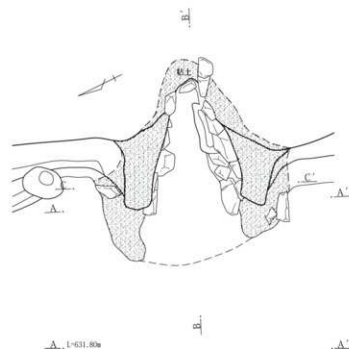
貯蔵穴底面小ビット

貯蔵穴土層

- 1 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む
- 2 黒褐色土 褐色土塊・ローム粒を含む
- 3 暗褐色土 小型のローム塊・炭化物を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。やや軟質
- 5 鈍い褐色土 大型のローム塊を多く含む

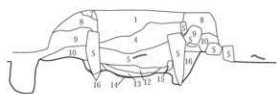


20図 3号住居跡(2)貯蔵穴及びエレベーション図



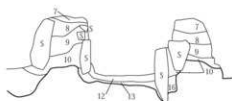
A. 1:631.80m

A'



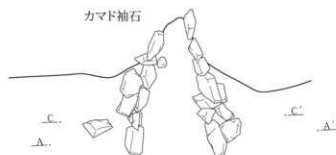
C. 1:631.80m

C'



カマダ土層

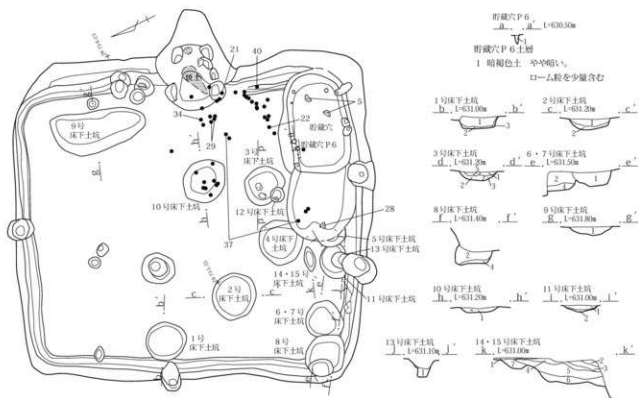
- 1 黒褐色土 ローム塊を多く含む。焼土粒・炭化物は少量
- 2 鈍い黄褐色土 粘土塊を主体とする。カマダ構築土
- 3 黒褐色土 やや明るい。焼土粒・炭化物を少量含む
- 4 黒褐色土 焼土塊・炭化物を多く含む
- 5 暗褐色土 焼土化したローム塊・粘土塊を多く含む。構築材崩壊土
- 6 黄褐色土 粘土塊を主体とする。カマダ構築土
- 7 鈍い黄褐色土 焼土化したローム塊を主体とする。構築土
- 8 暗褐色土 大型のローム塊を多く含む
- 9 鈍い褐色土 大型のローム塊・粘土塊を主体とする。
- 10 黄褐色土 ローム塊を主体とする
- 11 暗褐色土 小型のローム塊・焼土塊を含む
- 12 赤褐色土 焼土主体。ローム粒・炭化物を含む。使用面
- 13 暗赤褐色土 ローム塊・焼土塊を含む
- 14 黄褐色土 焼土化した基盤ローム
- 15 鈍い黄褐色土 焼土化したローム塊がまとまる
- 16 暗褐色土 ローム粒を少量含む。構築埋理土



0 1:30 1m

21図 3号住居跡(3)カマダ

第3節 検出された遺構と遺物



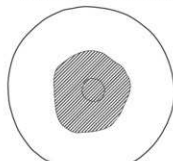
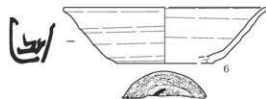
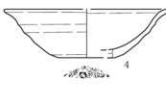
床下土層

- 1 黄、褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 2 黄、黄褐色土 大型のローム塊・黒色土塊を含む
- 3 黄褐色土 ローム塊を主とする
- 4 暗褐色土 やや明るい、小型のローム塊を多く含む

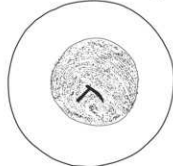
0 1:60 2m

14・15号床下土層

- 1 黄褐色土 ローム塊を主とする筋床構成土
- 2 暗褐色土 ローム塊を多く含む
- 3 黄、黄褐色土 小型のローム塊・褐色土塊を含む
- 4 黄、黄褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 5 黄、褐色土 やや暗い、褐色土塊、ローム塊を含む
- 6 黄褐色土 大型のローム塊を主とする、しまり強い
- 7 暗褐色土 小型のローム塊を少量含む(15号埋土)

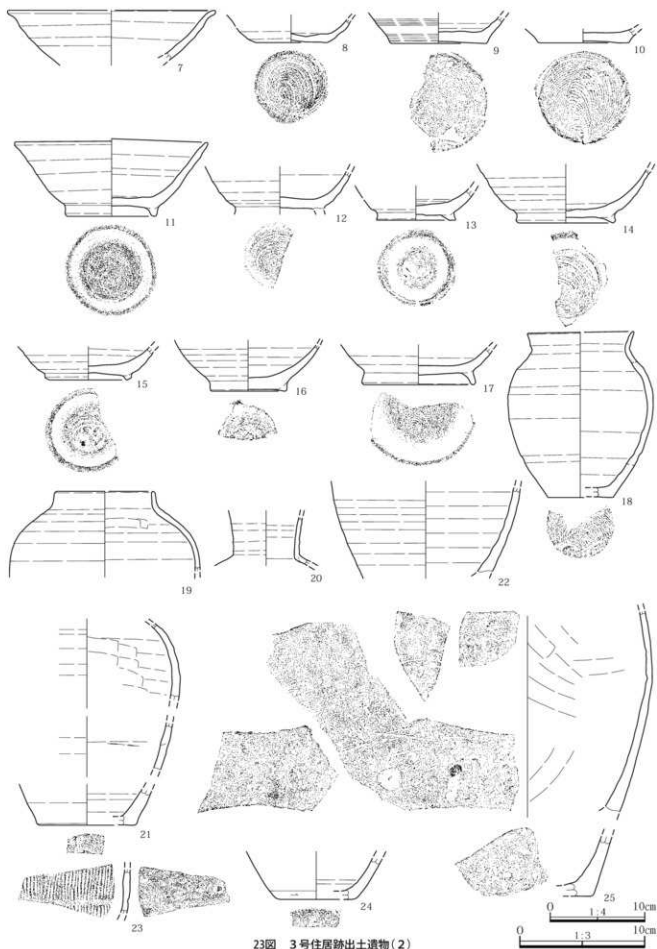


トーン部分は磨り面

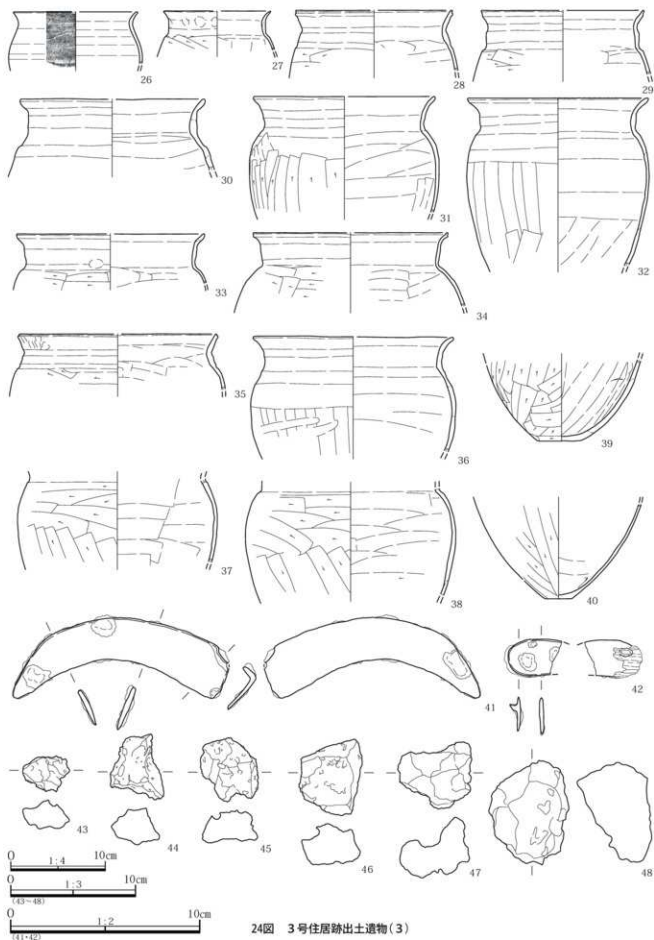


0 1:3 10cm

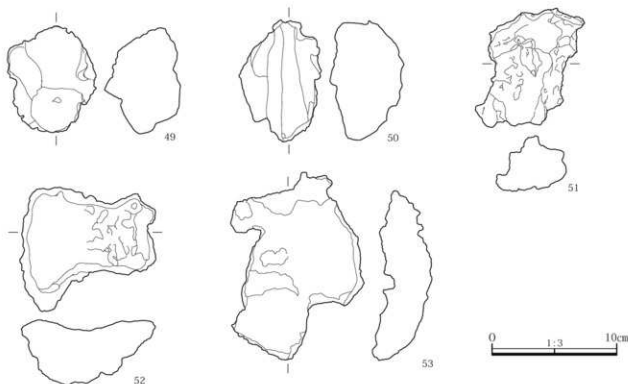
22図 3号住居跡(4)床下・3号住居跡出土遺物(1)



23図 3号住居跡出土遺物(2)



24図 3号住居跡出土遺物(3)



25図 3号住居跡出土遺物(4)

から出土している。その他では、須恵器器類の21・22や土師器器類26・27・29・30・33・34・36・37・39が出土しているが、土師器器の幾つかはカマド出土や床下調査の際の破片とも接合しており、貯蔵穴使用における一括性ではないようだ。

住居跡の時期を特定する、カマド出土遺物としては、25の須恵器器、31の土師器器が挙げられよう。おそらく須恵器器(25)はカマド補強材の一部に供されたものと考ええる。土師器器(31)は使用後あるいは廃棄に伴う例と考えている。床下調査においても、遺物出土が見られたが、土師器器の出土が目立つ(28・32)。

埋土出土の遺物としては、須恵器器(18)と轆轤(27)が特徴的である。また、小型甕(41)と弓引状鉄製品(42)は床直上の出土と捉えられ、住居居住者の生業を想起できる資料である。

住居跡の時期としては、出土遺物に大きな時期差も認められないことから、9世紀後半第3四半期に段階を求めたい。

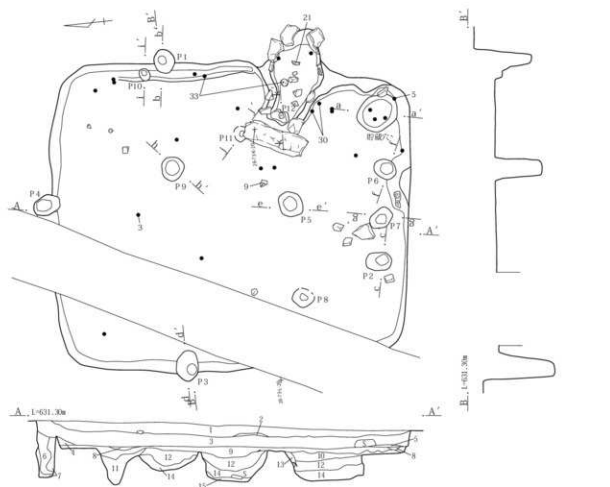
4号住居跡(26図～30図 PL. 6・18・19)

調査区東端で検出した。73区J・K-19・20グリッドに位置する。周辺は北から南への緩傾斜と東から西への緩

傾斜地形を呈す。傾斜角は両者とも $1 \cdot 2^\circ$ 前後で、ほぼ平坦地形にある。重複遺構としては、東南隅壁に58号土坑が重なるが、本住居跡が切る新旧関係を示す。近接する遺構は前述の3号住が北約5.1mに見られる。また、3号住との中間約3mの位置に59号土坑が見られる。その他には、重複・近接する遺構はなく、単独の検出といえよう。なお、調査面は3号住と同様に2面目で確認が果たせた住居跡である。なお、西側を横断するトレンチは試掘時のものである。

主軸をほぼ東に向けた、東カマドの住居跡である。平面形は、やや横長長方形を呈す。平面規模は約4.9×5.7m、深さは約50cm前後を測り良好な遺存度を示す。壁は黒褐色土を掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がる。若干南壁が低くなるが、四辺とも大きな崩れや湾曲は無く、比較的整った平面形を示していた。しかしながら、南壁東寄りに僅かな範囲で床面への突出が見られた。あるいは出入り口部の痕跡であろうか。

床面は、黒褐色土に止まる。暗褐色～にぶい褐色土を構成土とする貼り床がほぼ全体に及ぶ。特に大きな傾斜はなく平坦面を築くといえよう。硬化面はカマド周辺に認められた。壁周溝は東壁際の一部で検出したが、他の壁際には見られなかった。



住居跡土層

- 1 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 黒褐色土 やや明るい、黄色軽石粒・褐色土塊を含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。やや軟質
- 5 暗褐色土 褐色土塊を多く含む。しまりに含む
- 6 黒褐色土 黄色軽石粒・ローム塊を含む。軟質。柱痕か
- 7 暗褐色土 褐色土塊・ローム塊を含む。ビット埋土

- 8 暗褐色土 ローム粒を少量含む。軟質
- 9 鈍い・褐色土 大型のローム塊による床床構成土
- 10 黄褐色土 小型のローム塊・褐色土塊を多く含む。床下土埋理土
- 11 暗褐色土 黒色土塊と大型のローム塊からなる床下土埋理土
- 12 暗褐色土 褐色土塊・大型のローム塊含む。床下土埋理土
- 13 黄褐色土 大型のローム塊
- 14 鈍い・黄褐色土 褐色土塊・小型のローム塊からなる床下土埋理土
- 15 黄褐色土 大型のローム塊を主体とする

貯蔵穴
B, l=631.00m, A'P1
h, l=631.30m, b'P2
c, l=630.80m, c'P3
d, l=631.20m, d'P5
e, l=630.90m, e'

貯蔵穴土層

- 1 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を多く含む

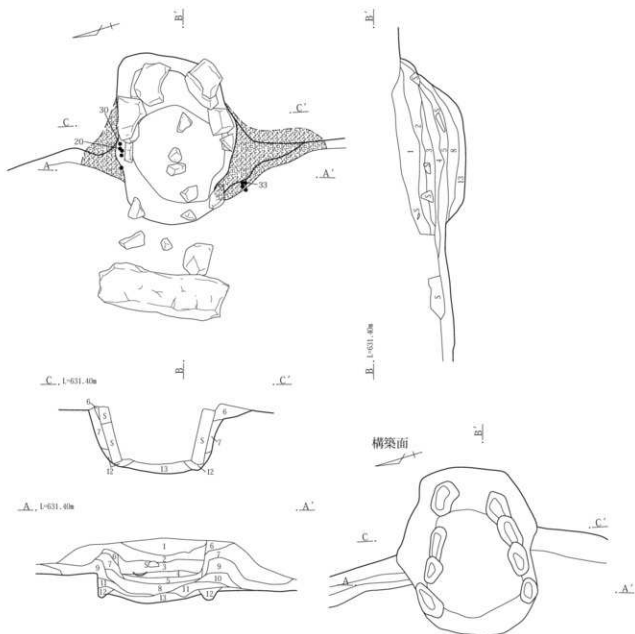
P6
f, l=630.90m, f'P7
R, l=630.90m, R'P9
h, l=630.80m, h'P10
i, l=631.30m, i'P11
j, l=630.90m, j'P12
k, l=630.90m, k'

ビット土層

- 1 黒褐色土 白色粒・黄色軽石粒を微量含む
- 2 黒色土 巧質で白色粒を微量含む。柱痕か
- 3 暗褐色土 褐色土塊・小型のローム塊を含む
- 4 暗褐色土 やや明るい、小型のローム塊を多く含む

0 1:60 2m

26図 4号住居跡(1)遺物出土状態

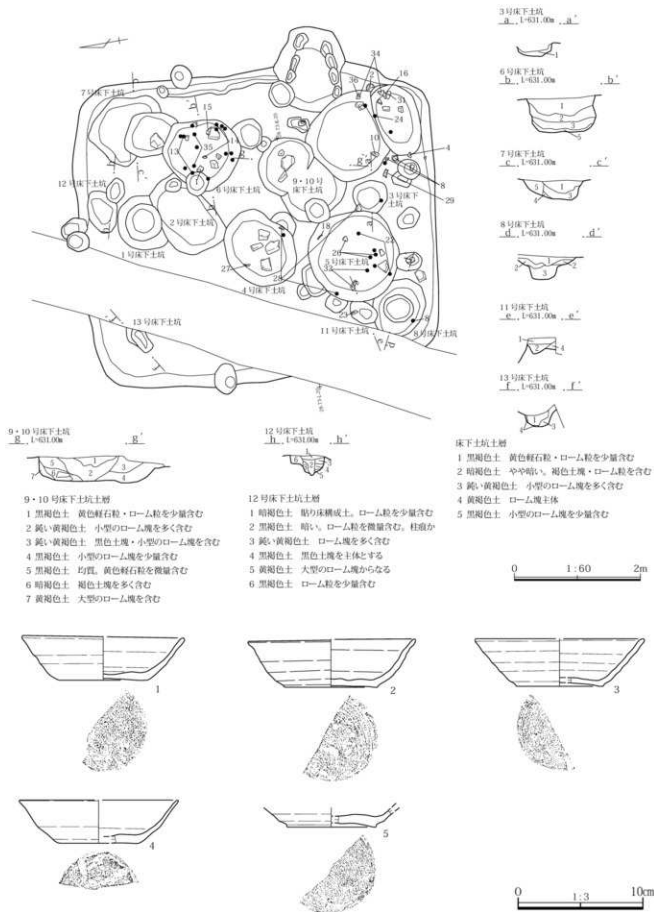


カマド土層

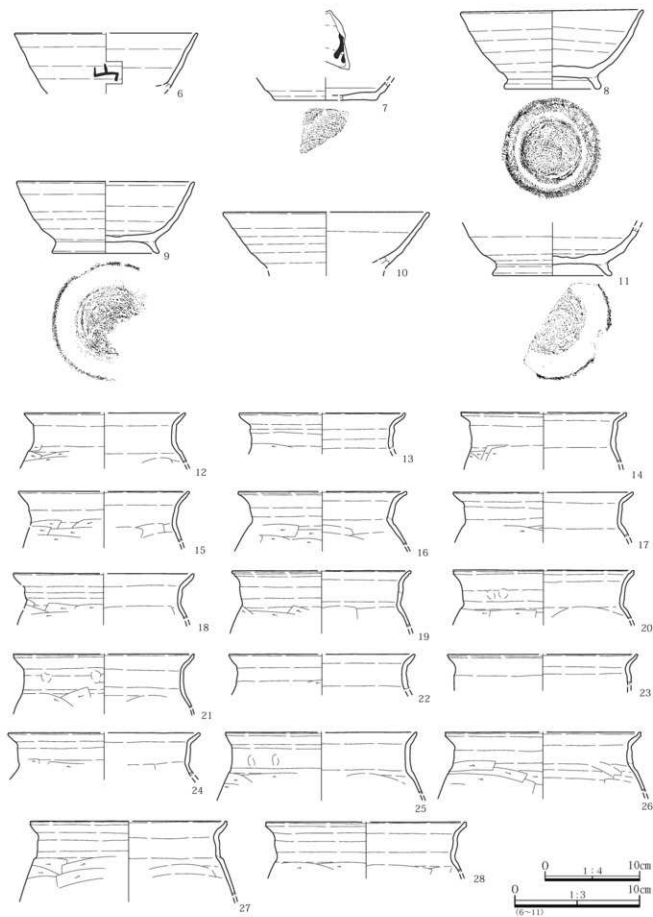
- 1 鈍い黄褐色土 焼土化したローム塊を多く含む。構築材崩壊土か
- 2 黒褐色土 小型の埴土塊・ローム粒を含む
- 3 鈍い黄褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。崩壊土か
- 4 黒褐色土 焼土粒・炭化物を多く含む。下面使用面
- 5 黄褐色土 焼土化した大型のローム塊を主体とする
- 6 暗褐色土 ローム塊・褐色土塊からなる。構築土
- 7 鈍い黄褐色土 焼土化した大型のローム塊からなる。構築土
- 8 暗褐色土 小型のローム塊・黒色土塊を含む
- 9 鈍い褐色土 大型のローム塊・褐色土塊からなる。構築材
- 10 黄褐色土 小型のローム塊を主体とする。構築材
- 11 暗褐色土 小型のローム塊を少量含む。構築材
- 12 暗褐色土 黒褐色土塊と褐色土塊を含む。構築埋理土
- 13 暗褐色土 小型のローム塊を含む

0 1:30 1m

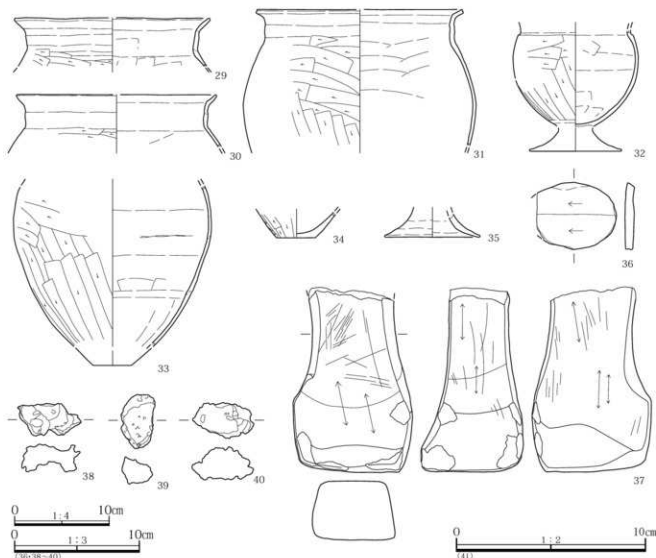
27図 4号住居跡(2)カマド



28図 4号住居跡(3)床下・4号住居跡出土遺物(1)



29图 4号住居跡出土遺物(2)



30図 4号住居跡出土遺物(3)

柱穴は、床下調査で得られたP1～P9を充てたい。いずれも、土層に柱痕を観察したピットである。そのうち壁柱穴としてP1・P3・P4が挙げられる。床面の柱穴はP2・P5～P9が規模・配置から可能性が高い。P9はP1・P3を結ぶ軸線上にある。また、P2・P6・P7は南壁に並列し、P4と対応する位置を示す。

貯蔵穴は、東南隅で検出した小型の土坑を充てたい。平面規模は約64×58cmで深さも19cmと浅く、本遺跡の4軒の住居跡のうち最も小型の貯蔵穴である。少量の須恵器・土師器片が出土しているが、埋土等に3号住居貯蔵穴のような特徴は見出せなかった。

カマドは東壁中央や南寄りに設けられる。主軸方位は南南東で、ほぼ東を向く住居主軸と若干のずれが見られた。燃焼部より煙道端部までは約50°の急傾斜角で立ち上がる。煙道は馬蹄状を呈し70cmほど壁外へ突出す

。燃焼部側壁には補強芯材として自然石を縦位に立て、ローム塊を主とした袖構成土で被覆する。焚き口部～燃焼部の火床は強く焼土化していた。また、焚き口部西の床面上に長さ約100cm、幅約40cmの大型自然石を見る。調査所見によると、裏面に加熱痕跡が観察されたことから、焚き口部～燃焼部に横架されていた可能性が高い。この大型自然石の存在からも、住居廃絶時にカマドも同時に破壊されたものと捉えられよう。なお、カマド側壁の自然石芯材は遺構確認時の重機掘削で一部を破壊してしまった。床下調査時に接合し、復元資料として図化・撮影を果した。

床下調査では13基の床下土坑を検出した。不整形、不整円形の平面形を呈す例が多く、規模も径約40～140cm、深さ約20～60cmと大小を見る。床下土坑底面の多くが、下層のロームまで掘り込んでいる。カマド構築材へ利用

したものと調査所見で観察している。南東側の床下土坑埋土には焼土塊が観察されている。

出土遺物は総量400点ほどだが、36点を図示した。埋土中の出土が多く、使用状態を示唆するような出土例は見られなかった。しかしながら、カマド・床下土坑出土が目立ち、本住居跡の帰属時期の判断材料となる。

須恵器環1や土師器裏12～14・31・32は6号床下土坑から、2号床下土坑からは土師器裏17・24・29が出土するように、各床下土坑から土師器裏類を中心とした出土が見られた。カマドから出土する土師器裏類としては、19・20・27・30がある。さらに、大型砥石(37)も出土しており、該期出土遺物組成として、注意を払う必要がある。また、埋土中の出土遺物であるが、鉄滓が少量ながら出土している。

住居跡時期としては、カマド、床下土坑出土の土師器裏類から9世紀後半第3四半期段階と考えておきたい。

本遺跡では、4軒の住居跡を調査した。調査区東側に偏り、2軒一単位とも取れる住居跡配置を呈していた。時期は出土土器から、4軒とも9世紀後半段階と見られ、時間幅の短い居住と判断できよう。また集落の範囲としても、山地斜面における限られた平坦面での居住痕跡であり、おそらく、数軒規模の集落と推定できる。

当地域の該期集落の多くは、おそらく本遺跡程度の規模であり、隣接する榎木Ⅱ遺跡や上原Ⅱ遺跡のように10世紀代にまで継続する集落は、やや大型化するのであろう。

また、生業も山地斜面のため、広域な水田耕作は営めず、畑作中心の食料供給体制であろう。その場合、急傾斜地形ではなく、集落周辺の緩斜面地形に畑を設けていたものと想定される。住居跡や「竈屋」以外の空地が畑作に供されていたのであろうか。

さらに、出土遺物としては、小型の鉄鎌や芋引き鉄製品が見られる。麻あるいはカラムシといった植物繊維を引く生業も念頭に置きたい。同時に鉄滓の出土からも、生業の一端として、鍛冶生産も行われていたものと想定できよう。

本遺跡の平安時代集落跡は、水田耕作が果たし得ない、該期山間地集落跡の典型的な様相と見ることができよう。

2. 竈屋遺構およびカマド・焼土遺構・集石土坑

1号竈屋(31図 PL. 7・19)

調査区北東側(73区N-24・25)で検出した。周辺は北から南への緩傾斜地形を示し、勾配角は約5°を測る。3号住や4号住と同様に2面目のⅣ層上面で調査を進めた遺構である。1面目の調査では、35号土坑や40号土坑を調査し、その後2面目の調査では45号・46号土坑、2号カマドを本遺構と同時に調査している。なお、3面目の調査で55号土坑が本遺構直下で検出されている。以上の遺構が本遺構に重複近接するが、新旧関係は調査層位を優先すると35号坑・40号坑が新しく、45号・46号坑が本遺構より若干古く、50号土坑が一番古いことになる。なお、2号カマドは、35号土坑に切られ、45号土坑より新しい表現をとるが、45号土坑との新旧は不明である。

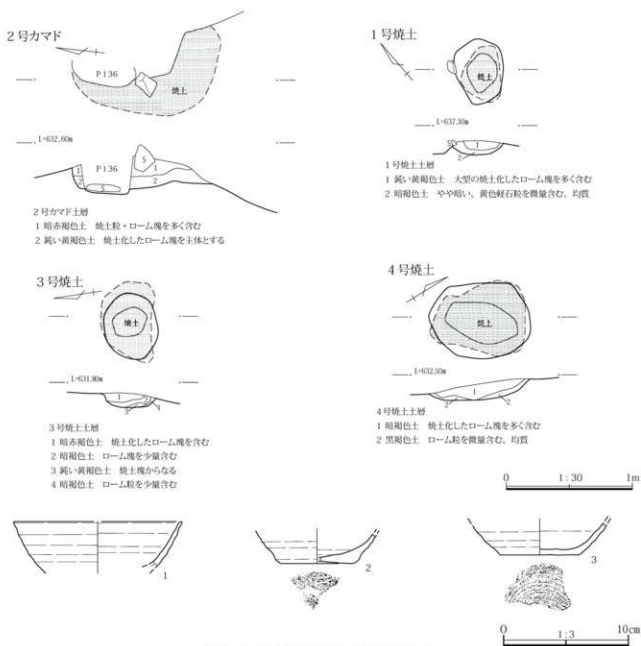
カマドを付帯する竈穴状遺構である。柱穴等を見ないことから住居跡ではなく、「竈屋」として位置付けた。

平面形は、1.9×1.8m程の不整正方形を呈し、深さは11cmと極めて浅い。2面目の調査という要素を割り引いても、他の住居跡と比して掘り込みが浅い遺構と判断できよう。壁の立ち上がりもやや不明瞭ながら、緩やかな立ち上がりは確認できた。

床面は平坦面を保つが、凹凸を持ち、緩やかに北から南へ約4°傾斜する。貼り床は見られず、Ⅳ層(黒褐色土)を地床としていた。硬化面はカマド周辺から西壁にかけて顕著だった。

壁周溝や柱穴は検出に努めたが、無かった。僅かに北東側の土坑(P1)が貯蔵穴として位置付けられる可能性がある。66×54×22cm程の不整円形を呈する浅い土坑である。埋土の特徴も他の住居跡との差は無い。

本遺構唯一の施設であるカマドは、東壁のほぼ中央に設けられる。確認面が下位であったため、煙道として把握できなかったが、おそらく壁外に突出する煙道と思われる。僅かな立ち上がりから、徐々に45°の急傾斜で立ち上がるようだ。施設廃絶時のカマドの破壊が想定されよう。焼き口部から燃焼部にかけて自然石と焼土塊が散乱する。石組カマドで、補強の芯材としての自然石と構築材の焼土化した粘土塊の散乱と思われる。焼き口部南に割れた状態で出土した大型自然石は焼き口部～燃焼



32図 カマド及び焼土・2号カマド出土遺物

2号カマド(32図 PL. 7・19)

調査区北東側で1号竈屋の北に隣接して調査された。前述のように土坑群が重複する箇所であり、2号カマドも35号土坑に切られるように調査されている。なお、1号竈屋に続き、本遺構も2号竈屋としての性格を探ったが、掘り込みや床面を確認できなかったため、2号カマド遺構として調査した。本書でも、調査時の遺構名を優先し、2号カマドとして報告する。

前述のように35号土坑や136号ピットなどの重複のため、平面形など全容は把握できないが不整楕円状を呈すものと捉えられる。掘り込みを持たず、黒褐色土中に約107×76cmの範囲で焼土が散布していた。焼土の中に

は、焼土化したローム塊や粘土塊が見られ、また上面から大型の自然石も作出している。何らかの構築材を使用した燃焼施設として推定されよう。

遺物は、須恵器環破片と土師器裏体部破片が出土している。須恵器環3点を図示した。

本来ならば焼土遺構として扱われるべき遺構と思われるが、1号竈屋に近接すること、焼土層中に構築材とも思われるローム塊が混在することから、カマド遺構として位置付けた。さらに、本遺構周辺のみ土坑や4号焼土等が群生している。例えば、2号カマドを廃絶する際の掘削行為の集積とも捉えられ、単なる重複遺構ではなく、集落内施設廃絶に伴う例も考えに入れておきたい。焼土

を伴う1号竈屋と近接することからも、同様の燃焼施設としての性格を想定することも可能であろう。

時期は、出土した須恵器坏などから9世紀後半段階と捉える。

1号焼土(32図 PL. 7)

調査区北東側(73区O-25)で調査された。重複遺構はなく単独の検出である。南西約2mに2号住、東約4mに2号カマドが近接する。黒褐色土中層において、40×30cm程の焼土の集中を確認したため、カマドを想定して周辺を精査したが、住居跡ではなく、焼土下に土坑を検出するに止まった。土坑は、規模は小型で約51×37cmの不整楕円状平面形を呈す。土坑上層に焼土塊が8cm程度の層厚をもってまどまる。掘り込みの深さも14cm程度で浅く、底面は黒褐色土に止まる。遺物は土師器裏破片が1点出土したが、小破片のため図示に至らなかった。

時期は周辺の遺構と同様に9世紀後半と考える。性格は不明である。なお、2号焼土は欠番扱いである。

3号焼土(32図 PL. 7)

調査区東側(73区N-23)で単独で検出された。黒褐色土中の確認で、焼土化したローム塊が約60×40cmの範囲でまどまって見ることができた。周辺には住居跡としての落ち込みも無く、単独の焼土遺構として位置付けた。北東約80cmに54号土坑が近接するが、本遺構との関係性は窺えない。規模は約53×42cmの小型の不整形土坑を下部に持ち、深さ約18cmの間に上層と下層2層に渡り焼土層を確認した。底面は黒褐色土中に止まる。

出土遺物はなく、周辺に関連する遺構も分布しておらず、時期・性格は不明である。焼土の様相が他の平安時代住居跡や竈屋と類似しており、そのことから、平安時代の所産と考えておきたい。

4号焼土(32図 PL. 7)

調査区北東側(73区M・N-25)で検出した。前述の2号カマドの東南約3mに近接する。2号カマドとの間には40号坑や45号・46号坑などが群在する箇所である。南西約1mには1号竈屋が接する。黒褐色土中の確認である。約70×50cmの範囲で焼土範囲を確認し、下部に約80×60cmの楕円状の土坑を調査した。上層に焼土が集中するが、

焼土化したローム塊を主としていた。土坑の深さは約25cmで、他の焼土遺構よりは深い掘り込みを示す。遺物の出土は見られなかった。

2号カマドでも述べたが、周辺には1号竈屋も近接しており、何らかの燃焼施設が集中する地点として考えられよう。それらの燃焼施設の廃絶段階に、40号坑や45・46号坑が掘削され、4号焼土や2号カマドを構成していた燃焼施設を破壊した可能性は高い。

1号集石(33図 PL. 8)

調査区北東側(73区N-24)で検出した。1面目の調査で得られた遺構である。1号竈屋南東隅を切る新旧関係を示すが、黒褐色土中の重複のため確定的ではない。その他に57号土坑と重複し、東に2号集石と隣接する。

平面形は径約110cmの不整形円形を呈し、深さは23cmを測る。断面形状は僅かに内湾する袋状を呈す。集石は15cm前後の拳大の自然石を中心に、上層から中層にかけて、土坑中央部に集中して出土した。焼石は見られなかったが、1石のみ北側壁にかかる大型自然石を見る。土坑底面は黒褐色土で止まる。埋土にはぶい褐色軟質土である。

遺物は集石下位より、羽釜口縁部破片を見たが、小破片のため図示には至らず、時期特定できる資料ではない。

本遺構の帰属時期は不確定だが、第1面目の遺構確認であり、土層の様相から中・近世に時期を求めたい。

2号集石(33図 PL. 8)

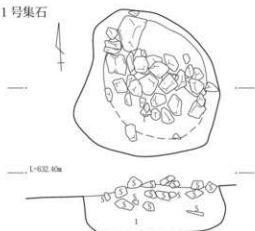
1号集石と同様に、調査区北東側(73区N-24)で検出した。1面目の調査で得られた遺構である。57号土坑と重複し、西に2号集石と隣接する。

平面規模は約86×78cmで不整形円形を呈す。深さは約32cmを測る。底面も地形に沿って傾斜しており、11°ほど南へ傾く。集石は上層から下層にかけて、土坑中央から北側へやや偏りを見せて分布していた。1号集石と比してやや大型の20cm前後の自然石で構成される。焼石などは見られなかった。土坑底面は黒褐色土で止まる。埋土は軟質黒褐色土を観察した。

遺物の出土はなく、時期を特定する要素は極めて乏しい。1号集石と同様に中世～近世にかけての所産とするが、確定的ではない。

第4章 榎木1遺跡

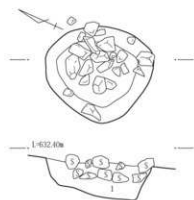
1号集石



1号集石土層

1 黄い褐色土 包含物極めて少ない。軟質

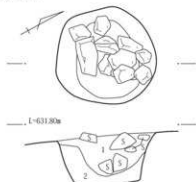
2号集石



2号集石土層

1 黒褐色土 白色粒を少量含む。軟質

3号集石

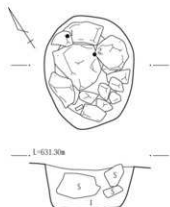


3号集石土層

1 褐色土 集石集中する。やや砂質
2 暗褐色土 白色粒を微量含む。軟質

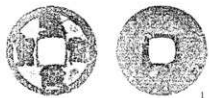
0 1:30 1m

4号集石



4号集石土層

1 暗褐色土 砂礫を含みやや軟質



0 1:1 5cm

33図 集石・4号集石出土遺物

3号集石(33図 PL. 8)

調査区北東端部、3号住居跡の南で調査した。3号住居とは北へ80cmの近距離にある。南東約1.8mに59号土坑、北西約2mに60号土坑がある。本遺構も1面目の調査で37号土坑とともに黒褐色土上層で検出されている。平面形は80×75cm程の不整形円形を呈し、深さは約45cmを測るように、しっかりとした掘り込みを示した。集石は20cm以上の比較的大型礫を中心にして、上層の第1層に集中

していた。ほぼ土坑中央にまとまるが、南東部には分布していなかった。遺物は土師器器裏体部破片が1点出土したが、小破片のため図化には至らず、本遺構の時期を特定するものではない。時期は調査面及び土層の観察から、中世～近世と考えたいが確定的ではない。性格は不明である。大型の自然石による集石という要素から、墓塚の可能性もあるが断定できない。

4号集石(33図 PL. 8・19)

調査区東側ほぼ中央(73区P-23)に位置する。重複遺構もなく、単独の検出である。近接遺構も北約3mに43号土坑、西約4.1mに47号土坑、南東約4.7mに42号土坑があるように距離を置いた配置であり、本遺構との関連性は弱い。遺構確認面は、第1面の黒褐色土上層である。

平面形は小型楕円状を呈し、約90×70×42cmを測る。しっかりとした掘り込みで、箱形の断面形は3号集石と共通する。土坑底面はローム漸移層上層に達する。集石は30cmを超える大型礫を主体とし、上層から下層にかけて土坑ほぼ全域より出土している。焼石は見られなかった。遺物は、土坑底面より僅かに浮いた状態で古銭2枚が出土している。1枚は判読不能だが、1枚は宋銭「洪武通寶」であろう。

本遺構の時期は、土坑底面より出土した古銭により、中世に求められ、性格も墓塚としての可能性が高い。

なお、後述する52号土坑も集石を伴い、宋銭2枚が出

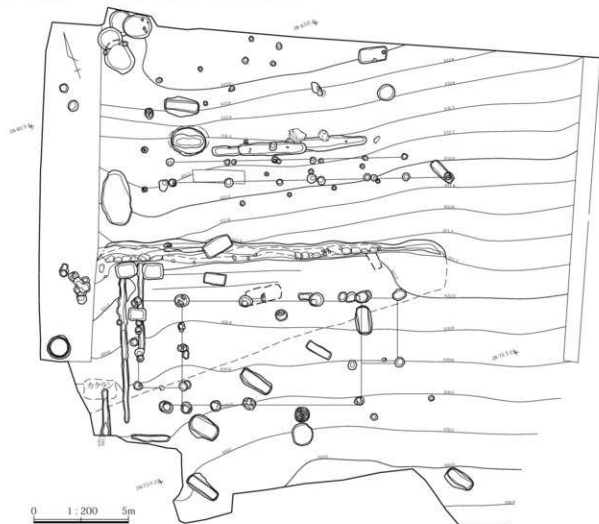
土している。4号集石と同様の墓塚として位置付けられよう。しかしながら、52号土坑と同様な集石土坑としては、31号土坑・33号土坑・36号土坑・46号土坑が挙げられるが、31坑・33坑・36坑は、調査区北西隅に集中している。集石遺構や52坑とは分布を異にしており、墓塚としては確定できない。よって、集石遺構・集石土坑全てを墓塚に性格を求めることは控えておきたい。

3. 建物跡

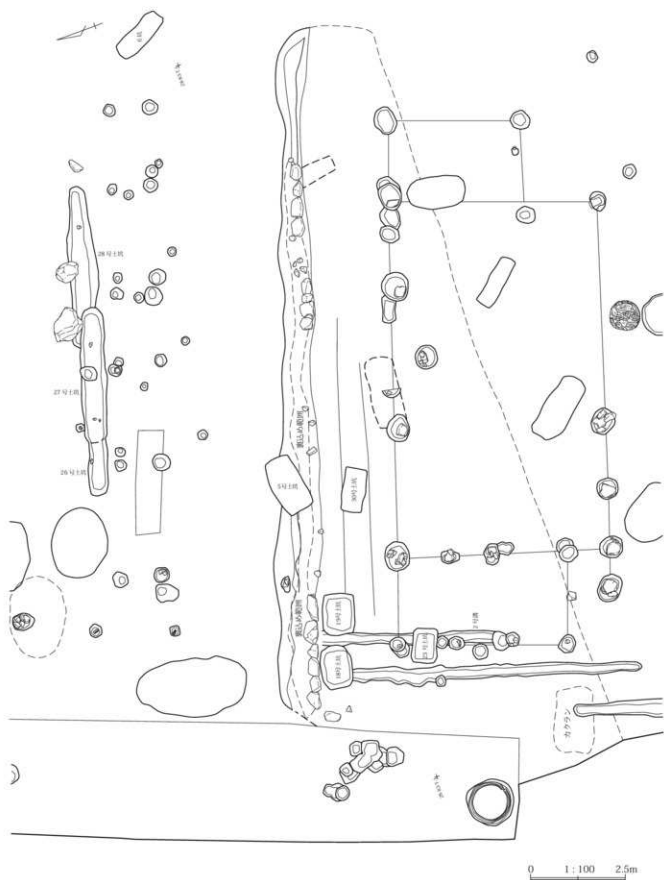
1号建物跡(34図～41図 PL. 8～11)

調査区西側で調査された近世屋敷跡である。周辺は北側から南側への緩斜面地形が展開しており、その傾斜角は約6°から10°である。

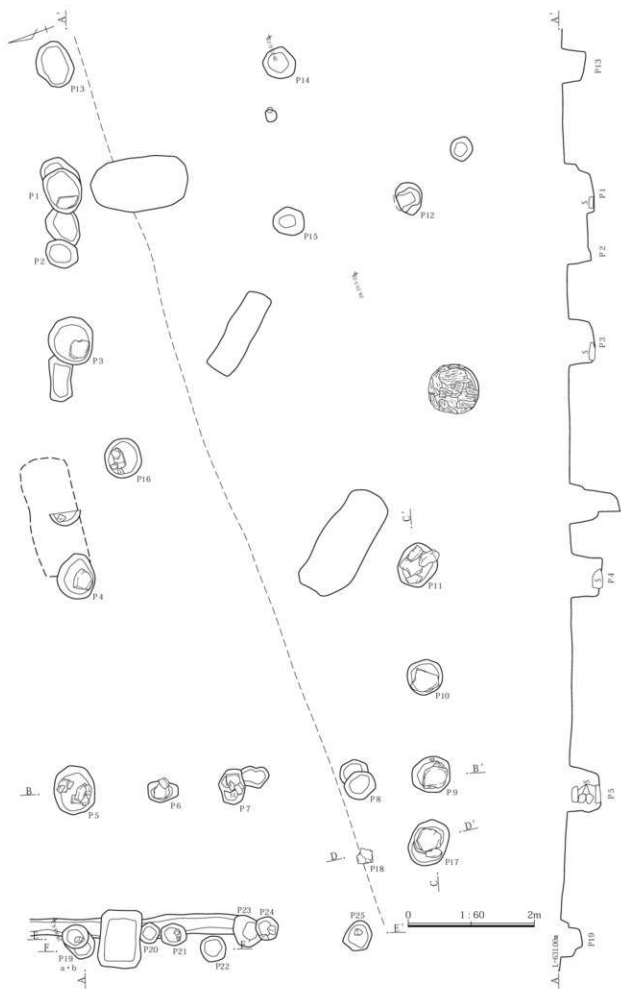
屋敷跡周辺には、土坑・ピットが散在するように分布している。おそらく同時期のものも多数含まれると思われるが、ここでは、屋敷の主軸に沿った遺構を優先して、屋敷内施設として報告する。



34図 1号建物跡(1)

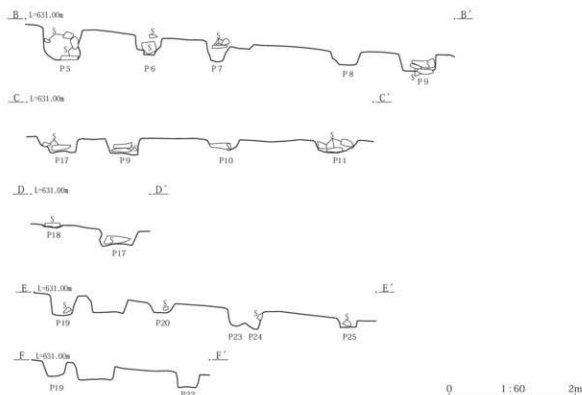


35図 1号建物跡(2)



36图 1号建物跡(3)

第4章 榎木1遺跡



37図 1号建物跡(4)

1号建物跡を含む近世屋敷跡は、建物敷地を切り土造成し、削平面を2段作出している。上段平坦面は、自然地形を利用し北側斜面を僅かに削り、緩やかな傾斜面を保っている。ここでは、26～28号土坑やピット列を見出すことができる。

下段平坦面である2段目は、北側に迫る急斜面地形を強く削り、南側に南北約9m、東西約20mの平坦面を確保し、1号建物を占地させる。北半が黄褐色ロームまでの削平で、南半はローム漸移層に止まる。平坦地傾斜は約3°～5°である。建物敷地面積としては、約150㎡である。

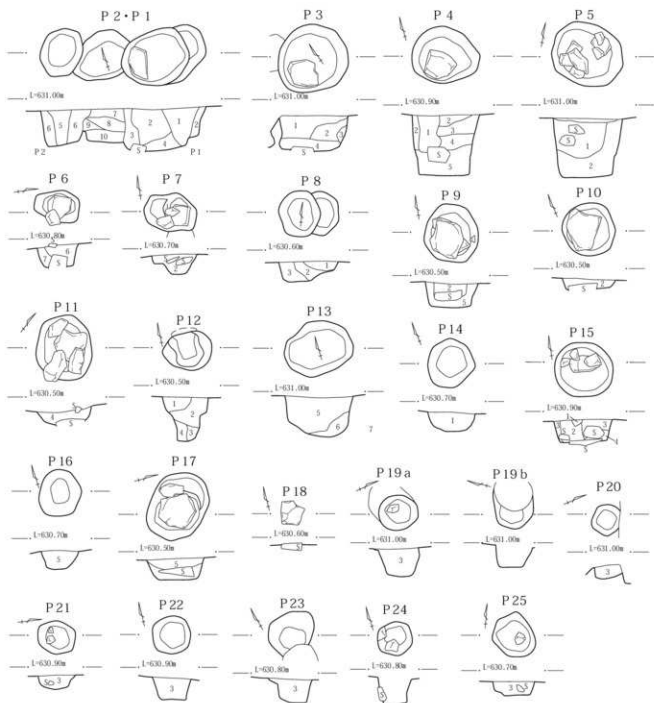
上段平坦面には溝状の土坑が連なり、南側にピット列を見る。おそらく、屋敷北に設けられた囲苑施設の一部と思われる。

下段平坦面では、北側傾斜を切り土した後、石垣を積み、法面補強をしている。石垣の残存は悪く、僅かに東端と西端の下段1段のみが残存しており、上段部分は、逸失していた。石垣東端の残りが良く、法面裾部に東西に自然石を6石並べ、法面との間にはローム塊を中心とした裏込め土を充填していた。

北側を石垣に囲われた下段平坦面には、1号建物跡が検出された。P1～P12までを建物柱穴として位置付けた。

規模は約9.3×5.5mを測る2間×3間の大型建物跡である。おそらく母屋建物と捉えてよいだろう。柱穴規模は径40cm前後で深さも30cm以内で浅い。しかしながら、多くの柱穴底面に礎石が設けられ、比較的堅牢な建物を想起させよう。柱穴配置をみると、P1～P5は北辺軸に並ぶ柱穴である。このうちP2を除くとP1～P3は2.4m、P3～P4は3.7m、P4～P5は3.3mの間隔で配される。西辺の柱穴はP5～P9からなるが、P5～P7間が2.5m、P7～P9間が3.1mの間隔を測る。北辺・西辺ともいずれも等間隔とはいえない。南辺と東辺に至ると柱穴数も揃いで、間隔も不定である。P9～P10は1.5m、P10～P11は1.9m、P11～P12は5.7mで中間に柱穴1基が空く距離である。さらに、東辺は、P1とP12は約5.3mを測り、対応するP5～P9間の距離に近いが、中間にあるP15は、配置的にも妥当性に欠け、建物を構成する柱穴とは位置付けられない。その他にP13は北辺の延長上にあり、P14とともに建物を構成するピットであろう。また、南西隅にあるP17は南辺の延長上にあり、礎石を有す。建物内にあるP16も礎石を有しており、柱穴配置としてはそぐわないが、建物を構成する柱穴として位置付けた。

西約2.4mには1・2号溝が南北の走向を持って、1号建物西側を画す。1・2号溝北には、18号土坑と19号



P 1・2 土層

- 1 鈍い黄褐色土 黒色土塊・ローム塊を多く含む
- 2 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む
- 3 暗褐色土 大型のローム塊を少量含む
- 4 鈍い褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 5 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 6 暗褐色土 黄色軽石粒・ローム塊を含む
- 7 黒色土 ローム粒を少量含む
- 8 黒褐色土 ローム塊を多く含む
- 9 黒色土 ローム粒を少量含む。軟質
- 10 黄褐色土 ローム塊を主体とする。軟質

P 3 ビット土層

- 1 黒褐色土 黒色土塊・ローム塊を含む
- 2 黄褐色土 大型のローム塊を主体とする
- 3 暗褐色土 大型のローム塊と黒色土塊からなる
- 4 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む

P 5 土層

- 1 褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 2 褐色土 大型のローム塊を多く含む

P 8 ビット土層

- 1 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む
- 2 黒褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 3 黒色土 褐色土塊・白色粒を含む

P 4 土層

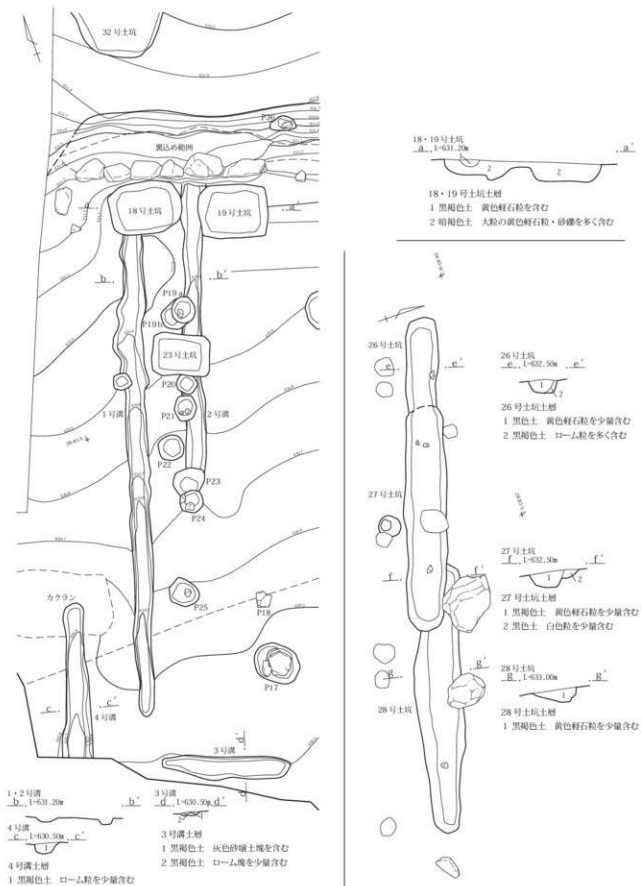
- 1 暗褐色土 ローム塊を少量含む。柱直か
- 2 黄褐色土 大型のローム塊を多く含む
- 3 黒色土 ローム粒・褐色土塊を少量含む
- 4 黄褐色土 大型のローム塊を主体とする。軟質
- 5 黒褐色土 ローム粒を少量含む

ビット統一土層

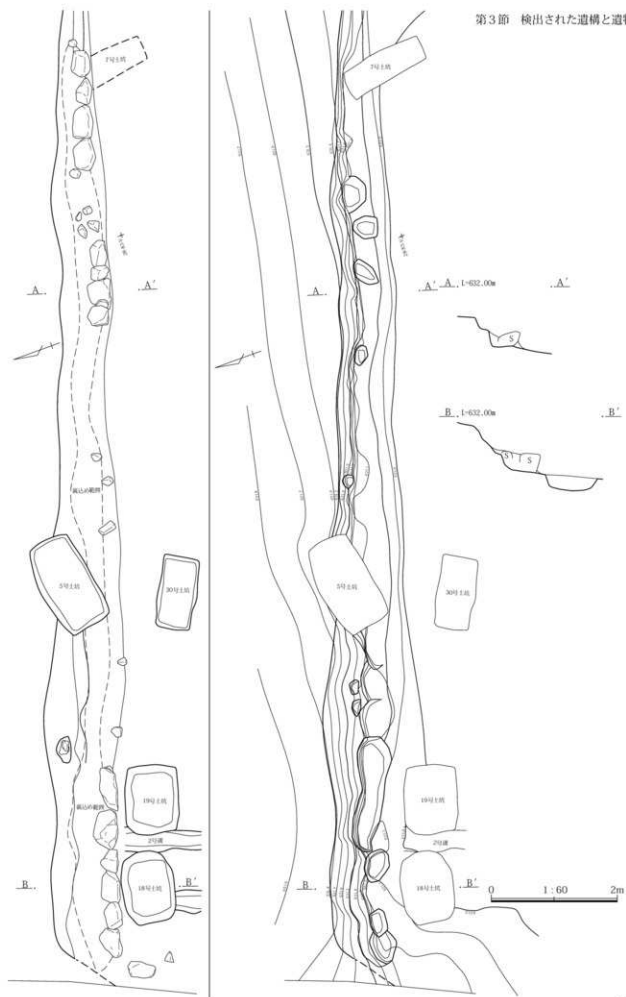
- 1 黒色土 均質で微量の黄色軽石粒を含む
- 2 黒色土 やや明るい。ローム粒を少量含む
- 3 暗褐色土 白色粒・黄色軽石粒を含む。軟質
- 4 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む
- 5 黒褐色土 黄色軽石粒・ローム塊を含む
- 6 暗褐色土 黄色軽石粒・ローム塊を含む
- 7 黄褐色土 ローム塊を多く含む

0 1:40 1m

38図 1号建物跡(5)



39図 1号建物跡(6)



40図 1号建物跡(7)

土坑が東西に並列し、石垣に接するように設けられている。1・2号溝と18・19号土坑の新旧が不明であるが、石垣から直交して地形傾斜に沿って溝が走向する形態であり、建物西端の区画を兼ねる施設として注意したい。また、1・2号溝南にはP19～P25が南北に並ぶ。ピットの重複から複数回の設定が予想されるが、1号建物跡西辺のP5～P8に対応する配置であり、1・2号溝に接した上層のある施設が想定されよう。1号溝南西には4号溝が南北に走向する。南端部は調査区域外に伸びるため不明だが、区画溝としての性格は捉えられる。3号溝は1号溝の南東で東西の走向を見せる。小規模な溝だが走向から、1号建物跡敷地の南端を示す可能性もある。

建物跡を検出した下段平坦面北側には、上段平坦面がある。前述のように、溝状土坑である26号～28号土坑が東西に連続して検出されている。また、土坑群の南側には2列のピット列が検出された。ピット列は、東西に並び、北ピット列が6箇所、南ピット列が7箇所のピットが並ぶ。2基一対のピットもあり、2回程度の設定が行われたようだ。北ピット列と南ピット列の新旧は不明だが、南ピット列の規模が大型であり、あるいは同時に並列するピット列で、狭小な上層も想定できよう。

ここでは、1号建物内の施設として扱わなかったが、敷地内やその周辺で円形土坑(10坑・20坑・21坑)などが検出されている。埋土などの特徴から、近世～近代に比定され、1号建物内施設の可能性はある。

出土遺物はごく少量で、詳細な時期の特定には至らない。4号溝より染付碗小破片が出土するが、おそらく後世の流入と判断した。その中で石垣中に石白破片の出土を見ている。図化は果たせなかったが、江戸時代後半期の所産と思われ、1号建物跡の時期も近世に充てたい。

以上のように、1号建物跡は、柱穴配置・間隔が不定ながら切り土された建物敷地に設けられた礎石建物であり、当時の民家の一形態として位置付けられよう。近世屋敷跡としては、この建物跡のみで周辺には組み合う柱穴も見出せなかった。しかしながら、本遺跡に隣接する榎木Ⅱ遺跡では、中世に比定される掘立柱建物跡が、雛壇状に傾斜地平坦面に占地していた。おそらく、本遺跡近世屋敷跡も調査区域外の平坦地形を選んで、他の建物跡が存在するものと推定できよう。

4. 土坑(42図～51図 PL.12～15・20)

榎木Ⅰ遺跡では、62基の土坑を調査している。縄文時代から平安時代、中・近世、近代と時代幅もある。また、陥穴状土坑や墓塚として性格が想定できる例もあるが、殆どの土坑の性格は確定できない。また詳細な時期も、土坑内出土遺物が良好な例が少なく、確定的ではない。故に、本書では時代・性格を考慮した掲載ではなく、調査時に付された土坑番号を優先した掲載方法を選んだ。また、土坑個別の説明では紙数を重ねてしまうため、概略を述べるに止める。計測値などは遺構計測表を参考にさせていただきたい。また挿図中の土層説明は、各土坑に共通性のある土層があるため、統一した説明を掲載した。それにそぐわない土層は個別に併記している。

縄文時代の土坑は、1基のみの検出である。48号土坑であり、他にも3面目の調査などで得られた該期土坑は存在すると思われるが、他時期土坑との分別が困難なため、48号土坑の説明だけに止める。

48号土坑は、調査区東側中央に位置する(73区M-23)。周辺には3号住家が東約3.6mに位置するが、関連性は無い。単独の検出で、縄文時代に帰属し得る土坑は他に見られない。平面形は円形で径約1.2×1.1mを測る。深さは約70cmと深い。東壁が緩やかに内湾し袋状を呈す。上層に焼土と伴に小型深鉢と大型自然石の出土を見、ほぼ同じ層位で出土している。出土した小型深鉢は、中期前葉に比定される例で、土坑の帰属時期としたい。性格は不明だが墓塚の可能性もある。隣接する榎木Ⅱ遺跡でも該期資料が充実しており、林地区における中期初頭～前葉の土器様相を語るに良好な資料である。

平安時代の土坑も確定し難い。遺物を出土した例としては、図化した土坑出土遺物として、40号土坑、42号土坑、55号土坑がある。ただし、40号坑の土層は中世～近世の埋土である。42号坑は陥穴状土坑、55号坑は1号竈屋の下層での検出であり、1号竈屋からの流入の可能性もある。ただ、いずれも調査区東側の平安時代住居跡が占地する範囲に位置する。その他では、1号土坑・5号土坑・9号土坑などで該期遺物が出土するが、小片で近世・近代遺物との伴出のため、平安時代の土坑とは見なせない。

次に、本遺跡における陥穴状土坑も平安時代以降の所

1号土坑



1号土坑土層

- 1 暗褐色土 粘土塊・ローム塊を含む。炭化物を少量含む
- 2 暗褐色土 粘土塊・ローム塊を少量含む
- 3 灰白色土 粘土層。炭化物を微量含む
- 4 黄褐色土 ローム塊主体。大粒の軽石粒を含む。硬くしまる
- 5 灰黄褐色土 粘土塊主体。ローム粒を少量含む。硬くしまる
- 6 黒褐色土 粘性に富む。ローム塊を含む
- 7 黒褐色土 ローム粒を含む。やや軟質

3号土坑



3号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む
- 2 黒褐色土 やや暗い。白色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム塊を多く含む。軟質

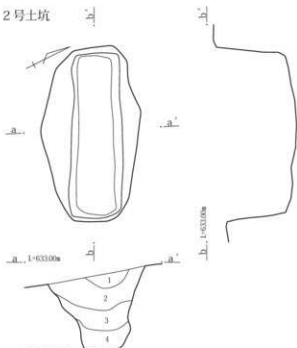
5号土坑



5号土坑土層

- 1 暗褐色土 大型のローム塊を含む。石埋土
- 2 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む。軟質

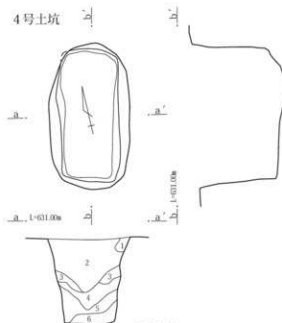
2号土坑



2号土坑土層

- 1 黒色土 少量の黄色軽石粒を含む。軟質
- 2 黒褐色土 やや明るい。白色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 白色粒を微量含む。軟質
- 4 黒褐色土 ローム粒を少量含む。軟質

4号土坑

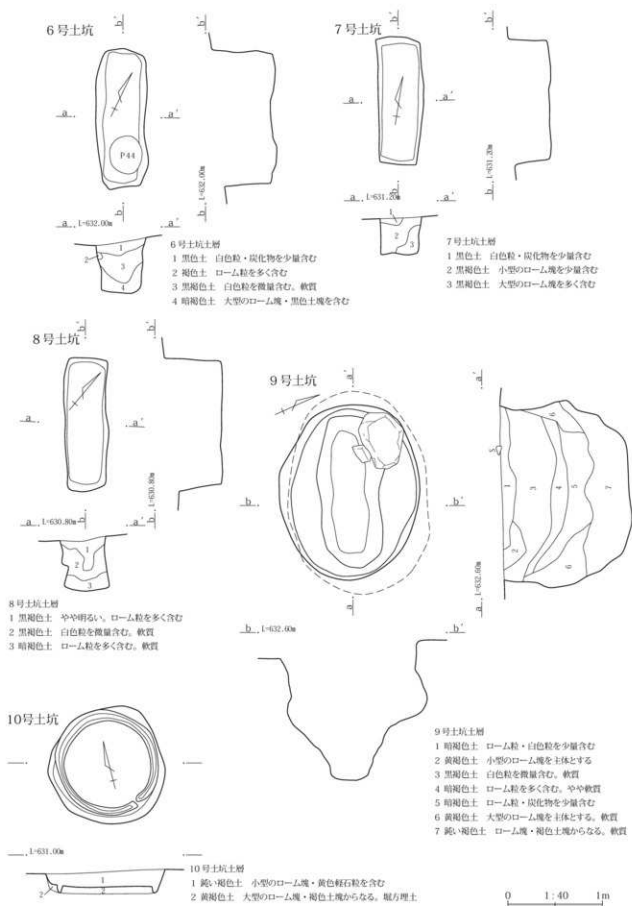


4号土坑土層

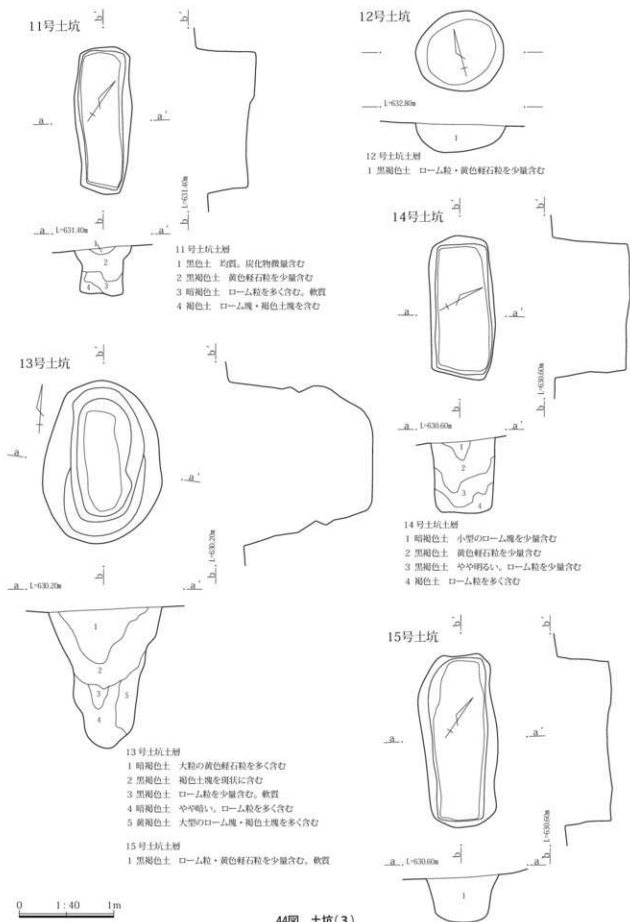
- 1 褐色土 小型のローム塊を少量含む
- 2 黒色土 白色粒を少量含む。軟質
- 3 黄褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 黒褐色土 白色粒を微量含む。軟質
- 5 黄褐色土 大型のローム塊を主体とする。黒色土塊を含む。軟質
- 6 黒褐色土 ローム粒を少量含む。粘性強い

42図 土坑(1)

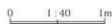
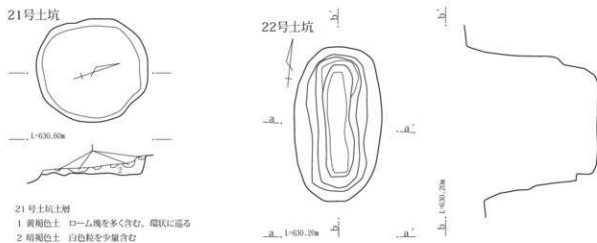
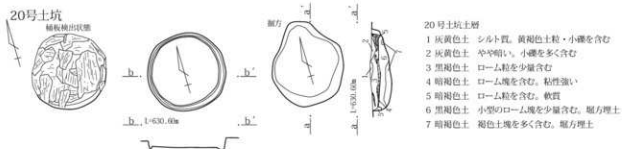
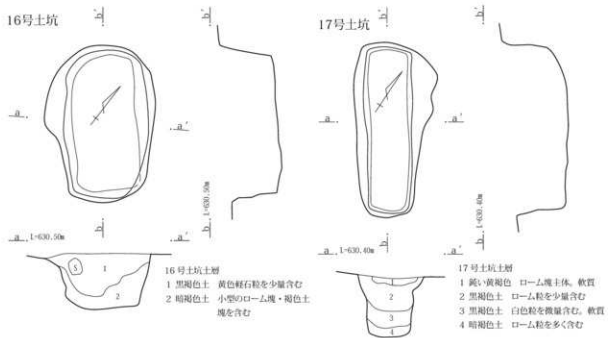
0 1:40 1m



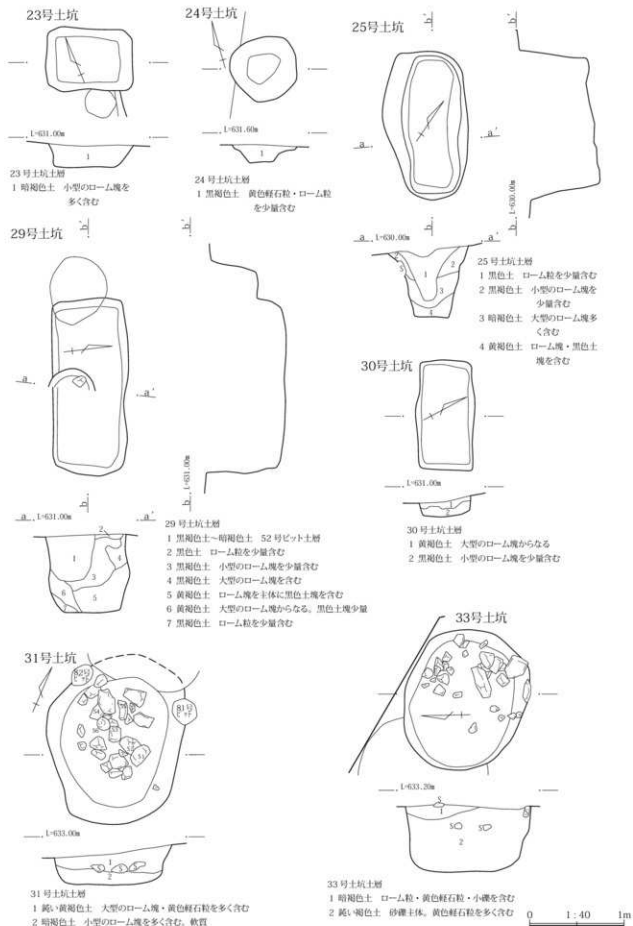
43図 土坑(2)



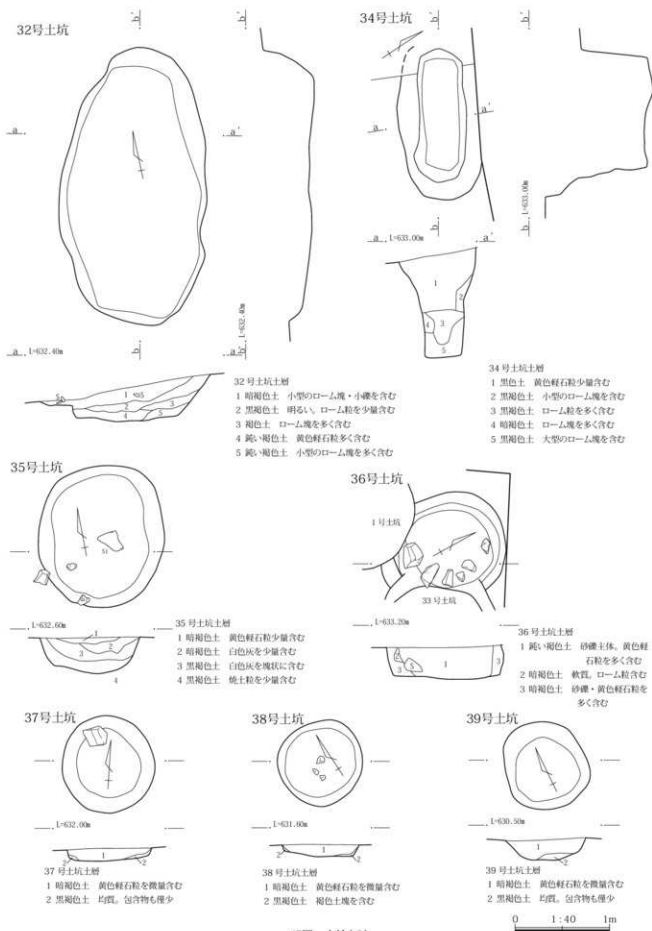
44図 土坑(3)



45図 土坑(4)



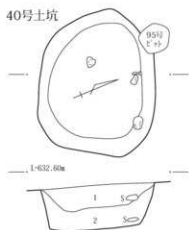
46図 土坑(5)



47図 土坑(6)

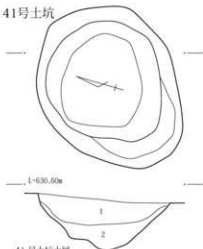
第4章 楡木I遺跡

40号土坑



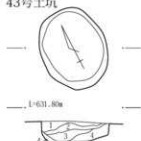
- 40号土坑土層
1 暗褐色土 褐色土塊・黒色土塊を少量含む
2 暗褐色土 黒色土塊を多く含む

41号土坑



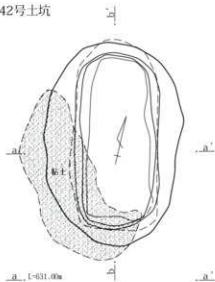
- 41号土坑土層
1 暗褐色土 褐色土塊・黒色土塊を少量含む
2 暗褐色土 黒色土塊を多く含む

43号土坑



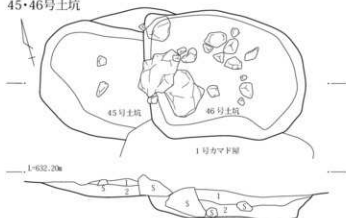
- 43号土坑土層
1 黒褐色土 黄色軽石粒を微量含む
2 暗褐色土 ローム粒を多く含む
3 黒褐色土 黄色軽石粒を含む
4 暗褐色土 褐色土塊を少量含む

42号土坑



- 42号土坑土層
1 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む、やや硬質
2 褐色土 ローム塊・粘土塊を多く含む、軟質
3 黒褐色土 ローム粒・黄色軽石粒を少量含む
4 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む、軟質
5 黒褐色土 大型のローム塊を多く含む
6 黒褐色土 ローム粒を少量含む、軟質
7 暗褐色土 褐色土塊・ローム塊を含む
8 黄褐色土 大型のローム塊・黒色土塊を含む

45・46号土坑



- 45号土坑土層
1 暗褐色土 褐色土塊を含む
2 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む

- 46号土坑土層
1 暗褐色土 小型の褐色土塊を少量含む
2 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む

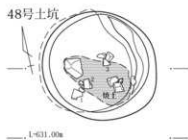
0 1:40 1m

48図 土坑(7)



47号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色軽石粒・褐色土塊を含む
- 2 鈍い褐色土 小型のローム塊を多く含む



48号土坑

1

2

3

4

5

6

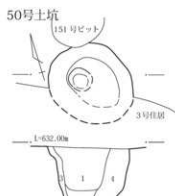
48号土坑土層

- 1 暗褐色土 少量の植土粒・黄色軽石粒を含む
- 2 黒褐色土 植土粒・黄色軽石粒を多く含む
- 3 黒褐色土 炭化物・ローム粒を少量含む
- 4 暗褐色土 小型のローム塊・褐色土塊を含む
- 5 暗褐色土 ローム塊・黒色土塊を多く含む
- 6 黄褐色土 大型のローム塊を多く含む



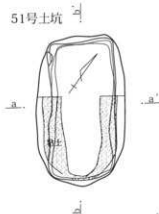
49号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色軽石粒・褐色土塊を含む
- 2 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 3 鈍い褐色土 ローム塊・褐色土塊を含む



50号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色軽石粒を微量含む。軟質
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。軟質
- 3 鈍い褐色土 小型のローム塊を含む
- 4 暗褐色土 大型のローム塊を少量含む



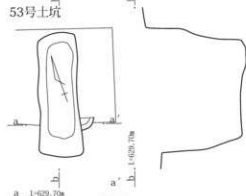
51号土坑土層

- 1 黒色土 白色粒・黄色軽石粒を微量含む
- 2 黒色土 やや暗い。ローム粒を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム粒・黄色軽石粒を含む。軟質
- 6 黄褐色土 大型のローム塊を多く含む
- 7 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 8 黄褐色土 ローム塊を主体とする
- 9 黒褐色土 黄色軽石粒・ローム粒を多く含む



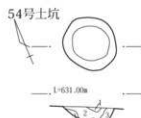
52号土坑土層

- 1 黒色土 白色粒を微量含む。軟質
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む



53号土坑土層

- 1 黒色土 包含物は僅少。軟質
- 2 鈍い黄褐色土 大型のローム塊を多く含む
- 3 黒褐色土 暗い。ローム塊を少量含む
- 4 暗褐色土 大型のローム塊・黒色土塊を多く含む
- 5 黒褐色土 ローム粒・黄色軽石粒を少量含む



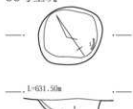
54号土坑土層

- 1 黒褐色土 白色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 3 黒褐色土 褐色土塊を含む

0 1:40 1m

49図 土坑(8)

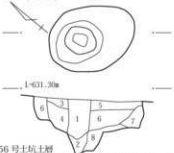
55号土坑



55号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒・黄色軽石粒を少量含む
- 2 黄い褐色土 小型のローム塊を多く含む

56号土坑



56号土坑土層

- 1 黒褐色土 大粒の黄色軽石粒を多く含む。軟質
- 2 黒褐色土 褐色土塊を多く含む。軟質
- 3 暗褐色土 大型の褐色土塊を含む
- 4 黒褐色土 褐色土塊を少量含む。硬くしまる
- 5 黄い褐色土 ローム塊・褐色土塊を多く含む
- 6 暗褐色土 ローム塊と褐色土塊を塊状に含む
- 7 暗褐色土 暗い、褐色土塊を少量含む
- 8 黄い黄褐色土 ローム塊を主体とする

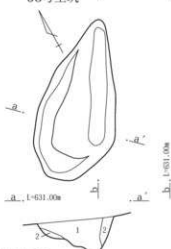
57号土坑



57号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒・黄色軽石粒を少量含む
- 2 黄い褐色土 小型のローム塊を多く含む

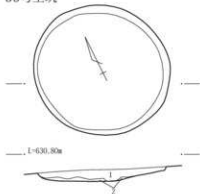
58号土坑



58号土坑土層

- 1 暗褐色土 黒色土塊・褐色土塊からなる
- 2 黄褐色土 ローム塊を主体とする

59号土坑



59号土坑土層

- 1 黒色土 白色粒を微量含む。軟質
- 2 黄褐色土 ローム塊を主体とする

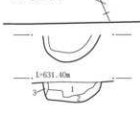
60号土坑



60号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 2 暗褐色土 小型のローム塊を含む

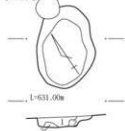
61号土坑



61号土坑土層

- 1 暗褐色土 黄色軽石粒を少量含む
- 2 褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 黒褐色土 小型のローム塊を少量含む

62号土坑

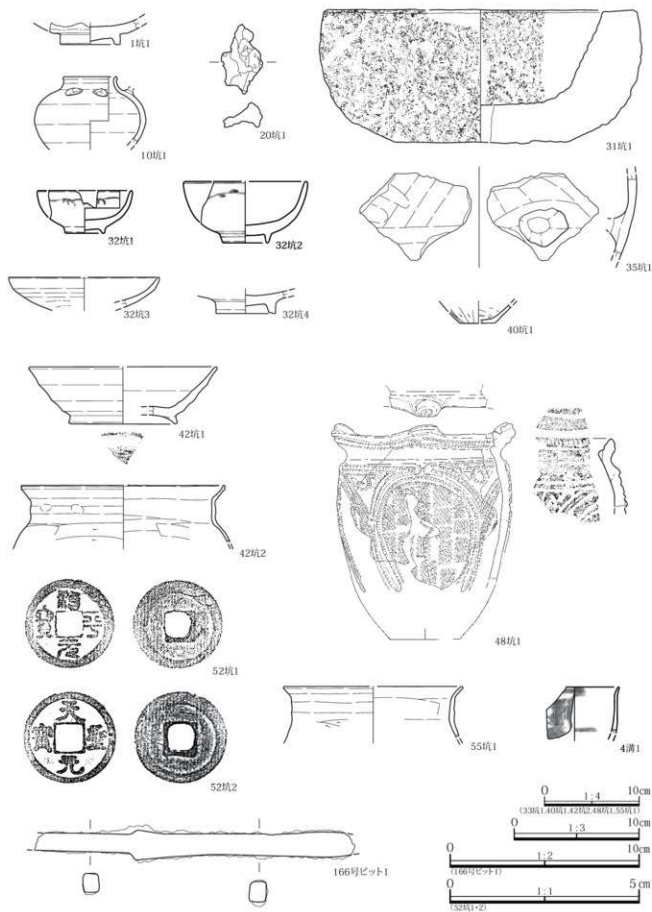


62号土坑土層

- 1 黒褐色土 褐色土塊を多く含む
- 2 黄褐色土 褐色土塊・ローム塊を含む



50図 土坑(9)



51図 土坑・溝・ビット出土遺物

産とする考えに従いたい。2号土坑・4号土坑・9号土坑・13号土坑・22号土坑・25号土坑・34号土坑・前述の42号坑・51号土坑を充てたい。このうち、22号坑は断面形態が溝状を呈す。対象動物の差と見る考えもあるが、あるいは縄文時代に時期を求める可能性もある。本遺跡の陥穴状土坑は、土坑底面に小孔を設けない例であり、これも対象動物の差あるいは捕獲方法の差と見るべきだろう。陥穴状土坑の主軸は概ね北西あるいは南北を向く例が多いが2号坑と9号坑が東西を主軸とする。これは、主軸を南北・北西に向ける陥穴状土坑は等高線に直交する設定方法に対し、2号坑と9号坑は等高線に平行している。おそらく、捕獲対象とする動物の「けものみち」に設定する差が、主軸の差となって具体化したものと思われる。また、2号坑と9号坑が極めて近い距離に隣接する様相も注意しておきたい。9号坑平面形に関しては、楕円状を呈する例としても、短軸が幅広でやや円形に近い形状である。方形や長楕円状の平面形状を主体とする陥穴状土坑の中で、独自性を窺わせる存在である。

中世土坑も確定できない。僅かに、52号土坑で宋銭2枚を出土しており、中世墓塚としての可能性を示す。また、35号土坑出土の焙烙破片も中世に時期を求めたい。52坑は、調査区中央南端の調査区境で検出されたの位置付けも考慮したい。31坑・33坑・36坑は調査区北西隅で一群をなす。31坑からは、石鉢破片が散乱した状態で出土する。内外面に煤が付着しており、再利用後の土坑埋置の可能性もある。集石土坑における、破損石製品出土例として注意するべきであろう。35坑は46号坑などと伴に重複土坑として集中する。群在する土坑2箇所とも、小規模とはいえず集石を伴う様相は注意したい。これらは、埋土・覆土の様相から中世に位置付けたいが、重複関係など不明な要素があり、確信性に乏しい。また、4号集石遺構でも述べたが、全てを墓坑とする位置付けは問題がある。類例と検証を重ねるべきである。

近世土坑は、1号建物跡周辺でまとまる。円形の土坑として、1号建物跡で述べた10号土坑・20号土坑・21号土坑が挙げられる。整った円形形状を示し、10坑や20坑は底面から桶状容器底部正痕が見出せた。20坑は木質の底板も確認された。21坑は確認段階で土坑外縁を環状にローム塊や粘土塊が巡る様相が観察された。同様な例では1号土坑の底面は灰白色粘土を貼り、粘土塊やローム

塊が外縁を硬く補強する。4基とも発酵容器あるいは便槽といった、液体や有機質を溜める施設として考えておきたい。

近世土坑としては、方形土坑が民家跡などに集中する傾向がある。本遺跡の方形土坑は密集する分布ではないが、1号建物跡周辺で見ることができる。3号土坑・5号～8号土坑・11号土坑・14号～17号土坑・23号土坑・29号土坑・30号土坑・53号土坑が挙げられる。方形土坑は「ムロ」など貯蔵用施設として位置付けられ、建物軸と一致する例が多い。しかし、本遺跡の場合は、方形土坑の殆どが1号建物跡の主軸とは差があり、そのため、建物内の施設としては扱わなかった。建物主軸とは合わないが、8号坑・15号～17号坑は敷地内で長軸を北西に向け統一性が窺われる。間隔も2.7m前後に配置され、意図的な占地と捉えられよう。ただ8号・15号・16号土坑は1号建物跡内に重なり、建物との時期差が推定されよう。

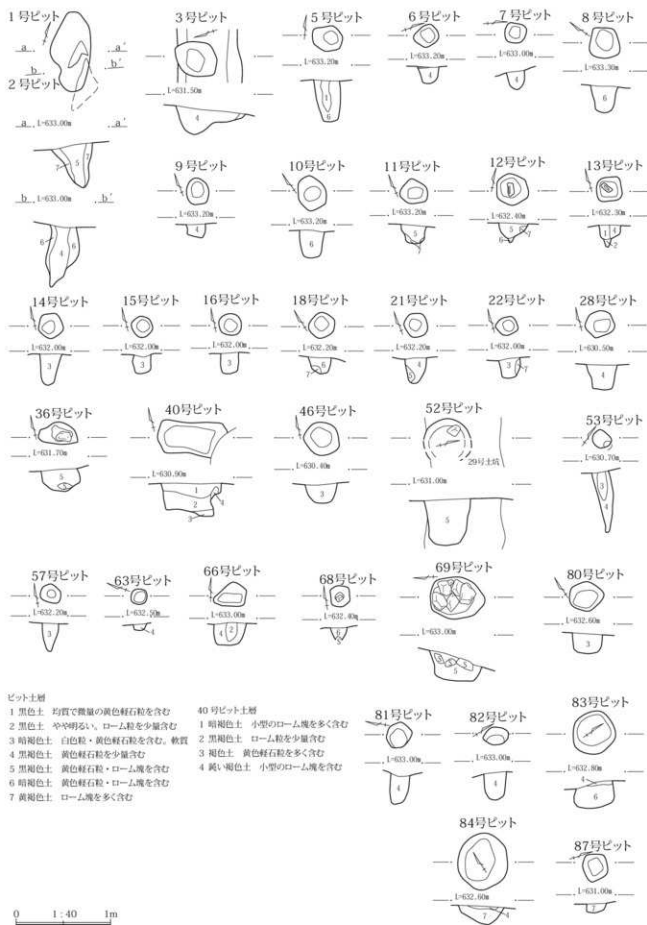
5. ビット (51図～56図 PL.20)

本項では、264基のビットを報告する。この他に1号建物跡を構成するビットがあるが、これは除外した。本遺跡のビットは、中央部を除きほぼ全域に散在する。例えば、平安時代の居住施設である竪穴住居跡以外にも、掘立柱建物跡の存在は集落の性格を推定する際には重要な施設であるため、調査においては、掘立柱建物跡の検出を試み、各ビットの対応性を追求したが、残念ながら良好に組み合わせる例はなく、ビットとしての報告となった。

本遺跡で検出したビットには柱痕を持つ例(5号ビット・119号ビット・120号ビット・133号ビット・174号ビット・178号ビットなど)や礫を多出するビット(69号ビット)、群在するビット群(74～79号ビット)、列状となる例(129～131号ビット)、遺物(鉄製品)を出土するビット(166号ビット)など性格・規模など多様性を含む。ビットを構築物の一部とする、多くの施設が混在する様相が想定されるが、実体像は明確にできなかった。

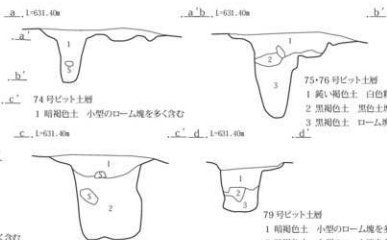
また、時期もビット内出土遺物では、特定できなかった。

ビットの規模や位置などは、遺構計測表を参考にさせていただきたい。また、土坑と同様に、各ビット土層で共通性のある土層は統一した土層説明を掲載している。



52図 ピット(1)

74~79号ピット



- 74号ピット土層
1 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 75・76号ピット土層
1 鈍い褐色土 白色粒を多く含む
2 黒褐色土 黒色土塊からなる
3 黒褐色土 ローム塊を多く含む

77・78号ピット土層

- 1 黒褐色土 白色粒を多く含む
2 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む

79号ピット土層

- 1 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む
2 暗褐色土 大型のローム塊を含む
3 黒褐色土 ローム塊を多く含む

88・89号ピット

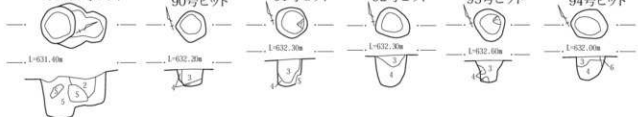
90号ピット

91号ピット

92号ピット

93号ピット

94号ピット



95号ピット

96号ピット

97号ピット

98号ピット

99号ピット

100号ピット



101号ピット

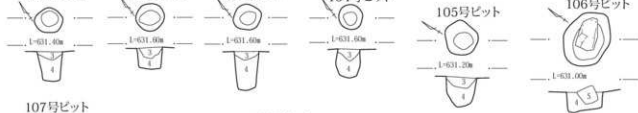
102号ピット

103号ピット

104号ピット

105号ピット

106号ピット



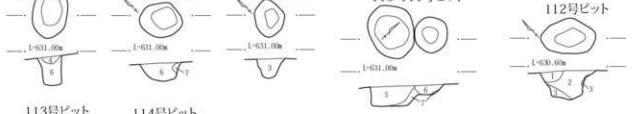
107号ピット

108号ピット

109号ピット

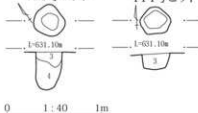
110・111号ピット

112号ピット



113号ピット

114号ピット



99号ピット土層

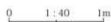
- 1 鈍い褐色土 焼土粒を含む
2 暗褐色土 均質。白色粒を微量含む
3 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む

112号ピット土層

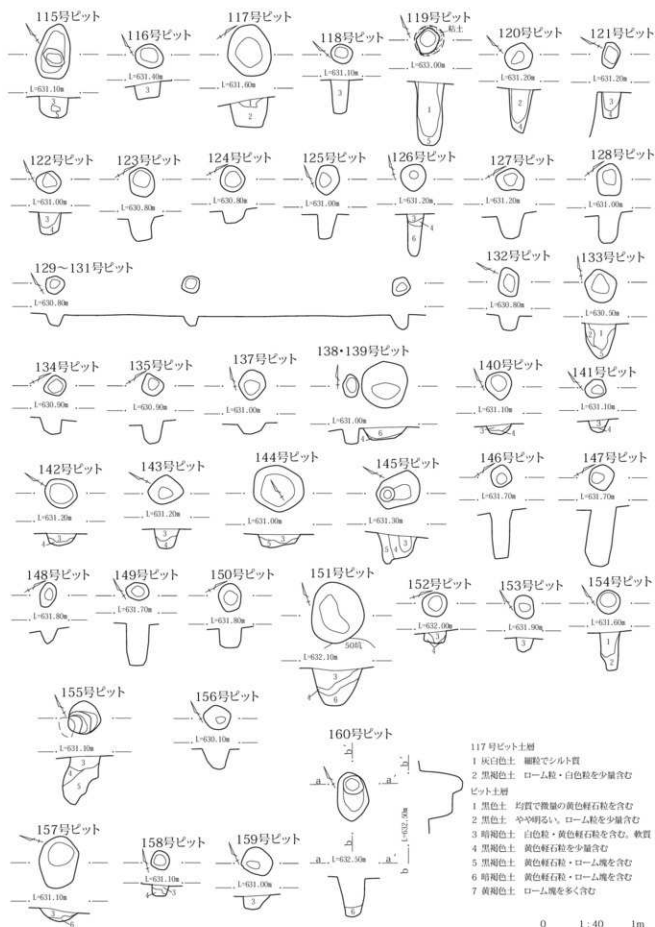
- 1 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を少量含む
2 黒褐色土 やや明るい。白色粒を少量含む
3 褐色土 ローム粒を多く含む。軟質

ピット土層

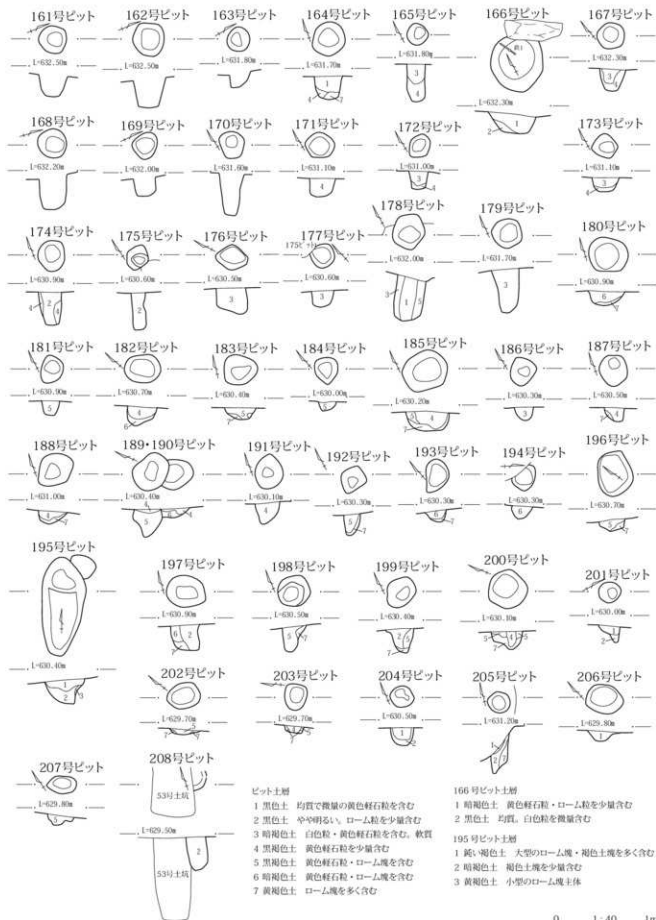
- 1 黒色土 均質で微量の黄色軽石粒を含む
2 黒色土 やや明るい。ローム粒を少量含む
3 暗褐色土 白色粒・黄色軽石粒を含む。軟質
4 黒褐色土 黄色軽石粒を少量含む
5 黒褐色土 黄色軽石粒・ローム塊を含む
6 暗褐色土 黄色軽石粒・ローム塊を含む
7 黄褐色土 ローム塊を多く含む



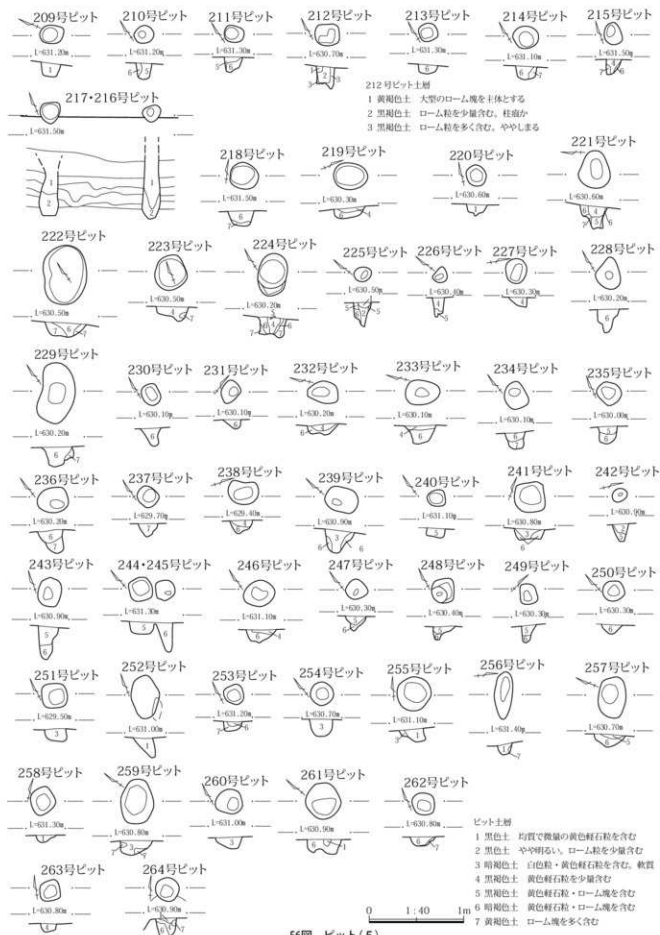
53図 ピット(2)



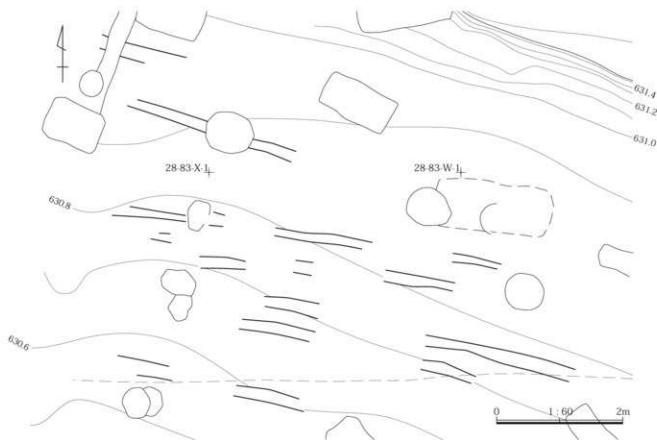
54図 ピット(3)



55図 ビット(4)



56図 ピット(5)



57図 1号畑跡

6. 畑跡(57図)

1号建物跡柱穴など検出時に、数条のサク状溝を確認した。サク状溝は、1号建物跡による平坦地にある程度の広がりが見られ、平行に走向することから、畑跡として、耕作痕であるサクの範囲を捉えた。位置するグリッドは73区・83区V～X-25～1である。畑の範囲は、東西長8.2m・南北幅5.2mで7条のサクを確認した。サクは、途中で途切れ不連続な様相で、全容の把握までは至らない。畑跡としては、サクのみの検出でありウネ部分は確認できなかった。残存状態は不良である。

サクは、ローム塊を混在した暗褐色土を理土としていた。走向は東西方向を基調とし、北西部2条のサクはやや北に走向していた。等高線に沿った走向といえよう。サクの走向は途中で途切れる様相だが、これは、1号建物跡検出を優先した結果、掘り込みの浅いサク検出が果たせなかったためである。サク間の距離は、約40.8～108cmと数値幅がある。これは、複数回にわたる耕作の痕跡と捉えられ、基準は80～100cm幅の畑サク間距離と考える。仮に100cmのサク間であれば、これは当地域各所で調査されているAs-A下畑跡のサク間に近い数値であり、同種の畑作物の可能性を示唆する。

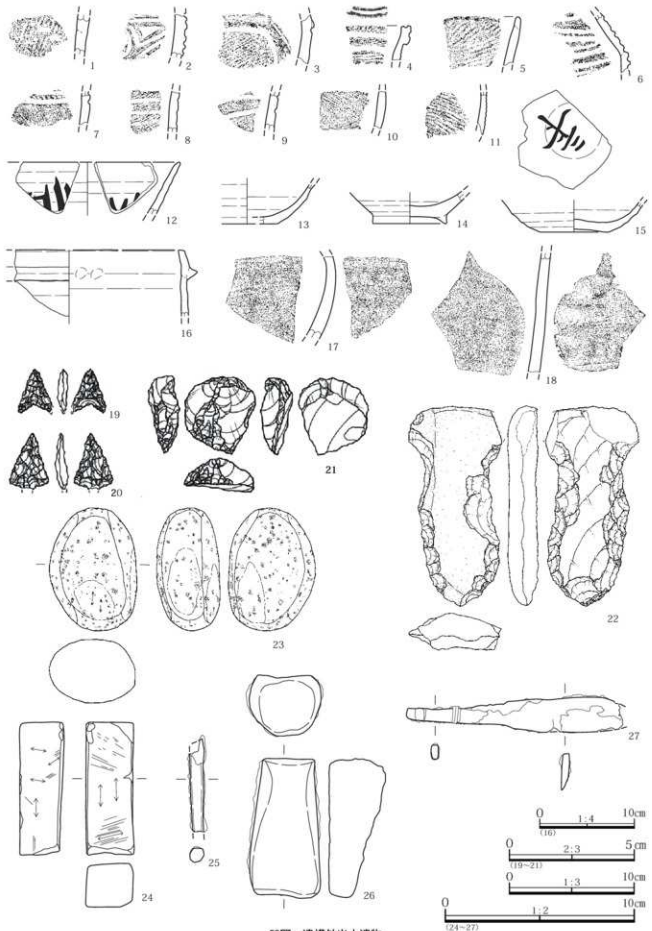
残存状態の悪い畑跡のため、耕作単位など詳細は不明である。周辺の緩斜面地形にサクの痕跡が認められないことから、小規模な畑跡と判断したい。

畑跡の帰属時期であるが、1号建物跡で検出された柱穴等との新旧関係は捉えられなかったが、1号建物の敷地内造成による平坦地に、サクが集中することから、1号建物廃絶後に、跡地の平坦地を選地したものと考えられる。よって、近世以降の所産と判断できる。

7. 遺構外出土遺物(58図 PL.20)

榎木1遺跡の遺構外出土遺物の多くが、平安時代の土師器類、須恵器類・埴類である。次いで、近世の陶磁器類、縄文土器・石器があるように、ほぼ検出された遺構に沿う例である。その中で、数点ながら弥生時代中期に比定される数点の土器が見られたのは特筆されよう。粗製土器と思われる土器片も幾つか見られたが、いずれも磨滅が著しく図化は一部に止まった。また、図化は果たせなかったが、中世焙烙鍋の体部破片や底部を見ることができた。これらは35号土坑で出土した焙烙鍋と同一個体の可能性もある。

各遺物の詳細は、観察表を参考にさせていただきたい。



58図 遺構外出土遺物

表2 楡木I遺跡 遺構計測表

1号住居跡											
住居跡名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物			時期	
1号住居跡	472	504	80	N-24° -E	73・K10・E25・1	2号住	須恵器環・埴輪、羽釜、砥石等			9c第4期	
カマド	172	58	88	N-23° -E							
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
貯蔵穴	178	72	43	1号ビット	54	50	17	2号ビット	32	30	34
3号ビット	26	22	21	4号ビット	38	32	28	5号ビット	52	32	57
1号床下土坑	51	50	37	2号床下土坑	172	154	33	3号床下土坑	130	95	15
4号床下土坑	202	90	12	5号床下土坑	-	65	2395				

2号住居跡											
住居跡名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物			時期	
2号住居跡	466	460	86	N-25° E	73P・Q24・25	1号住	須恵器環・埴輪、甕、土師器甕			9c第4期	
1号カマド	92	82	33	N-119° -E			刀子、				
2号カマド	86	64	19	N-112° -E							
3号カマド	144	112	94	N-35° -E							
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
貯蔵穴	148	104	60	1号ビット	28	26	56	2号ビット	36	30	58
3号ビット	30	28	11	4号ビット	50	34	45	5号ビット	54	40	10
6号ビット	108	-	22	7号ビット	86	62	19	1号床下土坑	-	70	10
2号床下土坑	88	84	22	3号床下土坑	110	64	11				

3号住居跡											
住居跡名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物			時期	
3号住居跡	512	568	82	N-116° -E	K・L22・23		須恵器環・埴輪、土師器甕、			9c第4期	
カマド	164	116	65	N-116° -E			土師器甕、小型鎌、字引金具				
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
貯蔵穴	176	130	46	1号ビット	46	32	127	2号ビット	30	22	58
3号ビット	58	36	102	4号ビット	22	22	62	5号ビット	32	22	104
6号ビット	43	33	124	7号ビット	53	49	71	8号ビット	29	28	39
9号ビット	24	24	25	10号ビット	44	40	109	11号ビット	48	28	43
1号床下土坑	63	60	22	2号床下土坑	72	70	16	3号床下土坑	64	57	16
4号床下土坑	70	70	22	5号床下土坑	46	44	32	6号床下土坑	-	-	-
7号床下土坑	60	57	25	8号床下土坑	60	60	28	9号床下土坑	149	66	17
10号床下土坑	68	66	10	11号床下土坑	56	46	7	12号床下土坑	24	22	9
13号床下土坑	-	25	18	14号床下土坑	-	108	43	15号床下土坑	40	11	16

4号住居跡											
住居跡名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物			時期	
4号住居跡	492	568	49	N-96° -E	73J・K19・20		須恵器環・埴輪、土師器甕			9c第4期	
カマド	168	72	30	N-111° -E			砥石等				
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
貯蔵穴	64	58	19	1号ビット	38	34	95	2号ビット	41	28	50
3号ビット	48	36	117	4号ビット	39	31	84	5号ビット	40	40	58
6号ビット	30	30	52	7号ビット	40	28	37	8号ビット	30	-	28
9号ビット	38	36	12	10号ビット	20	16	38	11号ビット	24	-	20
12号ビット	36	21	27	1号床下土坑	84	-	59	2号床下土坑	131	84	37
3号床下土坑	56	52	21	4号床下土坑	127	101	54	5号床下土坑	144	144	50
6号床下土坑	122	113	61	7号床下土坑	-	74	34	8号床下土坑	-	82	44
9号床下土坑	98	-	41	10号床下土坑	108	-	39	11号床下土坑	46	34	30
12号床下土坑	38	28	31	13号床下土坑	50	26	21				

1号電屋											
住居跡名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物			時期	
1号カマド屋	190	180	11	N-124° -E	73N24・25	40・46号等	土師器甕類			9c第4期	
カマド	84	70	14	N-135° -E							
施設名	長軸	短軸	深さ								
1号ビット	66	54	22								

カマド・焼土				
遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
2号カマド	107	76	-	73N25
1号焼土	51	37	14	73O25
3号焼土	53	42	18	73N25
4号焼土	82	59	24	73R・N25

集石				
遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
1号集石	110	108	23	73N24
2号集石	86	78	32	73N24
3号集石	80	75	45	73R・L-21・22
4号集石	89	70	42	73P23

1号建物跡											
遺構名	長軸	短軸	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物			時期		
1号建物跡	932	547	N-112° -E	73・K3T・X24・3					近世		
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
1号ビット	72	58	46	2号ビット	50	42	37	3号ビット	74	70	44

1号建物跡

施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
4号ビット	72	61	47	5号ビット	78	65	56	6号ビット	48	35	28
7号ビット	56	41	24	8号ビット	48	46	22	9号ビット	60	56	28
10号ビット	56	56	15	11号ビット	70	58	20	12号ビット	52	40	48
13号ビット	72	56	44	14号ビット	52	48	23	15号ビット	50	44	25
16号ビット	62	58	26	17号ビット	74	58	26	18号ビット	-	-	-
19号ビット	40	36	20	20号ビット	32	30	15	21号ビット	40	35	16
22号ビット	41	40	24	23号ビット	48	-	33	24号ビット	36	36	26
25号ビット	48	40	17	26号ビット	44	37	41	27号ビット	30	30	44
28号ビット	28	24	27	29号ビット	36	-	43	30号ビット	26	24	22
31号ビット	35	30	50	32号ビット	28	24	29	33号ビット	28	24	59
34号ビット	32	32	20	35号ビット	60	48	65	36号ビット	40	38	61
37号ビット	46	44	55	38号ビット	32	32	54	39号ビット	48	48	108
40号ビット	45	40	58	41号ビット	38	38	30	42号ビット	34	32	75
43号ビット	42	40	73	44号ビット	40	34	30				
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
18号土坑	116	88	26	19号土坑	112	86	33	26号土坑	-	50	27
27号土坑	-	-	13	28号土坑	-	75	24				

土坑

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
1号土坑	128	113	44	K384
2号土坑	184	106	91	K38-V3
3号土坑	150	78	68	K373
4号土坑	156	85	94	T3725+24
5号土坑	32	27	45	K381
6号土坑	146	54	62	K35-T 1
7号土坑	133	48	39	T3025
8号土坑	143	46	60	T3724+25
9号土坑	186	150	147	K31-W 3・2
10号土坑	126	124	24	K371
11号土坑	156	60	54	T3024
12号土坑	94	85	33	K372
13号土坑	174	122	154	T3721+22
14号土坑	150	68	81	T3823+22
15号土坑	180	80	57	T3824
16号土坑	166	114	62	K3324
17号土坑	196	70	70	K3323
20号土坑	82	84	11	T31-W24
21号土坑	118	108	21	T31-W23+24
22号土坑	164	92	138	T3021
23号土坑	92	64	26	K331
24号土坑	70	67	20	T3825
25号土坑	156	90	78	T3022
29号土坑	-	-	-	T31-W25
30号土坑	116	63	25	K381
31号土坑	-	142	46	K384
32号土坑	298	142	49	K332
33号土坑	152	127	69	K384

ビット

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
1号ビット	-	43	55	K303
2号ビット	-	30	74	K303
3号ビット	44	37	31	K372
5号ビット	33	28	45	K383・4
6号ビット	27	24	18	K373
7号ビット	24	22	21	K373
8号ビット	32	31	30	K373
9号ビット	28	24	14	K304
10号ビット	36	30	29	K303
11号ビット	30	26	22	K303
12号ビット	36	32	20	K383
13号ビット	27	26	15	K382
14号ビット	26	26	35	K372
15号ビット	24	22	20	K311・2
16号ビット	24	24	23	K301
18号ビット	29	28	13	K304
21号ビット	26	24	25	K302・3

34号土坑	(168)	(94)	116	K301・2
35号土坑	150	134	45	T3825
36号土坑	138	112	46	K31・3・4
37号土坑	104	97	18	T3122
38号土坑	90	87	20	T3821+22
39号土坑	94	84	24	T3020
40号土坑	152	124	50	T3825
41号土坑	181	148	64	T38・020
42号土坑	212	142	219	T38・021
43号土坑	86	70	25	T3823
44号土坑	43	-	51	1号住南壁
45号土坑	-	118	18	T3825
46号土坑	168	130	37	T3825
47号土坑	88	52	20	T3822
48号土坑	124	114	69	T3823
49号土坑	172	118	20	T3117
50号土坑	96	80	73	T3823
51号土坑	160	94	72	T3819
52号土坑	80	28	20	T3019
53号土坑	130	40	59	T3820
54号土坑	90	62	29	T3825
55号土坑	72	64	29	T3825
56号土坑	92	68	57	T3024
57号土坑	60	42	16	T3824
58号土坑	174	86	33	T3819
59号土坑	146	136	14	T3821
60号土坑	80	74	23	T3122
61号土坑	-	60	10	T3824
62号土坑	86	56	13	T3122

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
22号ビット	24	20	23	K37 1
28号ビット	30	26	25	T3823
36号ビット	42	24	31	T31 1
40号ビット	-	32	29	T3825
43号ビット	66	51	43	T3825
46号ビット	36	36	24	T3823
52号ビット	-	44	46	T3825
53号ビット	20	18	68	T3824
57号ビット	22	20	36	K372
63号ビット	17	16	9	K373
66号ビット	33	26	27	K373
68号ビット	23	20	18	K372
69号ビット	58	40	29	K383
70号ビット	-	-	-	T3825
74号ビット	34	30	53	K372
75号ビット	-	40	86	T311
76号ビット	40	30	16	K31-X1

ビット

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
77号ビット	34	—	41	8301
78号ビット	58	—	82	8301
79号ビット	50	46	47	8301
80号ビット	36	32	22	8302
81号ビット	28	25	34	8303
82号ビット	28	19	26	8304
83号ビット	46	44	29	8304
84号ビット	61	52	21	8304
85号ビット	—	38	22	8301
87号ビット	26	26	12	8301
88号ビット	—	34	37	8302
89号ビット	40	36	44	8302
90号ビット	32	30	21	730-P25
91号ビット	33	33	29	73025
92号ビット	36	30	36	73025
93号ビット	35	32	26	73025
94号ビット	38	30	17	73024
95号ビット	32	32	28	73025
96号ビット	34	25	30	73023
97号ビット	34	32	39	73023
98号ビット	48	44	31	73L24
99号ビット	51	50	36	73K・L23・24
100号ビット	52	44	54	73K23
101号ビット	30	26	32	73L21
102号ビット	30	30	24	73K21
103号ビット	30	28	41	73K22
104号ビット	27	25	41	73K22
105号ビット	37	34	32	73K20
106号ビット	63	46	20	73K20
107号ビット	58	38	31	73L18・19
108号ビット	46	38	21	73M19
109号ビット	40	32	22	73M18
110号ビット	60	56	22	73M18
111号ビット	38	26	10	73M18
112号ビット	58	38	33	73M18
113号ビット	32	30	42	73K21
114号ビット	30	30	21	73K22
115号ビット	58	34	20	73022
116号ビット	28	26	29	73023
117号ビット	54	46	33	73L21
118号ビット	22	22	39	73K21
119号ビット	28	24	44	83P1
120号ビット	30	26	50	73023
121号ビット	26	18	27	73023
122号ビット	26	24	24	73023
123号ビット	32	26	25	73P22
124号ビット	28	26	14	73022
127号ビット	30	22	25	73K23
128号ビット	34	26	32	73K22
129号ビット	20	18	13	73022
130号ビット	19	18	11	73022
131号ビット	18	18	19	73K21
132号ビット	30	21	19	73K22
133号ビット	34	34	37	73021
134号ビット	21	20	11	73K21・22
135号ビット	22	20	24	73K21
136号ビット	欠番			
137号ビット	32	28	11	73K20
138号ビット	24	16	16	73L20
139号ビット	50	48	14	73L20
140号ビット	30	26	10	73L20
141号ビット	22	18	13	73L20
142号ビット	36	30	16	73L21
143号ビット	38	30	22	73L21
144号ビット	53	46	16	73K21
145号ビット	48	30	28	73K21・22
146号ビット	24	22	48	73L23

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
147号ビット	26	26	60	73K24
148号ビット	26	16	15	73K24
149号ビット	24	18	44	73K23
150号ビット	30	22	19	73K24
151号ビット	64	54	48	73K23
152号ビット	26	24	8	73K23
153号ビット	26	22	18	73L23
154号ビット	24	24	42	73L23
155号ビット	36	34	40	73L20
156号ビット	30	22	21	73L19
157号ビット	56	40	21	73L19
158号ビット	22	20	11	73K19
159号ビット	32	28	17	73L20
160号ビット	52	30	41	8301
161号ビット	30	29	23	83P1
162号ビット	34	34	31	83P1
163号ビット	24	24	15	73024・25
164号ビット	36	34	26	73024
165号ビット	22	22	41	73024
166号ビット	—	54	23	73K25
167号ビット	30	28	8	73K25
168号ビット	32	30	35	73K25
169号ビット	30	24	21	73K25
170号ビット	29	24	46	73K24
171号ビット	32	28	23	73P23
172号ビット	26	22	24	73P23
173号ビット	25	23	15	73023
174号ビット	33	29	40	73023
175号ビット	24	22	40	73K20
176号ビット	26	26	28	73K20
177号ビット	25	24	16	73K20
178号ビット	38	35	56	73P25
179号ビット	32	30	46	73L21
180号ビット	42	35	16	73K24
181号ビット	30	24	20	73P23
182号ビット	38	32	19	73P23
183号ビット	36	32	14	73P22
184号ビット	30	25	11	73P21
185号ビット	48	40	25	73020
186号ビット	30	22	12	73020
187号ビット	34	28	20	73022
188号ビット	42	32	16	73K23
189号ビット	42	38	34	73L21
190号ビット	—	34	8	73L21
191号ビット	36	30	34	73K21
192号ビット	32	26	24	73L20
193号ビット	36	24	14	73M19
194号ビット	28	—	15	73M19
195号ビット	106	44	13	73M18・19
196号ビット	50	36	12	73L18・19
197号ビット	44	34	26	73L18
198号ビット	34	32	31	73M18・19
199号ビット	32	12	24	73L19
200号ビット	42	40	20	73K20
201号ビット	24	20	15	73M18
202号ビット	36	26	7	73020
203号ビット	28	24	7	73020
204号ビット	24	22	21	73022
205号ビット	24	20	30	73L19
206号ビット	40	32	14	73P20
207号ビット	32	20	12	70020
208号ビット	—	—	34	73K20
209号ビット	24	20	16	73K24
210号ビット	22	18	22	73K24
211号ビット	22	18	13	73K24
212号ビット	26	22	23	73K22
213号ビット	20	18	14	73K24

ビット

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
214号ビット	28	24	11	73K23
215号ビット	22	18	19	73K25
216号ビット	20	10.6	29	73K25
217号ビット	24	22	26	73K25
218号ビット	30	28	19	73O25
219号ビット	36	28	13	73K21
220号ビット	23	20	17	73O23
221号ビット	40	34	22	73K23
222号ビット	62	52	15	73K22
223号ビット	38	34	19	73K22
224号ビット	44	30	19	73K21
225号ビット	20	18	26	73K21
226号ビット	—	16	21	73L21
227号ビット	36	24	10	73L21
228号ビット	34	26	28	73K21
229号ビット	64	44	25	73K21
230号ビット	24	18	13	73K20
231号ビット	26	18	8	73K20
232号ビット	32	22	12	73K20
233号ビット	36	26	20	73K20
234号ビット	28	22	20	73K20
235号ビット	26	24	20	73K20
236号ビット	32	28	22	73K20
237号ビット	24	20	16	73K20
238号ビット	32	26	11	73O19
239号ビット	34	26	27	73K23
240号ビット	20	18	12	73K24
241号ビット	36	32	15	73K23
242号ビット	18	14	23	73K23
243号ビット	30	24	38	73K23
244号ビット	28	26	14	73O24
245号ビット	22	20	31	73O24
246号ビット	34	28	18	73P24
247号ビット	24	20	16	73P22
248号ビット	38	26	19	73O22
249号ビット	24	22	19	73O22
250号ビット	24	22	13	73O20

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
251号ビット	30	30	16	73O20
252号ビット	46	30	27	73K23
253号ビット	22	20	14	73K24
254号ビット	26	24	21	73K22
255号ビット	36	36	22	73J22
256号ビット	52	20	10	73J23
257号ビット	44	30	16	73K22
258号ビット	32	28	6	73L24
259号ビット	48	24	13	73K22
260号ビット	27	24	10	73J22
261号ビット	58	32	16	73J22
262号ビット	26	24	12	73K22
263号ビット	24	22	13	73K22
264号ビット	24	24	20	73J22

表3 榎木1遺跡 出土遺物観察表
1号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②着色③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	挿図番号 図取番号
1	須恵器 環 口縁～底部破片	口: (12.6) 底: (7.0) 高: 3.6	① 微黒 ② 灰色 ③ 堅緻	埋土	口縁～体部直線的に開く。右回転轆轤整形、底部回転系切り後無調整。薄手の器厚を呈す	13図 PL.16
2	須恵器 環 1/4残存	口: (13.2) 底: (5.8) 高: 4.5	① 微黒 ② にぶい褐色 ③ やや軟質	埋土	口縁部外反、体部下半に内湾。右回転轆轤整形、底部回転系切り後無調整	13図 PL.16
3a・b	須恵器 環 口縁・底部片2点	口: (15.6) 底: (7.2) 高:	① 細・石英・輝石 ② 明赤褐色 ③ 普通・酸化焙	床直上 +4.5	器厚薄手で直線的な体部。底径もやや広い。回転轆轤整形。回転方向不詳。底部回転系切り後微で調整を加える。内面研磨を施す	13図 PL.16
4	須恵器 環 口縁部破片	口: (15.6) 底: 高:	① 細・石英・輝石 ② にぶい褐色 ③ 普通・酸化焙	埋土	器厚薄手で直線的な体部。右回転轆轤整形。内面放射状研磨を施す。外面に黒書。判読不能。同一個体か	13図 PL.16
5	須恵器 環 底部1/2残存	口: (12.8) 底: (5.2) 高:	① 微黒 ② 灰白色 ③ やや軟質	床直上 +8.0	直線的に開く体部。底部は僅かに上げ残。右回転轆轤整形、底部回転系切り後無調整	13図 PL.16
6	須恵器 環・埴輪 口縁部破片	口: (12.8) 底: 高:	① 微黒・輝石 ② にぶい褐色 ③ やや軟質	埋土	口縁部外反、体部下半に内湾。右回転轆轤整形	13図 PL.16
7	須恵器 環・埴輪 口縁部1/5残存	口: (12.8) 底: 高:	① 細・石英 ② 灰色 ③ 普通	埋土	口唇部僅かに肥厚し外反。右回転轆轤整形。外面に自然輪付着	13図 PL.16
8	須恵器 環・埴輪 口縁部破片	口: (14.0) 底: 高:	① 微黒 ② 灰白色 ③ 普通	埋土	口縁部外反、轆轤整形。回転方向不詳。体部内面に黒書。判読不能	13図 PL.16

1号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	検出番号 図版番号
9	須恵器 坏・埴輪 口縁部破片	口: (12.0) 底: 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ 普通	埋土	輪軸整形、回転方向不詳。体部内面に墨書。判読不能	13図 PL.16
10	須恵器 埴 口縁～体部1/3 残存	口: (16.2) 底: 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ やや軟質	埋土	器厚薄手。体部下半に内湾。右回転輪軸整形。内外面輪軸目やや強い	13図 PL.16
11	須恵器 埴 口縁部破片	口: (14.4) 底: 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ 良好	埋土	口縁部外反。右回転輪軸整形。口縁部外面に自然輪付着	13図 PL.16
12	須恵器 埴 底部破片	口: (7.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 灰黄褐色 ③ やや軟質	埋土	内湾気味に開く体部。高台は内傾する。右回転輪軸整形。底部回転系切り後高台貼付	13図 PL.16
13	須恵器 埴 底部1/4残存	口: (9.0) 底: 高:	① 微細・石英 ② 灰白色 ③ やや軟質	埋土	内湾気味に開く体部。高台は短く内傾する。右回転輪軸整形。底部回転系切り後高台貼付。外面体部に線刻。意匠は不明	13図 PL.16
14	須恵器 羽釜 口縁部破片	口: (17.8) 底: 高:	① 粗・石英 ② にぶい褐色 ③ 普通・酸化塩	埋土	輪軸整形か。回転方向不詳。器厚薄手。口縁～肩部横撫で、体部は縦位へラ削り。内面は横位撫で	14図 PL.16
15	須恵器 羽釜 口縁部破片	口: (17.4) 底: 高:	① 粗 ② 黒褐色 ③ 普通・酸化塩	埋上下位 +23.0	輪軸整形か。回転方向不詳。口縁～肩部横撫で、体部は縦位へラ削り。内面は横位撫で。外面口縁部に厚付着	14図 PL.16
16	須恵器 羽釜 口縁部破片	口: (22.0) 底: 高:	① 粗・輝石 ② 灰色 ③ 良好・酸化塩	床直 +0.5	輪軸整形か。回転方向不詳。口縁部内湾気味。外面口縁～体部横撫で、内面も横撫で。	14図 PL.16
17	須恵器 羽釜 口縁部破片	口: (17.0) 底: 高:	① 粗・石英・小礫 ② 灰黄褐色 ③ 良好・酸化塩	埋土	輪軸整形か。回転方向不詳。口縁～肩部横撫で、体部は縦位へラ削り。内面は横位撫で	14図 PL.16
18	須恵器 羽釜 体部下半～底部 残存	口: 底: 8.4 高:	① 粗・石英 ② にぶい黄褐色 ③ 良好・酸化塩	床直上 +7.7	輪軸整形か。外面縦位へラ削り、内面横位へラ撫で	14図 PL.16
19	須恵器 小型甕 口縁部破片	口: (12.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ やや軟質	床下	器厚薄手。口縁～頸部強く外反。体部上半の最大径か。輪軸整形か、回転方向不詳	14図 PL.16
20	上師器 甕 口縁～体部上半 1/4残存	口: 底: 高:	① 粗・石英・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	カマド	口縁部は短く頸部外反。口縁部横撫が肩部にまで及び、斜位へラ撫でが加わる。体部は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫で。器厚やや厚手。同一個体か	14図 PL.16
21	上師器 甕 口縁～体部上半 1/4残存	口: 20.8 底: 高:	① 粗・石英・輝石 ② 鈍い褐色 ③ 良好	カマド	口縁部は短く頸部外反。口縁部横撫が肩部にまで及び、斜位へラ撫でも加わる。体部は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫でを密に施す。器厚やや厚手。外面口縁部に厚付着	14図 PL.16
22	磁石 上下端部欠損	法 量 (cm・g) 長:4.1 幅:2.1 厚:1.9 重:20.4			砥石。手持り砥。四面を使用し、特に表面の使用が顕著	14図 PL.16
23	鉄蒔か 先端部欠損	長:5.0 幅:0.3 厚:0.3 重:2.1			小型品。基部は細身で断面は方形を呈す	14図 PL.16

2号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	検出番号 図版番号
1	須恵器 坏 1/3残存	口: (12.6) 底: 6.4 高: 3.6	① 粗・小礫・石英 ② 灰白色 ③ 良好	床直	体部上半が内湾。右回転輪軸整形。底部回転系切り後無調整。底部内外面に墨書。外面は「佐」か	17図 PL.16
2	須恵器 坏 口縁～体部欠損	口: 13.0 底: 6.3 高: 4.0	① 粗 ② 灰白色 ③ 普通	貯蔵穴	口縁部僅かに外反。体部下半に内湾を持つ。底部は僅かに突出。やや上げ底を呈す。右回転輪軸整形。底部回転系切り後無調整。内外底面に墨書。「佐」か	17図 PL.16
3	須恵器 坏 完形	口: 13.4 底: 6.1 高: 3.9	① 粗・輝石 ② 灰白色 ③ やや軟質	床直 +1.5	口縁部に僅かな歪み。右回転輪軸整形。底部回転系切り後無調整。内底面に墨書	17図 PL.16
4	須恵器 坏 完形	口: 13.5 底: 5.8 高: 4.4	① 微細 ② 灰白色 ③ 普通	床直 +0.5	体部下半に内湾を持たせる均整ある器形。右回転輪軸整形。底部回転系切り後無調整。内底面墨痕か	17図 PL.16
5	須恵器 坏 1/2残存	口: 14.0 底: 6.6 高: 3.5	① 粗・石英 ② 灰色 ③ 堅緻	埋上下位 +14.8	口縁部僅かに外反。右回転輪軸整形。底部回転系切り後無調整。口縁部外面に自然輪付着	17図 PL.16

2号住居

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	採回番号 図版番号
6	須恵器 環 底部のみ残存	口: 7.0 底: 6.0 高: 7.0	① 耀: 輝石 ② 灰色 ③ 普通	床直 +0.8	底部は僅かに上げ底を呈す。右回転轆轤整形。底部回転系切り後無調整	178回 PL.16
7	須恵器 口縁~体部 1/2残存	口: (16.0) 底: 7.2 高: 7.2	① 微細: 輝石 ② 灰白色 ③ やや軟質	床直・3号 カマド	口縁部僅かに外反。体部下半に内湾を持つ。右回転轆轤整形	178回 PL.16
8	須恵器 埴 1/6残存	口: (16.1) 底: (7.7) 高: 5.7	① 耀: 輝石 ② 灰色 ③ やや軟質	床直	体部下半に僅かな内湾。高台は内傾気味に直立する。右回転轆轤整形。底部回転系切り後高台貼付	178回 PL.17
9	須恵器 埴 ほぼ定形	口: 15.1 底: 6.6 高: 5.6	① 耀: 石英 ② 灰白色 ③ 普通	埋土	口縁~体部は直線的に開く。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転系切り後高台貼付。上半の轆轤口強い	178回 PL.17
10	須恵器 埴 1/2残存	口: (16.0) 底: 7.2 高: 5.7	① 耀: 石英 ② 灰白色 ③ やや軟質	床直・ ビット2	口縁部外反。体部下半に内湾を持つ。高台は短く内傾する。右回転轆轤整形。底部回転系切り後高台貼付	178回 PL.17
11	須恵器 埴 底部1/3残存	口: 11.4 底: (11.4) 高: 7.2	① 耀 ② 灰白色 ③ 堅緻	床直・ 貯蔵穴	体部下半は内湾気味に開く。高台は長く内傾する。右回転轆轤整形。底部回転系切り後高台貼付。大型品、あるいは瓶か	178回 PL.17
12	須恵器 壺・甕 体部下半~底部	口: 13.4 底: 13.4 高: 7.0	① 粗: 小礫 ② 灰色 ③ 良好	床直	底径広く、大型器種か。体部最大径を中心に設ける。回転轆轤整形後、体部下半及び底面に横位・斜位へラ削りを加える。自然軸付着する	188回 PL.17
13	土師器 甕 口縁部破片	口: (18.6) 底: 18.8 高: 18.8	① 耀: 輝石多 ② にふい赤褐色 ③ 良好	ビット1	口脣部凹線を持ち、頸部は内傾気味に直立する。頸部に強い横位撫で、体部は横位へラ削り	188回 PL.17
14	土師器 甕 口縁~肩部 1/3残存	口: (18.8) 底: 20.0 高: 20.0	① 耀: 輝石 ② 褐色 ③ 良好	3号カマ ド	頸部直立気味。2条の横位撫でを加え、肩部は横位斜位へラ削り、内面は横位へラ撫で	188回 PL.17
15	土師器 甕 口縁~肩部 1/4残存	口: (20.0) 底: 20.0 高: 20.0	① 耀: 輝石 ② 灰褐色 ③ 良好	床直上+ ビット2 +10.7	口縁部強く外傾、頸部は内湾気味に直立する。横位撫で2条を加え、体部は横位・斜位へラ削り。内面は横位へラ撫で	188回 PL.17
16	土師器 甕 口縁部破片	口: (20.0) 底: 20.0 高: 20.0	① 微細: 石英 ② 明赤褐色 ③ 良好	埋土	頸部は外反気味に直立。口縁部横位撫で、体部は横位へラ削り、内面は横位へラ撫でを備す	188回 PL.17
17	土師器 甕 体部破片	口: 13.0 底: 13.0 高: 13.0	① 微細: 輝石 ② にふい赤褐色 ③ 良好	埋土	体部上半、下半の縦位へラ削り後上半に横位へラ削りを加える。内面は横位へラ撫で	188回 PL.17
18	土師器 甕 台付裏 体部下 半のみ残存	口: 13.0 底: 13.0 高: 13.0	① 耀: 石英 ② 黒褐色 ③ 良好	貯蔵穴・ 埋土上下	脚部欠損。外面体部下半は縦位へラ削り、内面は横位へラ撫で。外面に塚付着、器面剥落多い	188回 PL.17
19	刀子 完形	法 長:12.1 幅:1.0 厚:0.2 重:12.0	量 (cm・g)		薄く羅身の作り。小型品。対部は紙ぎ減りか、緩やかな湾曲を呈す	188回 PL.17
20	鉄滓	長:4.7 幅:4.5 厚:4.6 重:149.7		埋土中位	破片・塊状浮	188回
21	鉄滓	長:8.2 幅:5.9 厚:4.3 重:203.2		埋土下位	破片・塊状浮	188回
22	鉄滓	長:8.6 幅:7.9 厚:5.6 重:355.6		埋土下位	破片・塊状浮	188回
23	鉄滓	長:11.3 幅:7.9 厚:4.3 重:260.4		埋土下位	破片・塊状浮	188回
24	鉄滓	長:8.2 幅:7.0 厚:3.5 重:239.4		埋土下位	破片・塊状浮	188回

3号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	採回番号 図版番号
1	須恵器 環 4/5残存	口: 13.2 底: 5.2 高: 3.8	① 耀: 輝石 ② 暗灰色 ③ 良好	床直上 +8	口縁部外反。体部下半を内湾。底面僅かに上げ底気味。右回転轆轤整形。底部系切り後無調整	228回 PL.17
2	須恵器 環 1/2残存	口: 13.0 底: 7.0 高: 3.2	① 耀: 石英・輝石 ② 灰色 ③ 良好	貯蔵穴	やや身浅の体部。口縁部外反。体部下半の轆轤口強い。僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部系切り後無調整	228回 PL.17
3	須恵器 環 1/3残存	口: (13.0) 底: (6.0) 高: 3.9	① 耀: 輝石 ② 灰色 ③ 良好	貯蔵穴	口縁部外反。体部下半を内湾。右回転轆轤整形。底部系切り後無調整	228回 PL.17
4	須恵器 環 1/5残存	口: (13.2) 底: (4.6) 高: 3.9	① 微細: 輝石 ② 暗灰色 ③ やや軟質	埋土	口縁部外反。右回転轆轤整形。底部系切り後無調整。底部器厚やや厚手	228回 PL.17

3号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②着色③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	採掘番号 図版番号
5	須恵器 環 克形	口: 13.4 底: 7.0 高: 3.2	① 黒 ② 灰色 ③ 普通	貯蔵穴	口縁部外反, 右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後無調整。内底面に弱い磨痕。体部中位と底面に墨書。判読不能	23図 PL.17
6	須恵器 環 1/3残存	口: (16.2) 底: (7.8) 高: 4.5	① 粗・小礫 ② 灰白色 ③ 普通	貯蔵穴	口縁部僅かに外反。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後無調整。体部外面と底面に墨書。判読不能	22図 PL.17
7	須恵器 環 口縁1/4残存	口: (16.4) 底: 高:	① 粗・石英 ② 灰白色 ③ 良好	貯蔵穴	口唇部僅かに肥厚し, 口縁部外反する。轆轤整形, 右回転か。	23図 PL.17
8	須恵器 環 底部のみ残存	口: 底: (5.6) 高:	① 粗・石英 ② 灰白色 ③ 良好	貯蔵穴	内湾気味に開く。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後無調整。内外面に煤が付着するが、破断面にまで及ぶ	23図 PL.17
9	須恵器 環 底部1/2残存	口: 底: 7.6 高:	① 粗・石英 ② にぶい褐色 ③ 良好	埋土	右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後無調整。外面に撫で工具条線顕著。あるいは費底部か	23図 PL.17
10	須恵器 環 底部のみ残存	口: 底: 7.2 高:	① 粗・石英 ② にぶい褐色 ③ 良好	床直上 +10	右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後無調整。外面に煤付着	23図 PL.17
11	須恵器 埴 克形	口: 15.3 底: 7.2 高: 6.2	① 粗・石英 ② 灰白色 ③ 軟質	貯蔵穴	口縁部に歪み。体部下半に内湾を持つ。高台は短く直立気味。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後高台貼付	23図 PL.17
12	須恵器 埴 底部のみ残存	口: 底: 高:	① 粗 ② 灰白色 ③ やや軟質	埋上下位 +19	高台剥落後普通。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後高台貼付。やや厚手の器厚	23図 PL.17
13	須恵器 埴 底部のみ残存	口: 底: 6.3 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ やや軟質	埋土 +35	高台は短く直立気味。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後高台貼付	23図 PL.17
14	須恵器 埴 底部1/2残存	口: 底: 8.0 高:	① 粗・輝石 ② 黒褐色 ③ 普通	床直 +6	高台は短く外反気味。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後高台貼付。やや大型の埴	23図 PL.17
15	須恵器 埴 底部破片	口: (6.3) 底: 高:	① 粗・石英 ② 褐色 ③ 普通	貯蔵穴	高台は短く外反気味。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後高台貼付。	23図 PL.17
16	須恵器 埴 底部1/2残存	口: 底: 6.0 高:	① 粗・石英 ② 灰白色 ③ 普通	埋土	高台欠損部多い。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後高台貼付。下半の轆轤目強い。体部器厚薄手	23図 PL.17
17	須恵器 埴 底部1/2残存	口: 底: 8.8 高:	① 粗・石英 ② 灰白色 ③ 普通	埋土	内湾気味の high。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後高台貼付。やや大型の埴	23図 PL.17
18	須恵器 小型埴 2/3残存	口: 11.2 底: 7.0 高: 17.5	① 粗・石英 ② 灰色 ③ 良好	埋土	口縁部は短く外傾。体部上半に最大径を持つ。右回転轆轤整形, 底部回転糸切り後無調整。内外面褐色釉付着が著しい	23図 PL.17
19	須恵器 造 口縁~体部 1/3残存	口: (10.2) 底: 高:	① 粗 ② 灰オリーブ色 ③ やや軟質	埋上下位・ カマド +13	口縁部は短く直立する。肩部の張りは弱く、体部上半に最大径を持つ。轆轤整形、回転方向不詳。内面は横位撫で調整を加える	23図 PL.17
20	須恵器 長頸瓶 頸部1/3残存	口: 底: 高:	① 粗・石英 ② 灰色 ③ 堅緻	埋土	直立する頸部、肩部は強く張る。轆轤整形。回転方向は不詳	23図 PL.17
21	須恵器 造 体部~底部 破片	口: 底: 高:	① 微細・石英 ② 灰色 ③ 良好	カマド・ 貯蔵穴	体部上半に最大径か。轆轤整形。回転方向不詳。内面は横位ヘラ撫でが加わる。底部回転糸切り後無調整	23図 PL.18
22	須恵器 費 体部下半破片	口: 底: 高:	① 粗 ② 灰白色 ③ 良好	貯蔵穴・床 下	内湾気味に開く。轆轤整形, 右回転か。外面は条線状の撫で工具痕が間隔を挟つ。内面轆轤目強い	23図 PL.18
23	須恵器 費 体部破片	口: 底: 高:	① 微細・石英 ② にぶい赤褐色 ③ 堅緻	埋土	薄手の器厚を呈す。外面は横位平行叩き目後横位四級1条を指す。内面目当てを横撫でが消す	23図 PL.18
24	須恵器 費 底部破片	口: 底: (7.8) 高:	① 粗 ② 灰色 ③ 良好	埋土	内湾気味に開く体部下。回転轆轤整形か。外面横位刮り調整後横位撫で、内面撫で。底面は刮り調整	23図 PL.18
25	須恵器 費 体部下半~底 部破片	口: 底: 高:	① 粗・片岩・石英 ② 灰黄色 ③ やや軟質	カマド	大型品か。体部中位に内湾部を持つ。外面横位撫で、内面横位・斜位ヘラ撫で。	23図 PL.18
26	須恵器 小型埴 口縁1/4残存	口: 底: 高:	① 粗・輝石・石英 ② にぶい褐色 ③ 良好	埋土	轆轤費。口縁部は短く外反し、肩部に最大径を持つか。外面轆轤条線、内面横位撫で	24図 PL.18

3号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②着色③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	種別番号 図版番号
27	土師器 甕 口縁1/4残存	口: (11.3) 底: 高:	① 黄緑:輝石 ② 褐色 ③ 良好	貯蔵穴・ カマド	薄手の器厚。頸部外反気味に直立。体部地は強い横撫でで稜状となる。体部は横位・斜位へラ削り。内面は横位へラ撫で	24図 PL.18
28	土師器 甕 口縁1/4残存	口: (16.5) 底: 高:	① 黄緑:輝石 ② にぶい・褐色 ③ 良好	貯蔵穴	頸部は内傾気味。外面、口唇部に凹縁。頸部は強い撫で2条。体部は横位へラ削り。内面内面は横位へラ撫で	24図 PL.18
29	土師器 甕 口縁1/4残存	口: (17.1) 底: 高:	① 黄緑:石英 ② にぶい・褐色 ③ 良好	床下	口唇部に浅い凹縁。頸部は内湾気味に直立し強い横撫でを加える。体部は横位へラ削り。内面内面は横位へラ撫で	24図 PL.18
30	土師器 甕 口縁1/4残存	口: (19.4) 底: 高:	① 細:石英 ② にぶい・褐色 ③ やや軟質	貯蔵穴	頸部は直立気味。外面頸部は横撫で2条。撫で調整は体部上半にまで及び、凹凸ある器形を呈す。内面内面は強い横位へラ撫で、口縁部外面に保付着	24図 PL.18
31	土師器 甕 口縁1/3残存	口: (19.0) 底: 高:	① 細:石英 ② にぶい・褐色 ③ やや軟質	床直・貯蔵 穴	頸部は直立気味で2条の横撫で調整。撫では肩部にまで及びへラ撫でも加わる。体部は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫で、下半に縦撫でを加える	24図 PL.18
32	土師器 甕 口縁一部・体部中 位残存	口: 19.0 底: 高:	① 細 ② にぶい・褐色 ③ 良好	カマド	頸部は直立気味で2条の横撫で調整。撫では肩部にまで及び、体部は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫で	24図 PL.18
33	土師器 甕 口縁部破片	口: (20.0) 底: 高:	① 黄緑:輝石 ② にぶい・褐色 ③ 良好	5号床下 土坑	口唇部に浅い凹縁。頸部は直立し横撫で2条を施す。体部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫で	24図 PL.18
34	土師器 甕 口縁部破片	口: (20.6) 底: 高:	① 細:輝石 ② にぶい・褐色 ③ 良好	貯蔵穴	口唇部磨滅。頸部は直立気味で横撫で2条を施す。体部は横位へラ削り。体部内面は横位・斜位へラ撫で	24図 PL.18
35	土師器 甕 口縁1/4残存	口: (20.0) 底: 高:	① 細:輝石 ② にぶい・黄褐色 ③ 良好	埋上下位・ 貯蔵穴 +18	頸部は内傾気味。口唇部に凹縁。頸部は強い横撫で2条。体部は横位・斜位へラ削り。内面内面は強い横位へラ撫で	24図 PL.18
36	土師器 甕 口縁1/3残存	口: (21.4) 底: 高:	① 細:雲母少 ② にぶい・褐色 ③ やや軟質	床直 -2	頸部は外反気味に直立。体部上半に最大径。外面は口縁一部上半を横撫で、下半を縦位へラ削り後横撫で。内面横撫で。体部器面凹凸強い	24図 PL.18
37	土師器 甕 体部破片	口: 底: 高:	① 細:輝石 ② にぶい・褐色 ③ 良好	貯蔵穴・ 床下 +5	体部上半。外面、横位へラ削り後に下半は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫で	24図 PL.18
38	土師器 甕 体部破片	口: 底: 高:	① 細:石英 ② にぶい・褐色 ③ 良好	貯蔵穴	内湾する体部上半。外面上半は横位、下半は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫でを施す	24図 PL.18
39	須恵器 甕 体部下半~底部	口: 底: 4.5 高:	① 細:石英 ② にぶい・褐色 ③ 良好	カマド	内湾気味に開く下半。外面縦位・斜位へラ削り。内面縦撫で調整	24図 PL.18
40	土師器 甕 体部下半~底 部1/3残存	口: 底: (2.9) 高:	① 黄緑:輝石 ② 褐色 ③ やや軟質	貯蔵穴	器厚薄手で内湾気味に開く。外面は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫で。底面形状は不整形	24図 PL.18
41	鎌 定形	法 量(cm・g)		床直上	小型鎌。刃部・背骨ともに弧状に湾曲する。先端部も比較的鋭利。基部は「く」字状に屈曲する	24図 PL.18
42	字引状鉄製品か 基部のみ残存	長:2.5 幅:1.9 厚:0.2 重:3.1		床直上	薄手で楕円状の基部。頭状の突起で木質部に装着される。刃部を欠くため字引状金具としての確定は憚る	24図 PL.18
43	鉄滓	長:3.7 幅:2.8 厚:2.1 重:25.6		埋土	破片・塊状滓	24図
44	鉄滓	長:5.0 幅:4.1 厚:2.8 重:75.0		貯蔵穴	破片・塊状滓	24図
45	鉄滓	長:5.0 幅:4.5 厚:2.7 重:67.7		埋土	破片・塊状滓	24図
46	鉄滓	長:6.1 幅:4.8 厚:3.1 重:116.2		貯蔵穴	破片・塊状滓	24図
47	鉄滓	長:4.9 幅:5.7 厚:4.8 重:94.9		貯蔵穴	破片・塊状滓	24図
48	鉄滓	長:8.2 幅:6.4 厚:5.9 重:352.0		埋土	破片・塊状滓	24図
49	鉄滓	長:8.3 幅:7.0 厚:6.0 重:478.0		埋土	破片・塊状滓	25図
50	鉄滓	長:9.5 幅:6.5 厚:5.8 重:376.4		貯蔵穴	破片・塊状滓	25図
51	鉄滓	長:8.8 幅:7.0 厚:4.7 重:371.4		埋土	破片・塊状滓	25図
52	鉄滓	長:10.0 幅:9.1 厚:4.6 重:541.9		埋土	破片・塊状滓	25図
53	鉄滓	長:13.4 幅:9.4 厚:3.5 重:697.0		貯蔵穴	破片・塊状滓	25図

4号住居跡

掲載番号	器物・残存	法量	①胎土着色調子構成	出土位置	成・整形の特徴など	種目番号 図版番号
1	須恵器 環 1/3残存	口: 12.9 底: 7.2 高: 3.5	① 黒:石莖少 ② 黒褐色 ③ 良好	6号床下 土坑	口縁～体部直線的に開く。底部は僅かに上げ底。右回転軸輪整形。底部回転系切り後無調整。均整の取れた器形	28回 PL.18
2	須恵器 環 1/4残存	口: 13.6 底: 7.4 高: 3.8	① 黒:小礫 ② 褐色 ③ 良好	床下	口縁部外反。体部下下に内湾を持つ。右回転軸輪整形。底部回転系切り後無調整。薄手で均整の取れた器形	28回 PL.18
3	須恵器 環 1/4残存	口: (13.5) 底: (7.0) 高: 3.8	① 黒:石莖 ② 灰白色 ③ 普通	埋土下位 +26	口縁～体部直線的に開く。右回転軸輪整形。底部回転系切り後無調整。器厚は薄手。底部は上げ底気味	28回 PL.18
4	須恵器 環 1/4残存	口: (12.0) 底: (6.6) 高: 3.4	① 黒:輝石・石莖 ② 灰褐色 ③ 普通	床下	体部下下に僅かな内湾。右回転軸輪整形。底部回転系切り後無調整。器厚は薄手。底面に稜状の圧痕を見る	28回 PL.18
5	須恵器 環 底部1/2残存	口: 7.2 底: 7.2 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ 良好	埋土 +50	右回転軸輪整形。底部回転系切り後無調整。底部は上げ底。内底面に磨減痕	28回 PL.18
6	須恵器 環・埴類 口縁部破片	口: (14.4) 底: 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ 普通	貯蔵穴	器厚薄手。軸輪整形。回転方向不詳。体部外面に墨書。判読不能	29回 PL.18
7	須恵器 環 底部破片	口: 底: (8.0) 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ 良好	5号床下 土坑	右回転軸輪整形。底部回転系切り後無調整。内底面に墨書。判読不能	29回 PL.18
8	須恵器 埴 口縁1/2欠損	口: 14.5 底: 7.6 高: 6.3	① 黒:石莖 ② 灰色 ③ 堅緻	埋土	器厚薄手。口縁部に歪み有り。右回転軸輪整形。底部回転系切り後高台貼付。口縁部内外面に自然軸付着	29回 PL.18
9	須恵器 埴 1/2残存	口: (14.2) 底: 8.6 高: 5.7	① 黒:小礫 ② 灰白色 ③ やや軟質	埋土下位 +8号床下 土坑 +24	口縁部は一部が残存。口縁～体部内湾気味に一体化し高台は外反する。右回転軸輪整形。底部回転系切り後高台貼付	29回 PL.19
10	須恵器 埴 1/3残存	口: 15.8 底: 高:	① 黒:小礫 ② 灰白色 ③ 良好	床下土坑	口縁部は僅かに外反し。体部内湾も緩やか。右回転軸輪整形。外面軸輪目やや強い	29回 PL.19
11	須恵器 埴 体部下下～底 部1/2欠損	口: 9.4 底: 高:	① 黒:石莖・小礫 ② 黄灰色 ③ 良好	埋土	体部は内湾気味に開き、高台は強く内傾する。右回転軸輪整形。底部回転系切り後高台貼付。内底面に白色付着物。外底面に環状の線刻を見る	29回 PL.19
12	土師器 甕 口縁部破片	口: (17.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	埋土	頸部は内傾気味に直立。口縁～頸部横位で、体部は横位へラ削り。内面横位へラ撫でを施す	29回 PL.19
13	土師器 甕 口縁部破片	口: (18.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 褐色 ③ 良好	6号床下土 坑	口縁部は強く開き、頸部は直立する。口縁～頸部横位で、肩部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫で	29回 PL.19
14	土師器 甕 口縁～肩部 1/4残存	口: (17.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	6号床下土 坑	口唇部に浅い凹線を設け、口縁部は短く外傾する。頸部は直立する。体部は横位へラ削り。内面横位撫で	29回 PL.19
15	土師器 甕 口縁～肩部 1/4残存	口: (18.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	6号床下土 坑	頸部は外傾気味。口縁～頸部横位撫で、体部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫でを施す	29回 PL.19
16	土師器 甕 口縁部破片	口: (18.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	貯蔵穴・床 下	頸部は外傾気味。横位撫で2条を施す。体部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫で	29回 PL.19
17	土師器 甕 口縁部破片	口: (19.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	埋土	頸部は直立し横位撫で2条を加える。体部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫で	29回 PL.19
18	土師器 甕 口縁～肩部 1/4残存	口: (19.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	2号床下土 坑	頸部は直立し、横位撫で2条を施す。体部は横位へラ削り。内面は横位撫で	29回 PL.19
19	土師器 甕 口縁～肩部 1/5残存	口: (19.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 褐色 ③ 良好	埋土	口唇部に凹線。頸部は内湾気味に直立し横位撫で2条を施す。肩部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫で	29回 PL.19
20	土師器 甕 口縁～肩部 1/3残存	口: (20.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 褐色 ③ 良好	カマド	口唇部に浅い凹線。頸部は横位撫で2条を施し直立する。肩部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫でを施す	29回 PL.19
21	土師器 甕 口縁～肩部 1/4残存	口: (19.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	カマド	口唇部に浅い凹線を設け、頸部は内傾気味に直立。頸部に2条の横位撫で、体部に横位へラ削りを施す。内面へラ撫で	29回 PL.19
22	土師器 甕 口縁1/4残存	口: (19.8) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	カマド・床 下	口縁部は強く開き、頸部は内傾気味に直立する。内外面とも横位撫でを施す	29回 PL.19

4号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②着色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	種別番号 図版番号
23	土師器 甕 口縁部破片	口: (20.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にふい・赤褐色 ③ 良好	床下	口唇部に浅い凹線。頸部は直立する。口縁部内外面とも横位横撫で	29回 PL.19
24	土師器 甕 口縁部破片	口: (20.2) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にふい・褐色 ③ 良好	床下・貯蔵 穴	口縁部は短く外傾し、頸部は直立する。横位撫で2条を加え、体部は横位へら削りを施す。内面は横位へら撫で	29回 PL.19
25	土師器 甕 口縁～肩部 1/4残存	口: (20.4) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にふい・褐色 ③ 良好	2号床下土 坑	口唇部に浅い凹線を設け、直立する頸部に横位撫で2条を施す。体部は横位へら削りを加える。内面は横位へら撫で。口縁部外面に吹きこぼれ状の付着物を見る	29回 PL.19
26	土師器 甕 口縁～肩部 1/4残存	口: (20.8) 底: 高:	① 細・輝石 ② にふい・赤褐色 ③ 良好	1号床下土 坑	頸部は僅かに内傾気味に直立。口縁～頸部横撫で、肩部横位へら削り。内面横位へら撫でを施す	29回 PL.19
27	土師器 甕 口縁～体部 上半1/3残存	口: (20.8) 底: 高:	① 細・輝石 ② にふい・褐色 ③ 良好	1号床下土 坑	口唇部に浅い凹線。頸部は僅かに内傾気味に直立し、2条の横位撫でを施す。体部は横位へら削り。内面横位へら撫で	29回 PL.19
28	土師器 甕 口縁～肩部 1/4残存	口: (21.2) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にふい・赤褐色 ③ 良好	カマド・理 土中位 +36	口唇部に浅い凹線。頸部は内傾気味に直立し横位撫で2条を加える。肩部は横位へら削り。内面は横位へら撫で	29回 PL.19
29	土師器 甕 口縁部1/4残存	口: (20.8) 底: 高:	① 細・輝石 ② にふい・褐色 ③ 良好	床下	頸部直立し横位撫で2条を施し、肩部に横位・斜位へら削りを加える。内面は横位へら撫で	30回 PL.19
30	土師器 甕 口縁部破片	口: (21.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にふい・褐色 ③ 良好	貯蔵穴	頸部直立し横位撫で2条を施す。体部は横位へら削り。内面は横位へら撫で	30回 PL.19
31	土師器 甕 口縁～体部 1/6残存	口: (21.6) 底: 高:	① 微細・輝石 ② にふい・褐色 ③ 良好	2号床下土 坑	口縁部は短く外傾。口唇部に凹線。頸部は横位撫でを施し直立する。体部上半に最大径か。体部上半は横位へら削り、下半は縦位。内面は横位撫で	30回 PL.19
32	土師器 小型台付甕 体部のみ残存	口: 底: 高:	① 細・石英・輝石多 ② 褐色 ③ 良好	カマド	球状の体部形態で中位に最大径を持つ。頸部は横位撫で。体部は上半は横位、下半は縦位へら削り。脚部との接点には横位撫でを施す。内面は横位へら撫で	30回 PL.19
33	土師器 甕 体部破片	口: 底: 高:	① 微細・輝石 ② 暗赤褐色 ③ 良好	貯蔵穴・6 号床下土 坑	体部上半に最大径。外面上半は斜位、下半は縦位へら削りを施す。内面は横位へら撫でを下半の接合部に集中する	30回 PL.19
34	土師器 甕 底部2/3残存	口: 底: 4.0 高:	① 微細・輝石 ② にふい・黄褐色 ③ 良好	6号床下土 坑	直線的に開く体部下半。外面は縦位へら削り。内面は丁寧な撫で調整を施す	30回 PL.19
35	土師器 台付甕 脚部1/4残存	口: 底: (10.2) 高:	① 微細・輝石 ② 赤褐色 ③ 良好	貯蔵穴	強く開く脚部。内外面とも横位撫でを施す	30回 PL.19
36	土師器 土製円盤 一部欠損	長: (4.8) 短: 3.4	① 微細・輝石 ② 赤褐色 ③ 良好	埋土	「コ」字状口縁甕肩部破片を利用。両縁を丁寧に打ち欠き槽内状に整形する	30回 PL.19
37	砥石 上半部欠損	法 量(cm・g) 長: (9.7) 幅: 6.3 厚: 3.1 重: 429.8			大型の砥石。四面及び下端面も使用のため滑沢。使用方向は主に縦位を主とする。砥沢石	30回 PL.19
38	鉄滓	長: 2.5 幅: 4.6 厚: 2.3 重: 29.6		埋土	破片・塊状滓	30回
39	鉄滓	長: 4.2 幅: 2.5 厚: 2.0 重: 27.8		埋土	破片・塊状滓	30回
40	鉄滓	長: 4.6 幅: 2.2 厚: 2.6 重: 29.1		埋土	破片・塊状滓	30回

1号電屋・2号カマド

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	掲載番号 図版番号
1号電屋 1	土師器 小型甕 口縁～胴部1/4 残存	口: (12.4) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 明黄褐色 ③ 良好	カマド	頭部は外反気味に直立する。口縁～頭部横位撫でを施し、体部横位へラ削りを加える。内面胴部は入念な横位へラ撫で	31図 PL.19
1号電屋 2	土師器 甕 口縁～胴部1/4 残存	口: (15.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 明黄褐色 ③ 良好	カマド	口唇部に浅い凹線。頭部は内湾気味に直立し、2条の横位撫でを施す。体部は横位へラ削りを加える。内面は横位へラ撫で	31図 PL.19
1号電屋 3	土師器 甕 口縁～体部上半 1/6残存	口: (16.5) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 明褐色 ③ 良好	カマド	口唇部に浅い凹線。内湾気味に直立する頭部に横位撫で2条を施す。体部は横位・斜位へラ削り。内面は横位へラ撫で	31図 PL.19
1号電屋 4	土師器 甕 口縁部破片	口: (19.0) 底: 高:	① 微細・輝石 ② 明赤褐色 ③ 良好	カマド	口唇部に浅い凹線。内湾気味に直立する頭部に横位撫で2条を施す。体部は横位へラ削り。内面は横位へラ撫で	31図 PL.19
1号電屋 5	土師器 台付甕 脚部破片	口: 底: (8.8) 高:	① 微細・輝石 ② 褐色 ③ 良好	カマド	外反気味に短く開く。内外面とも横位撫でを施す。同一個体か	31図 PL.19
1号電屋 6	土師器 台付甕 脚部1/4残存	口: 底: (4.8) 高:	① 微細・輝石 ② 褐色 ③ 良好	カマド	外反気味に短く開く。内外面とも横位撫でを施す。小型品か	31図 PL.19
2号カマ ド1	須恵器 坏・碗類 口縁部破片	口: (13.4) 底: 高:	① 細・石英 ② 灰色 ③ 良好	埋土	口縁～体部内湾気味に一体化する。右回転轆轤整形。器厚薄手	32図 PL.19
2号カマ ド2	須恵器 坏 底部破片	口: (6.4) 底: 高:	① 細・石英・輝石 ② 灰色 ③ やや軟質	埋土	外反気味に開く体部下平。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外面轆轤口強い	32図 PL.19
2号カマ ド3	須恵器 坏 底部破片	口: (5.3) 底: 高:	① 細・石英 ② 灰色 ③ 普通	埋土	内湾気味に開く体部下平。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整	32図 PL.19

集石・土坑・溝出土遺物

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	掲載番号 図版番号
4号集石 1	銭貨 完形	径:2.4 孔径:0.7 重:2.8		銅銭	磨滅のため判読不能	33図 PL.19
4号集石 2	銭貨 完形	径:2.3 孔径:1.1 重:2.4		銅銭	「出武通寶」背文なし。	33図 PL.19
1坑1	磁器 碗 底部のみ残存	法量 口: () 底: 4.8 高:	① 胎土②色調③焼成 ① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	埋土	丸碗あるいは尾呂茶碗。瀬戸・美濃。18世紀	51図 PL.20
10坑1	磁器 小盃 口縁～体部下平 1/3残存	口: (4.2) 底: 高:	① 緻密 ② 黒褐色 ③ 堅緻	埋土	小型の横位把手を付す。鉄軸を施す。瀬戸・美濃か。近世	51図 PL.20
20坑1	鉄滓	法量 長:5.4 幅:3.2 厚:2.0 重:15.3		埋土	破片・塊状碎	51図
32坑1	石鉢 破片2点	法量 口: (33.0) 底: (14.0) 高: (18.0)	① 粗粒安山岩 ② ③	坑底面	被熱による破砕か。口縁部に平坦面を持ち、内外面は敲打痕が残る。炭化物が付着することから、二次利用を示唆する	51図 PL.20
32坑1	磁器 小型碗 口縁部一部欠損	口: 7.4 底: 3.2 高: 3.4	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	埋土	染付。肥前系。世の意匠か。18世紀後半か	51図 PL.20
32坑2	磁器 碗 口縁～体部1/6 ・底部残存	口: 9.7 底: 3.6 高: 4.3	① 緻密 ② 灰白色 ③ 緻密	埋土	染付。肥前系。雪輪草花文か。18世紀後半	51図 PL.20
32坑3	陶器 皿 口縁部破片	口: (10.0) 底: 高:	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	埋土	小径の皿。瀬戸・美濃。近世か	51図 PL.20
32坑4	磁器 碗 底部のみ残存	口: 底: 4.8 高:	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	埋土	丸碗あるいは尾呂茶碗。瀬戸・美濃。18世紀か	51図 PL.20

集石・土坑・溝出土遺物

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	押図番号 図取番号
35坑1	在土器 内耳土器 体部破片	口: 底: 高:	① 緑・砂粒多 ② 黒褐色 ③ 普通	埋土	焙烙。扇形土器。把手周辺の撫では丁寧。中世	51図 PL.20
40坑1	土師器 甕 底部1/2残存	口: 底:(3.7) 高:	① 微細:輝石 ② にぶい・黄褐色 ③ 良好	埋土	狭く開く体部下。外面は縦位へラ削り。内面は横位へラ撫でを施す	51図 PL.20
42坑1	須恵器 埴 1/4残存	口:(15.8) 底:(9.2) 高:4.5	① 微細 ② 灰色 ③ 良好	埋土	口縁～体部内湾気味に一体化する。高台は短く内傾する。右回転。輪軸整形。底部回転糸切り後高台削付。	51図 PL.20
42坑2	土師器 甕 口縁～肩部1/3 残存	口:(21.4) 底: 高:	① 微細:輝石 ② 明赤褐色 ③ 良好	埋土	口唇部に浅い凹線。頸部は内湾気味に直立し、2条の横位撫でを施す。体部に横位へラ削りを加える。内面横位へラ撫で	51図 PL.20
52坑1	鉄銭 完形	法 量(cm・g)			銅銭 「治平元直」か。孔周辺に磨れが見られる。背文なし	51図 PL.20
52坑2	鉄銭 完形	径:2.4 孔径:0.7 重:3.0			銅銭 「天型元直」。背文なし。やや磨減する	51図 PL.20
55坑1	土師器 甕 口縁部破片	口:(19.0) 底: 高:	① 微細:輝石 ② 褐色 ③ 良好	埋土	頸部直立し、肩部はやや緩やか。頸部に横位撫で2条を施し、体部に横位へラ削りを加える。内面横位へラ撫で	51図 PL.20
4溝1	磁器 碗 口縁部破片	口:(7.0) 底: 高:	① 緻密 ② 灰白色 ③ 緻密	埋土	染付。端反碗。近代の所産か	51図 PL.20
166号 ビット1	鉄蒔か 先端部欠損	法 量(cm・g)			大型品で基部断面形は方形。柄部に段差を有す。先端部はやや扁平になるため、蒔としての可能性を求めた	51図 PL.20
48坑1	深鉢 口縁～体部下 1/4残存	長:16.9 幅:1.1 厚:0.9 重:93.4	①胎土②色調③焼成 ① 粗片岩 ② にぶい・赤褐色 ③ 良好	埋土	口径:18.0。緩やかな四単位波状口縁。口縁部は短く頸部で屈曲し体部は内湾する。波頂部内面に渦巻状意匠を配す。口縁部に横位連続刺突文を2条施す。頸部は無文。体部は隠線による宇字状懸垂文を四単位配す。側縁は連続初突文。上位の区画内は小渦巻文と三角除刻文を充てる。懸垂線間には三角除刻文以下に縦位波状文が重なる。無頭を縦位充填施文する。中彫初頭～前葉	51図 PL.20

遺構外出土遺物

掲載番号	器種・残存	出土位置	①胎土②色調③焼成	文様などの特徴	押図番号 図取番号
1	深鉢 体部破片	73区確認面	① 粗:石英・横縞 ② にぶい・褐色 ③ 普通	無頭縦位施文。器面磨減する。縄文前期中葉か	58図 PL.20
2	深鉢 体部破片	73区K21	① 粗:石英・雲母未 ② にぶい・赤褐色 ③ 良好	体部上半か。横位沈線以下に沈線による環状意匠と三角文。三角文中心に三角除刻文を配す。丁寧な施文。縄文中期初頭か	58図 PL.20
3	深鉢 体部破片	73区K21	① 粗片岩・輝石 ② にぶい・赤褐色 ③ 普通	隠線による弧状意匠か。体部上半とすれば、分岐懸垂文上端となる。側縁は1本指きの沈線。細縄文LRを横位充填施文する。縄文中期初頭か	58図 PL.20
4	壺か 口縁部破片	2号カマ下 内	① 粗:石英 ② にぶい・褐色 ③ やや軟質	口唇端部に沈線。口縁部は肥厚し中に横位沈線を設け横位LRを重ねる。頸部に横位条線を施す。弥生前期か	58図 PL.20
5	深鉢 口縁部破片	73区確認面	① 粗:石英・輝石 ② 褐色 ③ 普通	口径は広い。口唇部無文。以下横位・斜位LRを施す。口唇部内外面に保持着。弥生前期か	58図 PL.20
6	鉢か 体部破片	73区確認面	① 粗:石英・輝石 ② にぶい・黄褐色 ③ やや軟質	内傾する鉢口頸部か。横位隠線で囲まれ、沈線による弧線文を充填する。弥生前期か	58図 PL.20
7	深鉢 体部破片	73区確認面	① 粗:石英・輝石 ② にぶい・黄褐色 ③ やや軟質	体部上半か。横位沈線2条を配す。沈線間に横位LRを施す。地文であろう。体部は浅い斜位条線を施す。弥生前期か	58図 PL.20
8	深鉢 体部破片	73区確認面	① 粗:石英 ② にぶい・黄褐色 ③ 普通	浅い横位沈線を3条設ける。地文は無頭横位施文。弥生前期か	58図 PL.20
9	壺か 体部破片	73区確認面	① 粗:石英 ② 灰黄褐色 ③ 良好	2条の弧状沈線間を磨消す。施文部は無頭LRを施す。内面に斜位条線を見る。弥生前期か	58図 PL.20
10	深鉢 体部破片	73区確認面	① 粗:輝石 ② にぶい・黄褐色 ③ やや軟質	縦位細密条線が器面を覆う。内面撫で調整。器面磨減。弥生前期か	58図 PL.20

遺構外出土遺物

掲載番号	器種・残存	出土位置	①胎土②色調③焼成	文様などの特徴	種別番号 図版番号
11	深鉢 体部破片	73区確認面	① 靑・石英 ② 褐灰色 ③ 普通	やや太めの条線が斜位に施される。内面撫で調整。弥生前期か	58回 PL.20
12	須恵器 環・埴類 口縁部破片	口: 底: 底: 高:	① 靑・石英 ② 灰黄色 ③ 普通	出土位置 73区確認 面 成・整形の特徴など 口縁～体部直線的に開く。右回転轆轤整形。体部内外面に墨書。判読不能	58回 PL.20
13	須恵器 環 底部破片	口: 底:(4.8) 高:	① 微細 ② 淡黄色 ③ やや軟質	73区R22 内湾気味に開く体部下平。右回転轆轤整形。底部回転系切り後無調整。	58回 PL.20
14	須恵器 埴 底部残存	口: 底:6.0 高:	① 微細 ② 灰白色 ③ 普通	73区R25 内湾気味に開く体部下平。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転系切り後高台貼付。	58回 PL.20
15	須恵器 環 底部残存	口: 底:5.6 高:	① 靑・石英 ② 灰色 ③ 良好	73区L21 内湾気味に開く体部下平。右回転轆轤整形。底部回転系切り後無調整。内底面に墨書。「三上下か」	58回 PL.20
16	須恵器 羽釜 口縁部破片	口:(24.4) 底: 高:	① 靑・石英 ② 暗オリーブ褐色 ③ 普通	73区R21 口縁部内傾気味に直立する。跨貼付。轆轤整形か。回転方向不詳	58回 PL.20
17	須恵器 甕・壺類 体部破片	口: 底: 高:	① 靑・石英 ② 灰色 ③ 良好	73区R23 体部上半か。内湾する。轆轤整形。回転方向不詳。	58回 PL.20
18	須恵器 甕 体部破片	口: 底: 高:	① 靑・石英 ② 褐灰色 ③ 膠融	73区R21 外面は引き調整後撫で。内面、環状当て目を横位へラ撫でが重なる	58回 PL.20
19	石鏝 右端部欠損	石材 法 量(cm・g)	黒曜石 長:1.7 幅:1.4 厚:0.4 重:0.5	無茶凹基縁。右端部が僅かに欠損。丁寧な加工を施し均整の取れた器形を呈す	58回 PL.20
20	石鏝 基部欠損	珪質変質岩 流紋岩質凝 灰岩	長:(2.2) 幅:1.5 厚:0.4 重:46.5	有基縁。基部を裏面からの加撃で欠損。丁寧な加工を施し、側縁は弧状を呈す	58回 PL.20
21	エンド・スクレイ パー 完存	黒曜石	長:3.0 幅:2.8 厚:1.3 重:7.9	刮片端部に裏面からの調整を集中し、片刃状の刃部を作出する。均質な石材	58回 PL.20
22	白雲石弁 右側縁一部欠	粗粒安山岩	長:15.7 幅:7.4 厚:2.4 重:411.2	短冊形。表裏面側縁を交互に凹縁調整を施す。	58回 PL.20
23	磨石 完形	粗粒安山岩	長:12.9 幅:9.5 厚:6.7 重:732.3	全面に細かな凹みを有し、側縁と片面に磨減痕を見る。	58回 PL.20
24	砥石 下端部欠損	法 量(cm・g)	長:7.1 幅:2.0 厚:2.3 重:74.5	成・整形の特徴など 砥沢石。手持ち砥。三面を使用し、湾曲は僅か。未使用面は斜位剝離痕を見る。	58回 PL.20
25	円柱状鉄製品 上半部欠損	長:4.8 幅:0.7 厚:0.7 重:7.6	上半部で屈曲する兆しを見せるが詳細不明。断面形は円形で、下端にかけて僅かに細身となる	58回 PL.20	
26	楔状鉄製品 完形	長:7.3 幅:3.6 厚:3.8 重:316.7	斧状の形態を呈し、上下端とも平坦面を持つ。労働対象は大型の自然石であろうか	58回 PL.20	
27	剃刀か 先端部欠損	長:11.3 幅:1.9 厚:0.4 重:289.0	刃部より柄部に連続性を見るため剃刀と判断した。柄部に巻き取りを見るが、材質は不明。近現代の所産か	58回 PL.20	

第5章 上原IV遺跡

第1節 概要

上原IV遺跡は、前章で述べた榎木1遺跡と同様に、吾妻郡長野原町大字林に所在する。吾妻川右岸最上位段丘面にあたり、周辺は、王城山南斜面が広がる扇状地地形の扇状部に近い緩斜面地形が広がる。本遺跡の西側を押し沢川が南流し、西側の山地地形と画する。このように、扇状地地形と山地地形の接点に本遺跡は占地する。

先に述べたように周辺遺跡としては、上原Ⅰ～Ⅲ遺跡や林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡、東原Ⅰ～Ⅲ遺跡、花畑遺跡があり、濃密な遺跡分布が知られる一角にある。近年、発掘調査が増加した地域であり、本遺跡も平成15年に当事業団が発掘調査を行い、縄文時代後期集落跡などを報告している。本章は、平成21年度分の調査を報告する。

平成21年度の調査区は、南への緩斜面地形が広がっていたが、遺構密度を把握するために、調査区内各所にトレンチを設定して全体像を捉えた。その結果、調査区内には、南北に流れる浅い自然流路が数条確認され、住居跡等の遺構密度はさほど高くないことが判明した。土坑6基と縄文時代遺物包含層を対象とした調査となった。標高は651.0～656.4mである。

本遺跡で検出された遺構は、中世～近世に比定される土坑6基と、縄文時代中・後期を中心とした遺物包含層である。

第2節 基本土層

調査区内に設定した幾つかのトレンチを利用して柱状図を作成した。本遺跡の層序は、林地区及び当地域の上位段丘面～最上位段丘面に見られる層位と大きな差は無く、平成15年度調査で得られた基本土層もほぼ同様である。林地区の最上位段丘面は、斜面地形であり、そのため地滑り等の土砂の移動も土層観察には欠かせない事項である。具体的には、各土層中には小礫層が局部的に混在しており、本遺跡でも、Ⅲ層とした黒褐色土においても、礫の混在が各所で見られた。

さらに、遺構基盤層となるローム層中においても、大型の角礫が露出する例がしばしば見られた。

遺構確認面はローム漸移層(Ⅳ層)からローム上層(Ⅴ

層)である。また、層位としては確認できなかったが、当地域では、平安時代の住居跡土・覆土中などに、浅間粕川軽石(As-K, 1128年)が薄く地点状に堆積する例がある。集落廃絶後の凹地への堆積であろうか。おそらく、Ⅲ層中に対比される層である。

遺構確認面以下では硬質ローム以下に浅間草津黄色軽石(As-YPK)をⅤ層として位置付けた。本遺跡では4層前後のユニットを確認したが、層厚があり硬化灰層も見られた。

なお、吾妻川中段位段丘面や下位段丘面に見られる、天明3年の浅間火山噴火に伴う軽石(As-A, 1783年)と泥流の堆積は最上位段丘面に位置する本遺跡では確認されなかった。

第3節 検出された遺構と遺物

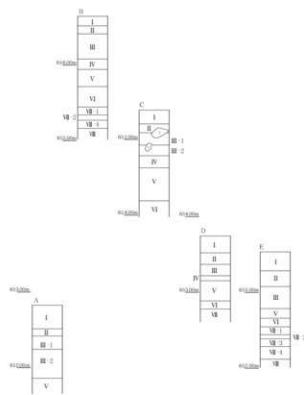
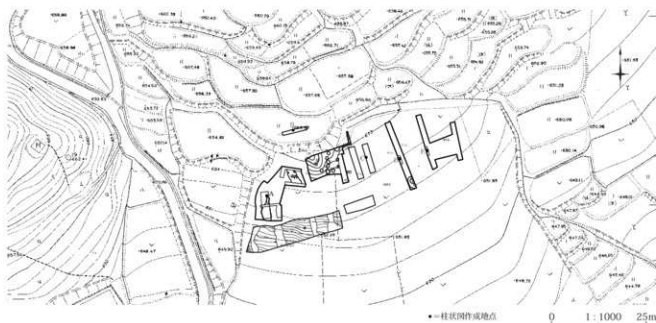
調査区は83区・84区・93区・94区に跨がる。通常、中グリッド内での遺構番号を付す調査方法が、八ッ場ダム発掘調査における手順であるが、平成21年度の上原IV遺跡においては、遺構数も少ないため、中グリッドにこだわらず、遺構番号は調査年度内の通し番号を付して、資料化を進めた。

トレンチによる試掘を経て、遺構を確認した箇所を中心に3箇所の調査区を設けた。北東調査区と南西調査区、さらに東端の東調査区の3箇所を主に調査した。その他のトレンチにおいても、遺構の有無に係わらず、拡張調査を施し、できる限り面としての調査を指向した。

北東調査区は、調査時は墓周辺と呼称された仮称である。現代の墓地の一部が調査区内にかかっていたためであるが、4基の墓の位置と平面プランは全体図に押さえた。ここでは、3基の土坑を検出したが、あるいはこれらは中世墓坑の可能性もある。南西調査区は、自然流路に基盤面が削られていたが、かろうじて残存する漸移層面で3基の土坑を調査した。

調査区東端では、7トレンチで縄文土器がまとまって出土している。8トレンチでも少量の遺物を見たため、7トレンチと8トレンチの間を拡張し、遺構の検出に努めた。住居跡などの遺構は確認できなかったが、一定量の縄文土器の散布を見ることができた。

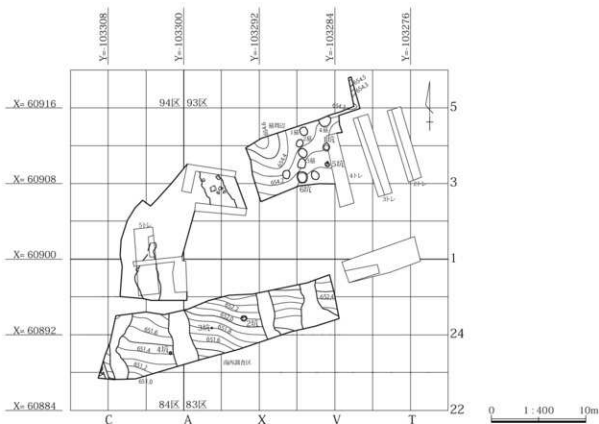
以下、調査で得られた遺構と遺物の概要を述べる。



- | | |
|-----------------------------|---------------------------------|
| I 暗褐色～褐色土 表土 | VI 黄褐色ローム層 粘性強く、大粒のAs-YPKを含む |
| II 灰褐色土 As-YPKを微量含む | VII-1 黄褐色細粒軽石層 白色軽石粒を混在する |
| III-1 黒褐色土 細粒の白色粒を多く含む | VII-2 桃色粗粒火山灰層 硬質化する |
| III-2 黒褐色土 細粒の白色粒を少量含む。 | VII-3 黄灰色軽石 大粒の黄灰色軽石。As-YPK一次堆積 |
| | VII-4 黒灰色軽石 硬質化する |
| IV 暗褐色土 ローム漸移層。細粒でしまりに富む | VII 黄褐色ローム層 粘土化し硬質 |
| V 黄褐色ローム層 やや軟質。大粒のAs-YPKを含む | |

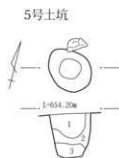
0 1:50 5m

59図 上原IV遺跡全体図・基本土層

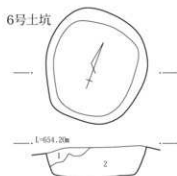
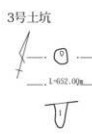


- 1坑土層
- 1 黒色土 黄色軽石粒を多く含む
 - 2 黒褐色土 ローム粒・黄色軽石粒を少量含む
 - 3 黄い褐色土 小型のローム塊を少量含む
 - 4 黄い黄褐色土 ローム塊を多く含む

- 2坑土層
- 1 黒褐色土 少量の白色粒を含む。軟質
 - 2 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む



- 3坑土層
- 1 黒色土 少量の黄色軽石粒を含む。軟質
- 4坑土層
- 1 黒色土 ローム粒を多く含む。軟質
 - 2 黒褐色土 小型のローム塊を多く含む



- 5坑土層
- 1 黒色土 ローム粒・黄色軽石粒を含む。軟質
 - 2 黒褐色土 やや明るく硬い。白色粒を少量含む
 - 3 黒褐色土 大型のローム塊を少量含む

- 6坑土層
- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む
 - 2 黄い褐色土 小型のローム塊を多く含む

60図 遺構位置図及び土坑

0 1:40 1m

1. 土坑(60図 PL.22)

北東調査区と南東調査区で6基の土坑を調査した。各土坑の概要を述べる。

1号土坑:北東調査区で検出した。93区V-3・4グリッドに位置する。4号トレンチで確認し、拡張調査に至った。周辺は約7°の傾斜角を測る斜面地形で、南1.2mに5号土坑が近接する。平面形は、径約83×71cmの不整形円形を呈す。深さは確認面から約35cmを測るが、II層掘り込み面からは75cm以上を測り、しっかりした箱形の断面形を示す。坑底面はローム上層にまで達し、僅かな凹凸があるものの、平坦を維持していた。埋土はローム塊を含む黄褐色土を下層に堆積する。人為堆積と考えた。出土遺物は見られなかった。時期・性格は不明だが、周辺が墓地という性格を踏まえると、中～近世段階の墓塚の可能性もある。

2号土坑:南西調査区で調査した。83区X-24グリッドに位置し、周辺は南側への傾斜が強く、約5°の傾斜角を測る。周辺遺構も無く単独の検出となった。西南西約3.2mに3号土坑があるが、関連性は弱い。平面形は不整形円形で、規模は約61×56×31cmを測る。断面形は皿状ではあるが、掘り込みや深さもはっきりしており、平面形と併せ整った形状といえよう。埋土は、黒褐色軟質土を主体としており、おそらく人為堆積であろう。出土遺物は見られなかったが、大型自然石2石を埋土中に見る。時期・性格とも不明である。

3号土坑:南西調査区83区Y-24グリッドで単独で検出した。周辺の傾斜は強く5.5°の傾斜角である。小型のビット状土坑である。平面規模は16×14cmで、不整形円形を呈す。深さは約30cmを測り、有機的なビットと判断できた。埋土は軟質黒色土であるが、埋没原因は判断できない。遺物の出土は無く、時期・性格は不明である。

4号土坑:南西調査区84区A-23グリッドで調査した。3号坑と同様にビット状土坑である。周辺は約6°の傾斜角で強い南傾斜にある。近接する遺構も無く、単独の検出となった。平面規模は31×25cmで、深さは20cmを測る。不整形円形を呈し、3号坑よりはやや大型のビットである。埋土は3号坑と同様に黒色軟質土を上層に堆積する。おそらく人為堆積と思われるが、確定性に乏しい。遺物の出土は見なかった。時期・性格は不明である。

5号土坑:北東調査区で検出した。93区V-3グリッド

に位置する。前述の1号坑が北約1.2mに近接する他、6号土坑が南西2.2mにある。周辺地形は1号坑よりやや緩く、約6°の傾斜角を測る。径約52×41cmを測る小型の不整形円形土坑である。深さは47cmあり、比較的深く、坑底面はローム層上層にまで達していた。埋土は黒色土と黒褐色土からなり、軟質でローム塊を含むことから人為堆積と判断した。遺物は出土していないため、時期・性格は不明だが、1号坑に近接することから、関係性は否定できない。

6号土坑:北東調査区で調査した。93区V-3グリッドに位置し、前述の5号坑と南西2.2mに近接する。周辺斜面地形の傾斜角も5号坑と等しく約6°である。平面形は、径約123×105cmを測る不整形円形を呈す。深さは約34cmで坑底面はローム上層にまで及ぶように掘り込みもしっかりしていた。坑底面は僅かに凹凸をみるものの、ほぼ平坦面を意識した作りである。埋土はローム塊を含むにぶい褐色土を主体としており、人為堆積と捉えられよう。出土遺物はなく、時期・性格は確定できないが、1号坑・2号坑と同様に、墓域にあること、円形で人為堆積を示す土層の判断から、中～近世段階の墓塚の可能性を考えておきたい。

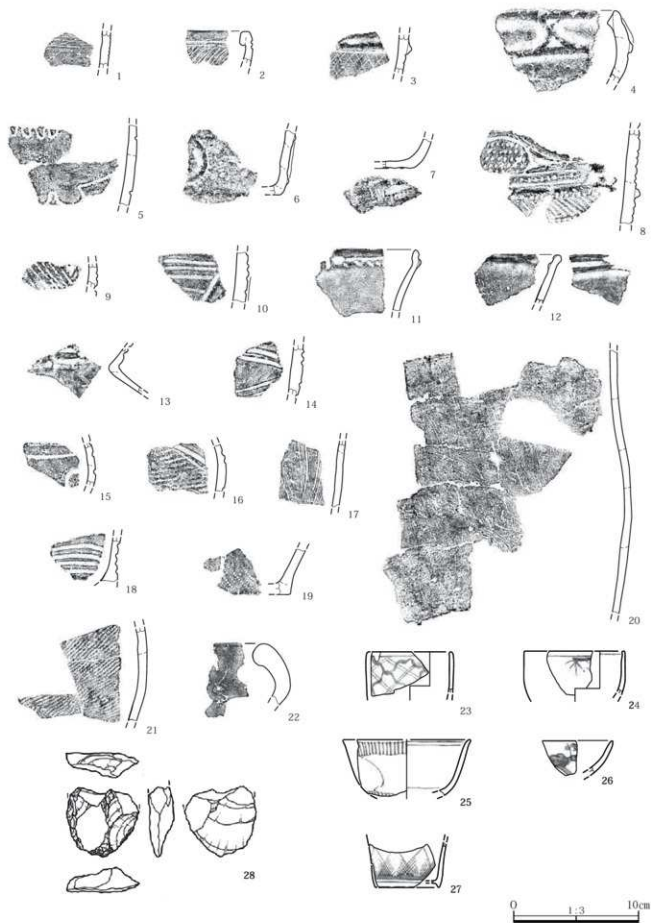
2. 縄文包含層(61図 PL.22・23)

7トレンチにおいて、自然礫層周辺より縄文土器の出土が見られたため、8トレンチとの間を拡張調査し、遺構・遺物の検出に努めた。遺構は確認できなかったが、縄文時代中期と後期土器片を主体とする遺物包含層として位置付けることができた。遺物の集中は特に見られず、拡張区全域より径約6.5mの範囲で、土器片が出土している。出土遺物総数は40点を数え、石器1点を含む22点を図示した。

出土遺物のうち、主体となる時期は堀之内I式期で、半数以上を占める(11～21)。ついで、中期前葉段階の勝坂1式あるいは阿玉台1b式が見られた(4～9)。前期後葉段階の諸磯c式(1)、中期初頭である五領ヶ台II式(2・3)も数点の出土があるが、客体的な存在であり、主体は中期前葉と後期前葉の二時期といえよう。

石器は打製石斧の欠損品(28)が出土している他に、黒曜石の剥片が2点出土している。

平成15年に調査された、上原IV遺跡(篠原他2008)で



61図 遺構外出土遺物

は、堀之内Ⅱ式～加曾利B1式の敷石住居跡が報告されているが、今回の調査で得られた出土土器は前回の例よりも若干ながら古相を示す。平成15年分は、台地西縁辺にあたり、標高も低く648m前後で、今回の調査地点とは約6mの比高差を見る。このことは、時期毎の台地占拠状況の一端を示している。単純な比較は控えるべきではあるが、高位標高地に中期～後期前葉の活動範囲が見出せ、低位標高地には、後期前葉～中葉の集落跡が検出された様相は、今後の当地区の調査にあたり、重要な指標となる。今回は縄文時代に比定される遺構検出は果たせなかったが、同一遺跡内における多時期にわたる占拠差を見ることができたことは、一定の成果といえよう。

表4 上原IV遺跡 遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
1号土坑	83	71	35	93V3・4
2号土坑	61	56	31	83X24
3号土坑	16	14	29	83Y24
4号土坑	31	25	20	84A23
5号土坑	52	41	47	93V3
6号土坑	123	105	34	93V3

表5 上原IV遺跡出土土器観察表 遺構外出土土物

掲載番号	器種・残存	出土位置	①胎土②色調③焼成	文様などの特徴	所属番号 図版番号
1	深鉢 体部破片	7トレンチ 堀内	① 黒・輝石・雲母 ② にぶい褐色 ③ 普通	小型の多岐竹管による斜位平行沈線を交互に施す。内面凹凸あり。縄文前期後葉か	61図 PL.23
2	深鉢 口縁部破片	8トレンチ	① 黒 ② 褐色 ③ 良好	口唇部内面肥厚。端部内頸状をなす。口縁部に横位平行沈線を設け、以下斜位平行沈線を充填する。中期前葉か	61図 PL.23
3	深鉢 体部破片	7トレンチ 堀内	① 粗・石英・輝石 ② 明赤褐色 ③ やや軟質	体部上半か。横位隆線以下細沈線による斜格子目文を配す。中期前葉か	61図 PL.23
4	深鉢 口縁部破片	7トレンチ 堀内	① 粗・石英・雲母 ② にぶい褐色 ③ やや軟質	口縁部内湾。頸部隆線とX字状隆線による楕円状区画文を配す。区画内は無文。中期前葉か	61図 PL.23
5	深鉢 体部破片	7トレンチ 堀内	① 粗・石英 ② 褐色 ③ やや軟質	単列の連続刺突文による横位波状文を設け、同刺突文による横位意匠文を配す。中期前葉か	61図 PL.23
6	深鉢 底部破片	7トレンチ 堀内	① 粗・石英 ② 灰褐色 ③ 普通	体部下半の隆線による楕円状区画文。区画内は単列の結節沈線が治う。同沈線による円文も配される。中期前葉か	61図 PL.23
7	深鉢 底部破片	7トレンチ 堀内	① 粗・輝石多 ② 灰褐色 ③ 良好	多岐竹管による横位平行沈線を施す。底面に朝代残存。中期前葉か	61図 PL.23
8	深鉢 頸部破片	8トレンチ 西	① 粗・石英・雲母 ② にぶい赤褐色 ③ 良好	おそく隆線による三角形状区画文か。平行沈線や連続刺突文を無線とし区画内には円形区画文と三叉文を配す。区画内は刺突文を充填する。頸部隆線は小突起を付し、以下横位連続刺突文と斜位沈線を施す。中期中葉か	61図 PL.23
9	深鉢 頸部破片	8トレンチ 西	① 粗・石英・雲母 ② にぶい赤褐色 ③ 良好	同一個体。区画内中位にあたる。三叉文と連続刺突文の充填を見る。中期中葉か	61図 PL.23
10	深鉢 体部破片	7トレンチ 堀内	① 粗・石英・輝石 ② にぶい赤褐色 ③ やや軟質	斜位隆線を設け横位沈線を施す。側縁も沈線。中期後葉か	61図 PL.23

3. 遺構外出土土物(61図 PL.23)

北東調査区で出土した、陶磁器類をみると殆どが近世～近代の所産(22～26)である。これら近世陶磁器類は、1号坑・5号坑・6号坑といった土坑墓としての性格を想定される遺構群と関連する可能性もあり、遺構外といえども図示した。一方、平成15年調査では、中世遺物が充実にあり、本遺跡周辺の中～近世資料の一端を窺う例となっている。伝承にある朝林寺推定域にあたる本遺跡であり、今回は寺に関する遺構・遺物は検出できなかったが、中～近世遺物の検証を重ね、寺域を検証するにあたり、本遺跡の出土土物例も参考資料となるだろう。

遺構外出土遺物

掲載番号	器種・残存	出土位置	①胎土②色調③焼成	文様などの特徴	所属番号 図版番号
11	深鉢 口縁部破片	7トレンチ 中間	① 曜：輝石・雲母 ② 灰黄褐色 ③ 良好	幅狭の口縁部に凹文を配し、横位沈線を加す。屈折部隆線には刻みを付す。後期前葉か	61図 Pl.23
12	浅鉢 口縁部破片	N区表採	① 曜：石英・輝石 ② にぶい・褐色 ③ 良好	外面は無文。口縁部内部肥厚し横位沈線を設ける。内外面とも研磨を加える。後期前葉か	61図 Pl.23
13	鉢 頸部破片	6トレンチ	① 曜：輝石 ② 黒褐色 ③ 良好	頸部縮曲強い。上位に円形刺突文と横位長橋円状沈線文を配す。後期前葉か	61図 Pl.23
14	深鉢 体部破片	7トレンチ 中間	① 曜：石英・輝石 ② にぶい・褐色 ③ 良好	2条一組の太い沈線による横位弧状意匠。後期前葉か	61図 Pl.23
15	深鉢 体部破片	7トレンチ 罐内	① 粗：石英 ② 灰黄褐色 ③ やや軟質	内湾する体部中位。横位沈線2条を設け、以下弧状沈線を配す。他は無紋。後期前葉	61図 Pl.23
16	深鉢 体部破片	7トレンチ	① 粗：石英 ② にぶい・黄褐色 ③ 良好	屈やかな内湾を呈す。体部上半か。2条の斜位沈線による弧状意匠か。横位LRを充填する。後期前葉	61図 Pl.23
17	深鉢 体部破片	7トレンチ 罐内	① 曜：石英 ② にぶい・黄褐色 ③ 堅緻	薄手の器厚を呈す。縦位条線を密に施し、2条の垂下沈線が懸垂する。後期前葉か	61図 Pl.23
18	深鉢 体部下半破片	7トレンチ 罐内	① 曜：輝石 ② にぶい・褐色 ③ やや軟質	底部は僅かに張り出す。太い横位沈線4条を配す。後期前葉か	61図 Pl.23
19	深鉢 底部破片	7トレンチ 罐内	① 粗：石英 ② にぶい・赤褐色 ③ 普通	外反気味に開く体部下半。縦位LRを施す。後期前葉か	61図 Pl.23
20	深鉢 体部破片	7トレンチ 罐内	① 粗：輝石 ② 灰黄褐色 ③ 良好	上半で外反し、体部下半で僅かに内湾する。無文で内外面とも調整痕が残る。後期前葉か	61図 Pl.23
21	深鉢 体部破片	7トレンチ 罐内	① 曜：石英・雲母 ② 灰褐色 ③ 普通	横位LRが器面を覆う。後期前葉か	61図 Pl.23
22	陶器 火鉢か 口縁部破片	法量	① 微細：輝石 ② 灰黄褐色 ③ 良好	出土位置	成・整形の特徴など
		口： 底： 高：		7号ト レン チ	強く内湾する口縁部。外面は研磨により平滑である。近世以降の所産か
23	磁器 碗・猪口 口縁部破片	口：(6.4) 底： 高：	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	確認面	染付。肥前系。格子目状の意匠か。近世
24	磁器 碗 口縁部破片	口：(10.0) 底： 高：	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	4号ト レン チ	染付。肥前系。近世
25	磁器 碗 口縁部破片	口：(10.0) 底： 高：	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	確認面	染付。環反の碗。近世か
26	磁器 碗 口縁部破片	口： 底： 高：	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	確認面	染付。雪輪梅文。肥前。18世紀後半
27	磁器 猪口 底部破片	口： 底： 高：	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	確認面	染付。肥前。18世紀
28	打製石斧 基部半欠	石材	法量 (cm・g)	表面からの加撃により上半を大きく切断する。細かな剝離は切断時の所産か	61図 Pl.23
		黒色頁岩	長：(6.4) 幅：5.7 厚：1.9 重：46.5		

第6章 西久保IV遺跡

第1節 概要

西久保遺跡は、平成21年と平成23年の2年次にわたる発掘調査が行われている。平成21年は遺跡の東端を対象とし、平成23年は西側を調査したため、分割調査となっている。

西久保IV遺跡は吾妻郡長野原町横壁に所在する。吾妻川右岸にあたり中位段丘面に占地する遺跡である。吾妻川の蛇行により北側へ突出した舌状台地の形態をとる。調査区は28地区60区・70区、29地区51区・61区に跨がる。地形は南から北への緩斜面地形に占められる。調査区西側は、吾妻川段丘崖が迫る西へも緩やかに傾斜する地形である。また、東側は小倉沢により開析され、河川崖によって画される。調査区内の標高は591.7～600.5mの間である。

周辺の調査遺跡としては、西久保I遺跡が挙げられる。小規模ながら縄文時代中期中葉～末葉にかけての集落跡や水場遺構を調査している。また、東約1.2kmに縄文時代中・後期の大集落跡である横壁中村遺跡や山根Ⅲ遺跡、西へ約600mに天明泥流下の畑を全面に検出した遺跡の

久々戸遺跡がある。吾妻川対岸になるが、西約260mに尾坂遺跡があり、ここでも天明泥流下の畑跡と縄文時代中期集落跡が調査されている。

西久保IV遺跡でも、天明泥流下の畑跡と平安時代及び縄文時代集落跡の一端を調査している。調査区全域に天明泥流が1m前後堆積しており、調査は第1面の調査として、泥流直下で江戸時代(天明3年)の畑跡を検出した。畑跡調査後、下層調査への試掘を経て、第2面目の調査を行ない、平安時代住居跡や縄文時代掘立柱建物跡を見ることができた。

遺構の概要としては、第1面調査である天明泥流下畑跡は調査区全面に広がっていた。ただし、基盤礫の露出が著しく、またAs-Aの堆積が薄く地点的なため、畑サクが明瞭ではなく、残存状態は良くなかった。その中で、円形平坦面あるいは道状遺構など畑に伴う諸施設を確認できた。なお、泥流畑跡を検出した調査区北側地形傾斜角は約6°を測るが、南側へ徐々に傾斜は強くなり、約7～8°になる。それに伴い、畑跡の痕跡は弱くなっている。

第2面目の調査は、下層の黒褐色土やローム層上面で行った。小型の平安時代住居跡1軒や焼土跡、小規模な畑跡、縄文時代後期の掘立柱建物跡2棟や柱六列を検出



62図 西久保IV遺跡全体図

した。2面目の調査遺構は緩斜面地形で基盤礫の露出が少ない箇所集中する傾向が見られた。出土遺物も同様で、土坑などの遺構が集中する箇所に少量ながら土師器破片や縄文土器片が出土している。このうち1号建物跡を構成する柱穴内からは後期土器片が出土しており、1号建物跡の時期決定の根拠とした。

第2節 基本土層

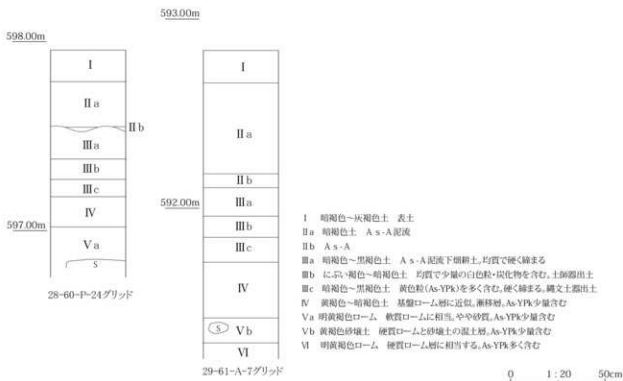
調査区内の高位部と低位部2箇所を選び柱状図を作成した。調査区内には埋没谷など沖積地を含まないため、当地域の洪積台地基本土層と大きな差は無い。

表土下には天明泥流が30～80cm程の厚さを持って堆積する。低標高部にかけて厚く堆積する傾向は、泥流の及んだ範囲を示唆するものである。なお、本遺跡より南約50mの地点で長野原町教育委員会が試掘調査を行っている。その際にも泥流堆積が認められており、標高600m付近にも災害が及んだ例と判断できる。泥流下にはAs-Aが地点によって数cmの堆積が認められる。畑跡サク状遺構に堆積しており、この軽石堆積の走向を持って、畑跡の全体像を把握している。

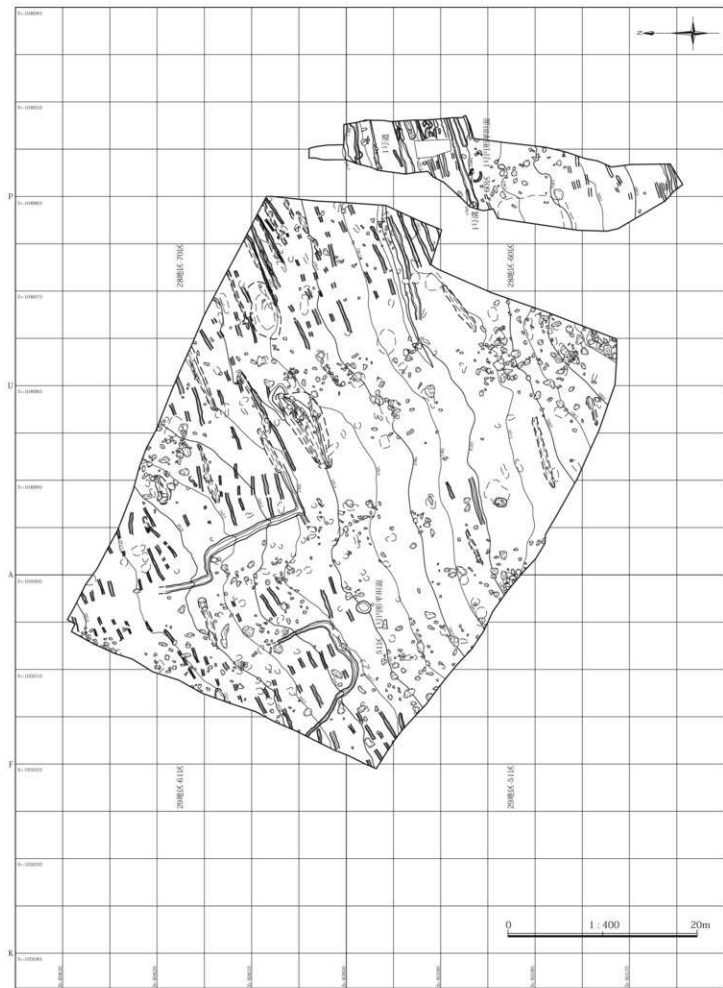
畑耕作土は暗褐色土を基調としているが、地点によっ

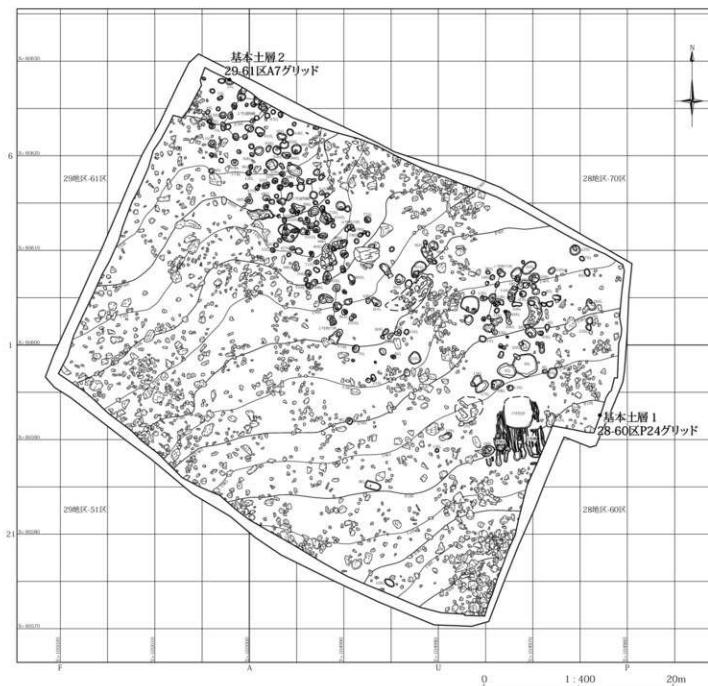
ては黒褐色を呈す。少量の炭化物を含み、泥流の土圧から、硬くしまる。炭化物は畑耕作に伴うとはいえず、下層黒褐色土にも含まれるため、即断はできない様相である。既にこの層位で基盤の大型自然石が露出している。この畑耕土下に暗褐色土～黒褐色土が堆積するが、上層Ⅲb層下位で平安時代住居跡や焼土跡を確認した。Ⅲc層で縄文土器の出土を見るが、絶対量も少なく、Ⅲb層やⅢc層の時期的な分層は安定的ではない。あくまでも調査手順で分別した層位であり、Ⅲb層下位で平安時代～中世の遺構を、Ⅲc層～Ⅳ層で縄文時代以降の遺構検出を行っており、その際の目安の層位とした。なお、Ⅲa層の調査中に、極めて薄く浅間泊川軽石(As-K, 1128年)の堆積を見た。1号住居跡周辺に限られたことから、凹地に堆積していた例と判断した。

Ⅳ層以下は基盤礫として位置付けられるが、大型礫の密度が徐々に高くなり、掘り下げも困難になり、さらに安全対策上の理由から、硬質ローム上面までを基本土層とした。



63図 西久保IV遺跡基本土層





65図 西久保IV遺跡 第2面(Q-L)基移上面)全体図

第3節 検出された遺構と遺物

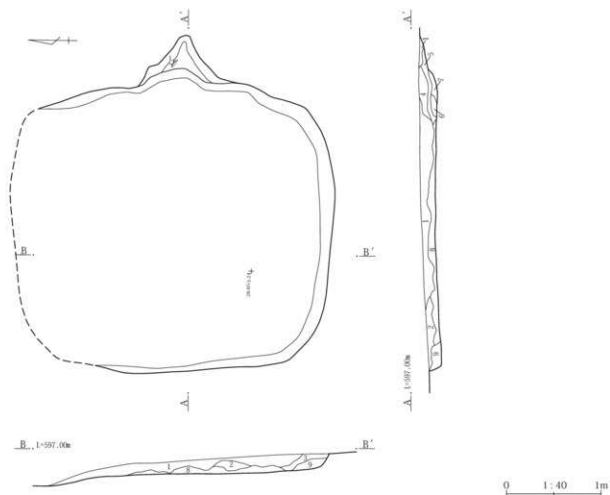
本遺跡で調査された遺構は、縄文時代の掘立柱建物跡2棟、柱穴列3基、柱穴状土坑。平安時代住居跡1軒、焼土遺構。平安時代～近世の畑跡、近世天明泥流下畑跡などである。ここでは、時期別順の記述ではなく、遺構別に本遺跡で調査された遺構を述べる。

1. 住居跡

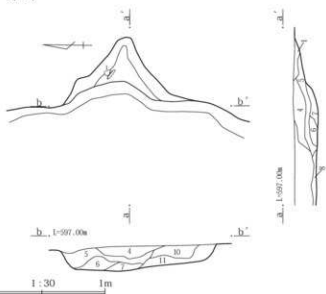
1号住居跡(66図 PL.25・31)

調査区東側で検出した。調査区内で、最も緩やかな北斜面地形に立地していた小型の住居跡である。平面形は北側壁を逸するが、規模3.1×3.3m程の小型の正方形を呈する。深さは最深部で19cmを測り、やや浅い。

調査区東半部において天明泥流下面の調査後、幾つかの試掘坑を設けた下層試掘調査の際に、焼土を確認し、暗褐色～灰褐色埋土の広がりを確認したため、住居跡と

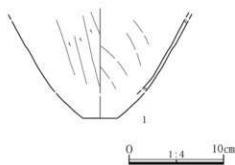


カマド

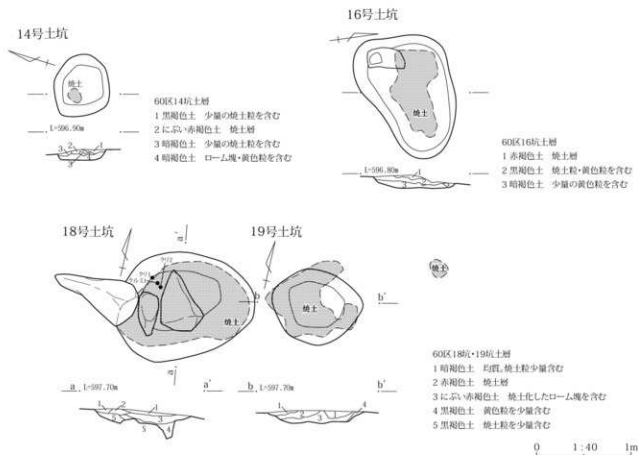


住居(カマド)土層

- 1 暗褐色土 灰色味を帯びる。軟質で均質。炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 褐色土塊を多く含む。軟質
- 3 暗褐色土 褐色粒子を少量含む
- 4 赤褐色土 焼土塊を主体とする。黒色土塊を含む
- 5 暗褐色土 小型の褐色土塊・焼土粒・炭化物を含む
- 6 黒褐色土 少量の白色粒・炭化物を含む
- 7 暗褐色土 白色粒・黄色粒・炭化物を含む
- 8 黒褐色土 微量の白色粒を含む
- 9 黒褐色土 少量の白色粒・炭化物を含む。しまりやや強い
- 10 黒褐色土 黄褐色土塊を少量含む。軟質
- 11 黒褐色土 焼土粒を少量含む。しまりはやや強い



66図 1号住居跡及びカマド・出土遺物



67図 焼土遺構

して調査した。確認面及び基盤層は黒褐色土(Ⅲb層)である。

単独の検出で、近接する住居跡も重複する遺構もない。南西約2.5mに焼土遺構である18号土坑と19号土坑が近接しており、この2遺構とは関連性を窺わせよう。

カマドは、東壁ほぼ中央で確認した。煙道は緩やかな傾斜をもって、約70cm壁外に突出し、燃烧部中央からやや北寄りに焼土がまとまる。袖石などの構築材は出土していない。

床面は黒褐色土(Ⅲb層)を地床とし、顕著な硬化面は確認できなかったが、平坦面を保ちつつ、緩やかに北側へ傾斜する。壁周溝・柱穴・貯蔵穴は見られなかった。

遺物は、土師器破片16点、須恵器坏類破片1点が出土し、カマド出土の土師器甕体部破片を1点図示し得た。他の破片類は図化には耐えられなかった。住居内の出土遺物も僅少で、住居跡時期の特定は果たせない。土師器甕体部破片の特徴から、9世紀代が窺えよう。

住居跡としては、カマドのみの検出で、柱穴・貯蔵穴などの施設を見ない。規模も小型であり、出土遺物も少

ないことから、簡便な短期間居住の燃烧施設として考えておきたい。

2. 焼土遺構(67図 PL.25)

1号住居跡周辺には、数箇所の焼土遺構を見た。遺構確認段階では、住居跡カマドの可能性も念頭に置き、調査を進めたが、竪穴施設を伴わないため、焼土遺構として扱う。なお、発掘調査では土坑番号を付けて、記録化しているため、ここでも土坑名で報告する。また、ここでは扱っていないが、13号土坑も埋土中に焼土層を確認している。調査では、焼土遺構として扱わず、焼土範囲を記録化できなかった。焼土遺構としての可能性も残す遺構として、位置付けておきたい。

60区14号土坑:調査区東側で確認された。近接遺構としては、1号住居が北約0.7mに近接し、16号土坑が約0.4m北西にある。Ⅲb層中の平面形確認で、底面も黒褐色土内に止まる。

焼土は径15cm程の小範囲にまとまり、塊状に検出された。下部に約70×60×9cmの浅い不整形円形を呈する土坑

を持つ。出土遺物は無かった。

60区16号土坑:調査区東側14号坑北西に近接して調査された。1号住とも近接距離にあり約1.6m南東に見る。Ⅲb層中の平面形確認で、底面も黒褐色土内に止まる。

焼土は93×36cm程の範囲でまとまり、下位に深さ7cm程の浅い掘り込みを持つ。平面形は不整形円形を呈し、約132×84cmを測る。出土遺物は無い。

18号土坑:調査区東側で確認された。60区S-23グリッドに位置する。焼土遺構である19号土坑と東西に隣接し、約20cm東に接する距離にある。1号住とはやや距離を持つが、約2.7m北東に近接している。西側は基盤礫の露出が点在し、本土坑底面や西壁も大型自然石が露出していた。確認面はⅢb層で、底面はⅢc層に達していた。

焼土は約121×83cmの比較的大きい範囲で確認された。焼土の厚さも9cm程で、他の焼土遺構に比して厚く確認された。下位に不整形円状を呈する掘り込みを有する。規模は約148×84×20cmで、浅い皿状の断面形を示す。出土遺物として、炭化クリと炭化カルミを見る。いずれも焼土中の出土である。

19号土坑:調査区東側で調査された。西に18号坑と隣接しており、両土坑の関連性を窺わせよう。1号住とは約2mの距離で近接する。

焼土は、70～90cmの範囲で確認された。80cm程東にも焼土塊が認められ、本遺構との関連性が窺われる。下位に不整形円形を平面形とする掘り込みを持つ。規模は約100×75×10cmで浅い皿状の断面形を示す。焼土も底面まで確認され、良好な残存状態を示していた。出土遺物は無かった。

4基の焼土遺構は、1号住を挟んで南北に2基1対の配置で検出されている。出土土器を見ないことから、詳細な時期は特定できないが、焼土の様相が近似し、占地状況も同様なことから、1号住との関連性を想定し、9世紀代を推定しておきたい。また、性格に関しても、1号住と同様に簡素な燃焼施設として位置付けられよう。18号坑より出土した、炭化果実の存在も検討項目の一つである。

3. 掘立柱建物跡及び柱穴列

調査区南半では、土坑群と伴に2棟の掘立柱建物跡(以下建物)と柱穴列3基を検出した。71区と61区に広がり、2面目の調査面(Ⅲb～Ⅳ層)で調査された。2面目の調査では、基盤礫の露出が著しく、土坑などの遺構は、基盤礫を避けて設けられていた。この土坑調査の際に、土層断面に柱痕を観察する土坑が多数見られた。よって、建物跡の存在を想定して、各土坑・ピットの配列を注意したところ、2棟の建物跡を抽出できた。同時に柱穴列も確認できたが、柱穴列としてはではなく、建物跡の可能性を追求した結果の柱穴列である。

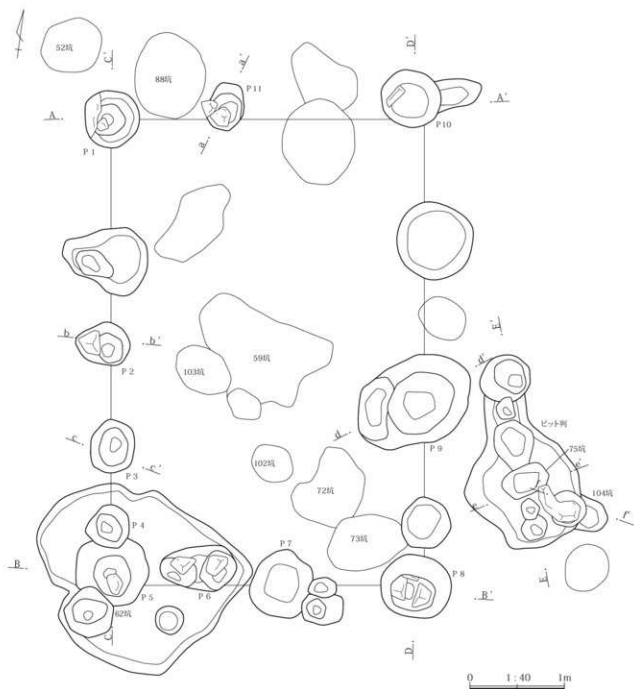
1号建物跡(68・69図 PL.26・31)

調査区北西側で調査した。11基の柱穴からなる。70区X・Y-3～5グリッドに位置する。周辺は土坑・ピット群が存在する箇所、柱痕を持つ例を抽出し、配置の妥当性を捉えた建物跡である。本遺構調査の際には、各柱穴・ピットは当初土坑として記録をしている。調査中に建物跡として位置付け、整理段階で、対応する土坑にピット番号を付した。よって、土坑番号に欠番が生じている。これは後述する2号建物跡や1～3号柱穴列も同様である。

周辺は谷頭状の地形で、北東から南～北西にかけて基盤礫が多く露出し、本遺構や土坑群は、やや低地にかかる礫が比較的少ない箇所密集して検出されている。周辺地形は北西側への緩傾斜地形で約5°を測る。

長軸を北北西(N-N7°-W)に持ち、長方形の柱穴配列を示す。但し梁と考えた短辺と、桁長辺が必ずしも直角はしておらず、やや歪な長方形を呈していた。規模は約4.9×3.2mでやや小型の建物跡である。柱穴規模は径約45～70cm、深さ35～55cmを測るように、柱穴規模としては小型の建物跡として妥当性を見る。柱穴は基盤礫に大きく影響されていた。壁・底面にかかる礫を避けた設営のために、平面規模や配置に誤差が生じていた。柱穴土層を観察すると、壁・坑底面の自然礫の間に、柱痕を見る例もあった。平面図において、柱穴底面などに礫の表現があるが、これは基盤礫であり、礎石などの人為的な所産ではない。

柱穴配置は不規則である。例えば、西辺のP1～P5



68図 1号掘立柱建物跡(1)

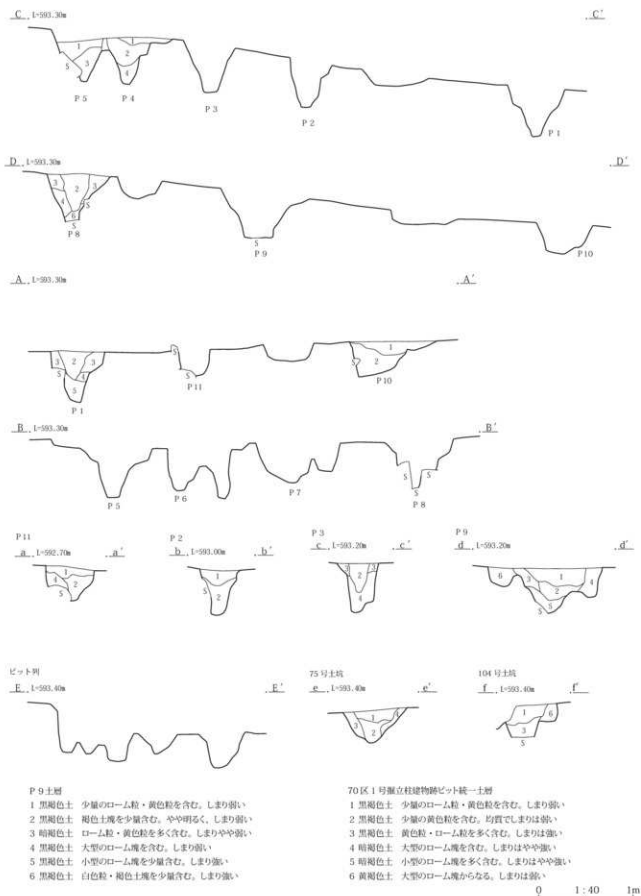
の柱穴間距離もP1-P2間が約2.5m、P2-P3間約1.0m、P3-P5間が約1.4mと統一性を見ない。これは東辺も同様で、P8-P9間約1.8m、P9-P10間約3.1mであり、西辺と東辺の柱穴間距離や柱穴数に不一致点があり、整然とした配置とは言えない。また、建物跡長軸が南北に近く、北西側への地形傾斜角度を考慮すると、建物自体の安定性にも問題が残る。

柱穴以外の施設は確認できず、灰跡・焼土も見られなかった。遺物はP1・P3・P4から縄文時代後期土器片が少

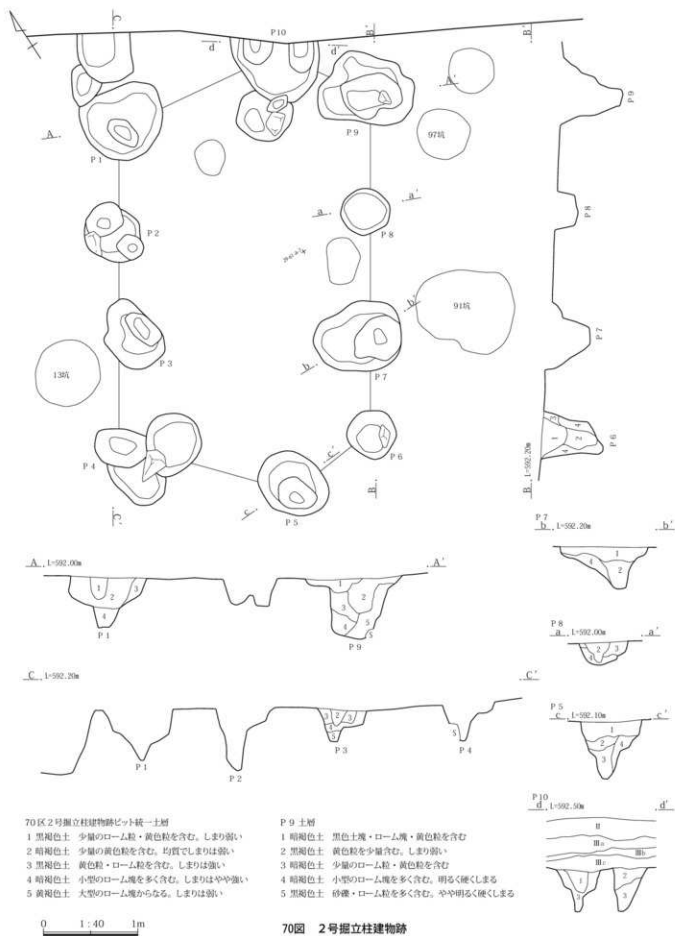
数ながら出土している。土器片の示す時期は多少の時間差が認められるが、周辺及び柱穴内からも、その他の時代の遺物が皆無なことから、本建物跡の時期も縄文時代後期初頭～前葉に求めたい。

2号建物跡(70図 PL.26)

調査区北西端で28地区70区と29地区61区に跨がって検出した(61・70区Y・A-6・7)。遺構名は70区を優先し、2号建物跡とした。遺構確認面は、Ⅲb層～Ⅳ層である。



69図 1号竪立柱建物跡(2)エレベーション及ピット土層



周辺は、調査区内の低位標高部分にあたり、徐々に傾斜が緩やかになる地点である。周辺には目立った遺構は見られず、1号建物跡とは南東に約6.5m距離を置くが、基盤礫や希薄になる、谷頭状の低位部分に占地する。

10基の柱穴からなる。2間×3間の配置を示すが、棟持ち柱を南北に設ける平面形を捉えた。長軸を北北東に向け、北西の地形傾斜とは交わる角度で設けられている。規模は、3.4×2.5mの小型の方形を呈すが、四隅の柱穴配置は必ずしも整ってはおらず、東辺が僅かに北側へずれるため、平面形態はやや歪つたものである。棟持ち柱に相当する柱穴を北辺と南辺に1基ずつ検出している(P5・P10)。両柱穴間の距離は4.6m程で強い突出ではなく、全体の平面形からは、やや東に偏る傾向が見られる。また、P10は断面の観察では新旧の判断が果たせなかったが、底面は対ビット状に小ビットが配される形態は注意したい。

その他の柱穴配置や柱穴間の距離は、1号建物跡と比較して整った配置である。P1-P2間及びP2-P3間が約1.0mで等しく、P3-P4間も約1.2mで大きな差ではない。対する東辺柱穴もほぼ1.0～1.2mの間隔で設けられており、柱穴個数も対応する配置である。各柱穴規模も径50～80cmにまとまり、深さも40～60cmの例が多い。小型ながら、掘り込みもしっかりしており、柱痕を持つ例も見られ良好な規模といえよう。

埴・焼土は確認できなかった。また周辺及び柱穴内からも、遺物の出土を見ない。遺構外出土遺物で、後期土器片が見られたが、図示に耐えられず、時期を確定する材料とはならない。

ここでは、1号建物跡柱穴埋土との類似性や、本建物跡の平面形から縄文時代後期と時期を充てたいが、確定的ではない。

2棟の建物跡を土坑群・ビット群の中から抽出したが、縄文時代中・後期集落に見られる、径1m前後の柱穴による構成ではなく、小型の柱穴を主とした掘立柱建物跡である。また、調査区内では傾斜の弱い箇所での検出とはいえ、約5・6°の傾斜地における建物跡であり、やや不安定な上屋が想定できる。調査区内には同時期の竪穴住居もなく、集落跡内施設としても孤立した印象を受ける遺構である。おそらく北側の調査区域外に同時期の

遺構が予想されるが、集落の縁辺に見られる建物と考えておきたい。

1号柱穴列(71図 PL.26)

調査区東側70区で調査した。土坑群が密集する箇所であり、調査中は土坑の幾つかに柱痕が認められたため、建物跡の存在を想定し、組み合わせる柱穴を精査したが、果たせなかった。僅かに、土坑群西側に南北に並ぶ4基の柱穴を抽出できたため、柱穴列として報告する。

調査区東側北斜面70区S-1・2グリッドに位置する。周辺地形の傾斜角は5°前後を測るが、西側傾斜に比して緩やかであり、基盤礫の露出も希薄な地点である。軸を北東に向け(N-17°-E)、距離約5.5mに渡って4基の柱穴が並ぶ。径40～70cmで深さも40～50cmを測り、良好な掘り込みである。柱穴間の距離は、P1-P2間が1.3m、P2-P3間が1.9m、P3-P4間は1.7mと統一性は見られないものの、ほぼ直線上に並ぶ柱穴列である。

焼土、柱穴内遺物などは見られなかったが、本遺構に近接する70区S-3グリッドで、堀之内I式期の小型深鉢がまとまって出土している。関連性を窺いたい、可能性を提示するのみである。

2号柱穴列(72図 PL.26)

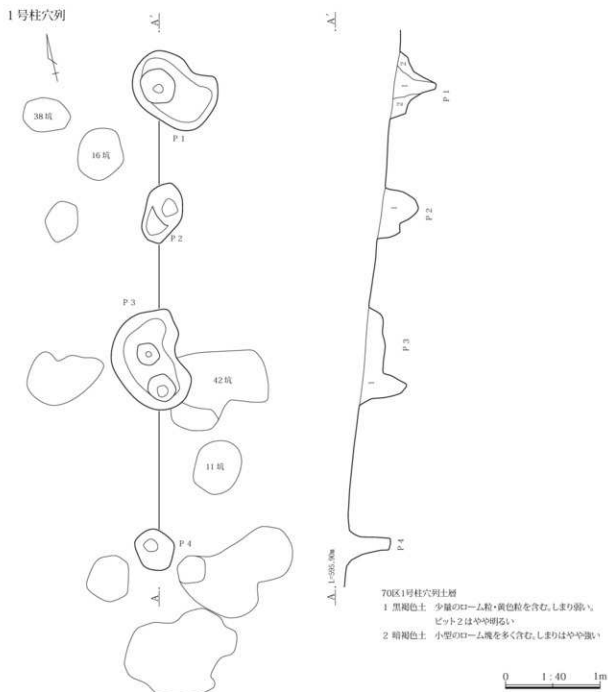
調査区中央やや北より(70区W-1・2)で調査した。周辺は北側及び北西側への斜面地形にあり、約7°の傾斜角を測り、基盤礫の露出がやや多い地点でもある。長さ約4.3mの距離に3基の柱穴が並ぶ。径70～100cmで深さも50～60cmにまとまり、掘り込みも良好である。なお、P2・P3は柱穴やビットの重複と思われる。柱穴間の距離は、P1～P2間、P2～P3間ともに1.9m前後であり、等距離にあるといえよう。

出土遺物は、柱穴内、周辺からも見られず、時期の特定は果たせない。

3号柱穴列(72図 PL.26)

調査区中央やや北よりで検出した(70区W-2～4)。2号柱穴列が南約1.7mに近接する。また1号建物跡が北西約3.0mにある。周辺は北西への斜面地形が強いが、本遺構は軸を等高線に沿っており、遺構自体の傾斜角は6°前後である。

軸を北北東に向け(N-6°-E)、約4.6mの距離に4基



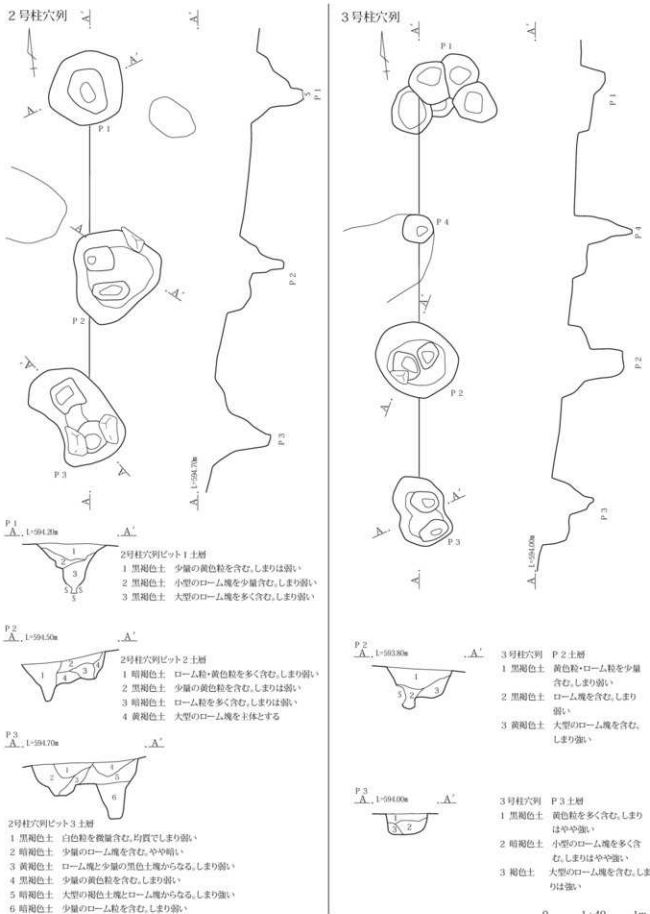
71図 1号柱穴列

の柱穴が並ぶ。柱穴の平面規模は統一性がない。これは、P3とP4が2基以上のピットが重複するためと思われる、おそらく、P1・P2が示す径30～40cm程度の小ピットからなる柱穴列と考える。柱穴間距離はP1-P2間が1.6m、P2-P3間が1.4m、P3-P4間が1.5m程で、等距離の配置といえよう。

柱穴内、周辺からも出土遺物は見られなかった。時期は不明である。

先にも述べたように、本遺跡の3基の柱穴列は建物跡

検出の際に、対応するピットを見出すことができず、柱穴列として、位置付けた経緯がある。柵としての性格は捉え難く、おそらく、建物の一部であり何らかの上屋構造を想定した、柱穴列と考えている。斜面地における掘立柱建物跡の在り方など、今後の検討課題の一つにしたい。



72図 2・3号柱穴列

4. 土坑(73図～79図 PL.27)

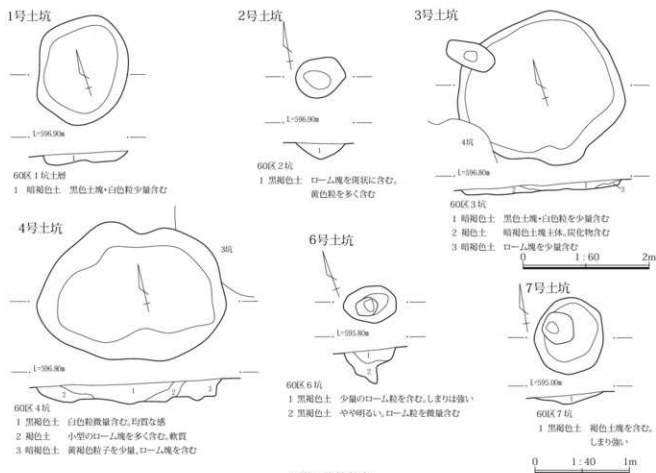
西久保IV遺跡では145基の土坑を調査した。調査にあたって、竪穴住居跡等の大型遺構を除き、検出段階で性格不明な竪穴遺構をすべて土坑として遺構名を付けた。その結果、平安時代の焼土遺構や縄文時代に比定される1号・2号建物跡を構成する柱穴などに土坑名が付されている。整理段階では、これらの土坑名を焼土遺構あるいは柱穴として位置付け、柱穴にはピット番号を充てた。故に、土坑番号には、幾つかの欠番が生じている。

本遺跡の土坑は、全て2面目の調査面で作られた遺構である。その分布状況を見ると、調査区東側60区で得られた土坑に関しては、散在的な分布を示すが、埋土の特徴から、平安時代の遺構埋土に近似する。特に1号住居跡周辺から70区東端の土坑は、平安時代に属する可能性が高い。70区の土坑は2箇所に分かれる分布である。東側の土坑群は露出礫を避けた設営だが、その中から縄文時代に比定される1号柱穴を抽出できた。その他の土坑も関連性を探ったが、残念ながら、時期・性格は不明

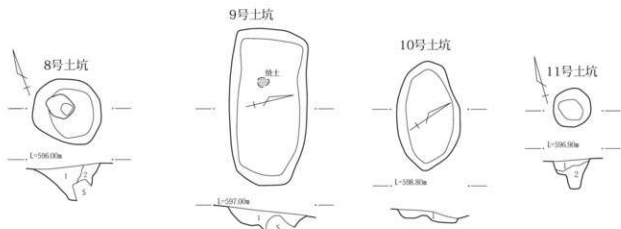
である。70区北西側の土坑群は、谷地形でやはり基盤礫が少ない箇所に集中する。1号建物跡や2号・3号柱穴列、61区にかけて2号建物跡が見ることができた。その他の土坑に関しては、一部に柱痕などを見たが、建物跡との関連性は確定できなかった。

検出された土坑は、殆どが不整形を呈し、遺物の出土も極めて希薄であり、有機的な所産と捉えたい例も多い。その中で、土坑-柱穴として位置付けられる例が幾つか見ることができた。土層観察で柱痕が観察された例や、径40～100cmで深さが50cm以上ある例は、柱穴としての性格付けも可能性がある。詳細は巻末の遺構計測表を参照されたい。

なお、当地域の土坑調査としては、陥穴状土坑が挙げられるが、本遺跡では残念ながら検出されなかった。吾妻川右岸に関しては、極めて陥穴状土坑の検出例が少ない傾向がある。本遺跡もその例に漏れなかった。



73図 土坑(1)



60区 8坑

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む、しまりは強い
- 2 黒褐色土 暗褐色土・ローム塊を多く含む、しまりは強い

60区 9坑

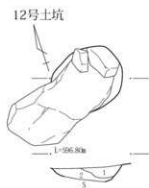
- 1 黒褐色土 上層に焼土を見る。黄色粒を少量含む、しまりは強い

60区 10坑

- 1 黒褐色土 ローム塊を少量含む、軟質

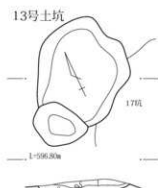
60区 11坑

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む、軟質
- 2 暗褐色土 ローム塊を多く含む、軟質



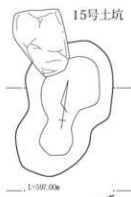
60区 12坑

- 1 黒褐色土 ローム塊を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム塊を含む



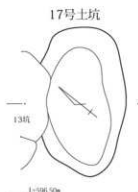
60区 13坑

- 1 黒褐色土 小型の焼土塊を多く含む
- 2 黒褐色土 焼土粒・黄色粒を含む



60区 15坑

- 1 黒褐色土 黄色粒・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む



17号土坑



20号土坑

- 60区 20坑
- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む、やや軟質
 - 2 褐色土 ローム塊を多く含む、軟質

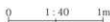


21号土坑

- 60区 21坑
- 1 黒褐色土 白色粒を含む、軟質
 - 2 黒褐色土 大型のローム塊を含む、軟質
 - 3 暗褐色土 ローム塊を多く含む、やや軟質
 - 4 褐色土 ローム塊主体

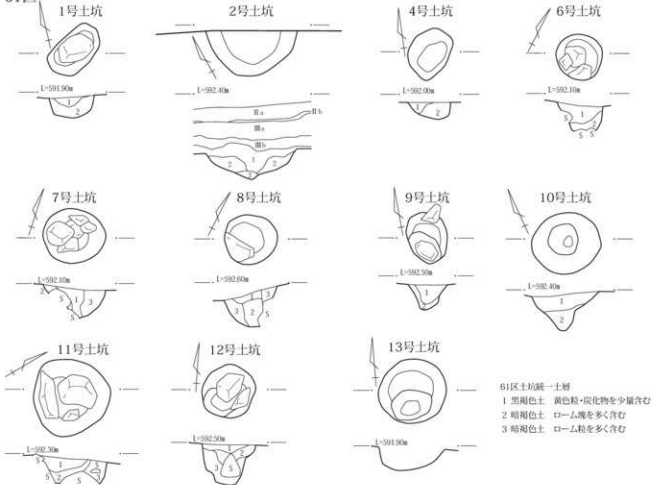


22号土坑

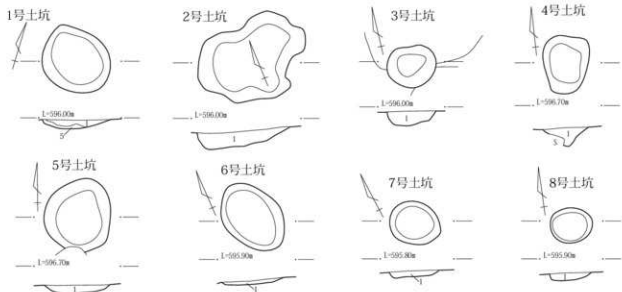


74図 土坑(2)

61区



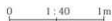
70区

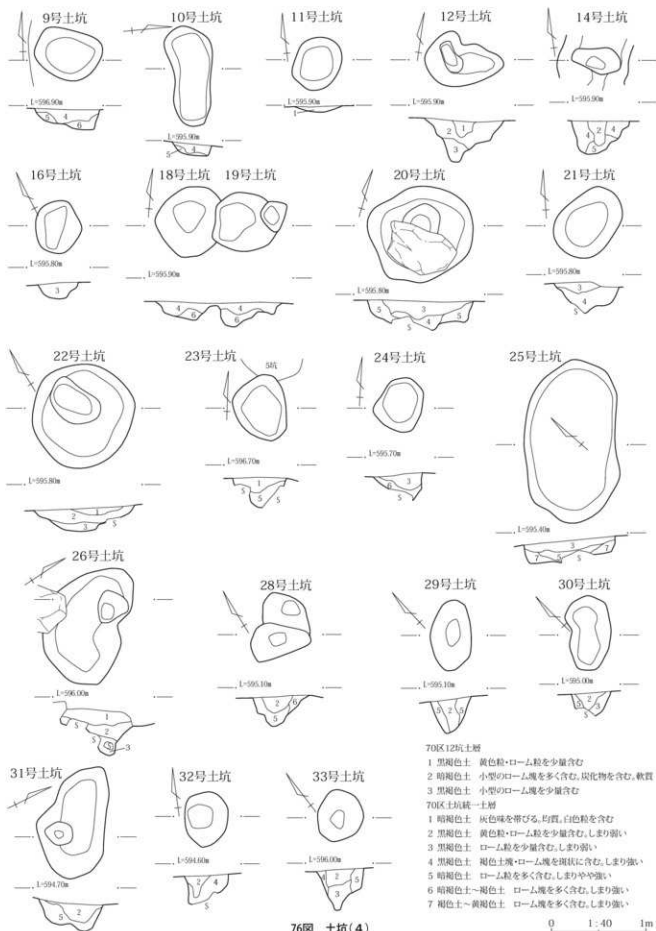


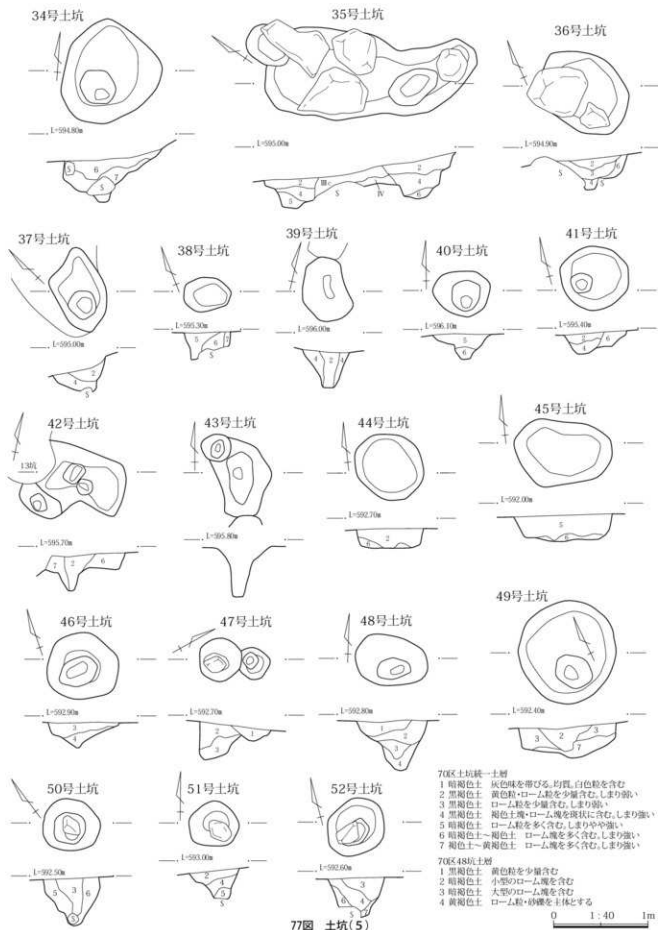
70区土坑統一土層

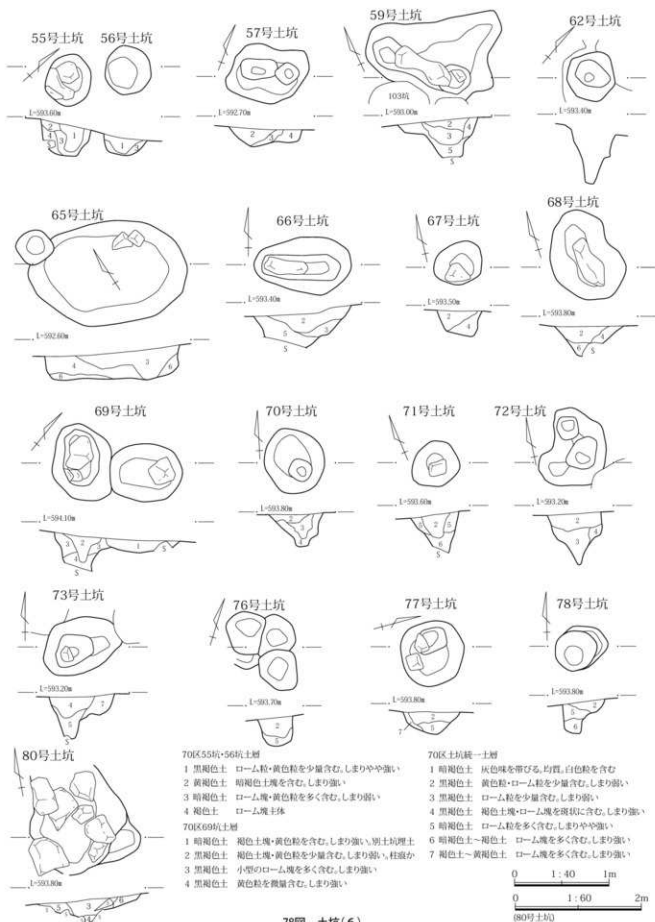
- 1 暗褐色土 灰色味を帯びる。均孔。白色粒を含む
 2 黒褐色土 黄色粒・ローム粒を少量含む。しまり強い
 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまり強い
 4 黒褐色土 褐色土塊・ローム塊を面状に含む。しまり強い
 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりやや強い
 6 暗褐色土～褐色土 ローム塊を多く含む。しまり強い
 7 褐色土～黄褐色土 ローム塊を多く含む。しまり強い

75図 土坑(3)

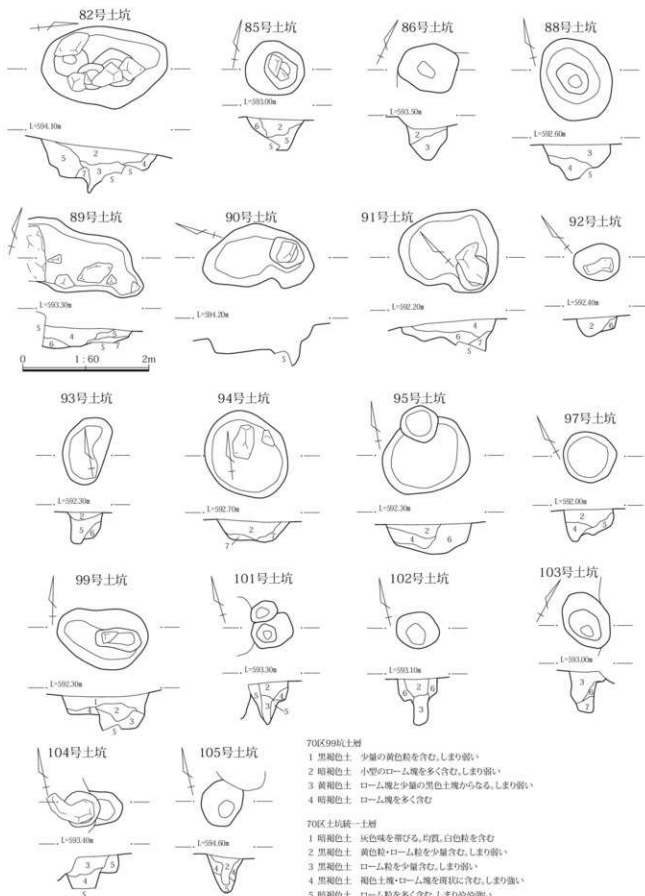




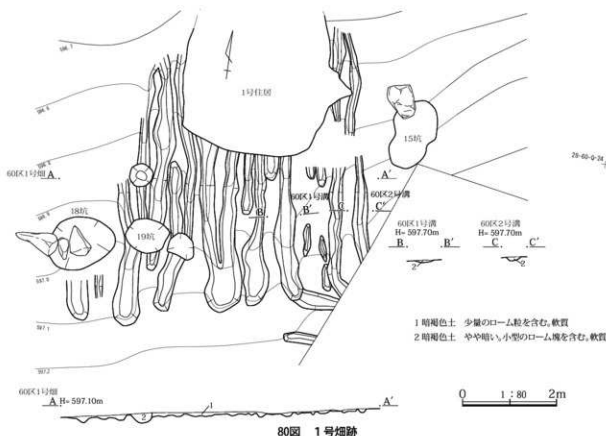




78図 土坑(6)



79図 土坑(7)



5. 烟跡(80図 PL.27)

西久保IV遺跡では、Ⅱ層下面でAs-A泥流下面と下層のⅢ層での2面調査を行っている。Ⅱ層下面では天明泥流下烟跡を検出し、Ⅲ層中では平安時代住居跡や縄文時代建物跡を調査している。このⅢ層中の調査でも、小範囲ながら烟跡を検出した。調査中は1号畑として資料化を果たしたが、平成21年度調査において、天明泥流下烟跡の一部を1号畑跡として記録しており、混乱を避ける上で、Ⅲ層中の烟跡には遺構番号を付さずに報告する。

調査区東側で検出した。60区R・S-23・24グリッドに位置する。周辺は緩やかな北斜面で、1号住や焼土遺構である18号坑・19号坑と重複して調査された。走向を北北西に向け(N-8°-W)、長さ5.8m、幅6.7mの範囲にサク状溝(以下サク)を10条以上検出した。暗褐色土であるⅢb層中の平面形確認で、サク覆土にはふい褐色土～褐灰色で、明瞭な平面形把握は困難だった。サクは南側で端部を揃え、北西方向へやや断続的に走向する。サク間の距離は狭い箇所では30cm前後だが、平均的には50～60cm幅の間隔で設けられる。幅狭の箇所はサク相互の重複であろう。サク底面はⅢc層まで及んでおり、凹凸が著しく不連続な印象を得る。

畑跡東側は同様な走向で1号溝と2号溝を見る。これも畑跡に伴う遺構で、区画溝などの性格が想起されよう。1号溝は南側でクランク状に屈曲し、調査区域外に延びる。南側のサク端部とクランク状屈曲箇所は平行し、このことから、畑単位の一部が把握できよう。北側は、1号住と斜面地形のため判然とせず、断続的な走向を示す。また、西側はサク相互の重複が著しかった。

畑耕土に相当する土層は特定できないが、Ⅲb層中のふい褐色土と考える。少量の炭化物を含むが、人為的な例とは断定できない。

畑跡の走向は南北に近い走向である。これは、地形傾斜に沿う形態であり、例えば、天明泥流畑跡とは様相を異にする。サクとウネによる保水は無視した走向といえよう。

畑跡の時期であるが、1号住との重複関係は不明であるため、判然としにくい。ただ、焼土遺構である18号坑や19号坑との重複状態を見ると、焼土の散布が著しくなく、畑耕作による焼土遺構の破壊は考え難い。畑焼土遺構という新旧関係を見ておきたい。焼土遺構を1号住と同様の時期に比定したことから、畑跡は1号住より遅る時期に可能性を求めたい。

6. 天明泥流下畑跡(81・82図 PL.28・29)

調査区北半分で検出された畑跡である。天明3年(1783年)浅間山噴火に伴う降下火山灰(As-A)と噴火に伴う泥流(以下天明泥流)によって埋没した畑跡である。北から南への傾斜地形に東西方向のサクを検出した。サクの走向方向はN-75°-E前後で、ほぼ一定方向を向く。サクにはAs-Aが薄く堆積しており、調査方法としてAs-Aを除去することなく、サク走向の確認を行った。これは当事業団のハッ場ダム調査地域における調査方法の一つである。なお、南東部分を除く南側の高標高部分大半においては、基盤礫の露出が著しく、サクの痕跡は見出せなかった。おそらく、畑範囲からは外れる地点と考えられよう。

サクは、等高線に沿った走向で、周辺他遺跡における泥流下畑とほぼ同様な様相である。しかしながら、本遺跡の泥流下畑は、露出した基盤礫を避けて、礫の露出の少ない緩傾斜地を選地していた。

本遺跡の泥流下畑の遺存度は極めて悪く、断続的な走向を示していた。サクの深度も浅く、サク平面形も不明瞭で把握に困難が伴った。ウネ部分も、当時の地表面が遺存しているとはいえ、平坦でウネ状の高まりや耕起痕跡は見られなかった。このように、ウネ・サクの遺存が不良なため畑単位や円形平坦面など、畑跡に伴う属性や諸施設の詳細な確定には至らなかった。

その中で、調査区東側で傾斜地形を利用した段差を見ることができた。平成21年度調査区と23年度調査区に跨がり、東西方向の走向で約27mに渡って検出された。各所で緩やかな湾曲があるがほぼ直線方向の走向で、走向方位は東北東(N-75°-E)を向く。サクとほぼ同一方向の走向である。北側低位部と南側高位部の比高差は50～60cm程で、70cmを超える箇所もあった。段差は西端に向



天明泥流下畑跡 段差

かうほど低くなり、60区U-23グリッド付近で、斜面地形と一体化し消失する。段差の北側と南側はやや平坦面が保たれており、21年度調査は道状遺構として把握したが、23年度調査では、サクを見ることから、道状遺構としてではなく耕作に伴う導線としての道状の平坦面と捉えた。この平坦面南側のサクは段差北側サクとは畑単位として分別できよう。

その他の畑単位は明瞭ではない。調査区北西部61区E～U-1～6グリッドで検出したクランク状の平面形を示す道状の凹みに区画された箇所も、あるいは単位と捉えられるが、規則性も見られず明瞭ではないため、判断を控えたい。前述のように露出礫を避けた畑選地であり、区画単位を設ける程の面積を確保できなかったと判断したい。この道状の凹みによる区画単位は確定し難い。

溝は、21年度調査で東西の走向を持って1条が確認されている。長軸長は約10mで平成23年度調査区には達しておらず、幅約0.3～0.7m、深さ4～17cm程の浅く小規模な溝である。走向方位はN-73°-E前後で、サク方向との一致を見出せよう。溝底面の傾斜は無く、ほぼ水平に近い底面を示すことから、水利等の供用ではなく、畑単位溝や地境溝といった性格が充てられよう。1号円形平坦面が南に接する様相からも、泥流下畑内の一施設と見ることができる。

円形平坦面は2基を調査した(82図)。畑跡検出面積の割には少ないが、これは畑跡全体の遺存度の低さもあり、サク以上に浅い平坦面は確認できなかったためである。なお、中グリッドで遺構番号を変えているので、1号平坦面が2基ある。60区と51区に属する例である。

60区1号平坦面は、21年度調査で得られた。60区O-22グリッドに位置する。周溝状に幅25cm程度の細い溝が円形に巡る。南東方向と北西方向に途切れが見られるが、これは残存度に影響するものである。溝の深さは5cm前後であり、極めて浅い。平坦面規模は径1.4m程の不整円形を呈す。1号溝が北に近接する。1号溝が畑単位を画する溝とすれば、畑の単位境に設けられた施設として考えた。

51区1号平坦面は23年度調査である。51区A-25グリッドで検出した。調査着手時は周溝状に確認されたが、平面形は明瞭ではなく、凹み状の検出となった。径約1.5×1.3mの不整円形を平面形とする。浅い皿状の断面形

を呈し、深さは12cmを測る。周辺には北西約70cmにサクの痕跡を見るが、南側には耕作痕跡を見ない。あるいは畑範囲外に設定された施設であろうか。

円形平坦面は、堆肥などを貯蔵する桶状の容器底部痕跡と見られている。周辺遺跡では、畑単位を意識した等間隔に配置された様相である。本遺跡の場合、遺存度も悪く、円形平坦面の配置までは特定できなかった。ただ、露出する基盤礫を避けた畑耕作状況を考えると、円形平坦面も露出する礫を避けたはずであり、等間隔配置は採らなかったと考えられる。

植物遺存体も、栽培作物を特定する良好な例は無かった。As-Aよりやや浮いた状態で出土した例が幾つか見られたが、泥流中の出土であり、流入と判断した。このことから、畑機能の停止状態が想起された。

西久保IV遺跡で調査された泥流下畑跡は、残りの悪い例ではあるが、吾妻川中位段丘面にまで、As-A泥流が被覆する事実が提示された。調査区の南に近接して、長野原町教育委員会が試掘調査を行ったが、その際にも泥流の堆積が認められ、層厚から泥流の天端と判断されている。

さらに、畑耕作地としては高標高で、急斜面地形の立地条件でも、耕作行為が及んだ例として、当時の畑地範囲を捉える意味でも良好な資料を提供することになる。周辺遺跡の該期畑跡は比較的平坦地に近い地形に営まれており、本遺跡のような斜面地形にまで畑作を拡大した様相は、注意しておくべきである。

さて、検出された畑跡サクは、断続的な走向で全体像の把握にも苦慮した。遺存状態の悪い、不明瞭な畑跡である。この要因を幾つか挙げてみる。

一つに泥流流下方向(西から東)とサクの方向が一致していたこともある。西久保IV遺跡は吾妻川の蛇行により北側へ突出した形態の段丘面に位置する。おそらく、天明泥流被災の際には、本遺跡が乗る突出した段丘面は、吾妻川泥流攻撃面となり、かなり強い力で地表面を削り取ったものと思われる。調査区内では、大型自然礫が泥流流下方向へ移動した痕跡が、各所に見られた。流下礫は当時の地表面を畑サクと同一方向に溝状に流れたため、サク走向と一致し、サクを破壊したものと考えられる。

次の要因の一つに、泥流流下前の畑そのものの状態が挙げられよう。泥流による当時の地表面削平を想定した

としても、同じ条件の尾坂遺跡や久々戸遺跡などでは、サクの平面形は明確に残り、畑単位や円形平坦面等、諸施設の把握が果たせるのである。対して、本遺跡のサクは断続的であり、辛うじて走向方向のみが捉えられるだけである。さらに、両遺跡とも泥流下あるいはAs-A下に麻などの栽培植物の痕跡が多々見られる特徴がある。前述のように、本遺跡は皆無といつてよいほど、植物遺体は採取できなかった。この差は、畑本来の状態を勘案するべきであろう。おそらく、本遺跡の泥流下畑は休耕中の畑あるいは廃棄された畑と考えるのが妥当であろう。連作障害を避ける意味での休耕畑は、例えば渋川市(旧子持村)のBr-FP下の畑跡にその解釈が充てられている。また、廃棄畑とすると、本遺跡の地理的条件が原因であろう。急勾配で夥しい基盤礫の存在は、広域な畑耕作には向かず、小規模で生産性の低い畑と判断されたのではないか。

休耕畑・廃棄畑として、一定期間放置されサクの痕跡が弱くなった際に泥流流下による削平を受けたものと捉えておきたい。

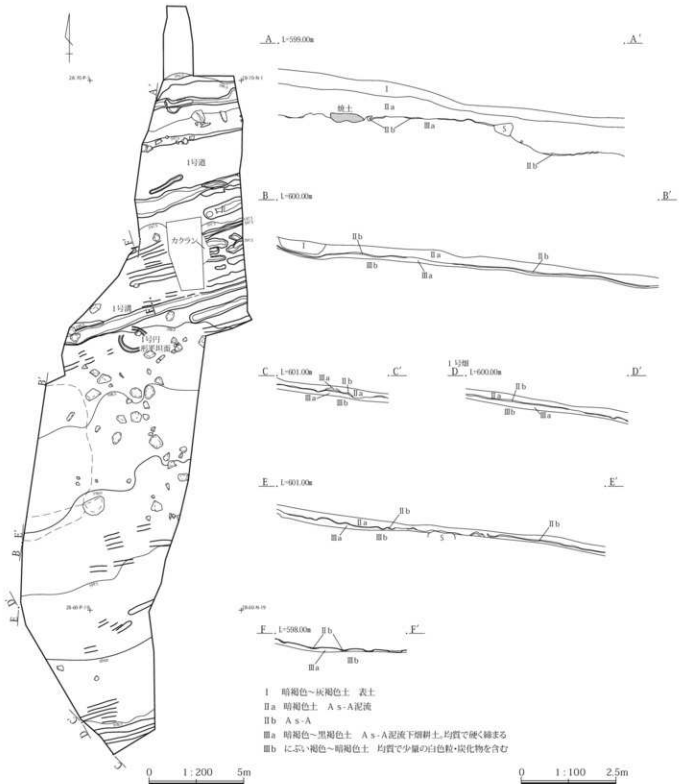
7. 遺構外出土遺物(83・84図 PL.30)

本遺跡は全体的に出土遺物が少ない。遺構出土例も僅かで、各遺構の時期特定に苦慮する。そのなかで、遺構確認時に出土した遺物や、天明泥流下畑跡検出時の出土例を遺構外出土遺物として掲載する。

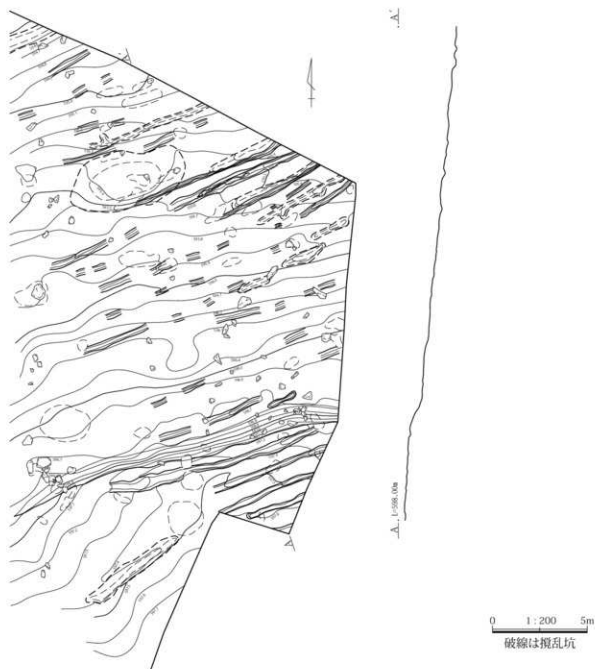
縄文土器では、60区出土の2点(1・2)が前期末葉から中期初頭に比定されよう。対して70区出土の6点(3～8)は中期～後期の所産であり、特に8は1号柱穴列北から東側でまとまって出土した堀之内1式土器である。1号柱穴列への帰属も考えたが、確定的ではないので控えた。1号柱穴列が東に延びる建物跡の一部とすれば、本例も建物跡への帰属が果たせたが、残念ながら遺構外扱いとなった。

石器は60区2点、70区2点と偏りは見られない(13～16)。打製石斧が3点出土しているが、縄文時代中～後期の所産であろう。

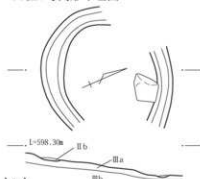
平安時代の遺物も土器類を中心に凶化したが、極めて少量である(9～12)。また残存率も悪く、図示し得た資料も口径・器形などは判然としない。しかしながら、60区出土であり、出土位置周辺の1号住や焼土遺構に伴



81図 西久保IV遺跡(東調査区)第1面

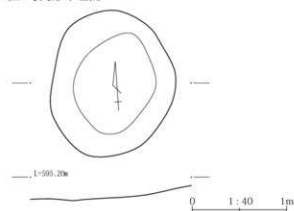


60区1号円形平坦面

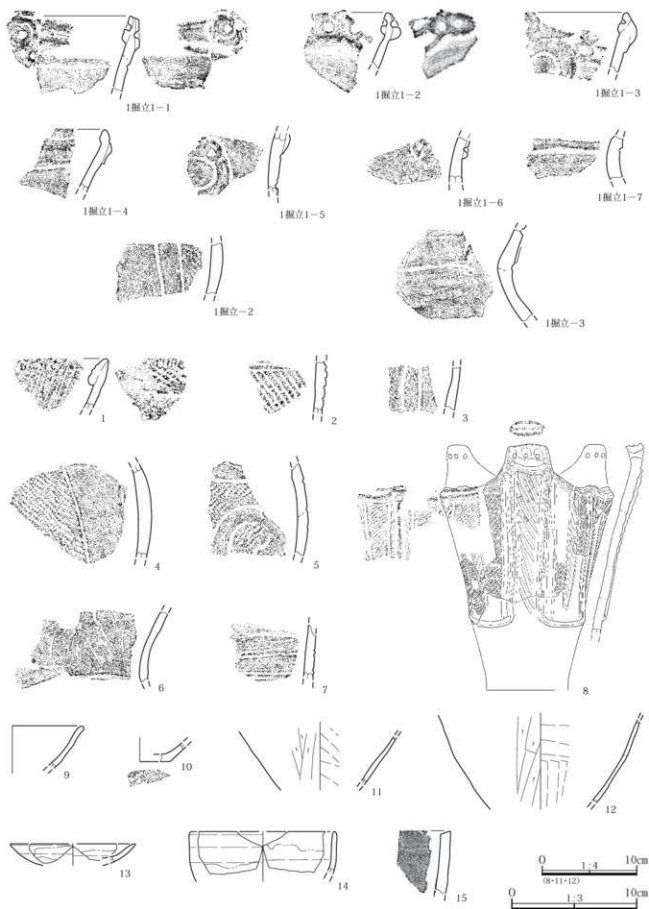


- II b A s-A
- III a 暗褐色～黒褐色土 A s-A泥灰下層粘土均質で硬く締まる
- III b 濃い褐色～暗褐色土 均質で少量の白色粉・炭化物を含む

51区1号円形平坦面



82図 西久保IV遺跡(西調査区)第1面・第1面円形平坦面



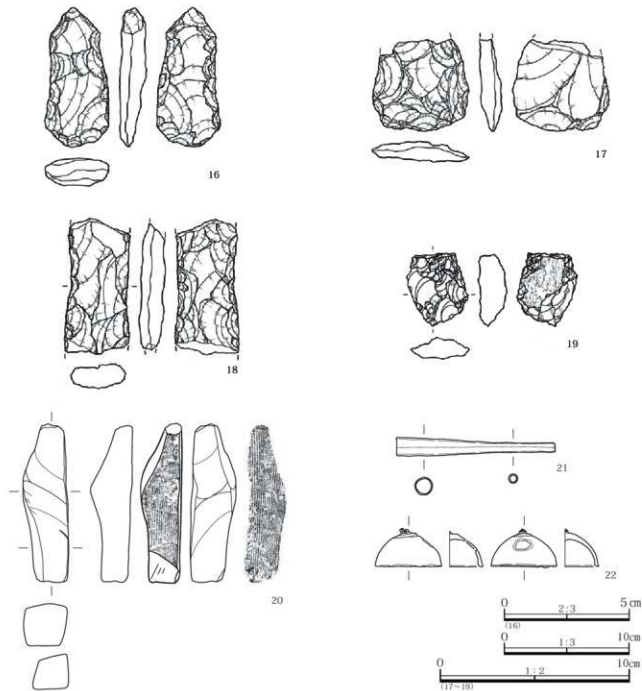
83図 1号掘立柱建物跡・遺構外(1)出土遺物

う例と考えている。70I区で出土した砥石は(20)、あるいは該期の所産であろうか。

中世遺物としては、小皿・碗・内耳土器3点を図示した(13～15)。小片資料であり、本遺跡に中世段階の遺構を見ないが、周辺遺跡に類例を求めたい。

近世遺物としては、煙管吸い口(21)が61I区で天明泥流中より出土している。出土地点周辺の畑サクは不明瞭だが、当地域の天明泥流下畑跡からは、煙管出土例が多く見られる。喫煙の風習が浸透していたものと推定する。

不明金属製品(22)は、鈴などの上半部を転用したものが。上端部に摘みを有し、懸架する使用方法が想起されよう。体部上半の穿孔は転用後の所産であり意図的である。調査区東南の高標高部分で天明泥流直下より出土している。周辺は基盤礫の露出が著しく、サクの痕跡は見られなかった。畑耕作に伴うものではない。



84図 遺構外出土遺物(2)

表6 西久保IV遺跡 遺構計測表

1号住居跡

住居跡名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物	時期
1号住居跡	335	315	19	N-91°-E	60R・S23・24	1号畑		平安
カマド	66.6	75.6	18.4	N-92°-E	60R・S23		土師器表体部破片	

1号建物跡

遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物	時期			
1号建物跡	491	320	—	N-7.6°-W	70X・Y 3～5		縄文後期土器片3点	後期			
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
1号ピット	60	58	53	2号ピット	60	46	53	3号ピット	56	48	55
4号ピット	44	44	44	5号ピット	80	80	51	6号ピット	79	42	50
7号ピット	70	64	39	8号ピット	76	64	52	9号ピット	128	92	50
10号ピット	64	60	32	11号ピット	50	36	45				

2号建物跡

遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物	時期			
2号建物跡	338	254	—	N-32°-E	61・70Y・A-6・7		なし	後期			
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
1号ピット	88	76	55	2号ピット	68	56	68	3号ピット	76	52	35
4号ピット	—	39	40	5号ピット	76	60	59	6号ピット	52	48	63
7号ピット	92	60	46	8号ピット	52	50	26	9号ピット	104	72	64
10号ピット	—	92	47								

柱穴列

遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物	時期			
1号柱穴列	548	—	—	N-17°-E	70S1・2		周辺に縄文後期土器	後期			
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
1号ピット	112	72	49	2号ピット	64	40	42	3号ピット	108	68	59
4号ピット	44	44	47								
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物	時期			
2号柱穴列	431	—	—	N-9°-E	70M1・2		なし	不明			
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
1号ピット	80	76	56	2号ピット	96	96	62	3号ピット	114	72	63
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	グリッド位置	重複遺構	出土遺物	時期			
3号柱穴列	461	—	—	N-6°-E	70W2～4		なし	不明			
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ
1号ピット	45	38	32	2号ピット	29	33	64	3号ピット	88	72	63
4号ピット	74	48	54								

土坑

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
28-60I区				
1号土坑	120	92	3	60Q・R25
2号土坑	56	40	32	60R25
3号土坑	264	244	21	60R25
4号土坑	200	188	13	60S25
6号土坑	56	40	43	60V25
7号土坑	80	72	41	60W25
8号土坑	76	72	9	60W23・24
9号土坑	168	84	15	60V22
10号土坑	116	64	7	60V19
11号土坑	40	40	34	60U23
12号土坑	76	—	11	60T23
13号土坑	112	100	18	60S・T24・25
14号土坑	68	60	9	60S24
15号土坑	132	72	19	60Q・R23・24

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
16号土坑	132	84	7	60S23・24
17号土坑	160	84	23	60S24・25
18号土坑	148	84	20	60S23
19号土坑	100	76	8	60S23
20号土坑	116	92	29	60・70R25・1
21号土坑	72	48	14	60V25
22号土坑	128	—	12	60U25
29-61I区				
1号土坑	64	36	53	61A7
2号土坑	—	—	21	61A7・8
4号土坑	56	48	21	61B7
6号土坑	48	48	35	61B6
7号土坑	68	56	35	61B6
8号土坑	56	48	30	61B6
9号土坑	56	40	13	61Y5

土坑

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
10号土坑	76	68	44	61A5
11号土坑	80	72	27	61A・B6
12号土坑	56	52	43	61・70Y・A5
13号土坑	72	68	20	61A7
28-70区				
1号土坑	76	64	13	70S1
2号土坑	96	92	22	70S1
3号土坑	50	48	19	70R1
4号土坑	64	52	22	70R1
5号土坑	76	72	13	70P・Q1
6号土坑	84	60	10	70Q2
7号土坑	56	44	9	70Q3
8号土坑	44	38	11	70R2
9号土坑	68	52	26	70R2
10号土坑	108	52	12	70R・S2
11号土坑	56	48	10	70S1
12号土坑	84	60	48	70S2
14号土坑	170	76	35	70R・S2・3
16号土坑	56	52	38	70S2
18号土坑	74	70	35	70R2
19号土坑	68	64	24	70R2
20号土坑	108	96	34	70R2
21号土坑	80	60	33	70Q・R2・3
22号土坑	112	108	34	70Q3
23号土坑	68	56	38	70P・Q1
24号土坑	56	48	17	70U1
25号土坑	172	96	22	70R2・3
26号土坑	132	80	29	70P・Q1・2
28号土坑	64	40	33	70V1
29号土坑	116	44	41	70V1
30号土坑	80	48	32	70V1
31号土坑	120	72	54	70V2
32号土坑	60	48	35	70V2
33号土坑	52	52	44	70S1
28-70区				
34号土坑	108	100	55	70U・V2
35号土坑	224	96	53	70U3
36号土坑	100	80	38	70U3
37号土坑	192	92	42	70U2・3
38号土坑	52	36	22	70S2
39号土坑	68	48	43	70S1
40号土坑	60	50	42	70R1
41号土坑	72	68	19	70R2
42号土坑	-	84	43	70S2
43号土坑	80	66	57	70S1
44号土坑	74	68	21	70X6

遺構名	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
45号土坑	100	72	29	70Y6
46号土坑	78	72	35	61・70A・Y4
47号土坑	46	44	38	70Y5
48号土坑	76	56	56	70Y4
49号土坑	106	104	52	70X6
50号土坑	60	60	59	70Y5
51号土坑	50	50	33	70X4・5
52号土坑	60	60	44	70Y5
55号土坑	52	50	32	70Y3
56号土坑	48	48	29	70Y3
57号土坑	74	60	45	70Y5
59号土坑	128	100	54	70X4
62号土坑	52	48	55	70Y3
65号土坑	168	112	38	70X5
66号土坑	104	62	54	70W・X3
67号土坑	52	44	33	70X3
68号土坑	100	74	36	70X3
69号土坑	a:80 b:76	60 64	46 21	70X2
70号土坑	68	64	45	70X2
71号土坑	52	46	40	70X3
72号土坑	84	72	57	70X4
73号土坑	80	60	49	70X4
75号土坑	208	120	61	70W・X4
76号土坑	48	44	30	70W4
77号土坑	68	68	50	70V4
78号土坑	56	44	41	70W3
80号土坑	284	156	54	70W・X3
82号土坑	132	88	64	70W2
85号土坑	60	56	46	70W1
86号土坑	60	52	53	70W3
88号土坑	88	74	46	70Y5
89号土坑	268	104	41	70Y4
90号土坑	120	64	35	70W2
91号土坑	100	100	27	70Y6
92号土坑	50	40	30	70Y6
93号土坑	72	48	34	70Y6
94号土坑	96	84	38	70Y6
95号土坑	96	76	33	70Y6
97号土坑	56	52	30	70Y7
99号土坑	96	66	39	70X・Y5・6
101号土坑	44	36	48	70X3
102号土坑	44	40	53	28X4
103号土坑	64	48	51	70X4
104号土坑	-	36	21	70W4
105号土坑	-	44	46	70W1

表7 西久保IV遺跡 出土土物観察表

1号住居跡

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	挿図番号 図版番号
60K 1住1	上器器 裏 底部破片	口: 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 普通	カマド	残存率低く、器形等の判断は困難。外面は縦位へラ削り、内面は斜位へラ削りを施す	66図 PL.30

1号掘立柱建物跡

掲載番号	器種・残存	出土位置	①胎土②色調③焼成	文様などの特徴	挿図番号 図版番号
1号掘立 1-1〜 7	深鉢 口縁～体部上半破 片7点	P1埋土	① 細:石英・輝石 ② にぶい黄褐色 ③ 普通	口縁部内屈し、小型の環状突起や8字状突起を内外面に付す。口縁部は肥厚し、横位隆線と沈線を描き、突起周辺には凹形刺突文を施す。頸部は無文で突起直下より縦位8字状貼付文が体部に接続する。体部は低位隆部による半渦巻状意匠が配される。側縁は沈線。後期初葉か	83図 PL.30
1号掘立 2	深鉢 体部破片	P2埋土	① 細:石英・輝石 ② にぶい赤褐色 ③ 普通	僅かに内湾する体部。垂下沈線に画された磨消部と施文部。施文部縄文は縦位LR充填施文。磨消部は弱い研磨を加える。交互構成ではなく、無文部と施文部の間を磨消部による意匠が配されると思われる。後期初葉か	83図 PL.30
1号掘立 3	深鉢 頸部破片	P4埋土	① 細:石英・輝石 ② にぶい黄褐色 ③ 普通	頸部屈曲部を跨ぐ縦位貼付文を剥落する。貼付文上下より横位沈線が派生する。外面研磨を施す。後期前葉か	83図 PL.30

遺構外出土土物

掲載番号	器種・残存	出土位置	①胎土②色調③焼成	文様などの特徴	挿図番号 図版番号
1	深鉢 口縁部破片	60-R25 3号坑埋土	① 粗:石英・雲母 ② にぶい赤褐色 ③ やや軟質	外面は斜位平行沈線を施す。内面肥厚部に斜位平行沈線と沈線1条による疎らな斜格子文を充填する。口縁部に帯系を施す。器面磨滅する。前期末葉～中期初葉か	83図 PL.30
2	深鉢 体部破片	60-U1 IIIc層	① 粗:石英・雲母 ② にぶい赤褐色 ③ やや軟質	横位沈線以下斜位平行沈線を充填する。平行沈線は内皮施文。器面磨滅。前期末葉～中期初葉か	83図 PL.30
3	深鉢 体部破片	70-A23 IIIc層	① 細:輝石 ② にぶい赤褐色 ③ 良好	垂下沈線に画された磨消部と施文部。施文部は縦位LR充填施文後縦位波状沈線を加える。中期後葉か	83図 PL.30
4	深鉢 体部破片	70-X3 IIIc層	① 粗:石英・輝石 ② にぶい黄褐色 ③ 普通	横位沈線に画された施文部と磨消部による分岐垂文構成。施文部縄文はLR縦位充填施文。中期末葉か	83図 PL.30
5	深鉢 体部破片	70-Y3 IIIc層	① 粗:輝石 ② にぶい黄褐色 ③ 良好	2条の沈線に画された磨消部弧状・渦巻状意匠。縄文はLR横位充填施文。後期初葉か	83図 PL.30
6	深鉢 頸部破片	70-A1-U1 ・V1-V3 IIIc層	① 細:輝石 ② にぶい黄褐色 ③ 良好	無文で外反する頸部。体部上半に横位沈線を設けるが、弧状であろうか。器厚薄手。後期前葉	83図 PL.30
7	深鉢 体部破片	70-U4 IIIc層	① 粗:石英・片岩 ② にぶい褐色 ③ やや軟質	横位条線を地文とし、横位平行沈線が加わる。内面も条線が器面磨滅し判然としな。弥生中期か	83図 PL.30
8	深鉢 口縁～体部1/3 残存	70-S3・R2 ・190K	① 細:輝石 ② にぶい褐色 ③ 良好	口径17.5cm程度の小型深鉢。直線的に開く器形。小孔を3個穿つ口縁部突起を付す。おそらく3単位。突起下端より垂下する隆線が、波底部小突起より垂下する隆線と体部下半で横位隆線が繋ぎ区画化する。側縁は1・2条の沈線。区画内は沈線による縦位長楕円状意匠を配し斜位短沈線を充填する。短沈線は突起下にも施される。地文は縦位LR。後期前葉か	83図 PL.30
9	須恵器 環・埴類 口縁部破片	法量 口:(11.4) 底: 高:	① 細:石英 ② 灰白色 ③ やや軟質	成・整形の特徴など	83図 PL.30
10	須恵器 環 底部破片	口: 底:(4.8) 高:	① 粗:石英 ② 浅黄色 ③ 良好	残存率極めて低く、器形等の判断は困難。右回転輪軸整形。底部回転車切り後無調整	83図 PL.30
11	上器器 裏 体部破片	口: 底: 高:	① 微細・輝石 ② にぶい褐色 ③ 普通	残存率極めて低く、器形等の判断は困難。外面は縦位へラ削り、内面は斜位へラ削りを施す	83図 PL.30
12	上器器 裏 体部破片	口: 底: 高:	① 細:小礫 ② にぶい褐色 ③ 普通	残存率極めて低く、器形等の判断は困難。外面は縦位へラ削り、内面は下半は縦位、上半は横位へラ削りを施す。外面保存者	83図 PL.30
13	陶器 皿 口縁部破片	口:(10.2) 底: 高:(1.6)	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻	縁輪小道。古瀬戸	83図 PL.30

遺構外出土遺物

掲載番号	器種・残存	法量	①胎土②色調③焼成	出土位置	成・整形の特徴など	検出番号 図版番号
14	陶器 碗 口縁部破片	口:(11.5) 底: 高:(9.4)	① 緻密 ② 灰白色 ③ 堅緻		尾呂茶碗か。瀬戸美濃。近世	83回 PL.30
15	在地土器 内耳土器 口縁部破片	口: 底: 高:	① 粗・小礫 ② にふい・黄橙 ③ 普通		内外面横撫で。口縁端部平坦。僅かにくぼむ	83回 PL.30
16	打製石斧 完存	石材	法	量(cm・g)	成・整形の特徴など	83回 PL.30
		粗粒輝石安山岩	長:7.0 幅:5.1 厚:2.0 重:116.2	扁平な横長割片を素材とし、頭部にやや厚みを残す。裏面対部に僅かな磨滅痕を見るが顕著ではない		
17	打製石斧 基部欠損	細粒輝石安山岩	長:(7.2) 幅:7.6 厚:1.2 重:96.9		裏面加撃による切断欠損。対部再調整時の欠損か。表面対部に磨滅痕を見る	83回 PL.30
18	打製石斧 基部・対部欠損	紫蘇輝石質 通輝石安山岩	長:(10.7) 幅:5.1 厚:3.0 重:153.0		中央表裏に広い割離で平坦面を作出した後、左右縁辺に細かい割離を備す。基部・対部欠損とも表面からの折段欠損	83回 PL.30
19	加工痕のある割片 石器 完存	黒曜石	長:2.9 幅:2.4 厚:1.1 重:7.5		裏面に大きく自然面を残す。右側縁の割離が不連続なため挿器としての判断を控えた。不純物多い石材	83回 PL.30
20	砥石 端部欠損	法	量(cm・g)	成・整形の特徴など		83回 PL.30
		長:8.4 幅:2.3 厚:2.2 重:50.8		砥沢石。手持ち砥。二面を頻繁に使用し湾曲が著しい。未使用面二面には鋸痕を縦位に見る		
21	煙管 喉口部残存	長:8.4 幅:0.5~0.9 重:9.0			罎守などの残存物は無い	83回 PL.30
22	鈴?	高:(2.0) 径:3.5 重:131.0			鋳製品であろうか。鈴などの球形品上平を切断した再利用品か。上端に小型の横みを持ち、体部中に意図的な穿孔が及ぶ	83回 PL.30



2面目 試掘調査風景

第7章 まとめ

1. 平安時代の集落について

(1) 竪穴住居の占地

榎木1遺跡では、平安時代の竪穴住居4軒と、後述する竈屋と考えられる遺構1基を確認した。遺跡は北側が丘陵に移行する急な斜面、西側と東側は谷、南側はおそらく段丘崖と考えられる段差でそれぞれ区切られた南北50m、東西120mほどの緩やかな南傾斜の平坦地に立地している。平安時代の住居を確認した発掘区域は南北25m、東西40mの範囲で、住居は狭い平坦地に15mほどの間隔を置いて、1・2号住居と3・4号住居が二つの単位を成すかのように分布している(図1)。

遺跡の中央部は、西側との比高がローム層上面において70cmほどの浅い谷状を呈すが、遺構検出面のV層上面においてはほぼ平坦で、住居が立地するのに著しい支障がある地形とは思えない(図2)。したがって、見掛け上では占地する空間があるにもかかわらず、1・2号住居は重複して占地するという特異な分布を示す。

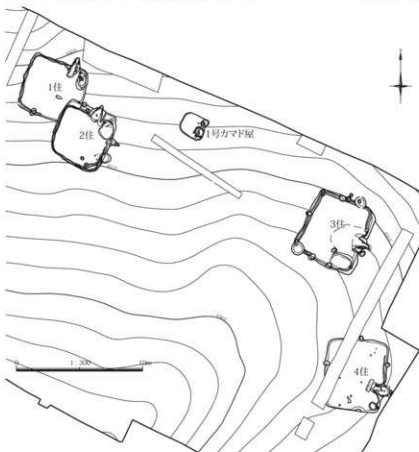


図1 榎木1遺跡 平安時代集落



図2 榎木1遺跡 平安時代集落全景(西から)

(2) 竪穴住居の年代と住居形態

確認した1~4号住居は、出土遺物からいずれも9世紀後半と考えられ、大きな時間幅はないようだ。但し、1号住居と2号住居は重複していることから明らかに時間差があり、全てが同時存在したものではない。しかし、1号住居と2号住居は、併存する土器の型式からその年代は極めて近接しており、2号住居には人為的に埋められた痕跡があることから、両者は2号住居→1号住居の順で時間的に連続している可能性が高い。

各住居の規模は、1・2号住居が短軸約4.5m、長軸約5.0m、3・4号住居が短軸約5.0m、長軸約6.0mであり、1・2号住居と3・4号住居がそれぞれ近似した規模をもつ(図3)。

竈の位置は2号住居が東壁から北壁へ造り替えをしてはいるが、最終的に1・2号住居が北壁竈で、3・4号住居は東壁竈である。また、いずれも板状の石を袖部などの芯材にしているが、1号住居は石材の長軸を横(水平方向)に用い、3・4号住居は縦(垂直方向)に用いている。なお、2号住居は石材が遺存していない。

柱穴は、1・2号住居が壁内に明確な主柱穴を持たないのに対して、3・4号住居は壁に沿ったほぼ近似した位置にいわゆる壁柱穴を配置している(図3)。

以上のことから、規模、竈、柱穴の状況からみると1号住居と2号住居が近似し、また同様に3号住居と4号住居もそれぞれ近似した住居形態を呈している。

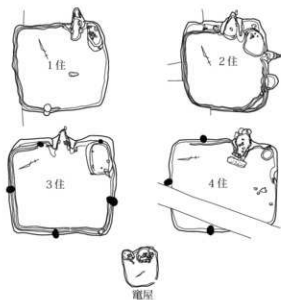


図3 榎木1遺跡 1～4号住居・竈屋(5=1/200)

(3) 竈穴住居の分類と変遷

前述した住居の年代と形態から、1・2号住居と3・4号住居のグループ分けが可能である。このうち、1・2号住居は重複して時間差があり、2号住居→1号住居の順で時間的に連続している可能性が高い。この順は、2号住居に「コ」の字状を呈する口縁部の土師器裏が、1号住居に口縁部の「コ」の字状が崩れて器内が厚くなった「コ」の字状口縁部の系譜の土師器裏及び、羽釜がそれぞれ伴出することとの矛盾が認められない。

一方、3号住居と4号住居の前後関係を証明する実証的な資料はなく、伴出する土師器裏にも明確な型式差は認められない。したがって、両者は同時存在した可能性もあることから、当初2号住居、3号住居、4号住居が存在し、その後1号住居が造られた可能性が高い。

(4) 竈屋の存在とその意義

この遺跡では、一辺1.8m四方、確認面からの深さ5cmで、東壁に竈を設置した竈穴状の遺構を確認した(図4)。この遺構は、他の竈穴住居とはその平面的な規模及び掘り込みの浅さなどの形態を大きく異にし、居住するには小さ過ぎる一方で竈を備えていることから、竈穴住居と同時期で集落内の共同の煮炊き用施設である竈屋との判断をした(※1)。伴出する土師器裏は、「コ」の字状を呈する口縁部の形状が2号住居、3号住居、4号住居のものに近似していることから、この集落の成立当初のものと考えられる。



図4 竈屋全景(西から)

この遺構が竈屋であると仮定した場合、他の同時期の竈穴住居は竈を有することから、この遺跡には竈穴住居とともに集落を構成した、竈をもたない居住施設としての平地式建物が存在した可能性が考えられる(子持村教委1990)。

一方、この遺跡では見掛け上においては遺跡の中央部に占地が可能な空間があるにもかかわらず、1・2号住居は重複して占地している。この重複という現象はこうした平地式建物などの分布による、立地上の制約が存在した可能性を示している。但し、渋川市(田子持村)黒井峯遺跡の例にみるように、竈穴住居の周囲には広い範囲に竈が作られていることから、竈穴住居の立地上の制約には、平地式建物だけではなく竈がその要因となった可能性も考えられるが、いずれにしても火山灰などで被覆されない限り検出が不可能な、竈穴住居以外の集落を構成した遺構が存在した可能性がある。

以上、いずれの内容も仮説の域を出ないが、今後この地域の集落分析にあたっては、竈及び竈などを視野に入れた住居の分布に関する分析の必要性をひとつの問題提起としたい。

注)

※1 平地式建物は、地面をほとんど掘り込むことなく、当時の地面をそのまま床面とする建物である。竈屋とした遺構は他の住居が確認面からの深さ約50cmであるのに対して約5cmと浅く、おそらく平地式建物に近い形態であったものと考えられる。

引用・参考文献

子持村教育委員会 1990『黒井峯遺跡』
 飯口 一→三浦京子 1986『奈良・平安時代の土器の編年』『群馬県史研究』
 第24号 p18-p55 群馬県史編さん委員会

2. 概括

本報告書は、群馬県吾妻郡長野原町林及び横壁に所在する、榎木Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、西久保Ⅳ遺跡の発掘調査資料をまとめた。3遺跡とも調査面積も小規模で、調査期間も短い。しかしながら、遺跡の内容は各々が小規模ながらも重要な資料を提供しており、周辺地域の資料と併せ、今後十分に活用される内容を保持する調査資料である。

ここでは、各遺跡の調査成果を概括的にまとめ、終章とした。

榎木Ⅰ遺跡

9世紀後半段階の竪穴住居跡4軒で構成される小規模な集落跡である。住居跡や集落跡全体像に関しては、前項に詳しいため、ここでは、特徴的な出土遺物を介して、榎木Ⅰ遺跡の平安時代集落を概観してみよう。

4軒の出土遺物を概観すると、少量ながら墨書土器の出土を見ることができる。各住居跡出土土器に一定量の組成を占めるようで、特に2号住居跡出土例が良好である。この傾向は林地区の該期集落跡に顕著で、例えば隣接する榎木Ⅱ遺跡でも多くの墨書土器の出土が報告されている。他には、林宮原遺跡や上原Ⅱ遺跡にも豊富な出土例が見られ、林地区における墨書土器の在り方をさらに考える必要がある。

次に、3号住居跡出土遺物に見られる小型鎌と芋引き状鉄製品を注意してみよう。既に芋引き状鉄製品は、麻や芋などの繊維を採取する際の工具として位置付けられている(原2011・富田2012)。当時の生業形態の一面を具体化する出土遺物と見られるが、当時の畑作物の特定にも参考となる資料である。おそらく、麻などは商品作物として流通し、当地域で積極的に栽培されていたものと考えられよう。また、商品化に至る多くの行程が、本遺跡の平安時代集落内で行われていたものと想定でき、その生産過程の一工程を担う芋引き状鉄製品あるいは小型鎌と位置付けたい。

さらに、前項でも触れ得た、竈屋にも注意を払うと、1号住・2号住と3号住・4号住という居住地からは一定の距離を保つ箇所に占地する小型の燃焼施設として位置付けられる。加えて2号カマドも近接しており、竈屋

周辺は居住とは別の燃焼施設を設ける箇所として見ることができよう。あるいは、芋引き状鉄製品・小型鎌が麻・芋などの加工具と位置付け、竈屋とその周辺は、「麻煮」などの麻加工工程の一部を担う施設として、想定できないだろうか。確定性に乏しい竈屋の性格付けだが、居住区外燃焼施設としては、作物などの煮沸加工も予想されよう。

2号～4号住居跡からは、鉄滓の出土を見る。住居跡内からはがや羽口の出土はなく、小鍛冶遺構ではない。おそらく、周辺に予想される鍛冶関連施設からの流入・廃棄と考えられよう。また、鉄滓を出土しない1号住居跡が4軒の住居跡では唯一羽釜を出土するように、9世紀後半から10世紀に至る間に、本遺跡周辺での鍛冶関連施設の衰退・移動が窺えよう。

時代は前後するが、調査区西で検出された1号建物跡は礎石建物であり、当地域の近世建物跡の一つとして数少ない例を提示する。出土遺物が希薄で詳細な時期が特定できないのが大変残念だが、母屋及び周辺を開発する石垣、溝などを見る事ができた。吾妻川中位・下位段丘では、天明3年に発生した浅間泥流による埋没屋敷跡の調査例が知られる。最上位段丘に位置する榎木Ⅰ遺跡で、調査された建物跡は天明期よりは下り、遺存度もやや不良だが、当地区の近世建物の様相を具体化する例であろう。特に、占地状況を見ると、斜面に造成された平坦地に立地しており、榎木Ⅱ遺跡で検出された中世建物群の占地状況に近似する。1号建物跡は近世の所産ではあるが、周辺にはひな壇状の平坦地が点在する様相から、近世建物を選定する際に中世建物のあった平坦地を選ぶ例は十分予想される。本遺跡1号建物跡の詳細な消長は判然としないが、中世段階から継続的な居住も今後は捉えるべきであろう。

中世遺構としては、4号集石、31号土坑・35号土坑・52号土坑が位置付けられる。4号集石及び52号土坑は宋銭2枚の出土を見ることから、墓坑を想定できるが、人骨の出土を見ないため、確定性に乏しい。

弥生時代に比定される遺構は見られなかった。僅かに遺構外出土遺物として数点の土器片を提示できた。前期の所産と考える。

縄文時代に属する遺構は48号土坑が挙げられよう。中期初頭～前葉の所産である。小型深鉢が出土しており、

焼土を伴う出土状態から墓坑の可能性を示すが、確定的ではない。小型深鉢は幅狭の口縁部文様帯に非対称突起を付し、腰部懸垂文構成を呈す例である。共伴資料は見られないが、五領ケ台2式あるいは勝坂式直前段階と考えた。類例は榎木Ⅱ遺跡や立馬Ⅱ遺跡などに見られるが、いずれも林地地区であり、当該期の集落が林地地区に広がる様相は特筆したい。

上原Ⅳ遺跡

事業団調査としては2次調査にあたる。縄文時代後期配石遺構や近世木製品などを調査した前回調査を鑑み、また地元で伝わる朝林寺域が予想されたため、2次目の調査にあたったが、土坑6基と縄文時代包含層の調査となった。

土坑の詳細な時期は不明であるが、おそらく中～近世の所産と捉えられる。周辺には近～現代の墓域があることから墓坑の可能性が高い。

縄文時代包含層は調査区北東部にあたる。前回調査地点よりは、標高が高く、上原Ⅰ遺跡が東に近接する箇所である。前回の調査では、縄文時代後期前葉～中葉、特に堀之内2式土器を中心とした資料が出土しているが、今回は、堀之内1式土器に偏る傾向が看取された。調査範囲が限定的なため、遺跡の全容は把握できないが、遺跡内地点毎に時期の偏りが窺えることができた。中期中葉の土器片も出土しているが、周辺の概期集落遺跡との関連を想起させよう。周辺遺跡では、阿玉台Ⅰb式や勝坂1式の出土が目立ち、本遺跡の中期資料もその傾向に沿うものである。

西久保Ⅳ遺跡

上原Ⅳ遺跡と同様に遺構密度の希薄な遺跡ではある。天明泥流が1m近く堆積し、直下より畑跡を全面に検出したが、遺存度は不良で、畑単位など詳細把握には至らなかった。本文中では、急斜面地形と露出する基盤礫の存在、さらに畑耕作に伴う連作障害を避ける様相から、休耕畑あるいは廃棄畑の状態を想定した。さらに、泥流による破壊が加わったため、遺存度の悪い畑跡の検出と位置付けた。将来的に隣接地点に調査が及んだ際に、さらに詳細な調査を望みたい。

平安時代に比定した1号住居跡1軒を調査した。出土

遺物は貧弱で、土師器器体部小破片のため詳細な時期を特定できない。住居跡そのものの様相も竈以外に、柱穴・貯蔵穴も見られず、積極的かつ長期の居住痕跡を見出せなかった。想定ではあるが、本報告書に掲載した榎木Ⅰ遺跡で位置付けた「竈屋」と同等の燃焼施設として捉えておきたい。西久保Ⅳ遺跡では、1号住居跡に近接して、数基の焼土遺構が検出されている。これらも併せて、1号住居を中心とした、燃焼施設群として位置付けておきたい。

縄文時代建物跡として2棟の掘立柱建物跡を検出した。その他に、柱穴列を3基加えたが、2号・3号柱穴列の時期は不明である。出土遺物は少量ではあるが、1号掘立柱建物跡柱穴からは後期初頭～前葉に比定される出土土器片を見ることができた。また、1号柱穴列の周辺からも堀之内1式土器のまとまった破片が出土している。このことから、本遺跡は、縄文時代後期初頭～前葉における堅穴住居跡を伴わない、小規模な建物のみで構成される集落跡として捉えるべきであろう。本遺跡が位置する吾妻川右岸横壁地区には、縄文時代中期～晩期の大規模集落跡として著名な横壁中村遺跡が所在する。本遺跡で調査した建物跡は、大規模集落跡外縁に占地する、小規模集落の一部として、その可能性を指摘しておきたい。吾妻川右岸の各河岸段丘面上に、大規模集落と小規模な地点的な集落が点在する様相が当時の景観と考えた。

以上のように、榎木Ⅰ遺跡と上原Ⅳ遺跡、西久保Ⅳ遺跡の調査成果を概略程度にまとめた。短期間で調査・整理・報告にまで至るため、検討に検討を重ねた精緻なまとめではなく、調査及び整理内容を全て網羅していない。詳細は本文を参考にしたい。今後の調査・研究に役立っていただければ幸いである。

参考文献

- 原 明芳 2011 「長野県の古代生業」『日本考古学協会栃木大会研究発表資料』日本考古学協会2011年栃木大会実行委員会
富田孝彦 2011 「林宮原遺跡Ⅵ」長野県町教育委員会

発掘調査報告書抄録

書名ふりがな	にれぎいちいせき・うえはらよんいせきかっこに・にしくぼよんいせき
書名	楡木1遺跡・上原IV遺跡(2)・西久保IV遺跡
副書名	ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第39集
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	549集
編著者名	中沢 悟 坂口 一 山口逸弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20121207
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

遺跡名ふりがな	にれぎいちいせき
遺跡名	楡木1遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやし
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林
市町村コード	10424
遺跡番号	0050
北緯(日本測地系)	363231
東経(日本測地系)	1384007
北緯(世界測地系)	363242
東経(世界測地系)	1383995
調査期間	20090901-20091031
調査面積	3018
調査原因	ハツ場ダム建設に伴う代替地造成
種別	集落/散布地
主な時代	縄文/平安/中・近世
遺跡概要	集落/散布地-縄文-土坑1+土器+石器/弥生-土器/平安-住居跡4+竈屋1+土坑+土器+石器+金属器/近世-礎石建物跡1+石垣1+土坑+溝4+陶磁器
特記事項	平安時代の集落。近世屋敷跡
概要	平安時代集落跡は住居跡4軒ながら、配置から2棟1単位の變遷が示唆された。また、カマド施設を持つ小型の竪穴遺構を竈屋として位置付けた。住居跡出土遺物から9世紀後半段階とされる。3号住からは小型の鉄製鎌や芋引き状鉄製品が出土している。近世屋敷跡は、礎石建物跡1棟の周辺を石垣・溝等で囲繞する。

遺跡名ふりがな	うえはらよんいせき
遺跡名	上原IV遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのほらまちおおあざはやし
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林
市町村コード	10424
遺跡番号	0044
北緯(日本測地系)	363236
東経(日本測地系)	1384046
北緯(世界測地系)	363247
東経(世界測地系)	1384034
調査期間	20090401-20090531
調査面積	1826
調査原因	ハツ場ダム建設に伴う町道拡張工事
種別	集落/散布地
主な時代	縄文/中・近世
遺跡概要	散布地-縄文-土器+石器/集落-中・近世土坑6/陶磁器
特記事項	縄文時代遺物包含層
概要	縄文時代前期末葉～後期前葉の包含層。後期前葉～後葉の資料を主とする前回調査とは、地点による時期差が認められた。土坑の一部は中・近世墓坑の可能性がある

遺跡名ふりがな	にしくぼよんいせき
遺跡名	西久保IV遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのほらまちおおあざよこかべ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字横壁
市町村コード	10424
遺跡番号	0216
北緯(日本測地系)	363226
東経(日本測地系)	1383938
北緯(世界測地系)	363238
東経(世界測地系)	1393926
調査期間	20091201-20091228/20110501-20110630
調査面積	3456
調査原因	ハツ場ダム建設に伴うJR吾妻線付け替え工事及び変電所建設
種別	集落/生産跡
主な時代	縄文/平安/近世
遺跡概要	集落/散布地-縄文-掘立柱建物跡2+柱列3+土坑145+土器+石器/平安-住居跡1+焼土遺構4+畑跡+土器/近世-畑跡+陶磁器+金属器
特記事項	縄文時代後期掘立柱建物跡と近世天明3年泥流下畑跡
概要	縄文時代後期掘立柱建物跡は傾斜地に営まれた小規模な例。拠点集落とは距離を置いた遺地。平安時代焼土遺構からはクリ・クルミ等の炭化果実を出土する。近世畑跡は天明3年の所産で、泥流被災前は休耕畑の可能性が高い

写真図版



榎木I遺跡と西久保IV遺跡



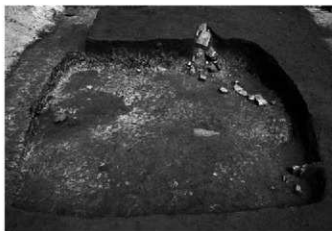
上原IV遺跡と榎木I遺跡



調査区より丸岩山を臨む



調査区遠景(1・2号住居跡周辺)



1号住居跡 遺物出土状態(南から)



1号住居跡 床面全景(南から)



1号住居跡 床下全景(南から)



1号住居跡 カマド横断面(南から)



1号住居跡 カマド全景(南から)



1号住居跡 カマド全景(南東から)



1号住居跡 調査風景



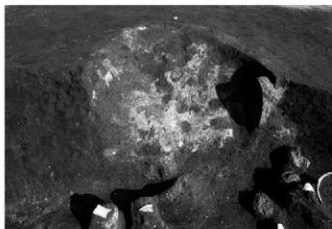
1号住居跡・2号住居跡 重複状況(南から)



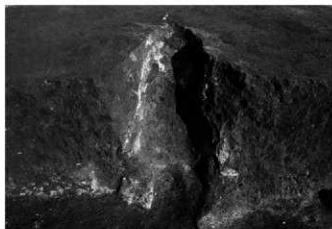
2号住居跡 床面全景(南から)



2号住居跡 床下全景(南から)



2号住居跡 1号カマド全景(西から)



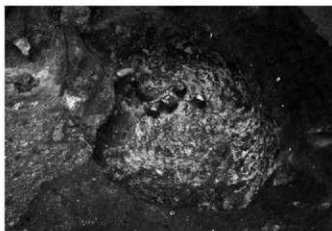
2号住居跡 2号カマド全景(西から)



2号住居跡 3号カマド(南から)



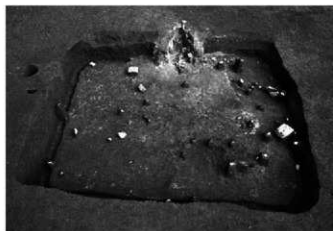
2号住居跡 3号カマド土層(東から)



2号住居跡 貯蔵穴全景(南から)



1号住居跡・2号住居跡 調査風景



3号住居跡 遺物出土状態(西から)



3号住居跡 床面全景(西から)



3号住居跡 床下全景(西から)



3号住居跡 カマド全景(西から)



3号住居跡 貯蔵穴中層状態(西から)



3号住居跡 底面小ビット(西から)



3号住居跡 貯蔵穴中層遺物出土状態近接



3号住居跡 貯蔵穴底面上遺物出土状態(南から)



4号住居跡 床面全景(西から)



4号住居跡 床下全景(西から)



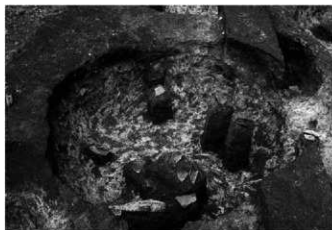
4号住居跡 カマド全景(西から)



4号住居跡 カマド構築面(西から)



4号住居跡 カマド袖石復元(西から)



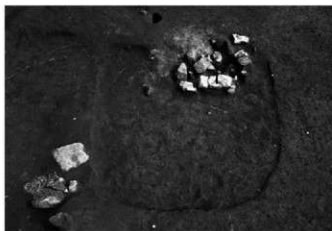
4号住居跡 2号床下土坑遺物出土状態(南から)



4号住居跡 6号床下土坑遺物出土状態(東から)



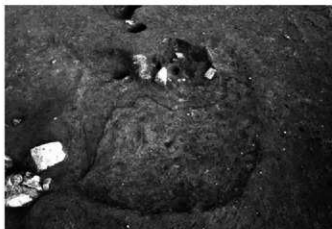
4号住居跡 6号床下土坑遺物出土状態近接(東から)



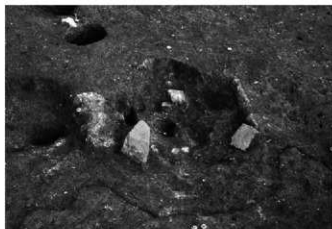
1号竈屋 全景(西から)



1号竈屋 カマド確認面(南から)



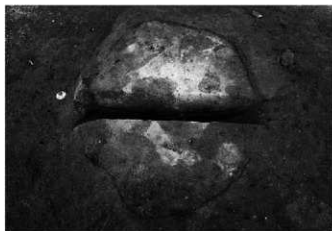
1号竈屋 床下全景(西から)



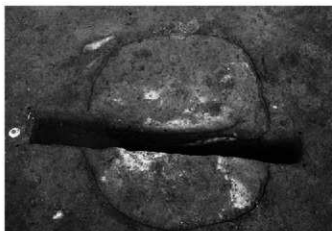
1号竈屋 カマド使用面下(西から)



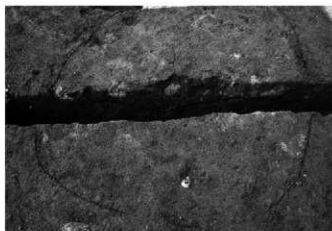
2号カマド 全景(東から)



1号焼土 全景(南から)



3号焼土 全景(西から)



4号焼土 全景(西から)



1号集石 土層(南から)



2号集石 土層(南西から)



3号集石 全景(西から)



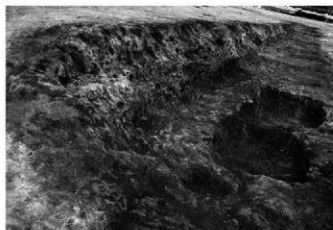
4号集石 全景(南から)



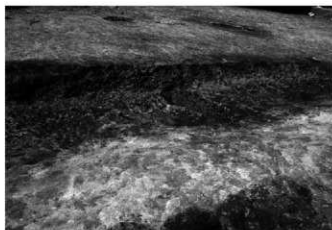
1号建物跡 遠景(南東から)



1号建物跡 全景(南西から)



1号建物跡 石垣基盤(南西から)



1号建物跡 石垣基盤(南から)



1号建物跡 1・2号溝全景(北から)



1号建物跡 1～3号溝全景(南から)



1号建物跡 3号溝全景(南から)



1号建物跡 4号溝全景(北から)



1号建物跡 26～28号土坑全景(東から)



1号建物跡 18号土坑全景(南から)



1号建物跡 19号土坑全景(南から)



1号建物跡 遠景(東から)



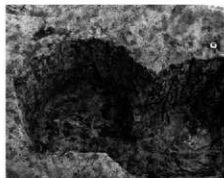
1号建物跡 1号ビット土層(南から)



1号建物跡 1号ビット全景(南から)



1号建物跡 2号ビット土層(南から)



1号建物跡 2号ビット全景(南から)



1号建物跡 3号ビット土層(南から)



1号建物跡 4号ビット全景(南から)



1号建物跡 5号ビット全景(南から)



1号建物跡 6号ビット全景(南から)



1号建物跡 7号ビット全景(南から)



1号建物跡 8号ビット全景(南から)



1号建物跡 9号ビット全景(南から)



1号建物跡 10号ビット全景(南から)



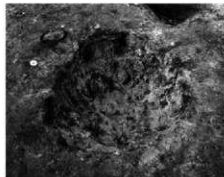
1号建物跡 11号ビット全景(南から)



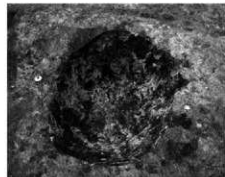
1号建物跡 12号ビット全景(南から)



1号建物跡 13号ビット全景(南から)



1号建物跡 14号ビット全景(南から)



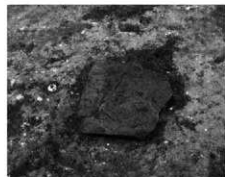
1号建物跡 15号ビット全景(南から)



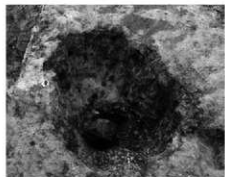
1号建物跡 16号ビット全景(南から)



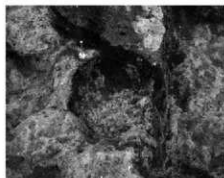
1号建物跡 17号ビット土層(東から)



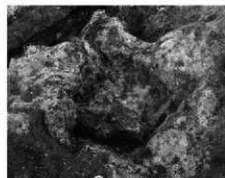
1号建物跡 18号ビット土層(南から)



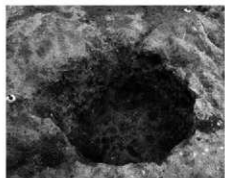
1号建物跡 19a号ビット全景(東から)



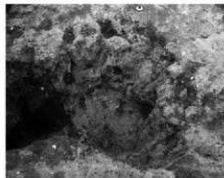
1号建物跡 20号ビット全景(東から)



1号建物跡 21号ビット全景(南から)



1号建物跡 22号ビット全景(南から)



1号建物跡 23号ビット全景(西から)



1号建物跡 24号ビット全景(東から)



1号建物跡 25号ビット全景(南から)



1号建物跡 36号ビット全景土層(南から)



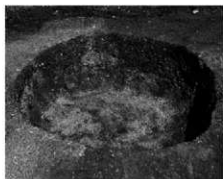
1号建物跡 39号ビット土層(南から)



1号建物跡41・42号ビット全景(南から)



1号土坑 全景(南から)



1号土坑 基盤全景(南から)



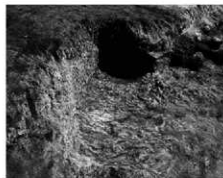
2号土坑 全景(東から)



3号土坑 全景(南から)



4号土坑 全景(南から)



5号土坑 全景(南西から)



6号土坑 全景(南東から)



7号土坑 全景(南から)



8号土坑 全景(南東から)



9号土坑 全景(西から)



10号土坑 全景(南から)



11号土坑 全景(南東から)



13号土坑 全景(南から)



14号土坑 全景(東から)



15号土坑 全景(南東から)



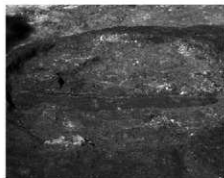
16号土坑 全景(南東から)



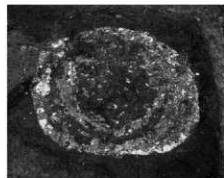
17号土坑 全景(南東から)



20号土坑 材出土状態(東から)



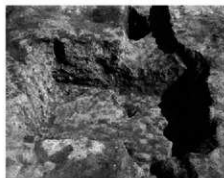
20号土坑 底面土層(桶底か)(南から)



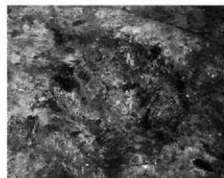
21号土坑 検出状況(西から)



22号土坑 全景(南東から)



23号土坑 全景(南東から)



24号土坑 全景(南から)



25号土坑 全景(南東から)



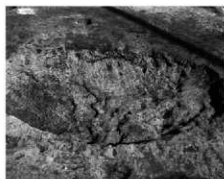
29号土坑 全景(南から)



30号土坑 全景(東から)



31号土坑 集石状況(東から)



32号土坑 全景(西から)



33号土坑 集石状況(西から)



34号土坑 全景(南から)



35号土坑 全景(南から)



36号土坑 全景(西から)



37号土坑 土層(南から)



38号土坑 全景(南から)



39号土坑 全景(南から)



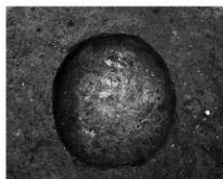
40号土坑 全景(南から)



41号土坑 全景(東から)



42号土坑 全景(南西から)



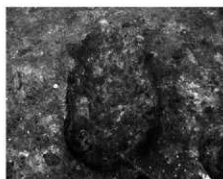
43号土坑 全景(南から)



44号土坑 全景(東から)



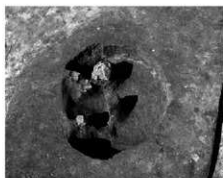
45・46号土坑 全景(南から)



47号土坑 全景(南から)



48号土坑 遺物出土状態(東から)



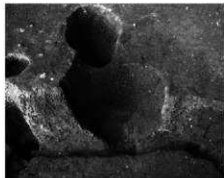
48号土坑 中層(東から)



48号土坑 中層下の土層(南から)



49号土坑 全景(北から)



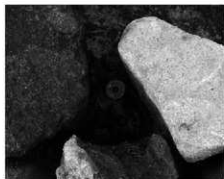
50号土坑 全景(南から)



51号土坑 全景(西から)



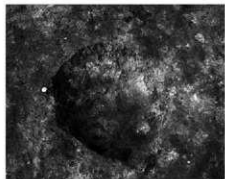
52号土坑 全景(南から)



52号土坑 出土古銭近接



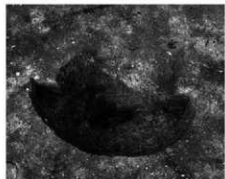
53号土坑 全景(南から)



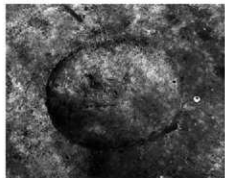
54号土坑 全景(南から)



55号土坑 全景(南から)



56号土坑 全景(南から)



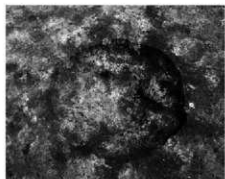
57号土坑 全景(南から)



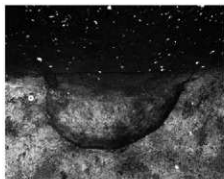
58号土坑 土層(南から)



59号土坑 土層(南から)



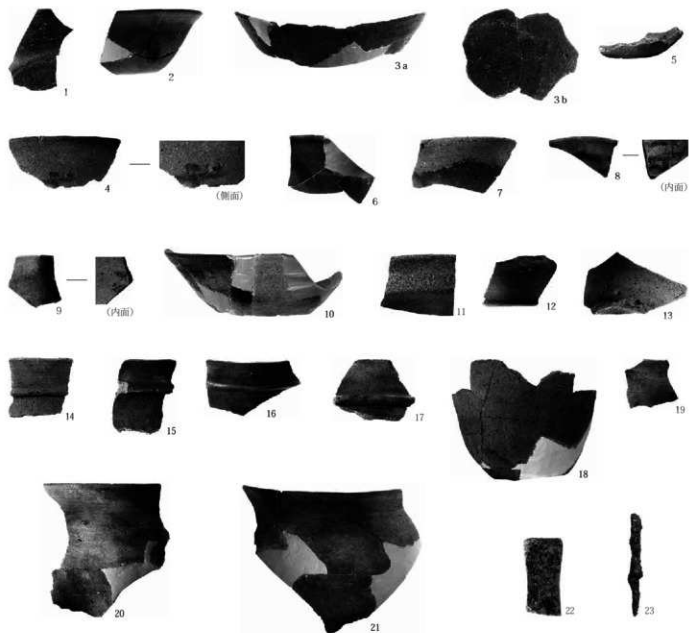
60号土坑 全景(南から)



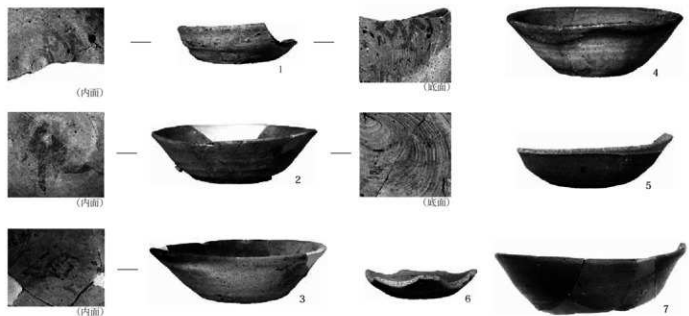
61号土坑 土層(南から)



62号土坑 全景(南から)

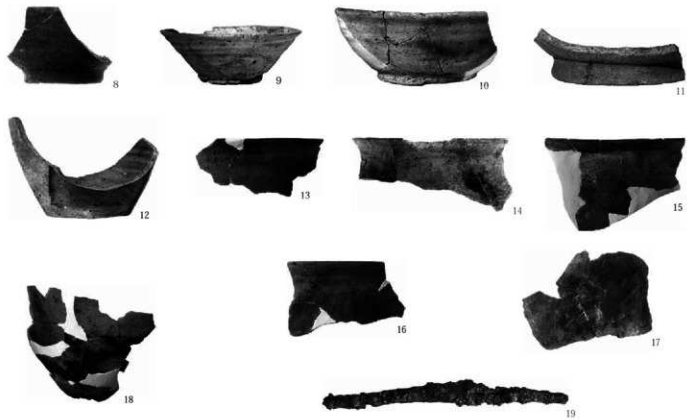


1号住居跡出土遺物

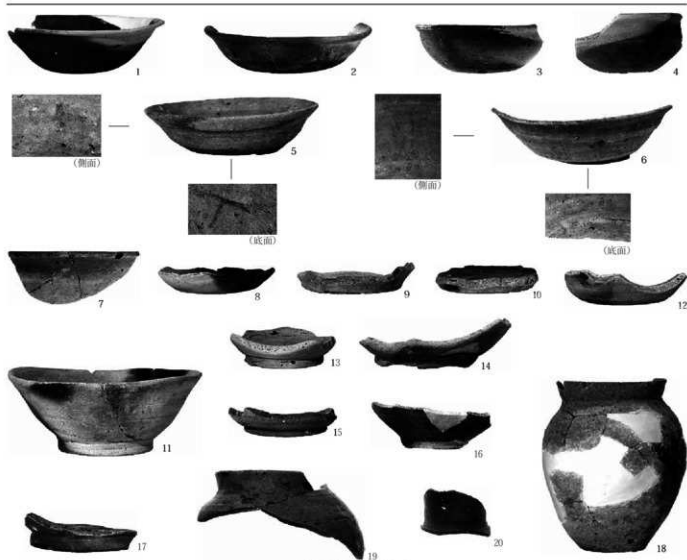


2号住居跡出土遺物(1)

楡木1遺跡



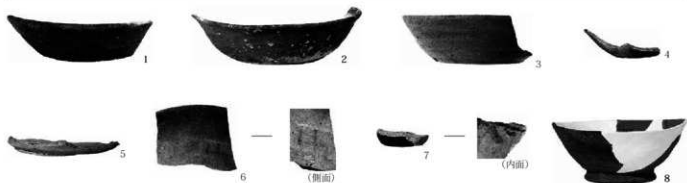
2号住居跡出土遺物(2)



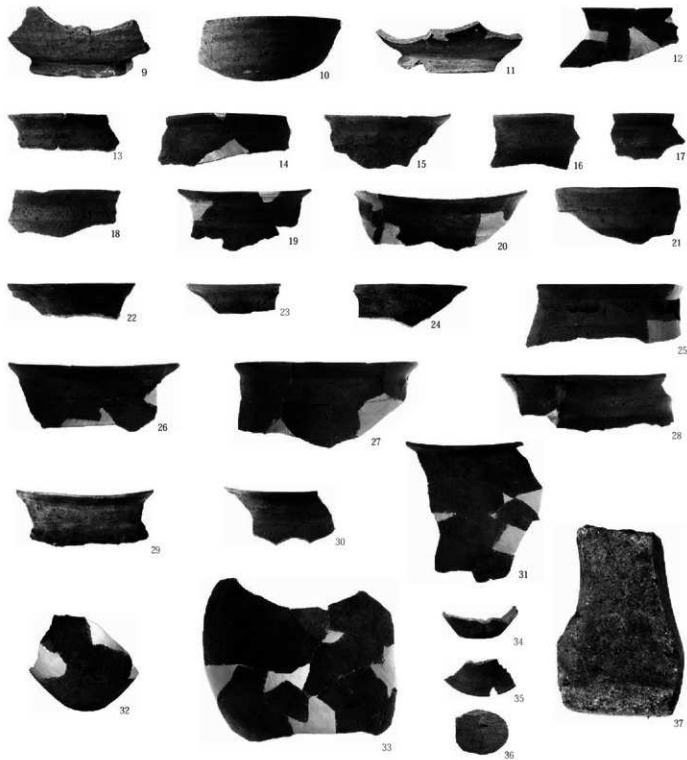
3号住居跡出土遺物(1)



3号住居跡出土遺物(2)

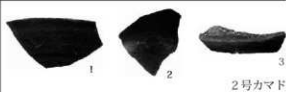
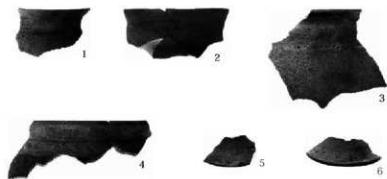


4号住居跡出土遺物(1)



4号住居跡出土遺物(2)

1号竈屋

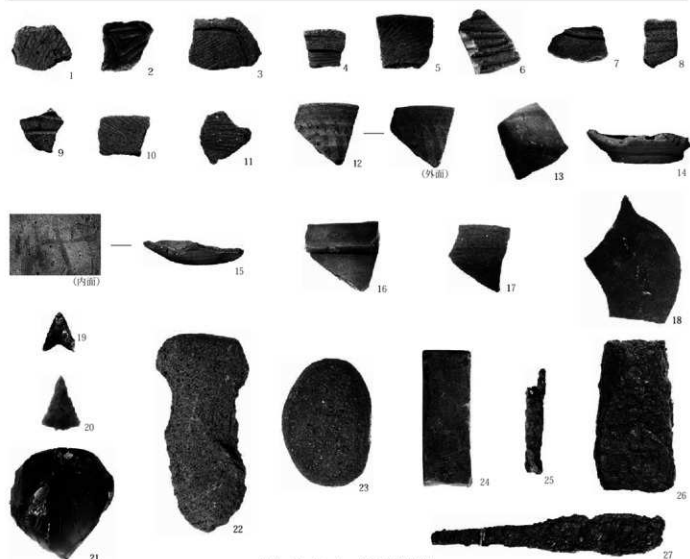
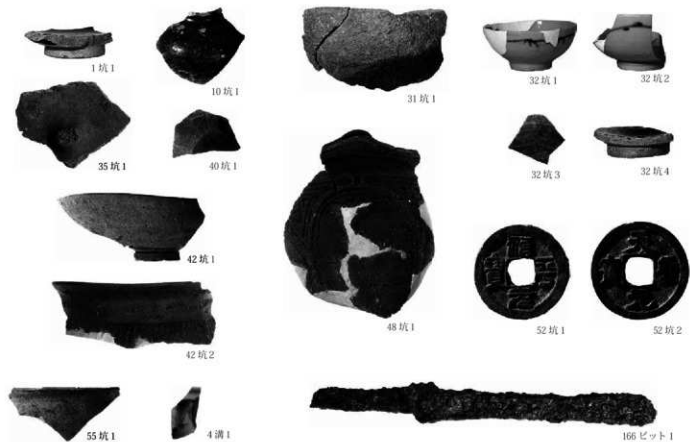


2号カマド



4号集石

竈屋・カマド・集石出土遺物



土坑・溝・ビット・遺構外出土遺物



上原IV遺跡 遠景(南から)



上原IV遺跡 調査前遠景(南から)



上原IV遺跡 5トレンチ



上原IV遺跡 6トレンチ



上原IV遺跡 7トレンチ



上原IV遺跡 1号土坑(南から)



上原IV遺跡 7・8トレンチ弧張状況



上原IV遺跡 縄文包含層調査区



上原IV遺跡 縄文包含層



上原IV遺跡 縄文包含層





西久保IV遺跡 西側調査区遠景 1 面目As-A泥流下(東より)



西久保IV遺跡 東側調査区遠景 2 面目(西より)



2面目 1号住居跡 全景(西より)



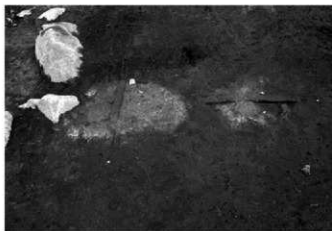
2面目 1号住居跡 カマド(西より)



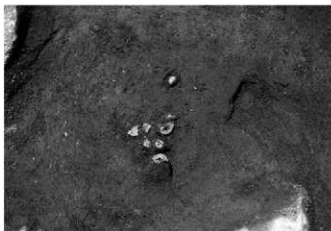
2面目 焼土遺構 14号土坑土層(南より)



2面目 焼土遺構 16号土坑土層(南より)



2面目 焼土遺構 18・19号土坑検出面(南より)



2面目 焼土遺構 18号土坑炭化果実出土状況(東より)



2面目 焼土遺構 18号土坑土層(東より)



2面目 焼土遺構 19号土坑土層(南より)



2面目 西側調査区 遠景(東より)



2面目 1号掘立柱建物跡 全景(北より)



2面目 2号掘立柱建物跡 全景(北より)



2面目 1号掘立柱建物跡 ビット列全景(南より)



2面目 1号柱穴列 全景(南より)



2面目 2号柱穴列 全景(南より)



2面目 3号柱穴列 全景(南より)



2面目 2・3号柱穴列 全景(南より)



2 面目 西側調査区 土坑群(東南より)



2 面目 西側調査区 土坑群(北より)



2 面目 西側調査区 土坑群(北より)



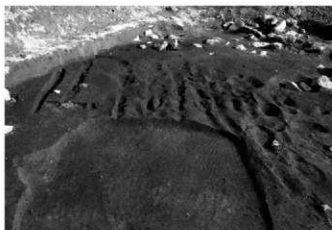
2 面目 西側調査区 土坑群 調査風景



2 面目 西側調査区 土坑群 調査風景



2 面目 西側調査区 土坑群 調査風景



2 面目 東側調査区 燧跡(北より)



2 面目 東側調査区 燧跡(北西より)



1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 全景



1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 溝



1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 円形平坦面



1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 段差



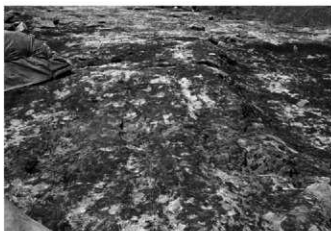
1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 全景(南より)



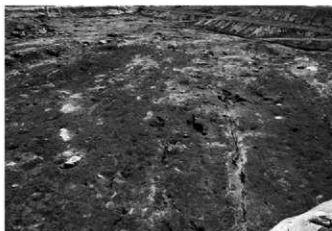
1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 全景(南より)



1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 段差(東より)



1 面目 東端調査区 天明泥流下畑跡 サク(東より)



1 面目 東端調査区 天明泥流下燼跡 サク(東より)



1 面目 東端調査区 天明泥流下金属製品出土状態



1 面目 西側調査区 天明泥流下燼跡 全景(南より)



1 面目 西側調査区 天明泥流下燼跡 全景(南より)



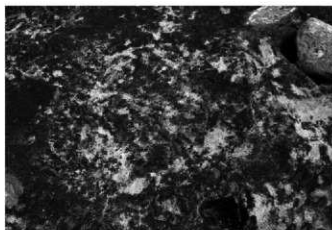
1 面目 西側調査区 天明泥流下燼跡 溝状凹み



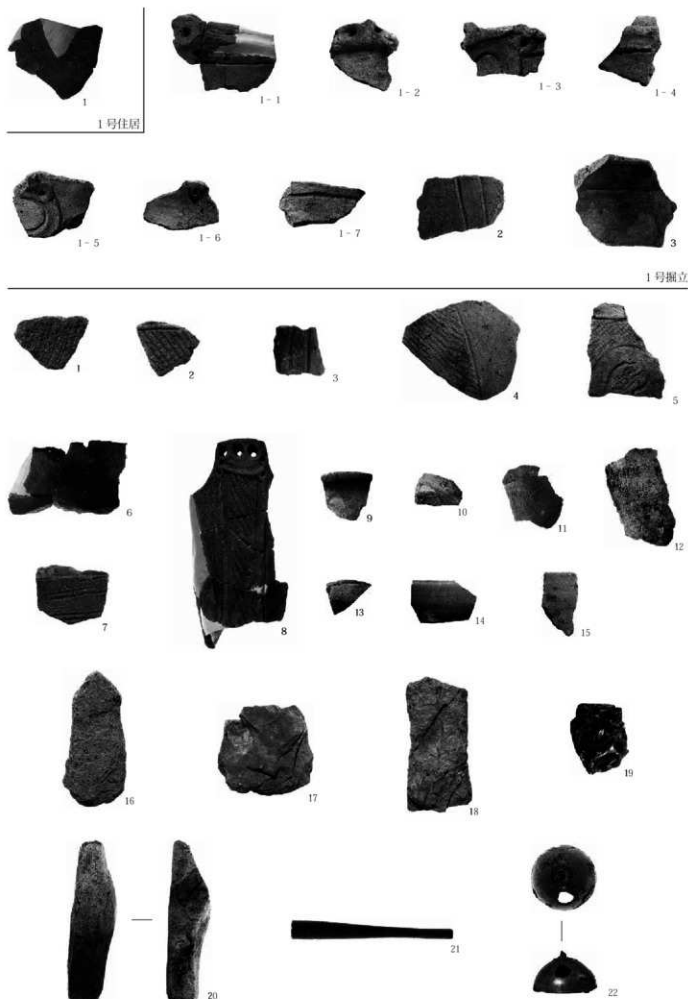
1 面目 西側調査区 天明泥流下燼跡 溝状凹み



1 面目 西側調査区 天明泥流下面 近景



1 面目 西側調査区 天明泥流下燼跡 円形平坦面(南より)



1号住居

1号掘立

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第549集

楡木I遺跡

上原IV遺跡(2)

西久保IV遺跡

ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書第39集

平成24(2012)年11月30日 印刷

平成24(2012)年12月7日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県澁川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/ジャーナル印刷株式会社
